ISSN 0913-042X

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

年報

昭和
62年度

1988

序

財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、昭和60年４月に設立され、間もなく３周年を迎えようとしています。本センターは、前身の愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部以来、主として、名古屋環状２号線の建設に伴う遺跡の事前発掘調査を実施してまいりました。国・県の公共事業の増大に伴い、調査面積は、年々拡大を続けております。

昨年12月１日には、愛知県埋蔵文化財調査センターが、海部郡弥富町に設立されました。それに合わせて、財団法人愛知県埋蔵文化財センターも同所内に移転し、新たな第１歩を踏みだしております。

本書の刊行及び発掘調査にあたり、専門委員の諸先生及び愛知県教育委員会の御指導並びに建設省、日本道路公団、愛知県土木部、地元市町村その他の関係者の方々の多大な御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

この年報が、考古学の研究はもとより、埋蔵文化財の保護と活用のうえでも、お役に立つことができればまことに幸いと存じます。

昭和63年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　中　根　昭　二

例　言

1．本書は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの昭和62年度事業の概要をまとめたものである。

2．調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、日本鉄道建設公団名古屋局支社及び愛知県土木部から、愛知県教育委員会文化財課を通じての委託を受けて、本センターが実施した。

3．調査の概要は、各遺跡ごとにまとめて掲載した。

4．普及活動の概要は、本センターの事業のうち、研修会、埋蔵文化財展など埋蔵文化財の発掘調査以外の事業についてその概要を掲載した。

5．調査研究は、発掘調査及び整理作業を通じての研究成果の一部を集録した。

6．発掘調査にあたっては、専門委員の各氏及び愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導助言をいただいた。

7．本書の作成にあたっては、赤塚美智代、石原智恵子、伊藤禎樹、加藤とよ江、亀井けい子、河合明美、鈴木規子、長井富美男、林素子、坪井裕司、市川浩代、伊藤千春、伊藤隆彦、各氏の協力を得たほか、愛知県陶磁資料館、愛知県清洲貝殻山貝塚資料館をはじめとする関係各機関並びに、地元作業員の方々には過大の援助を賜わった。

8．文責は各文末に記した。

財団法人　愛知県埋蔵文化財センターの組織

（役　員）

理事長

中根　昭二

常務理事

中林　　茂

理　事

小金　　潔	県教育長
井関弘太郎	名古屋大学教授
伊藤　秋男	南山大学教授
大参　義一	信州大学教授
坪井　清足	㈶大阪文化財センター理事長
楢崎　彰一	名古屋大学教授
花木　蔦雄	都市教育長協議会会長（一宮市教育長）
大溪　紀雄	町村教育長協議会会長（吉良町教育長）
下田　修司	県土木部長
中神　秀雄	県教育委員会社会教育部長
林　　正治	清洲貝殻山貝塚資料館館長（清洲町長）
日下　英之	県陶磁資料館館長

監　事

石原　坂男	県出納事務局次長
龍野　　等	県教育委員会総務課長

専門委員

考古学	楢崎　彰一	名古屋大学教授
地理学	井関弘太郎	名古屋大学教授
文献史学	早川　庄八	名古屋大学教授
建築史学	浅野　　清	愛知工業大学教授
動・植物学	渡辺　　誠	名古屋大学助教授
形質人類学	池田　次郎	岡山理科大学教授
保存科学	江本　義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長
岩石学	諏訪　兼位	名古屋大学教授
木材組織学	木方　洋二	名古屋大学教授

（職　員）

事務局長（兼管理課長）　太田　正男

調査課

課　長	明壁　正毅
課長補佐兼主査	鷲野　　勉
主　事	小澤　一弘
〃	石黒　立人
主　査	梅本　博志
主　事	宮腰　健司
〃	佐藤　公保
〃	水谷　朋和
嘱　託	松田　　訓
主　事	平田　睦美
嘱　託	飴谷　　一
主　査	細野　正俊
主　事	鈴木　正貴
嘱　託	中野　良法
課長補佐兼主査	山田　耕治
主　事	後藤　浩一
嘱　託	岡本　直久
主　事	北村　和宏
嘱　託	菅沼　良則
主　事	森　　勇一
〃	樋上　　昇
主　査	平野　　清
主　事	赤塚　次郎
〃	山仲　廣司
〃	松原　隆治
〃	神谷　友和
主　査	土屋　利男
主　事	池本　正明
〃	酒井　俊彦
嘱　託	野口　哲也

管理課

課長（事務局長兼）	太田　正男
主　査	青山　光一
主　事	鈴木　孝治
〃	田上　堅三
〃	大野　智靖
〃	小倉　晴美

目　次

Ⅰ.遺跡調査の概要 …… 1

調査の工程…… 2

遺跡の位置…… 4

清洲城下町遺跡…… 6

小田井遺跡……20

朝日遺跡……21

比良遺跡……26

岩倉遺跡……32

勝川遺跡……34

町田遺跡……54

松河戸遺跡……60

志貴野遺跡……66

岡島遺跡……74

諏訪遺跡……82

杉山遺跡……88

試　掘……90

Ⅱ.調査研究 …… 91

朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告 …… 渡辺　誠・田中禎子 …… 92

勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境……森　勇一 …… 117

伊勢湾地方から見た近江系土器……石黒立人 …… 137

朝日遺跡の異形土器について……飴谷　一 …… 147

朝日遺跡出土の外来系土器について－２－……宮腰健司 …… 156

清洲宿についての一考察……中野良法 …… 163

Ⅲ.埋蔵文化財センターの活動……169

埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会 …… 170

発掘調査技術等研修会 …… 171

資料の貸出・提供 …… 172

現地説明会 …… 173

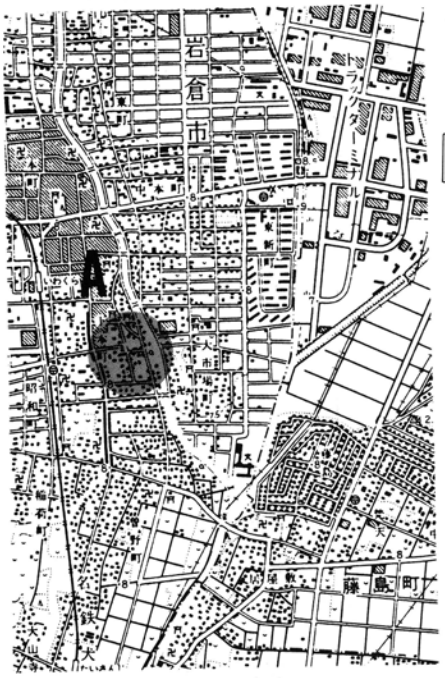
Ⅳ.付篇(受贈図書目録)……174

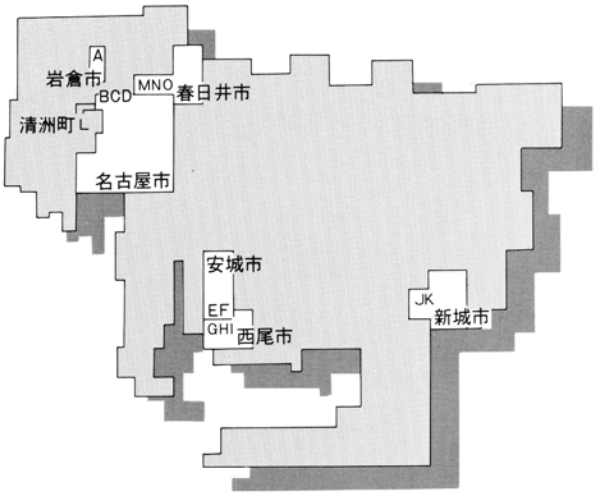
遺跡調査の概要

調査の目的と工程

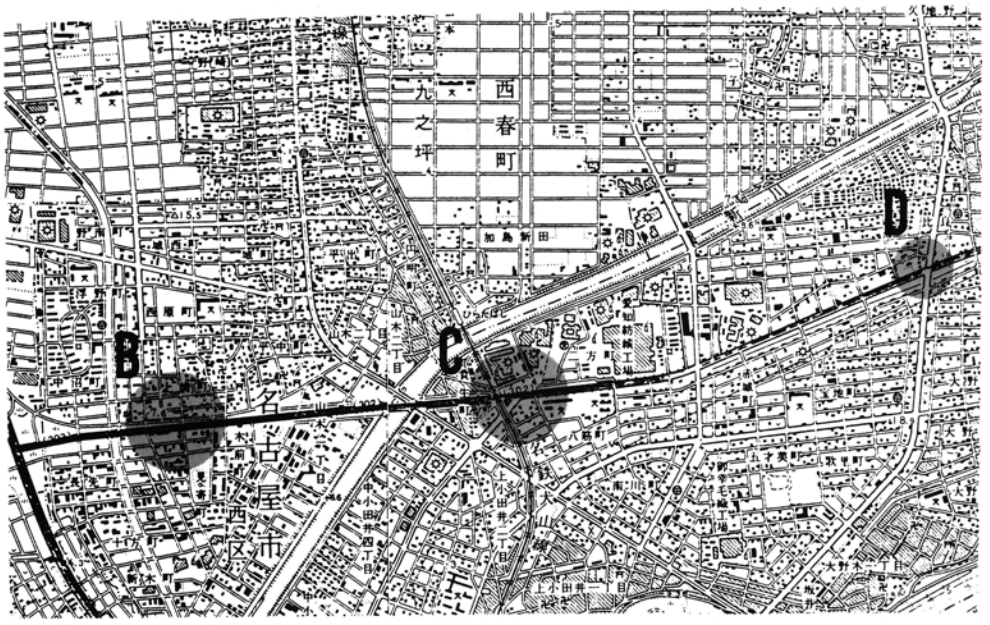
調査委託者	調査の目的	遺跡名		面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
建設省 日本道路公団	名古屋環状2号線	松河戸遺跡	A	1729	87. 8～88. 1	山田・北村・後藤
			B	1620	87.12～88. 3	山田・北村・後藤
			C	1627	87. 8～88. 1	山田・北村・後藤
			D	1635	87.12～88. 3	山田・北村・後藤
			E	1598	87.10～88. 2	山仲・樋上
			F	1558	88. 2～88. 3	山仲・樋上
			G	1598	87.11～88. 2	平野・岡本
		(13,431㎡)	H	2066	87.11～88. 2	平田・松田
		町田遺跡	A	1544	87. 4～87. 7	山田・山仲・後藤・佐伯
			B	1427	87. 7～87.11	山仲・後藤・神谷
			C	1438	87. 4～87. 4	山田・山仲・後藤・佐伯
			D	1249	87. 7～87.11	山仲・後藤・神谷
			E	1138	87. 4～87. 7	山田・山仲・後藤・佐伯
			F	1106	87. 7～87.11	山仲・後藤・神谷
			G	970	87. 4～87. 7	山田・山仲・後藤・佐伯
		(9,882㎡)	H	1010	87. 7～87.11	山仲・後藤・神谷
		勝川遺跡	F	1090	87. 4～87. 9	森・樋上・丹羽
			G	1058	87. 4～87. 9	森・樋上・丹羽
			H	1092	87. 4～87. 9	森・樋上・丹羽
		(4,403㎡)	I	1163	87. 4～87. 9	森・樋上・丹羽
		朝日遺跡	A	1203	87. 6～87. 8	宮腰・平田・飴谷
			B	1690	87. 6～87. 9	梅本・小澤・佐藤
			C	304	87. 4～87. 7	小澤・水谷・松田
			D	250	87. 6～87. 8	小澤・水谷・松田
			E	308	87. 4～87. 7	小澤・水谷・松田
			F	178	87. 4～87. 7	小澤・水谷・松田
			G	343	87. 4～87. 7	小澤・水谷・松田
			H	448	87. 4～87. 7	小澤・水谷・松田
			I	387	87. 4～87. 7	梅本・宮腰
			J	323	87. 4～87. 7	梅本・宮腰
			K	403	87. 4～87. 7	梅本・宮腰
		(6,214㎡)	L	377	87. 4～87. 7	梅本・宮腰
		小田井遺跡	A	240	87. 4～87. 5	佐藤
			B	230	87. 4～87. 5	佐藤
			C	170	87. 9	宮腰
			D	320	87. 4～87. 5	平田・飴谷

調査委託者	調査の目的	遺跡名		面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
			E	330	87. 4～87. 5	平田・飴谷
			F	305	87. 4～87. 5	平田・飴谷
		(1,688㎡)	G	93	87. 4～87. 5	平田・飴谷
		比良(月縄手)遺跡	A	96	87. 6～87. 8	水谷
			B	300	87. 6～87. 8	平田・松田
(36,264㎡)	(36,264㎡)	(646㎡)	C	250	87. 6～87. 8	平田・松田
建設省	国道23号線バイパス	志貴野遺跡	A	2200	87. 8～87. 9	土屋・池本
		(3,000㎡)	B	800	87.10～87.11	土屋・平田・池本
(3,750㎡)	(3,750㎡)	西山遺跡・藤井遺跡 小島遺跡	試掘	750	87. 4～87. 5	土屋・池本
愛知県土木部	県道新川・清洲線	清洲城下町遺跡	E	966	87.10～88. 1	細野・佐藤・鈴木・飴谷
			F	852	88. 1～88. 3	細野・佐藤・鈴木・飴谷
			H	535	87.11～88. 1	細野・佐藤・鈴木・飴谷
			I	802	87.10～87.12	細野・佐藤・鈴木・飴谷
			J	495	87. 4～87. 7	細野・鈴木・中野
			K	492	87. 4～87. 8	細野・鈴木・中野
	(4,800㎡)	(4,800㎡)	L	658	87. 4～87. 6	細野・鈴木・中野
	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	130	87.11～87.12	細野・水谷・中野
			B	510	88. 1～88. 2	細野・水谷・中野
			C	690	87. 8～87.11	細野・水谷・中野
			D	990	88. 1～88. 3	細野・水谷・中野
			G	500	87.10～87.11	細野・鈴木
			M	230	87.10～87.11	細野・鈴木
	(3,200㎡)	(3,200㎡)	N	150	87.11～87.12	細野・水谷・中野
	土地区画整理	勝川遺跡	A	1251	87. 9～87.11	松原・赤塚
			B	716	87. 4～87. 5	松原・赤塚・神谷
			C	246	87. 9～87.11	松原・赤塚
	(2,813㎡)	(2,813㎡)	J	600	87. 5～87. 6	赤塚・丹羽
	県道萩原多気線	岩倉城遺跡	A	380	88. 1～88. 2	松原
	(760㎡)	(760㎡)	B	380	88. 2～88. 3	松原・平田
	新城バイパス	諏訪遺跡	A_3	375	87. 7～	土屋・池本
			A_4	525	87.12～88. 1	酒井
			B	2285	87. 9～87.11	酒井・野口
			C	2200	87. 6～87. 9	酒井・野口
		(6,000㎡)	X	615	87.12～88. 1	酒井
	(7,000㎡)	杉山遺跡		1000	87. 4～87. 5	酒井・野口
	県道蒲郡・碧南線	岡島遺跡	A	1400	88. 1～88. 3	土屋・池本・管沼・野口
			B	1700	87.11～88. 1	土屋・池本・管沼・野口
(4,800㎡)	(4,500㎡)	(4,500㎡)	C	1400	88. 1～88. 3	土屋・池本・管沼・野口

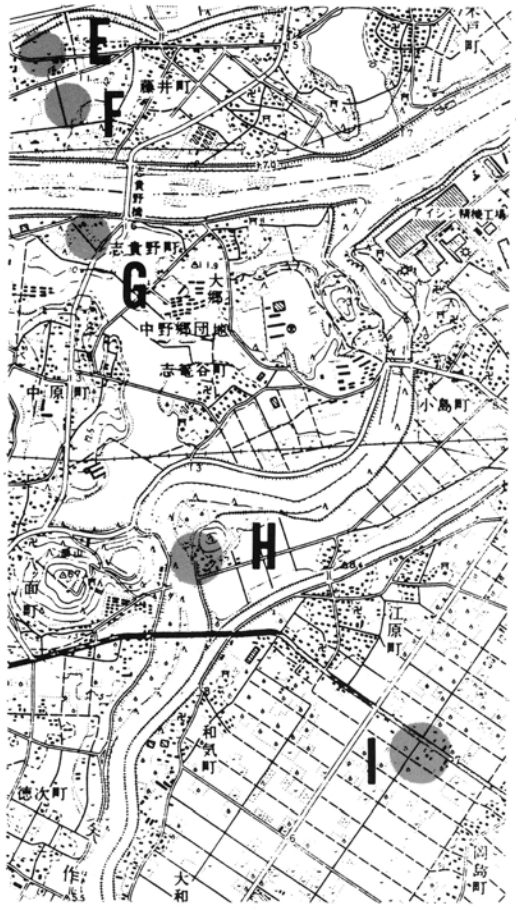




A 岩倉遺跡　B 朝日遺跡　C 小田井遺跡
D 比良遺跡　E 西山遺跡　F 藤井遺跡
G 志賀野遺跡　H 小島遺跡　I 岡島遺跡
J 杉山遺跡　K 諏訪遺跡　L 清洲城下町遺跡
M 勝川遺跡　N 町田遺跡　O 松河戸遺跡

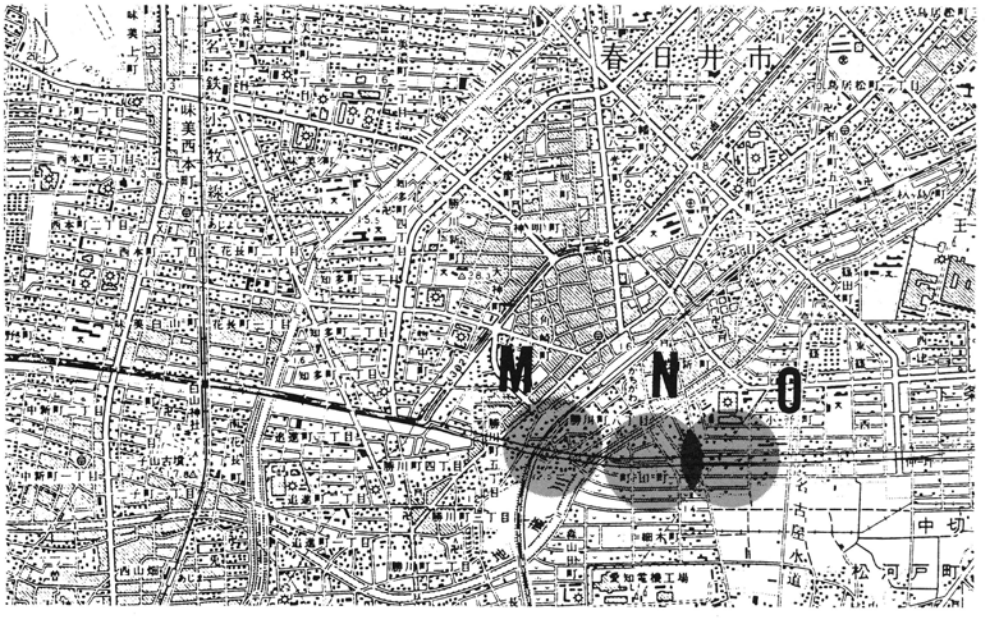


遺跡の位置


E
F
藤井町
志貴野町
G
大和
中野郷団地
志貴谷町
中原町
小島町
H
江原町
和気町
I
徳次町
作
大和
鳥町


新城市
豊栄
杉山
J
今出平
K
諏訪

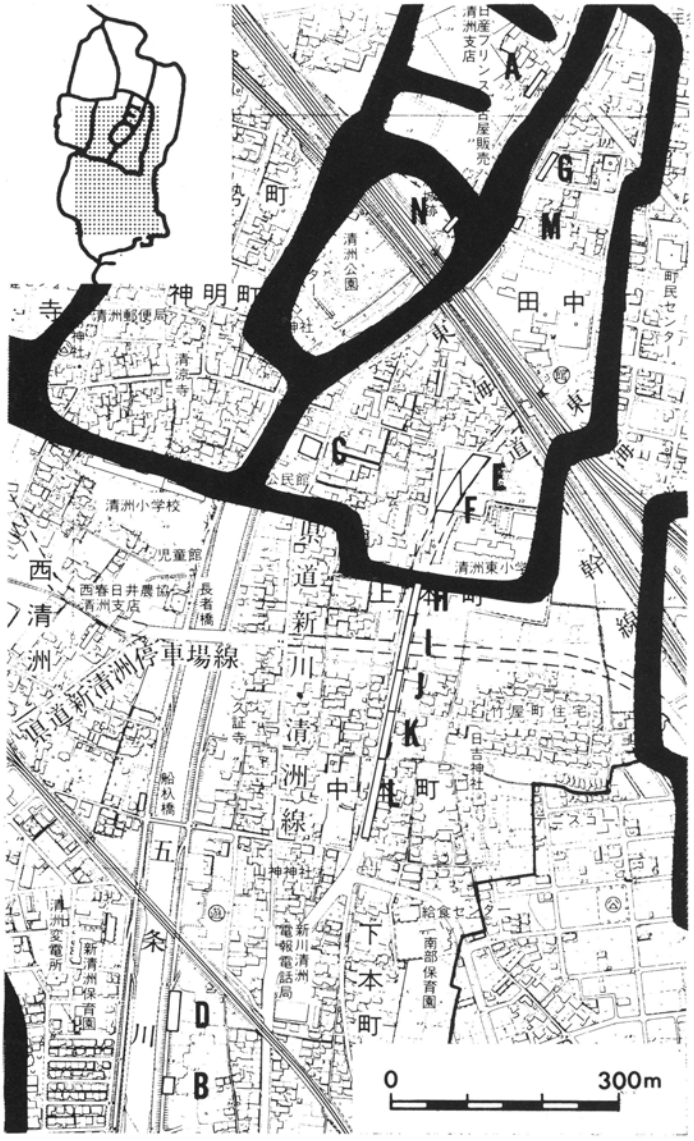

野田町
朝伯
L
清洲
西田中


春日井市
峠美上町
峠美西本町
鉄
小牧線
M
N
O
中切
松河戸町
愛知電機工場

清洲城下町遺跡

1．調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を流れる五条川中流域に形成された自然堤防および後背湿地上に展開する安土・桃山、江戸時代を中心とする遺跡である。遺跡の発掘調査は、環状2号線建設に伴う事前調査として、昭和59年度より実施された。その後、61年度からは五条川改修関係、62年度からは県道清洲・新川線関係の調査が加わり、昨年度までの総調査面積は21231㎡に上る。本年度の発掘調査では、河川改修関係（A～D・G・M・N区）3200㎡、県道関係(E・F・H～L区)4800㎡、合計8000㎡を対象とした。



第1図　62年度調査区位置図(A～N)

調査の結果、各調査区において良好な状態で遺構・遺物を検出することができた。概要については後述するが、従来の時期区分、すなわちⅠ期(中世)、Ⅱ期(城下町期)、Ⅲ期（宿場町期）といった3期区分の枠外の時期に該当する遺構・遺物がかなりの面的な広がりをもって確認されたことは注目に値する。そのため、本遺跡における時期区分について、再考を要する結果となった。

（細野正俊）

2．五条川改修関係

(1)　主な遺構

本年度の五条川改修に伴う発掘調査では、以下に述べるように、II期とIII期の良好な遺構が検出された。

〈II期〉 主な遺構は大小の溝、井戸、土坑、自然流路等である。特に溝についてはいずれも真北よりやや東にずれている。

A区では、南北に走行する溝が3条検出されたが、調査区の幅が3m程と狭いため規模については確認できなかった。SD01とSD02の間に位置するSD03は、南に傾斜している。これらの遺構の下では、調査区全域にわたり61年度の環状2号線関連発掘調査で確認された沼沢地と類似した状況を呈していた。

G区では、東西に走行するSD03と、これを埋覆して新たに南北方向に形成されたSD01、及びSD01にほぼ直交する溝（SD04・05）を検出した。

N区は、清須城本丸跡とされている清洲公園の東隣にあたる。遺構は南北方向の溝が1条検出されたのみであるが、城跡とされている付近から南北方向の溝が確認された意義は大きい。この溝の下からは南北に走行する自然流路が認められた。

C区は、約1mにもおよぶ大規模な整地層を境として、前後2期に区分できる。前期（II－1期）において、調査区の西半から自然流路（NR01）が検出された。これに東接するかたちでSK65が検出された。SK65は直径約9mを測り、木製品・陶器等が良好な状態で出土した。その他の遺構として溝、土坑等があげられる。後期（II－2期）になると、前期の遺構群を埋覆し、「盛土」を伴う整地が行われ、それを掘り込むかたちで遺構が検出された。遺構は溝、井戸（桶組み3基を含む）、土坑等である。調査区の西隅から検出されたSD04からは木製品、陶器等が多量に出土した。

〈III期〉 C区では、井戸が11基検出され、うち5基が桶組みの井戸枠をもつ。井戸は5群に区分され、うち3群は切り合い関係および隣接する状況を示す。



C区SK65遺物出土状況



C区SD04遺物出土状況

(2) 出土遺物

出土遺物は、陶磁器がその大半を占めるものの、C区からは漆器椀・箸・曲物・下駄・板塔婆等の木製品がSK65・SD04から多量に出土した。遺物のほとんどがII期に属するものであるが、C区を中心としてIII期の遺物も出土している。以下、各時期の代表的な遺構からの出土品について概略を述べる。

〈II－1期〉 第3図1～3・18・19はA区SD03からの出土品で、1は灰釉平椀、2・3は鬼板化粧の施された鉄釉天目茶椀、18は鉄釉壺、19は鉄釉鉢である。

第3図5・6・10・13・16はG区SD03からの出土品で、5は土師器壺、6は見込み部に菊の刻印が施された灰釉皿、10は体部にナデ調整のある非ロクロ成形の土師器皿、13は紐つまみが前後2箇所に付けられた鉄釉水注、16は底部に糸切り痕の残るロクロ形成の土師器皿である。

C区SK65からの出土品のうち、陶磁器では瀬戸・美濃窯の製品（第3図4・7・15）、常滑窯の甕、中国陶磁（第3図14）等が出土しているが、特に土師器製品の鍋・釜・皿（第3図11・12・17・21）が多く、なかでも皿類の出土が際立っている。4は鬼板化粧の鉄釉天目茶椀、7は無釉の皿、15は鉄釉花瓶である。木製品では漆器椀（第3図24）、箸、笊、下駄（第3図27）、曲物、籠等が出土している。24は黒漆に扇文の朱漆絵が施されている漆器椀である。底部には刻印がみられる。25は外面黒漆、内面朱漆の合子蓋、27は表面に鳥草文の施された連歯下駄である。第3図29・30は板塔婆であり、NR01からの出土品である。30は「(正面) 卍　南無観世音菩薩　(裏面) 佛法僧　大火所焼時我此土安穏」と読み取れる。

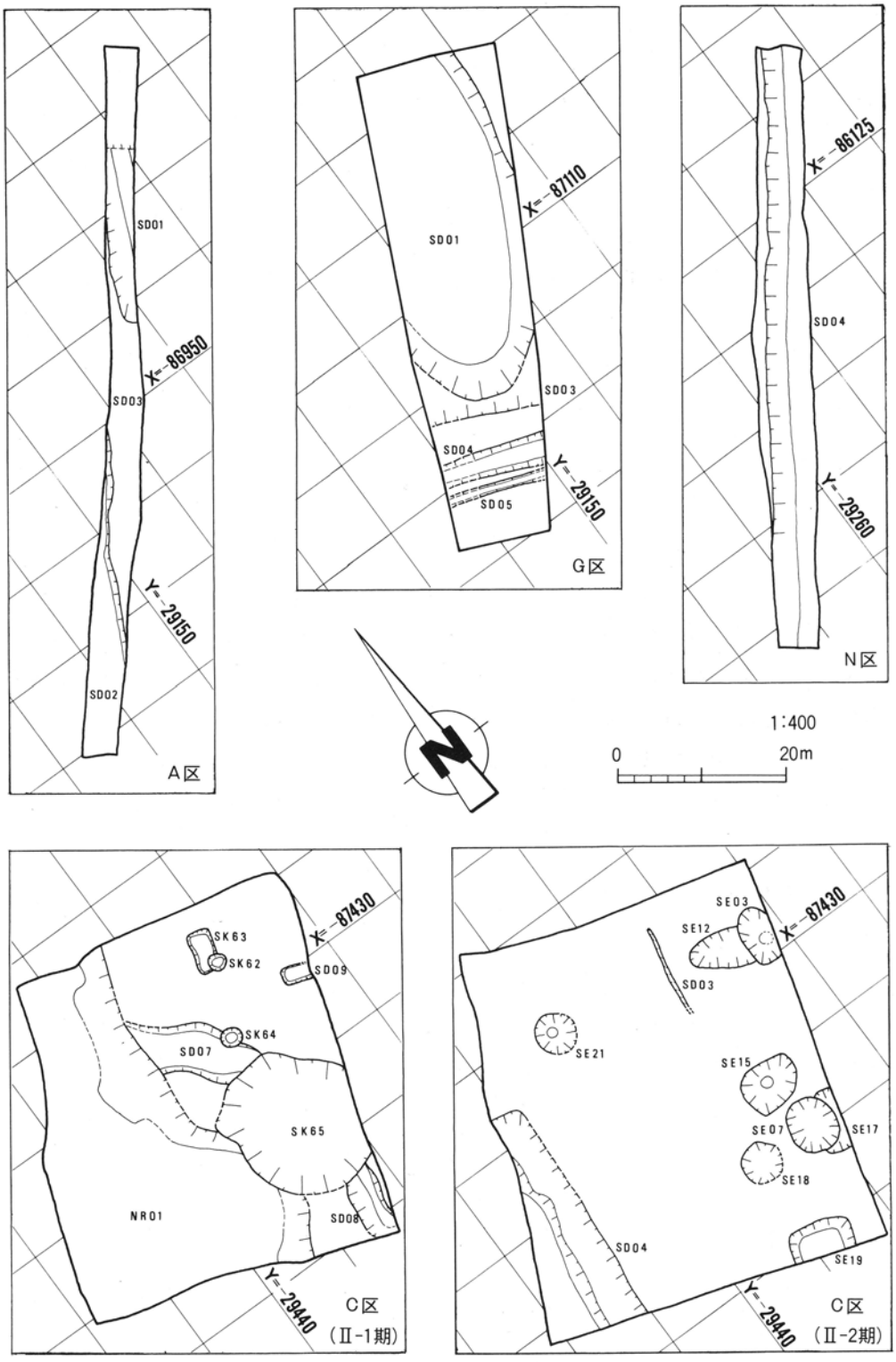
〈II－2期〉 第3図8・9はA区SD01からの出土品である。8は銅緑釉皿、9は鉄釉皿である。

C区SD04からの出土品のうち、その多くを占めるのが土師器皿（第3図22）と木製品（第3図23・26・28・31）である。22は底部に板状圧痕、糸切り痕の残るロクロ成形の土師器皿である。底部には「仏」の墨書がみられる。23は黒漆に鶴亀文の朱漆絵が施された漆器椀である。26は曲物、28は連歯下駄である。下駄の表面には足の痕跡がみられる。31は板塔婆で、「(正面) ★□★★★□　南無阿弥陀佛 [　] [□□] [　] (裏面) ★」と読みとれる。

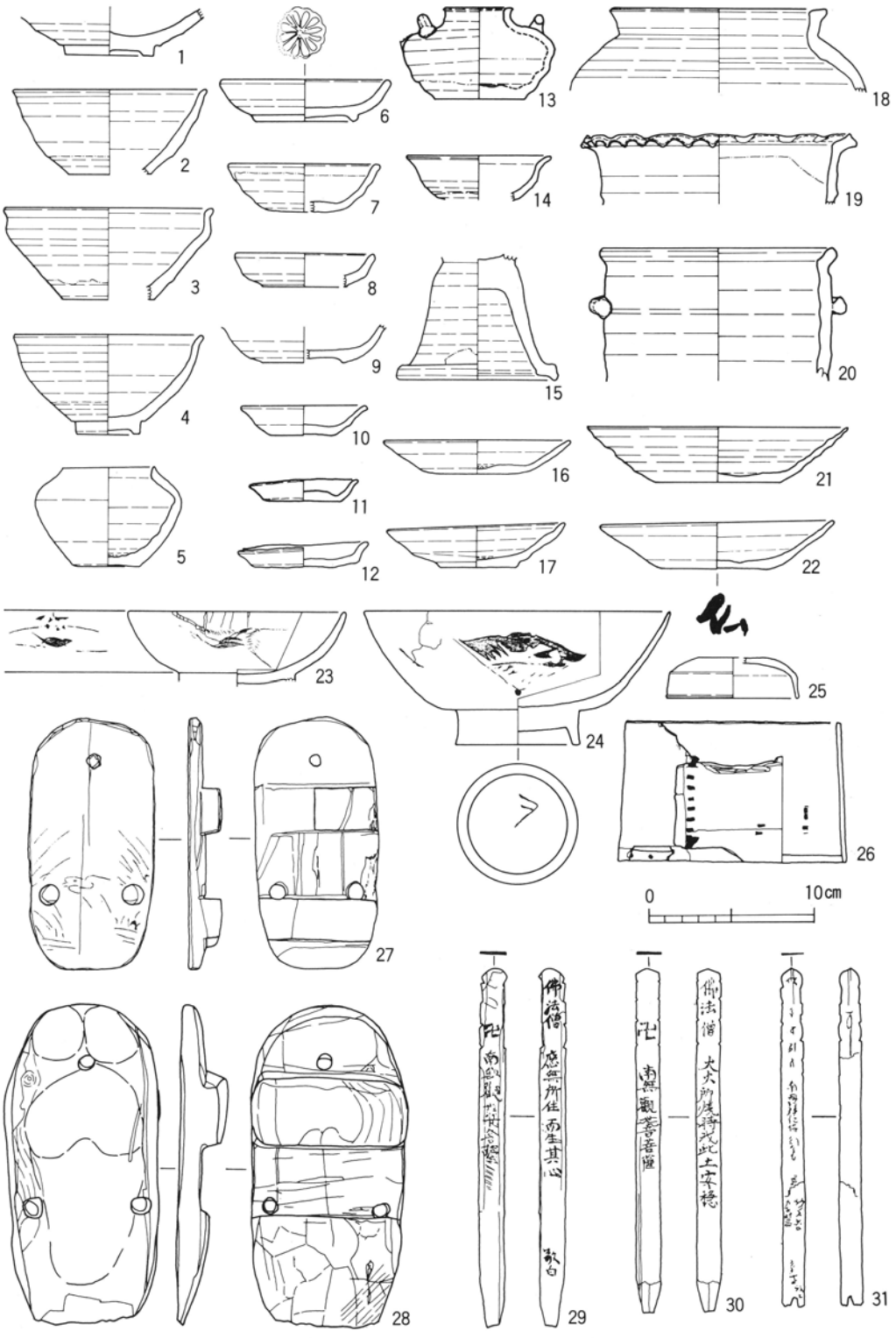
その他II期の遺物としてG区SD05出土の鉄釉鉢（第3図20）があげられる。

〈III期〉 瀬戸・美濃窯の陶磁器、常滑窯の甕（いわゆる「アカモノ」と称される素焼き製品）、瓦等が出土している。陶磁器の多くは18世紀末から19世紀中葉のものである。

(中野良法)



第2図　五条川改修関係遺構配置図



第３図　五条川改修関係出土遺物（1～28は1/4、29～31は1/8）

3．県道清洲・新川線関係

調査区は、五条川東岸の自然堤の東端を南北に縦断する。本調査区では、従来確認されていた中世、清洲城下町期の遺構の他、古墳時代、奈良・平安時代の遺構も確認できた。

(1)　古墳時代

古墳時代の遺構は、奈良・平安時代の遺構と同様、東西にのびる旧五条川の自然堤上に展開し、その北辺にあたるＥ・Ｈ区に集中する。この自然堤はＬ区で急激におちこみ、これより南では古墳、奈良・平安時代の遺溝はほとんどみられなかった。田面下、標高２ｍで検出された遺構は、溝と住居址である。

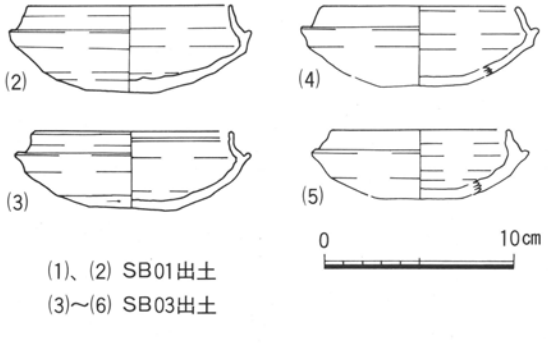
住居址は、６軒検出され、いずれも一辺約５ｍの方形で、北壁にカマドを有する。住居址の切り合いは、２軒同志１回切り合うものが２組みられる。

溝は、４条確認しえた。中でもＥ区で見られるＳＤ09とＳＤ10は、間隔が約2.5ｍで、平行して東西方向へ走る。方向もＥ区のＳＢ03、ＳＢ08、Ｈ区のＳＢ09と同一である。また、Ｅ区東端のＳＤ07は、幅2.0m、深さ0.8ｍで、逆台形の断面を呈し、南北へ走る。近接するＳＢ01、ＳＢ03までの間、西へ約20ｍの空間がある。居住域の東端を示す溝であろう。

出土遺物は、須恵器の杯身・蓋等、土師器の甕等が出土した。Ｅ区のＳＢ01、ＳＢ03から出土した遺物を見ると（第４図）、須恵器の杯身は、口縁の立ち上りは顕著で、内傾する



62E区 SB01、03



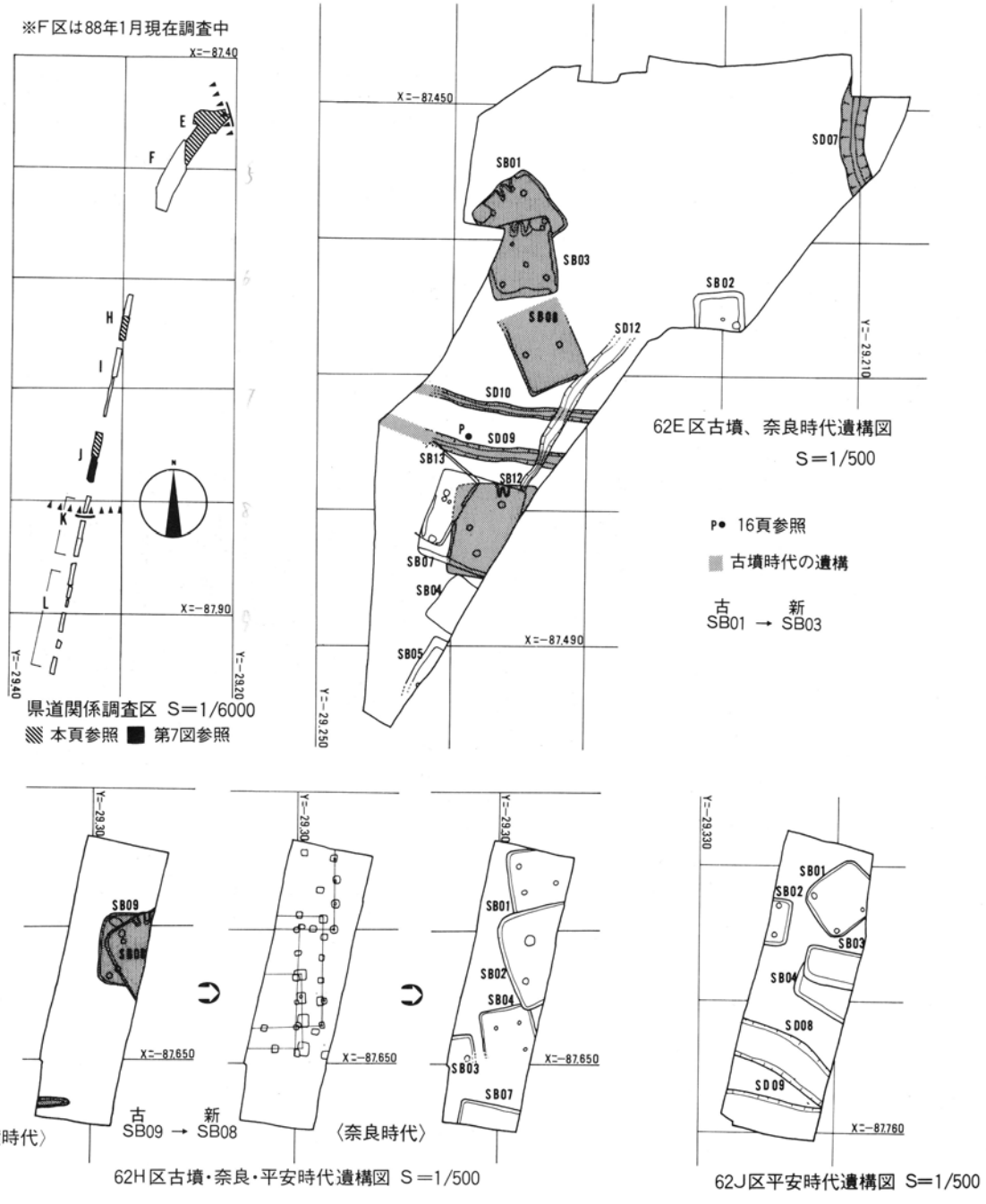
(1)、(2) SB01出土
(3)～(6) SB03出土

第４図　62Ｅ区 SB01、03出土遺物

傾向があり、口縁内面の沈線は不明確である。土師器の甕は長胴のタイプと球形の胴部のタイプがある。須恵器の特徴より、6世紀後半より7世紀初と考えうる。

以上のことより、五条川東岸では、6世紀後半から7世紀初の比較的短期間、集落が営まれたと考えうる。

（佐藤公保）



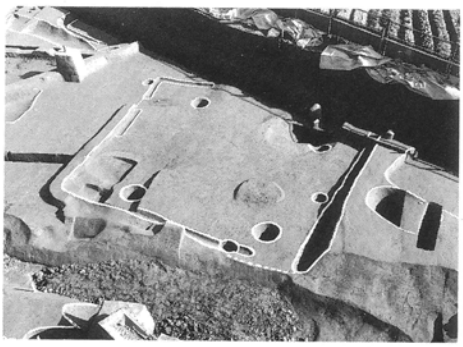
第5図　県道関係遺構図（古墳～平安時代）

(2) 奈良・平安時代

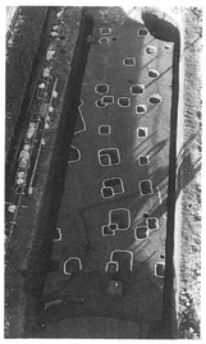
奈良・平安時代の遺構は竪穴住居・掘立柱建物・溝等が確認され、これらは、さらに3つの時期に大別できる。

まず、8世紀中頃の遺構として、竪穴住居と掘立柱建物が検出された。竪穴住居は一辺が約5mの隅丸方形の平面プランを持つものが大半を占める。いずれもカマドは検出し得なかった。特に、SB07から須恵器の蓋杯・椀・高杯・短頸壺と土師器の甕等良好な遺物が出土した。H区でも、これと同時期の竪穴住居が5基検出された。さらに、H区では、この竪穴住居群に切られる形で掘立柱建物が検出された。5間×2間以上の庇付き建物1棟の他、2棟の建物が存在し、これらは少なくとも一度以上の建て替えが行われたものと思われる。(第5図)

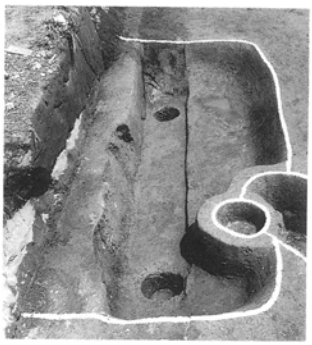
9世紀前半の遺構として、J区で竪穴住居と溝が検出された。竪穴住居は一辺が約4mの隅丸方形のプランを持ち、カマドは検出し得なかった。この南では、東西方向に平行して走る溝3条が確認され、この時期の居住域の南端を示す可能性がある。出土遺物は、須恵器の蓋杯・土師器の甕・土錘等が存在する。



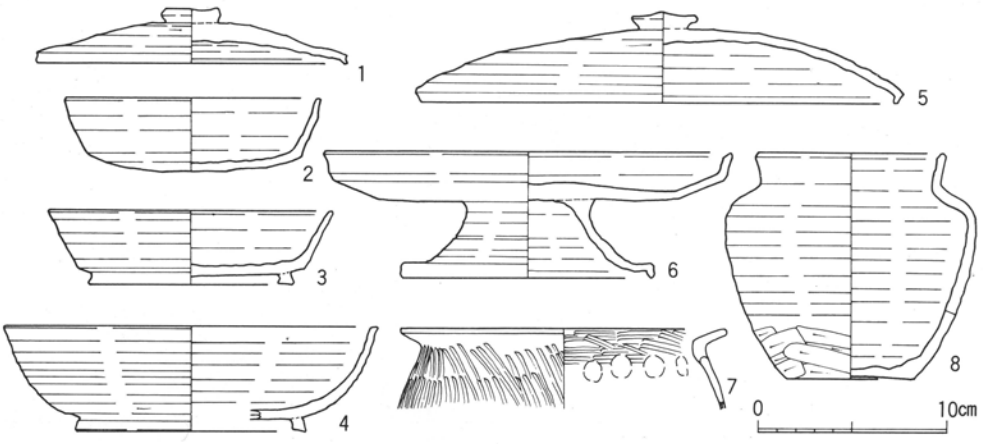
62E区　SB07



62H区　掘立柱建物



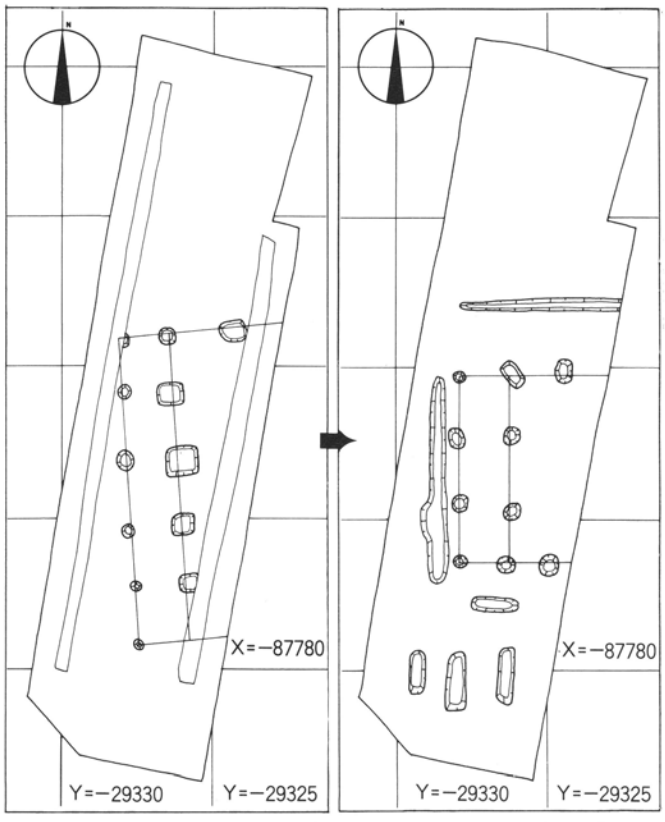
62J区　SB02



第6図　62E区 SB07 出土遺物　　S=1/4

10世紀から11世紀前半の遺構として、J区で上下2面で掘立柱建物が1棟づつ検出された。

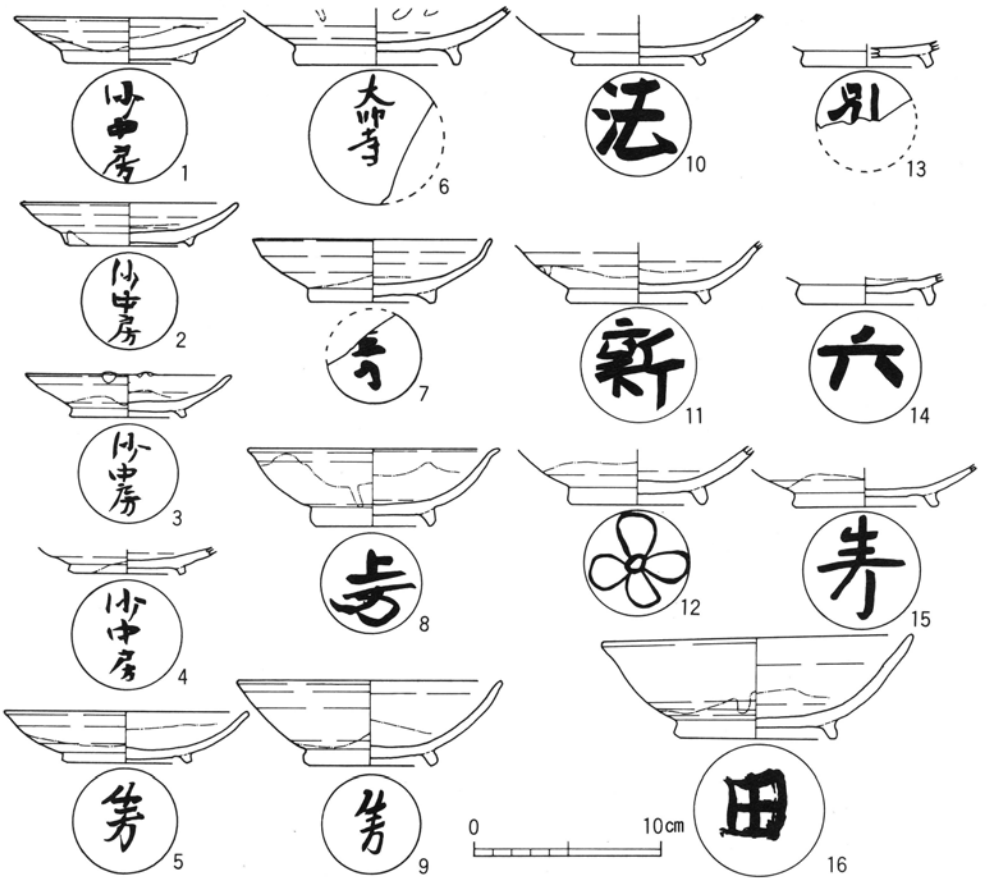
下面の建物SB06は5間×2間以上の庇付き建物で、出土遺物から見て10世紀前半に位置づけられる。上面の建物SB05は3間×2間以上の庇付き建物で、10世紀後半～11世紀前半に位置づけられる。SB05では雨落溝と見られる溝が周囲を取り囲み、南には長楕円形の土坑が3基配置されている。SB05はSB06の廃絶後に建て替えられたものと思われ、建物の主軸の方位が異なる。SB05の上面には、雨落溝で囲まれた範囲で黒褐色砂質土が堆積していた。この中から、11世紀前半の灰釉陶器の皿・椀等が出土した。これらは、SB05の廃絶と共に廃棄されたものと思われる。この中には、底部に墨書が記された灰釉陶器が見られ、SB05・SB06の性格をうかがう好資料である。



第7図　62J区掘立柱建物（左＝SB06 右＝SB05）S＝1/250

墨書が記された灰釉陶器は、黒褐色砂質土の他、その上層（褐色砂等）からも出土し、K区から出土したものを合わせると39点を数える。器種は全て皿あるいは椀である。これらは、墨書の内容と書体から概ね2種に類別できる。I類は、比較的細い筆で「沙中房」・「□方(沙中房の省略形と見られる)」・「大師寺」等と記されたものである(表1～16、第8図－1～9)。II類は、比較的太い筆で「新」・「六」・「別」等と一字のみ記されたものである(表17～24、第8図－10・11・13～15)。また、花文を記したものもある(第8図－12)。

以上から次の2点が指摘できる。まず、「沙中房」・「大師寺」等の記載から当地に寺院址が存在した可能性がうかがえる。SB05・SB06はこれに関連する遺構と見られる。また、II類の墨書は祭祀的目的あるいは何らかの符号として記されたものと思われる。墨書の持つ意味については問題点が多く、今後の検討を要する。　（鈴木正貴）



第８図　62J･K区出土墨書灰釉陶器

No.	図No.	出土地点	器種	釈文	No.	図No.	出土地点	器種	釈文	No.	図No.	出土地点	器種	釈文
1	1	J区 黒褐色砂質土	Ⅲ	沙中房	14	－	K区 検出Ⅳ	椀？	大□(師カ)	27	－	J区 検出Ⅲ	Ⅲ？	□
2	2	〃 〃	輪花Ⅲ	沙中房	15	－	J区 トレンチ6	椀？	］寺	28	－	〃 ＳＫ48	Ⅲ	□
3	3	〃 検出Ⅰ	Ⅲ	沙中房	16	－	K区 ＳＫ70	Ⅲ？	］方［	29	－	〃 黒褐色砂質土	Ⅲ	□
4	4	〃 トレンチ6	Ⅲ	沙中房	17	10	J区 表土	椀	□(法ヵ)	30	－	〃 トレンチ6	椀	□
5	－	〃 ＳＫ22	Ⅲ？	沙中［	18	11	K区 ＳＤ12	椀	新	31	－	〃 検出Ⅳ	椀	□
6	－	K区 表土	椀？	沙中［	19	13	J区 検出Ⅲ	Ⅲ？	別	32	－	K区 検出Ⅱ	椀？	□
7	9	J区 検出Ⅲ	椀	□方	20	－	〃 検出Ⅰ	Ⅲ？	別	33	－	〃 〃	椀？	□
8	5	K区 ＳＫ70	Ⅲ	□方	21	14	〃 トレンチ6	椀？	六	34	－	〃 検出Ⅲ	Ⅲ	□
9	－	J区 トレンチ6	Ⅲ？	□(沙ヵ)	22	15	〃 Ｐ52	椀	□	35	－	〃 〃	Ⅲ？	□
10	8	〃 黒褐色砂質土	椀	上方	23	－	K区 検出Ⅱ	Ⅲ？	生［	36	－	〃 ＳＤ12	椀	□
11	7	〃 検出Ⅳ	椀	］方	24	16	〃 ＳＫ70	椀	田	37	－	〃 ＳＫ70	椀	□
12	6	〃 検出Ⅲ	椀	大□寺(師ヵ)	25	12	〃 ＳＤ07	椀	❀	38	－	〃 検出Ⅴ	椀？	□
13	－	〃 検出Ⅳ	Ⅲ	大□	26	－	J区 表土	椀？	□	39	－	〃 〃	椀	□

62Ｊ・Ｋ区　出土墨書灰釉陶器一覧表

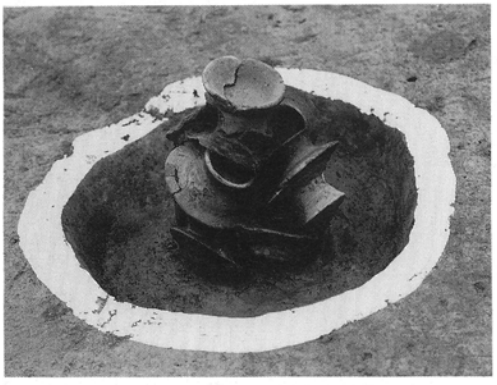
E区のピット（径0.4m、深さ0.4m　第5.9図）で土師器の脚付杯、皿、擬高台皿等が20個体ほぼ完形で出土した。それを紹介したい。

出土状態は写真にある様にピット内に折重なるように出土している。全て火を受けた痕跡があり、有高台杯には重ね焼きの痕跡を残すものが見られ、いずれも一過性の使用しか考えられない。これらのことから同ピットは、地鎮等の祭祀的性格が想定される。

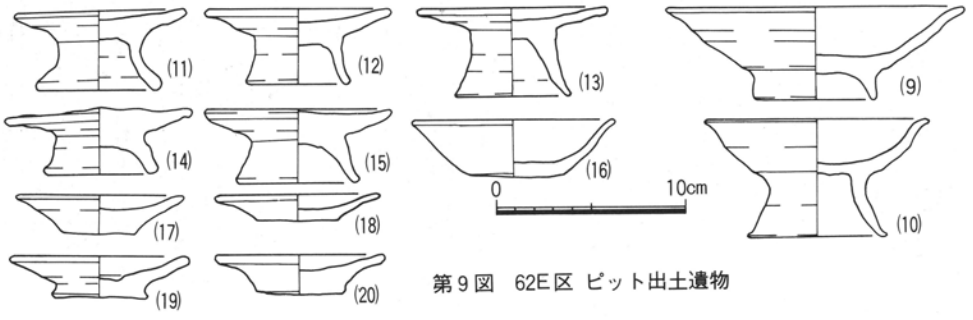
出土した土師器は大別すると次の形態に分類できる。

有高台杯　わずかに湾曲する体部に外反する口縁を呈し、低い脚をもつ。法量で大・中・小に分かれ、大きなものは1個体（口径16cm第9図9）、中位なものは5個体（口径11cm前後第9図4～8）、小さいものは3個体出土（口径10cm以下第9図1～3）。脚付杯　杯部の形態は、前記の有高台杯と同じ。高い脚をもつ。所謂、白色軟陶か？1個体出土（第9図10）。脚付皿　浅い皿に高い脚をもつものと偏平な体部に高い脚部がつく、托に似たものがある。5個体出土（第9図11～15）。擬高台皿　浅い皿に突出した台状の底部を持つ。底部に回転糸切り痕を残す。4個体出土（第9図17～20）。無高台杯　わずかに湾曲して立上がる体部をもつ。底部に回転糸切り痕を残す。1個体出土（第9図16）。

これらは、朝日西遺跡、大渕遺跡、尾張国府跡等の他、県外では三重県斎宮跡等でも出土しており、これらの遺跡の共伴遺物から11世紀後半から12世紀前半の時期が考えられる。古代末から中世初の土器様相を示す一群としてとらえられる。　（佐藤公保）



62E区 ピット遺物出土状態



第9図　62E区 ピット出土遺物

(3) 中世（Ⅰ期）

Ⅰ期の遺構を確認しえたのはＥ・Ⅰ区のみである。両区はＥ区の一部を除いて耕作による削平をうけており、遺構の遺存状態は悪く、検出しえたのは井戸と溝である。それらの遺構中からは、12世紀から14世紀にかけての山茶椀、施釉陶器等が見られた。したがって、調査区の制約、耕作による旧地表削平のため、集落の全体像は不明だが、五条川東岸に鎌倉時代から室町時代にかけての集落が展開していることがうかがえる。　　（佐藤公保）

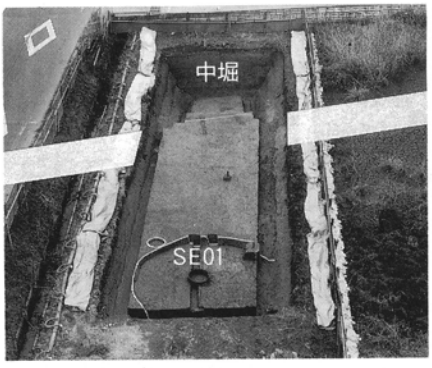
(4) 城下町期（Ⅱ期）

Ⅱ期の遺構は、調査区のほぼ全域に展開する。以下、Ⅱ－１、Ⅱ－２期の遺構の概要を述べる。

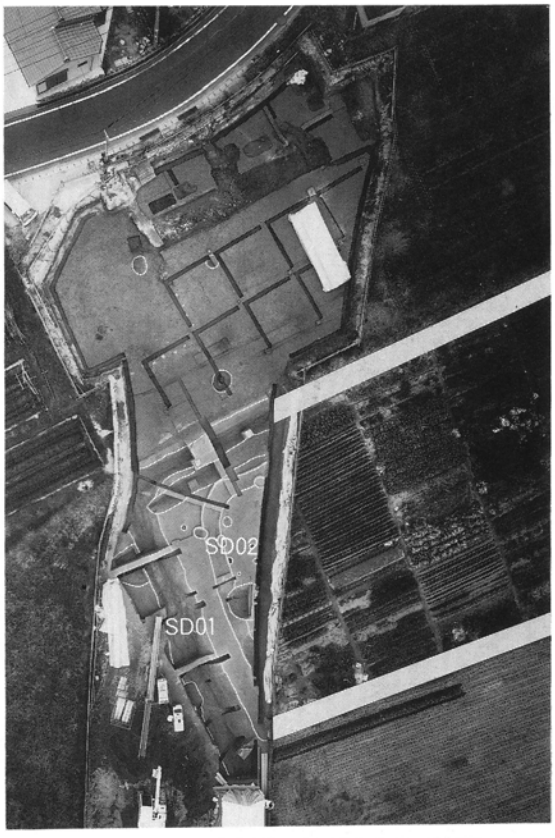
Ⅱ－１期　Ｅ区のみでこの時期の遺構を検出した。確認したのは溝２条である。溝の規模は、ＳＤ01が幅3.5m、深さ1.4m、ＳＤ02が幅2.0m、深さ0.4mを測る。断面形はＳＤ01が逆台形、ＳＤ02が舟底状を呈する。この２本の溝はほぼ正方位に、Ｌ字状に並走している。調査区の制約により、溝の内側には同期の遺構を確認できなかったが、戦国時代の居館跡の例にあるように溝の内部は屋敷地と考えられる。この屋敷地の規模は隣接する島



62Ｈ区　ＳＥ01



62Ｈ区　全景（白線は堀推定ライン）



62Ｅ区　城下町期全景（白線は島畠の範囲）

畠の現況から東西90m、南北30mにわたる長方形のプランをもつものと想定される。なお、金原氏により、北側のE・F・H・I区にII－1期の300m×300mの堀を有する方形区画が存在することを示唆されている。[注] しかし、今年度の調査では、その方形区画は確認しえなく、前記の屋敷地を検出したのみである。

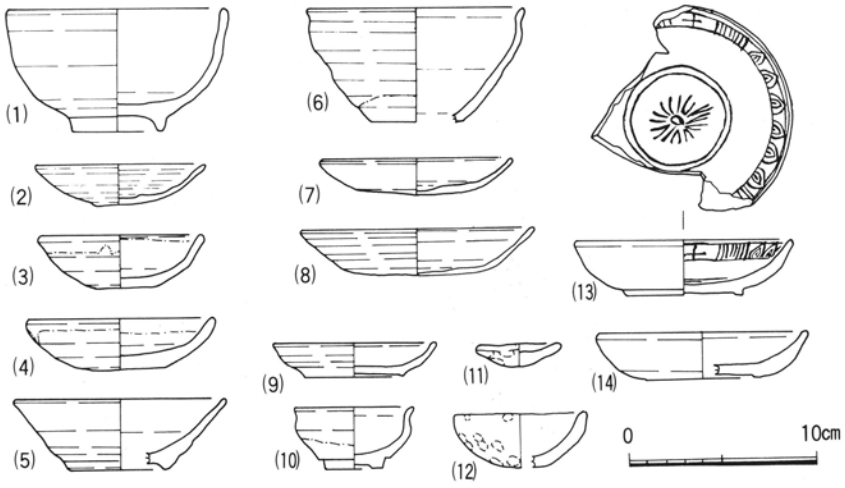
II－2期　H区の北端で、ほぼ東西方向へ走行する大溝（SD01）の南肩を検出した。確認しえた規模は、幅6m、深さ2.5mを測る。溝の上層は人為的に埋められており、この層からは、17世紀初頭の陶磁器等が出土している（第10図）。このSD01は、予想される規模、埋没状態、出土遺物の時期、位置より『清須村古城絵図』にある本丸の東側に位置する「中堀」に比定される。

H、J～L区では、「中堀」と同一方向に走る溝を数条検出した。これらの溝は約135mごとに等間隔で並走している。南北に細長いトレンチ状の調査区のため、溝間で同時期の遺構は検出しえなかったが、溝の規格性より、「中堀」の外側地区の町割を示すものと考えられる。また「中堀」の内側にあたるE区では、このような溝は確認できず、「中堀」を境として、その内側地区と外側地区の町割の性格の相異がうかがえる。

なお、今回の調査区では、III期（宿場町期）の良好な遺構は検出されなかった。

（飴谷　一、佐藤公保）

注　金原宏　「清洲城下町の堀の復元」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター　年報　昭和60年度』　1986



第10図　62E・H区　出土土器

(1)～(5)62E区SD01出土　(6)～(8)62H区SE01出土　(9)～(14)62H区SD01出土

(1)灰釉椀　(2)無釉皿　(3)・(4)縁釉皿　(5)朝鮮系椀　(6)鉄釉椀　(7)無釉皿　(8)土師器皿　(9)灰釉皿　(10)鉄釉小椀　(11)土師器皿　(12)るつぼ　(13)長石釉鉄絵皿　(14)長石釉皿

4．まとめ

1．本年度の発掘調査における最大の成果は、従来、若干の須恵器など遺物の出土は見られたが、明確な遺構としては確認し得なかった古墳時代以降の遺構・遺物を良好な状態で確認できたことである。調査区が限られており、面的な広がりで把握することは不十分なもののＥ・Ｈ～Ｊ区で検出された竪穴住居等からは古墳、奈良・平安時代の集落の存在がそれぞれ想定できる。さらに、Ｊ区において掘立柱建物などの遺構に関わって「沙中房」「大師寺」などと墨書された11世紀に比定される灰釉陶器が確認されたことは、当該期の寺院の存在をうかがわせるものである。

2．城下町期に関する大きな成果としては、Ｅ区において屋敷地を画する溝が検出されたことがあげられよう。屋敷地は、隣接する島畠より東西90m、南北30mの規模と推定され、清須城大改修（1586年）以前の城下町の姿を解明するうえで新たな知見を与えてくれた。

次に、Ｈ区において検出された溝（ＳＤ01）は、「清須村古城絵図」によれば、清須城を巡る三重の堀のうち「中堀」に比定されるものである。この溝が確認されたことは、大改修後の清須城下の構造の検証をさらに推し進める結果となった。

この他、「中堀」の外側にあたるＪ～Ｌ区から、東西に走行する溝が一定の間隔をもって検出され、「中堀」と「外堀」の間の地区の町割を考える上で貴重な知見を得た。

遺物については、陶磁器類の出土量は莫大であるが、Ｃ区で検出されたＳＫ65・ＳＤ04から出土した木製品群は、漆椀・曲物・下駄など多種多様であり、それぞれ城下町期前半・後半の陶磁器類では知り得ない生活像を復元するのに好個な資料である。

3．宿場町期に関しては、当時、清洲宿の一角を形成していたと考えられるＣ区より、多数の井戸が検出され、町並復元の一つの手がかりを与えてくれた。

4．従来、清洲城下町遺跡の時期区分については、Ⅰ期（中世）、Ⅱ期（城下町期）、Ⅲ期（宿場町期）の3期区分を用いてきた。しかし、本年度の調査結果より、五条川東岸の南の自然堤上に古墳時代以降も綿々と生活が営まれてきたことが確認され、時期区分について再検討が必要となった。

その結果、本遺跡の時期区分に関しては、Ⅰ期（古墳時代）、Ⅱ期（奈良・平安時代）、Ⅲ期（鎌倉・室町時代）、Ⅳ期（城下町期）、Ⅴ期（宿場町期）の5期区分案を考えたい。

（細野正俊）

小田井遺跡

小田井遺跡は名古屋市西区貴生町地内に所在する。昭和60年度の試掘の結果に従い、7箇所の調査区を設定した。検出できた遺構の時期は、古墳時代前期と近世である。中世の遺物は、若干みられたが、遺構に伴わず、包含層中より出土したものである。

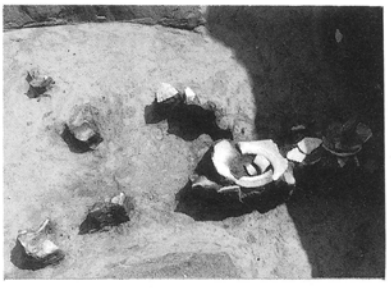
古墳時代前期の遺構はD区より西側の区で検出しえた。ことにA区では、土坑等の遺構が集中して見られ、周囲に同時代の集落の存在をうかがえる。これらの遺構群は、南北へのびる自然堤上に位置し、その基盤は東へ向い低くなる。よって、同時代の遺構は、A区よりさらに西へ広がり、D区をもって東限となる。

近世の遺構は、B区で北東より南西へ走る大溝を検出。一部は、現代の用水とも重なる。D・E区では、セクションで水田址を確認できた。遺物を伴わず、時期は不明であるが、遺構面より近世以降と考えうる。F・G区は、立会い調査により近世以降の耕作地としての可能性が高いことが認められた。

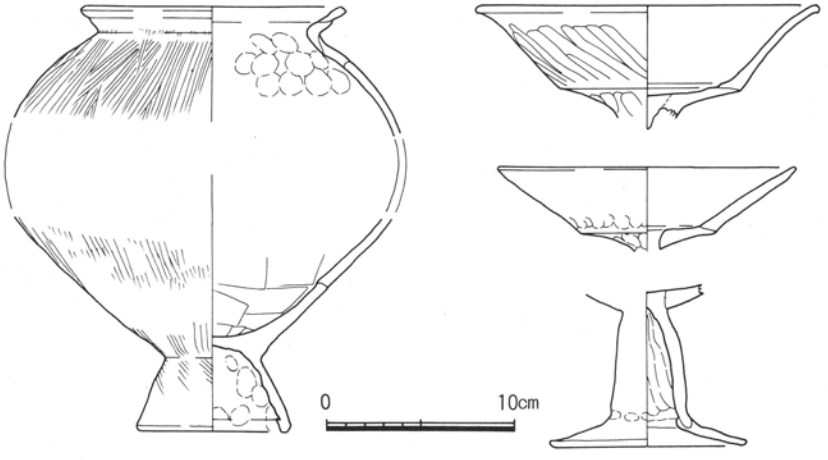
(佐藤公保)



小田井遺跡 調査区位置図(S=1/5000)



62A区　SK10遺物出土状態



62A区 SK10出土土器

朝　日　遺　跡

1．調査の経過

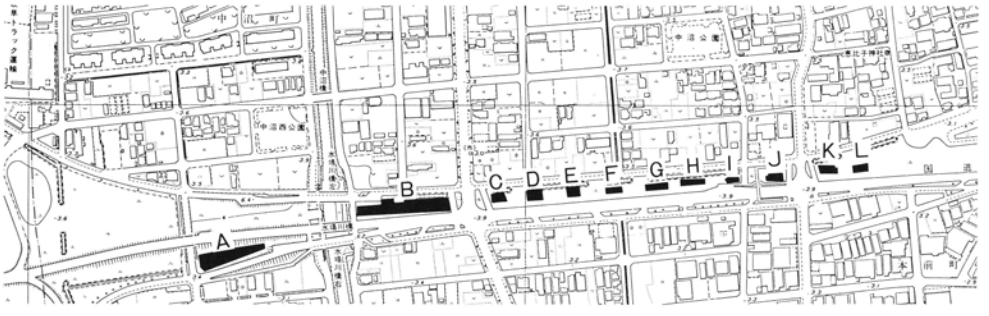
朝日遺跡は沖積地を東西にのびる微高地に立地しており、標高は２～４ｍを測る。遺跡は弥生時代を中心として営まれ、大きく南と北の居住域、東と西の墓域に分かれており、その推定面積は70～80万㎡におよんでいる。

本年度は東墓域内とその東側部分を、Ａ～Ｌ区の12調査区に分け、合計6214㎡の調査を実施した。以下その成果について記述していくが、遺構・遺物の時期区分については先年度の「年報」に従い、Ⅰ～Ⅵ期の６時期に分ける。

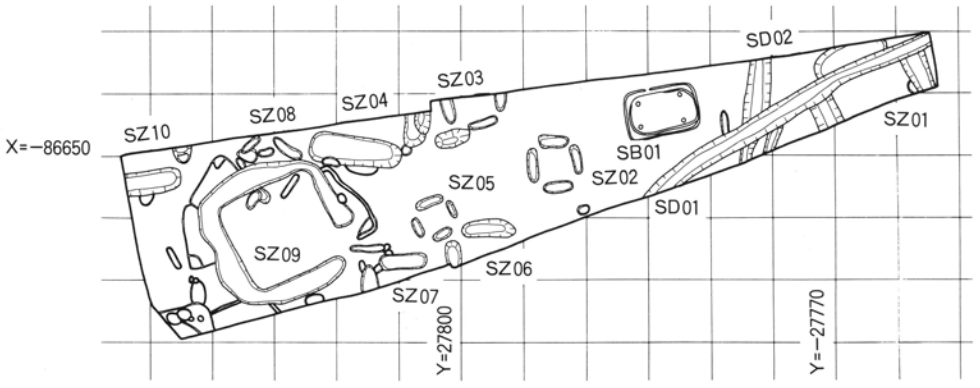
2．調査の概要

62Ａ区　Ⅲ期に属する方形周溝墓が９基検出された。規模は径（周溝の下端長）３～７ｍの小規模のものばかりで、全て四隅が切れるタイプである。溝内供献と思われる土器がＳＺ04・10より出土しているが、点数は極めて少ない。Ⅳ期には方形周溝墓１基ＳＺ09が検出される。ＳＺ09は径８ｍの正方形をなし、南東隅に１ヵ所の陸橋部をもつ。ＳＢ01に関しては遺物の出土がほとんどなく、時期決定が困難であったが、Ⅲ～Ⅳ期にはいるものと思われる。遺構は周溝のみで、二重に廻る。外側の周溝で長径６ｍ、短径４ｍを測り、内側のものはそれよりひとまわり小さい。周溝は内側→外側の準に拡張するように作られているが、柱穴にはその痕跡はみられない。また、その他同時期の方形の落ち込みや周溝状の溝がいくつかみられたが、住居とは認定できなかった。Ⅳ期には溝２条ＳＤ01・02があり、その南を錯綜して走る溝群に繋がる。また、ＳＤ01の上・中層より多量の土器の出土がみられた。

62Ｂ区　Ⅲ期には方形周溝墓５基と多数の溝が検出され、そのうちの幾つかは方形周溝墓の周溝になるものと思われる。測定可能なものの規模はＳＺ02が径18ｍ、ＳＺ04が径10ｍ、



第１図　調査区位置図(1:7500)



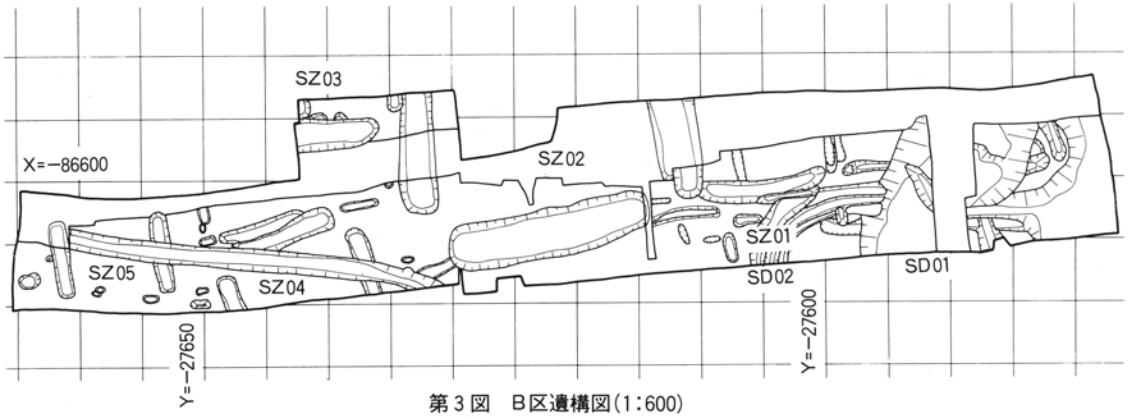
第２図　Ａ区遺構図(1:600)

ＳＺ05が径７ｍを測る。ＳＤ01は上・下層に粘土・粘質土、中層に砂層（自然木を含む）が堆積しており、中層の時期に流水があったものと考えられ、下層上部よりⅥ期～古墳時代前期の土器が多量に出土している。ＳＤ02・03は近世以降の溝である。

62Ｃ～Ｅ区　Ⅲ期の方形周溝墓と周溝状の溝がＥ区まで検出されており、Ｅ区が東墓域の東端になるものと考えられる。調査区が小さく全貌が窺える方形周溝墓は少ないが、Ｃ区で検出された径８ｍのものを含めて小規模なもので占められている。Ⅵ期に属するものは土坑１基と溝１条がある。溝はＥ区を南北に走り、幅2.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。またＣ区より中世の不定形の落ち込みが検出されている。

62Ｆ～Ｊ区　この５調査区ではⅥ期～古墳時代前期の土坑・井戸状遺構・溝が散発的にみられるのみである。土坑の中でもＧ区ＳＫ02は、Ⅵ期の良好な資料の出土をみた。井戸状遺構はＨ・Ｉ・Ｊ区にそれぞれ１基づつ検出された。特にＩ区ＳＫ01では、上・中層より古墳時代前期、下層よりⅥ期の土器群が出土している。

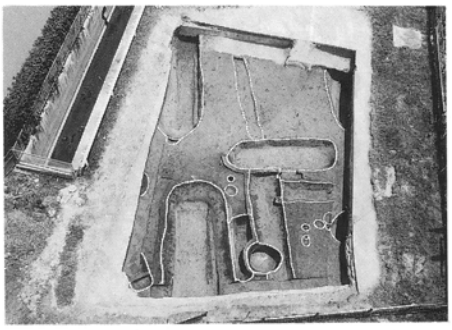
62Ｋ・Ｌ区　遺構はまったくみられない。また地山高もＪ区以西に較べ20㎝程低くなっており、東側になだらかに落ち込んでいくものと考えられる。



第３図　Ｂ区遺構図(1:600)



第4図　朝日遺跡弥生時代中期遺構図(1:6000)



C 区 全 景



G区K02土器出土状態



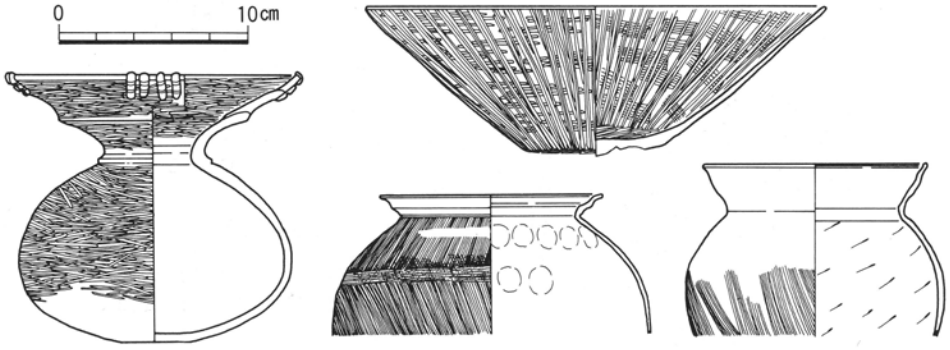
I 区 K01土器出土状態

3．まとめ

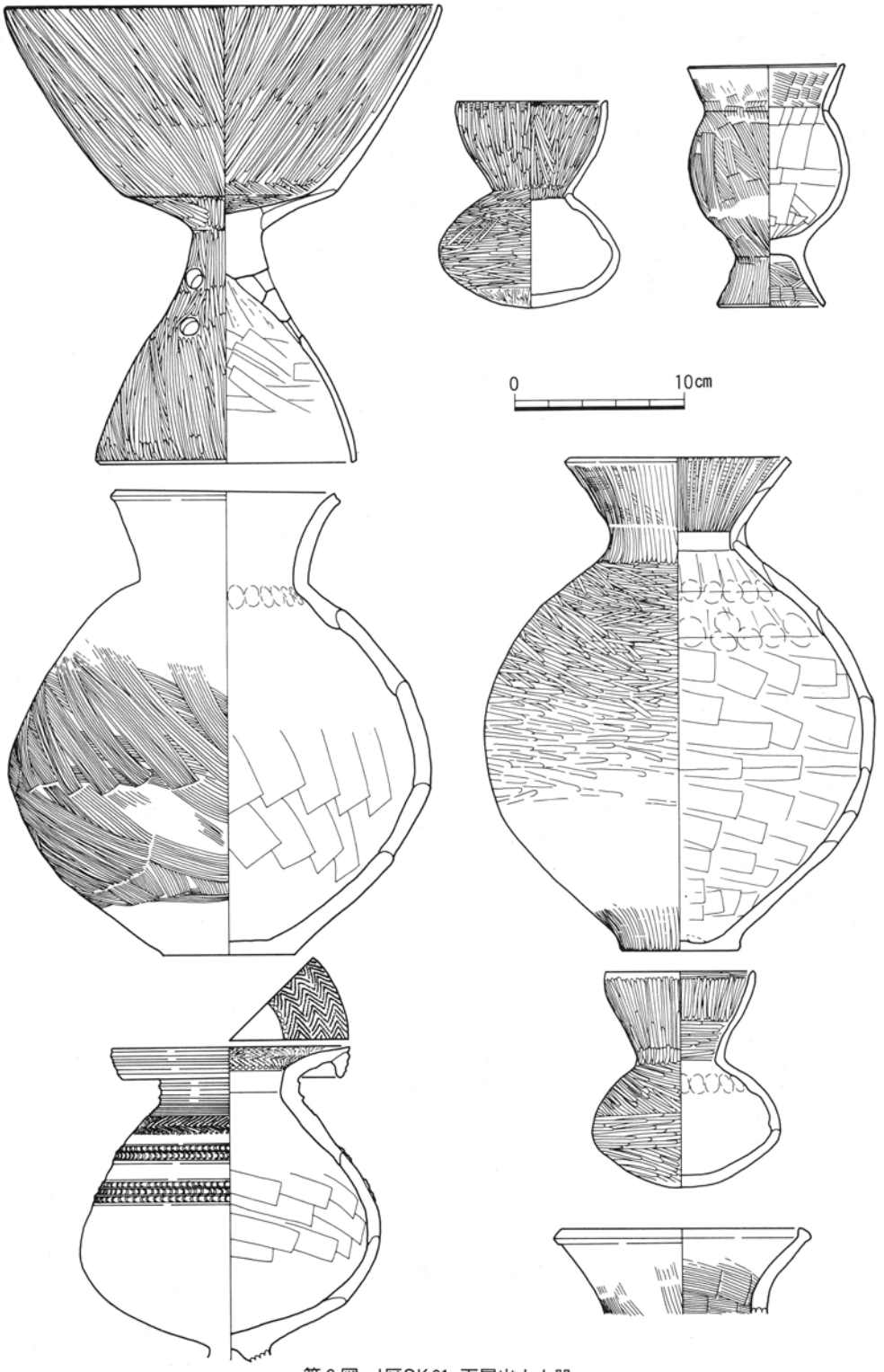
本年度の成果としては、まず中期に属する東墓域の東端が確認されたことがあげられる。これで東墓域の東西長は約600mとなり、南北（特に北側）が不明であるが、微高地上を東西に細長く伸びる墓域が想定される。またB区ＳＺ02を中心とした方形周溝墓の一群は、61T・U区の大型方形周溝墓ＳＺ01を中心とした一群とは距離が離れているため別単位かとも考えられるが、方向軸はほぼ同方向をむく。A区ＳＢ01が、墓域内の方形周溝墓が築かれない部分に単独で存在することは注目に値し、この住居の性格の解明が今後の課題となっていこう。

また、Ⅵ期～古墳時代前期の遺構はＪ区まで続き、それ以東は遺跡がみられず、同時に朝日遺跡の東端が確認されたことになるわけであるが、この時期には縮小しつつあった南・北居住域との関係は不明であり、特に井戸状遺構のような生活に密着した遺構が存在することや廃棄土坑・溝が多いことを考えると、近隣に居住域があり、南・北居住域とはべつのグループがあったことが示唆されよう。

（宮腰健司）



第5図　I区SK01 上・中層出土土器



第6図　I区SK01 下層出土土器

比良（月縄手）遺跡

今年度は、本遺跡を「比良遺跡」として調査を進めてきたが、調査の結果、遺跡の推定範囲は東西100ｍにも充たない、幅の狭い微高地上に位置することがわかったため、「比良」という広範囲な地区名を名称として用いるより、調査地区の小字名（月縄手）を名称として用いる方が適切であると考える。

１．位置・経過

比良（月縄手）遺跡は、名古屋市北部を流れる庄内川右岸の微高地上（名古屋市西区比良二丁目）に位置する。調査は環状２号線（国道302号線）橋脚建設工事に先立ち、昭和62年６月25日から８月14日まで実施し、調査区は東西に三ヶ所（Ａ・Ｂ・Ｃ区）設定し、この内明確に遺構が検出できたのはＢ区のみであった。

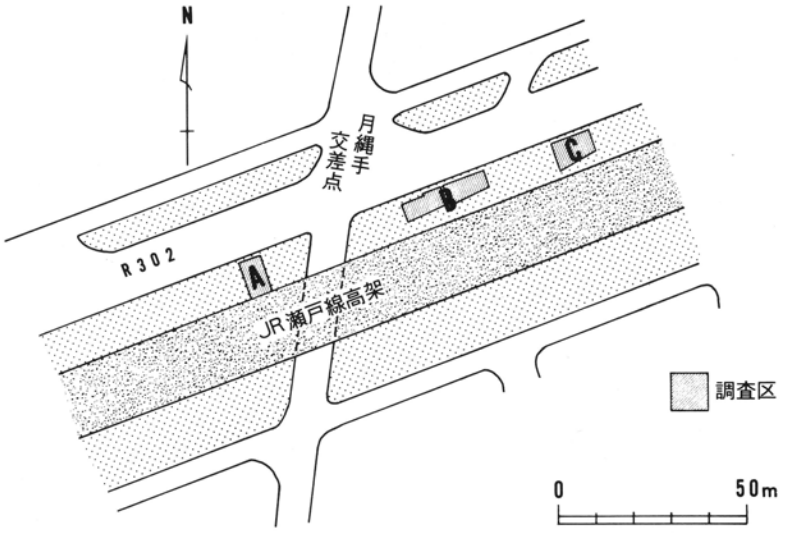
２．層序

基本層序は、Ａ～Ｃ区共に現代の水田面によって古墳時代前半の包含層中途まで削平されており、この下に更に各地区同一レベルで砂質シルト（無遺物）層が堆積している。この砂質シルト層を間層として、その下に弥生時代前期の包含層が存在する。この包含層はＢ区において最も高く、標高3.5m（Ｔ・Ｐ）を測る。Ａ区との比高は約１ｍ有り、Ｃ区では東に向かって緩やかに下って行く。その下に再び砂質シルト層が堆積し、確認しえた最下層は粗砂であった。以上の層序から、本遺跡は大別すると、古墳時代前半と弥生時代前期の２時期に分かれる。以下これを上層・下層と仮称し、紹介する。

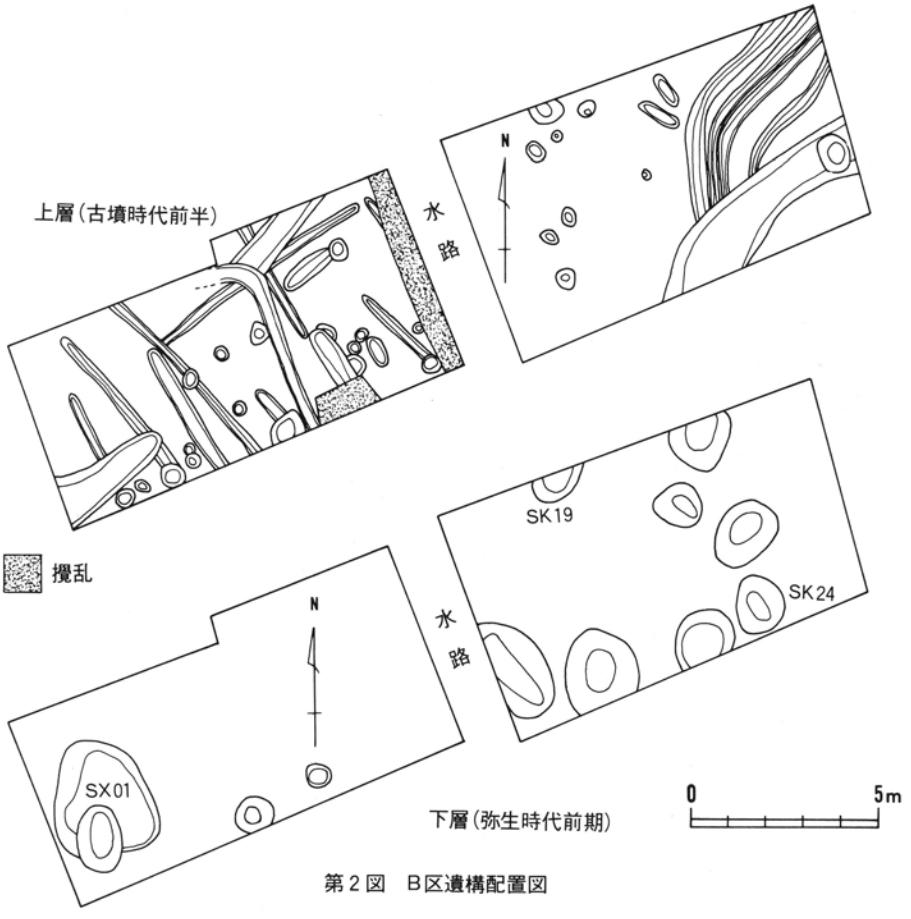
３．遺構

上層では、古墳時代前半の溝、小穴が検出された。溝は最低１回は掘り返された可能性があるが、調査区内で他に関連遺構が検出されていないため、その性格は不明である。同様に多数検出された小穴も、規則性、方向性などが認められないため、性格は不明である。

下層においては、砂質シルト層を全体に除去したところ、完全に埋設しきらずに地表に窪みを残している状態で、土坑状の落ち込みを数か所検出した。これらの他に土坑12基を検出した。この土坑は埋土の分析が未了ではあるが、土器の出土状態などから、廃物処理を目的としたものと思われる。これはこの時期の居住域が近在する可能性を示すものであるが、調査区内では検出できなかった。



第1図　比良(月縄手)遺跡調査区位置図



第2図　B区遺構配置図

4．遺物

上層の出土物は、ほとんど遺構に伴うかたちで出土していない。須恵器は含まれておらず、土師器によって構成されており、甕、高杯、台付甕、壺等の破片が出土している。時期的には、僅かに含まれる欠山期の物を除いて、元屋敷期以降の物である。

下層の出土遺物は、遺構包含層中を問わず弥生時代前期に限られたことが注目される。石製品、壺蓋、壺、甕、二又柱口状土器片等多数出土している。これらの出土遺物はいわゆる遠賀川系（畿内等Ⅰ様式影響下）土器が主体を成し、少ないながら条痕文系の土器も含まれている。

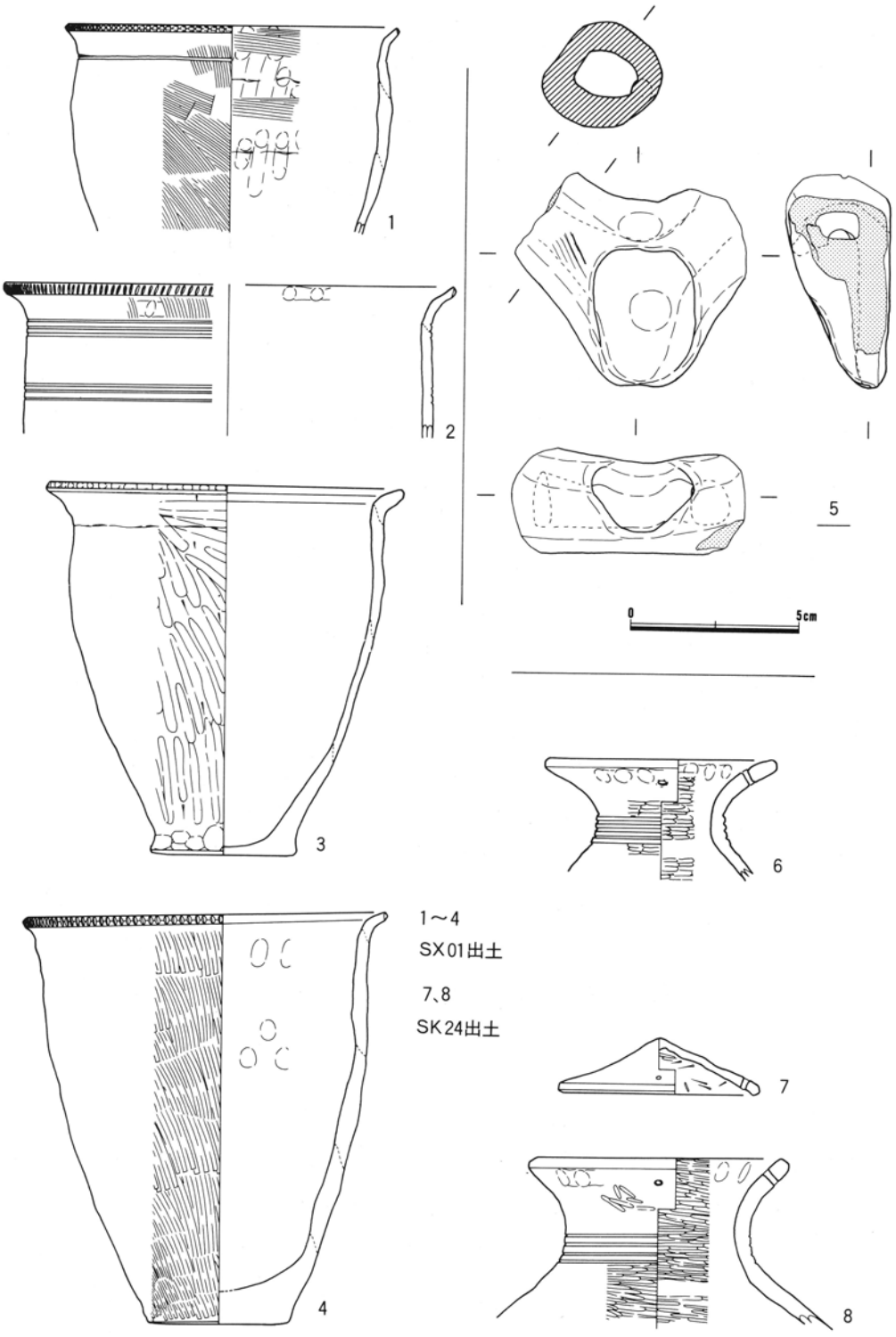
5．展望と課題

ここで、本遺跡の調査によって提示された問題点と、整理作業を進めて行く上での課題について述べる。

本遺跡では先にも述べたように、古墳時代前半の包含層の下に砂質シルト層を間層とし、弥生時代前期の単純層が検出された。今回の調査ではこの層の検出が最大の成果と考え、以下弥生時代前期の本遺跡に絞って考えてみたいと思う。

地理的な環境においては、A、B、C区の層序が示すように弥生時代前期の段階での本遺跡は、B区がもっとも高い面でありA区、C区との対応関係を考えた場合、南北の狭い微高地上に立地していると考えられる。そして露呈していたはずであったこの部分が、何らかの自然的要因によって水の影響を強く受ける環境へと変化したらしいことが、砂質シルト層の堆積状況から窺える。再び水の影響が少なく、人々が生活の営みの痕跡を残せるような露呈した状況に戻るのは、古墳時代を待たねばならなかった。この間に砂質シルト層の堆積によってパックされた状態になり、地形はこの堆積によって微高地をも消失させ、起伏の少ない環境へと変化して行ったわけである。したがって、弥生時代前期の本遺跡の地形については、地籍図等による想定は不可能であり今後の周辺資料の増加に期待したい。

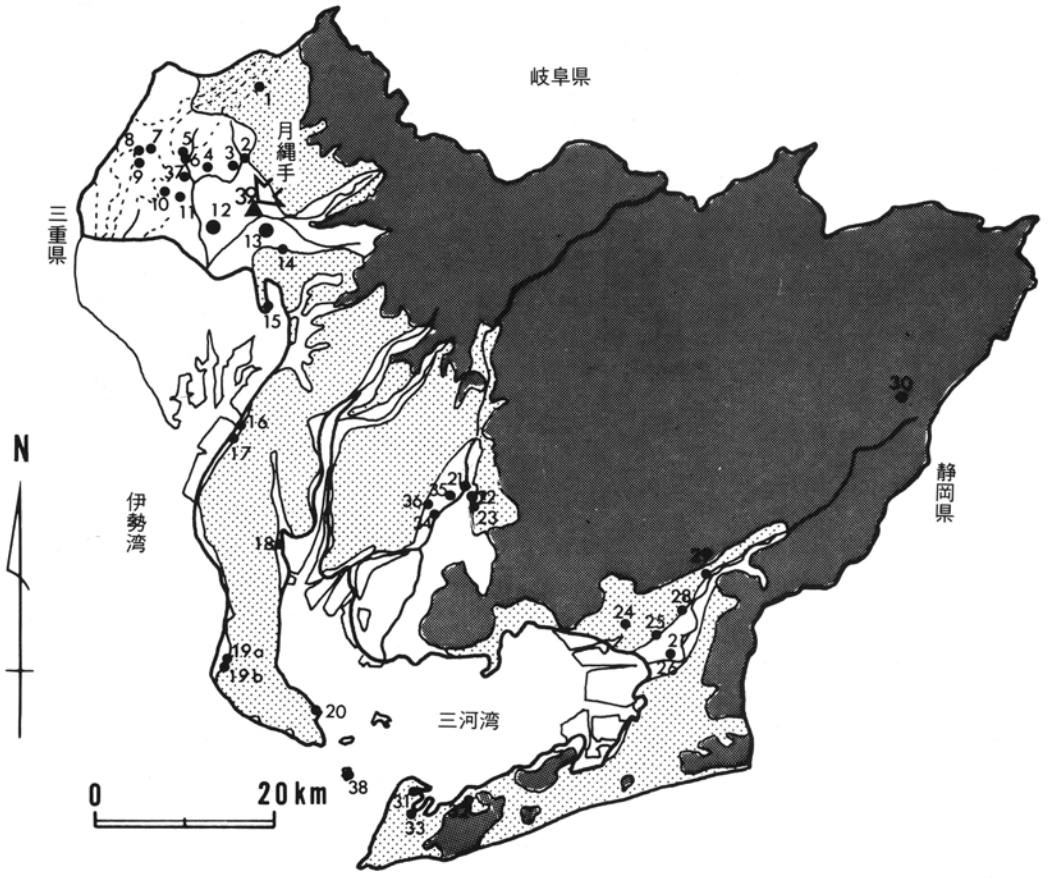
弥生時代前期の尾張北西部は、稲作農耕を伴う前期弥生文化の伝播を語る時、必ずと言って良いほど紹介される地域である。それはこの地域が面的な意味で、前期弥生文化が直接影響を及ぼした地域の東端にあたるからである。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて東海地方西部を中心とする地域には、条痕文系土器文化が繁栄した。この地域に西から稲作を伴う遠賀川系土器文化が伝播し、条痕文系土器文化と接触を持ちながらも、二つの文化がそれぞれどちらに吸収されることもなく共存した、と現在まで説かれている。しかし尾張北西部の弥生時代前期の様相は、こうした説が語られているにもかかわらず、その接触状況や共存状況を具体的に示すような、良好な同時代資料に乏しいのが現状である。



1～4
SX01出土

7、8
SK24出土

第3図　B区下層出土遺物

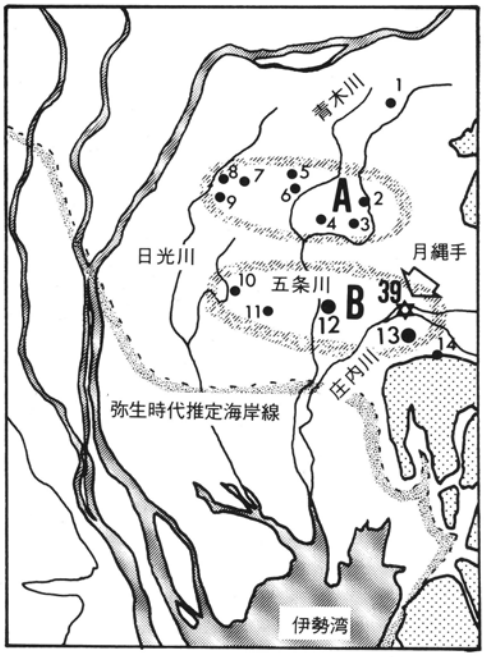


番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	西浦	丹波郡大口町	22	高木	岡崎市
2	曽野	岩倉市	23	神明	岡崎市
3	のんべ	岩倉市	24	河原田	宝飯郡御津町
4	元屋敷	一宮市	25	樫王	宝飯郡小坂井町
5	馬見塚D地点	一宮市	26	五貫森	豊橋市
6	弥勒	一宮市	27	大蚊里	豊橋市
7	北川田	一宮市	28	麻生田大橋	豊橋市
8	山中	一宮市	29	水神平	宝飯郡一宮町
9	河田	一宮市	30	桜平	北設楽郡東栄町
10	大塚古墳下層	稲沢市	31	八幡上	渥美郡渥美町
11	清水	稲沢市	32	西郷中	渥美郡渥美町
12	朝日	西春日井郡清洲町	33	保美	渥美郡渥美町
13	西志賀	名古屋市北区	34	亀塚	安城市
14	片山神社	名古屋市東区	35	楠	安城市
15	高蔵	名古屋市熱田区	36	釈迦山	安城市
16	荒古（八幡森地点）	知多市	37	下津城	稲沢市
17	細見	知多市	38	神明社	知多郡南知多町
18	岩滑	半田市	39	比良（月縄手）	名古屋市西区
19a	下高田	知多郡美浜町			
19b	下高田（丸山地点）	知多郡美浜町			
20	山田	知多郡美浜町			
21	矢作川河床	岡崎市			

第4図　愛知県遠賀川系土器出土遺跡分布図

愛知県ではこれまで遠賀川系土器が確認された遺跡は、40を数える。もっともこの中には表採資料のみである例[註1]や、わずか数片のみ出土した例、現在では確認が不可能な例等が半数近くを占める。こうした県下の状況のもと、遠賀川系土器が主体的に出土する遺跡の分布に目を向けて見ると、それらは尾張北西部に集中する。今回これに本遺跡が加わったことになる。[註2]この地域の弥生時代前期の遺跡に関しては、高橋信明氏が興味深い分析を行なっている。[註3]氏は尾張北西部に於ける遠賀川系土器が出土する遺跡を、出土遺物の在り方から三パターンに分けている。すなわち縄文晩期土器が主体となる「縄文型」(西浦遺跡が相当)、遠賀川系土器が相対的数量においてのみ優勢となる「弥生A型」(第5図Aグループ)、遠賀川系土器主体(9割強)の「弥生B型」(第5図Bグループ)である。「縄文型」は扇状地上に、「弥生A型」は丘陵に近い平野部に、「弥生B型」は当時の海岸線に近い平野部に位置する。このような三つのパターンの遺跡の位置関係は、「縄文ムラ」から「弥生ムラ」への変容過程を考える時、重要な意味を含んでいると言えよう。本遺跡は、この三パターンの中では位置的にも内容的にも「弥生B型」に属し、その資料整理に於ける課題も多い。出土土器類の器面調整の検討等は、文化動態を探る上で重要な資料を提供することになるであろう。土壌サンプルによる古墳境の復元、胎土分析による産地同定(他遺跡の資料協力を予定)等の科学分析を含め、広い視野に立った上で整理作業に臨みたいと考えている。

(松田　訓)



第5図　尾張北西部遺跡分布図

註

1　第4図参照　『マージナル5』 考古学談話会 (1985) 所載の分布図をもとに補足、改訂を行なったものである。北村和宏、神谷友和、後藤浩一氏にご教示を得た。38は山下勝年氏に提載の許可をいただいた。

2　第5図参照　高橋信明　1985「尾張東北部及び南西部」『マージナル5』所載の分布図をもとに補足、改訂を行なったものである。

3　註2論文。

岩　倉　城　遺　跡

位置・経過：岩倉城遺跡は、岩倉市下本町字城跡を中心とする一帯に所在し、五条川右岸の標高10m前後の自然堤防上に立地する。発掘調査は、県道萩原・多気線が岩倉城本丸跡の北部を東西に横切るために事前調査として実施したもので、城跡の下には弥生時代の遺構の存在が推定できたので、二面調査となった。調査面積は756㎡であり、発掘区を東西にA・B区に分けて実施した。



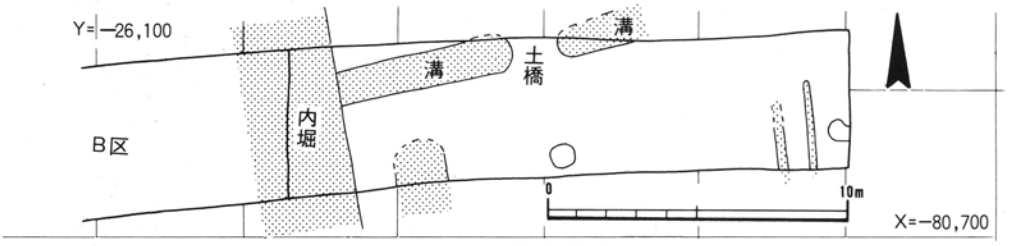
第1図　岩倉城遺跡位置図

岩倉城史：織田敏広が築城したといわれるが確証はない。しかし文明8年（1476）守護所をめぐり、下津にいた守護織田敏広と織田敏定が争い、敏定が下津を焼いたので、敏広は岩倉城を築いて清洲城の敏定に対抗し、文明11年（1479）の和議後、敏広は岩倉に在城したらしい。その後代々敏広の子孫が城主になったが、信賢のとき永禄2年（1559）に織田信長に攻められて落城し、以後廃城となった。



第2図　岩倉城二重堀復元図

遺構：城の縄張りが明らかな絵図等は残存しないが、北東から五条川の水を二重堀に引き、東西60余間の本丸に望楼をそなえた平屋建て間口21間、奥行15間の建物があ



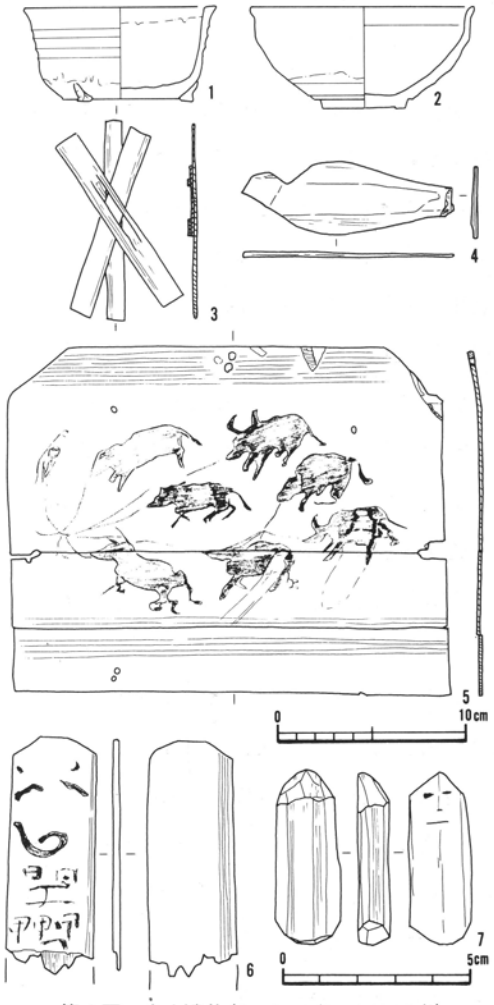
第3図　A 区 遺 構 図

ったらしい（「前野文書」）。地籍図からは、北東部分を除いて外堀の位置が復元できる。A区では建物跡は検出していないが、西端で南北にのびる幅６ｍ、深さ２ｍの内堀らしい溝を検出した。また東西にのびる幅３ｍ、深さ１ｍの溝も検出したが、これは本丸内を区画する溝で、堀り残し部分は土橋と考えられる。

遺物：A区で出土した主な遺物には、土師質皿、瀬戸・美濃系陶器、常滑系陶器、中国陶磁、木製品、竹製品等があり、内堀・溝からの出土が多い。特に土師質皿は多く、一括投棄された様子が認められる。瀬戸・美濃系陶器としては天目茶椀(図４－２)・香炉(図４－１)・擂鉢、常滑系陶器には甕、中国陶磁には青磁椀・鉢、染付、木製品には板・折敷・ひしゃく・曲物・しゃもじ・箸・漆椀・下駄のほか呪術的・祭祀的色彩をおびた遺物（図４－３～７）がある。竹製品としては、茶筅・籠等がある。

築城時の整地層中から、弥生時代後期の土器、奈良時代の須恵器が多数出土した。

（松原隆治）



第４図　出土遺物(1～4：1/4、6･7：1/2)



内堀　遺物出土状況



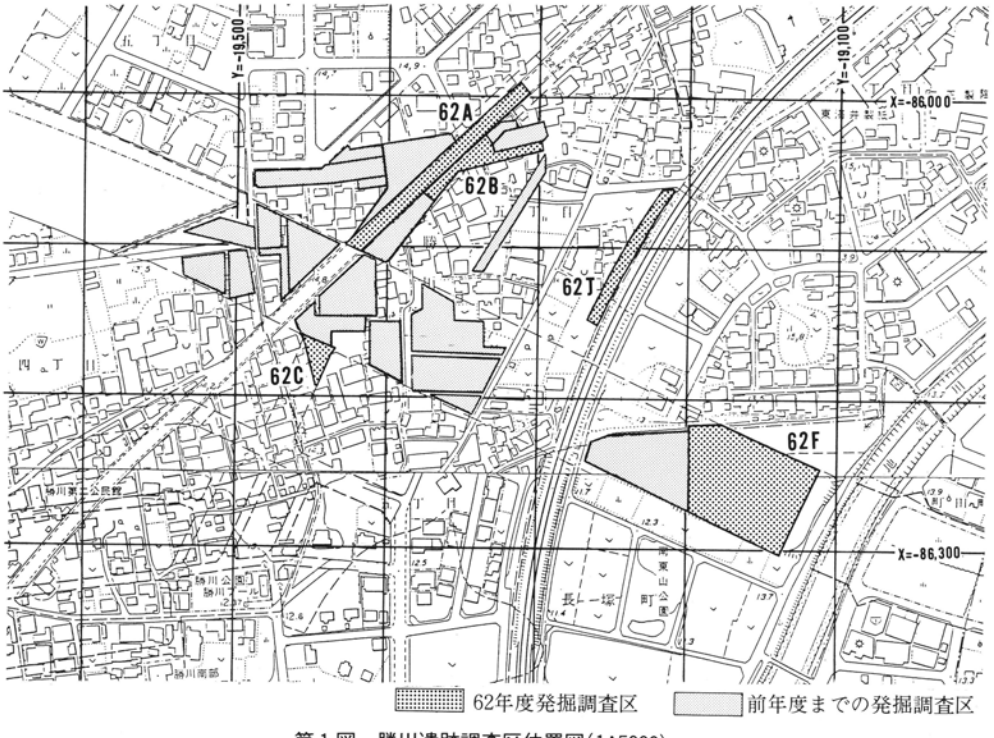
発掘区全景

勝　川　遺　跡

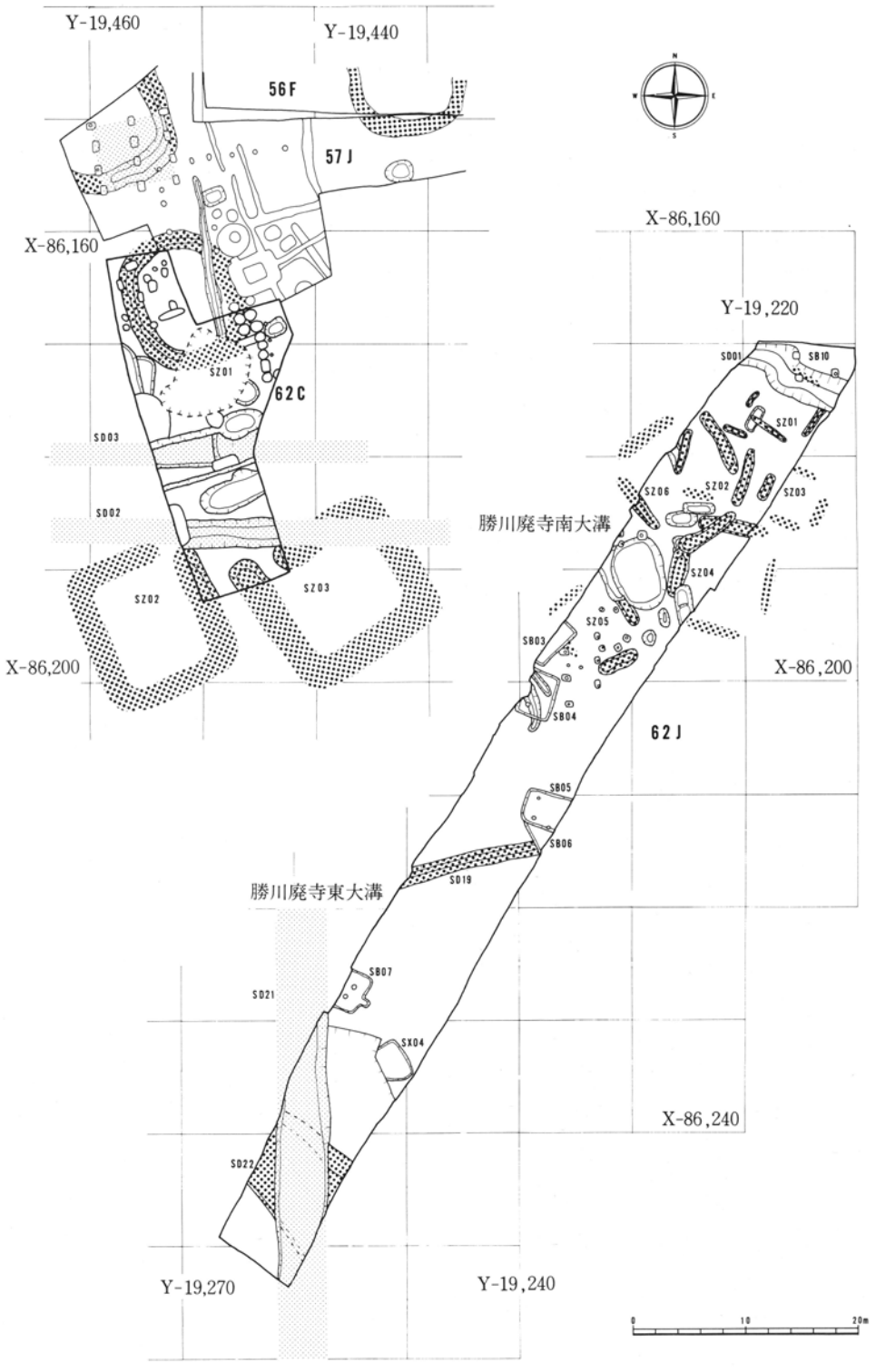
調査経過

勝川遺跡は、鳥居松面とよばれる洪積段丘の南端付近に立地する上屋敷地区と、その段丘下の沖積地に立地する苗田地区に分けられる。上屋敷地区は標高13mであり、弥生時代～江戸時代の四期に区分される複合遺跡である。苗田地区は標高９ｍであり、弥生時代～平安時代の複合遺跡である。Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：弥生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良時代～平安時代（勝川廃寺）、Ⅳ期：江戸時代（下街道の勝川宿）とする。

本年度は、上屋敷地区・苗田地区を発掘調査した。62Ａ・Ｂ区で方形周溝墓４基、掘立柱建物４棟、溝（下街道の側溝）を追加することができた。62Ｃ区で勝川廃寺南大溝・62Ｊ区で同東大溝を検出でき、寺域の範囲をより一層具体的にすることができた。62Ｊ区で勝川Ⅰ期の方形周溝墓・竪穴住居跡・溝を検出することができた。62Ｆ区は、56Ⅰ区の東隣の調査区である。弥生時代中期の木製品と木器加工場跡の検出、奈良時代～平安時代の木製祭祀具（人形など）と墨書土器による「祓の祭祀場跡」を検出した。人形７点・墨書陶器約50点が川の岸辺から出土し、数度の祭場跡と考えられる。　　（神谷友和）



第１図　勝川遺跡調査区位置図(1:5000)



第2図　62C、J区 主要遺構図(1:600)

上屋敷地区

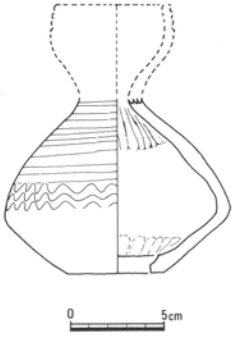
弥生～古墳時代

勝川Ⅰ期からみていくと、主な遺構に方形周溝墓９基・溝２条・竪穴住居跡１軒がある。方形周溝墓は62Ａ・Ｂ区や62Ｊ区に集中し、墓域の拡がりを示す資料である。62Ｂ区のＳＺ02は１辺15ｍと勝川遺跡では最大規模を測り、その遺構の南半分は調査区外となっている。東溝は巾1.2ｍ・深さ0.9ｍを測り、周溝内のトレンチ南壁付近で弥生土器が１点出土した。その土器（第３図）は、周溝底部で倒立の状態で出土した。口頸部は欠損していて、焼成後に底部穿孔している。外面の文様は櫛描直線文・波状文であるが、回転台を用いて施文していないやや雑なものである。西溝から２個分の壺の破片が、底面あたりに集中して出土している。62Ｊ区で、方形周溝墓６基・竪穴住居跡１軒・溝２条が検出できた。平面形は４隅が途切れたものばかりであり、ほぼ同時期と考えられる。幅1.0ｍ深さ0.6ｍほどであり、周溝内から土器はほとんど出土していない。62Ｊ区のＳＺ06は、ＳＺ02・04と重複している。62Ｊ区の方形周溝墓群は、今回の調査で初めて検出できた墓域である。62Ａ・Ｂ区の方形周溝墓群と62Ｊ区のそれとが一つの墓域を形成していくのか、２つの墓域を成すのか今後の課題としていきたい。ＳＤ19は、幅1.0ｍ・深さ２ｍの東西にのびるＶ字状の溝である。ＳＤ22は、幅２ｍ・深さ40㎝の溝であり、上部はＳＤ21などによって削平されている。ＳＤ19の埋土の中層から大量の土器が出土し廃棄されたものであろう。その２条の溝が、そのまま西方へのびて交差することが調査されている。ＳＤ19を小溝、ＳＤ22を大溝とした場合、大溝に注ぐ小溝ということが考えられる。ＳＢ04は、一辺６ｍ・深さ20㎝の竪穴住居である。埋土内から土器が少量出土している。

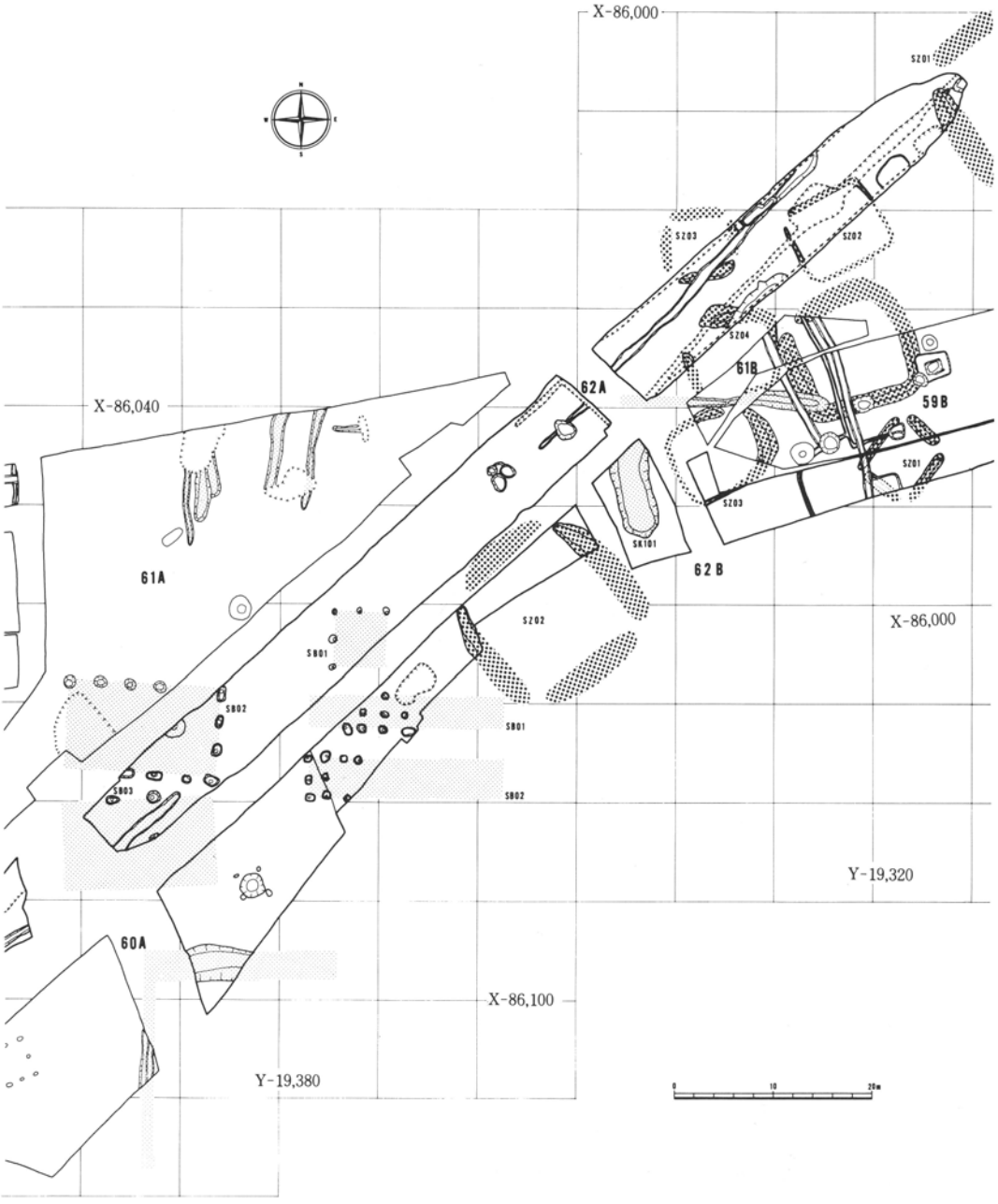
勝川Ⅱ期は、62Ａ・Ｃ区で方形周溝墓が検出できた。平面形態は２辺以上がつながっているものである。62Ｃ区周辺にも方形周溝墓が多くあり、広範囲に墓域が拡がるのか、３群を形成していくのか、今後の課題としたい。（神谷友和）



Ｂ区　ＳＺ02土器出土状況



第３図　SZ02出土土器

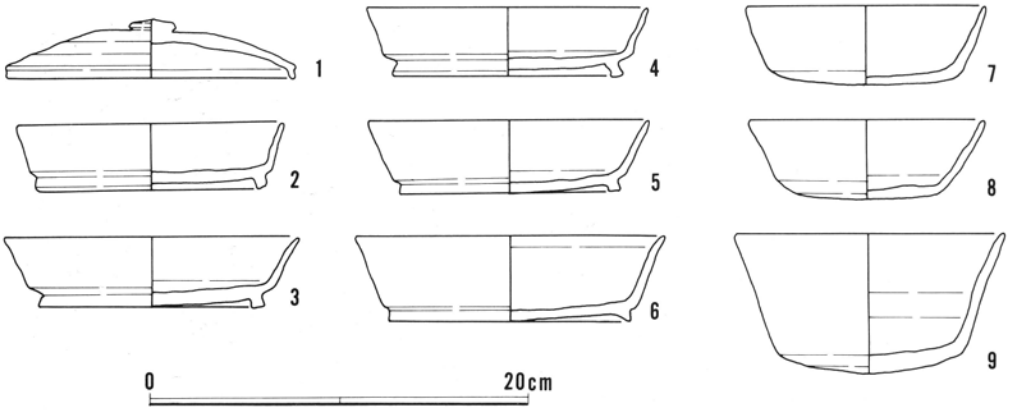


第4図　62A・B主要遺構図

奈良・平安時代

勝川廃寺を中心とする奈良・平安時代の遺構で、今回２つの重要な発見があった。１つは寺地を画する大溝について。62Ｃ区南隅において勝川廃寺南大溝が予定位置に検出できたが、さらにその内側に並行する一条の溝の存在があらたに確認できた。南大溝（62ＣＳＤ02）は検出面で幅2.7m、深0.5mを測り、内側の溝（ＳＤ03）は幅約２m、深0.3m、両溝の中心部からの距離は7.5mを測る。この長さは西大溝と平行する内側の溝との距離と同一であり、したがってすくなくとも西及び南側では、7.5mの距離をたもって２条の溝が廻っていた可能性が考えられる。ところで62Ｊ区では東大溝があらたに確認できた。幅５m、深0.4～1.0m。この東大溝は従来考えられていた場所よりさらに約40mほど東方に位置しており、これにより寺地の東西の幅が確定したことになる。

次に注目すべき点は大型の建物群の検出である。62Ａ・Ｂ区で東西５間（15m）南北３間（９m）の掘立柱建物２棟、東西２間、南北２間（5.4m）の建物１棟、さらに東西４間以上、南北２間の長大な掘立柱建物２棟が復原できる。これらの建物群の配置はおそらくほぼ平行して整然と存在していたことが予想できる。建物の性格については、この場所が勝川廃寺中心伽藍の推定地北方に位置するわけであり、この点を十分に配慮する必要があろう。また62Ｊ区北隅で多量の須恵器（第５図）瓦を伴った建物跡が確認できた。これらは勝川廃寺の区域外に位置し、東方周辺部に瓦葺大型建物の存在を推測させる。



第５図　SD01出土土器

江戸・明治時代

下街道「勝川宿」関係の遺構としてまず興味深いものは62A区で検出できた「下街道」跡である。道の両側溝が見つかり、その溝中心間の距離は約4mを測る。北側の溝は幅1m、深0.1mであった。調査区内では下街道はほぼ現在の県道鳥居松線内に位置している。さて次に62C区北側で土坑が集中する場所が見られる。これらの土坑群は57J区で確認した井戸及び方形石組遺構・溝等に伴う施設と考えられる。これらの土坑には3つの種類が認められ、まず常滑産の埋甕を配するもの、次に粘土を坑壁面に厚く塗りかためるもの、そして大型で炭化物が多く堆積し、所によって焼壁面をもつものとがある。今これらの遺構群をやや詳細に見てゆくと、まず下街道に近い所に井戸を設け、そのすぐ横に石組構造を内部にもつ大型の方形土坑が築かれ、南北と東西に溝を配する。その南に続く土坑群はほぼ3つの部分に区分できる。方形石組遺構に近接する所では埋甕土坑が整然と2列6ヶ所配置されている。その南に連続する中央部の土坑群では、埋甕が一列に3ヶ所、接して焼土、炭化物が堆積する大型土坑1ヶ所存在する。南端には粘土を塗りかためた土坑が接して3ヶ所見られ、内2基が円形、1基が方形を呈している。以上の施設は第1に井戸、溝の存在から水廻りの空間が、焼土、炭化物の堆積から火処を、甕、粘土塗から貯蔵という機能が推定でき、したがって厨房関係の場が想定されよう。ところでこうした遺構群は下街道両脇に、ある間隔をおいて見られるのであり、これらは宿場内部の状況を具体的に知る重要な手掛かりと考えられる。

(赤塚次郎)



C区　土　坑　群

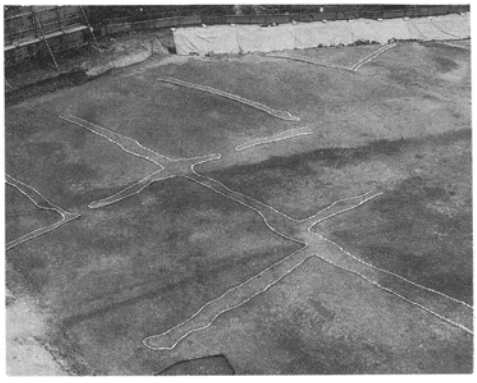


B区　遺物出土状況

苗田地区

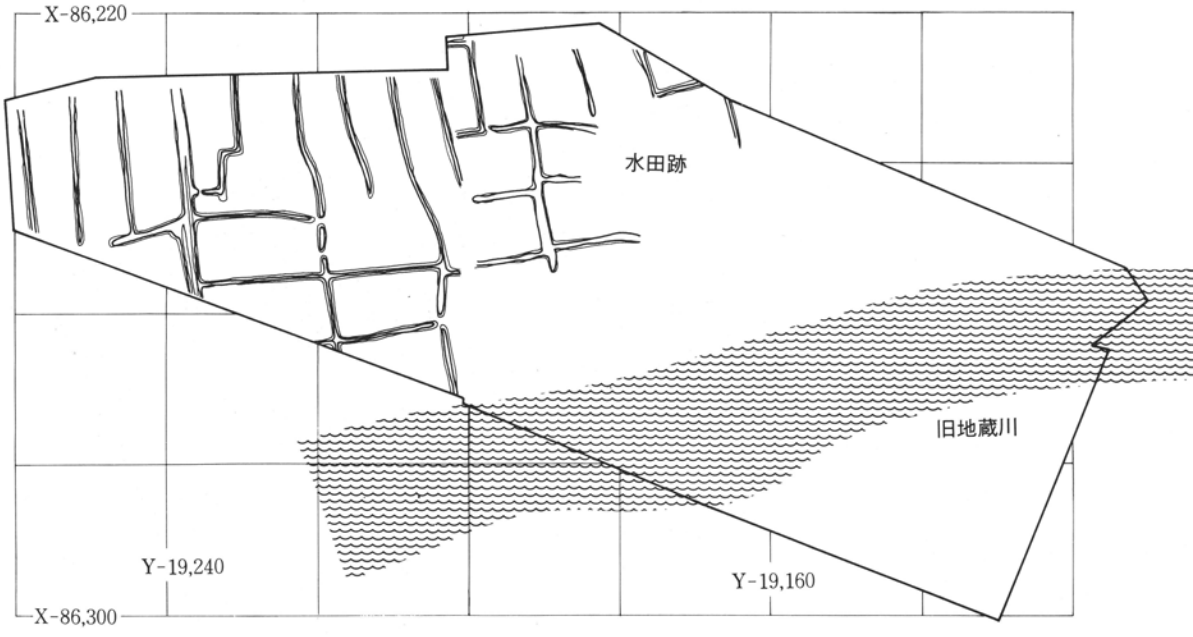
A期

昭和57年度の調査区（以下57Ⅰ区）に東接する今回の調査区（62F区）の上面において、57Ⅰ区同様、水田の畦畔を検出した(第6図)。畦畔は南北方向5本、東西方向4本が遺存していたが、旧地蔵川（NR01）の氾濫によって削平を受けたために極めて残りが悪く、わずかに5㎝程度の高まりを残す程度であった。特に南から東側にかけては、昭和14年の地籍図にも畦畔は見られず、水田化されなかったものと思われる。



水　田　跡

水田の施行された時期については明確な決め手には欠けるが、水田の上面を覆う土層より出土する土器などから14世紀頃とみられる。



第6図　A期主要遺構配置図

B期

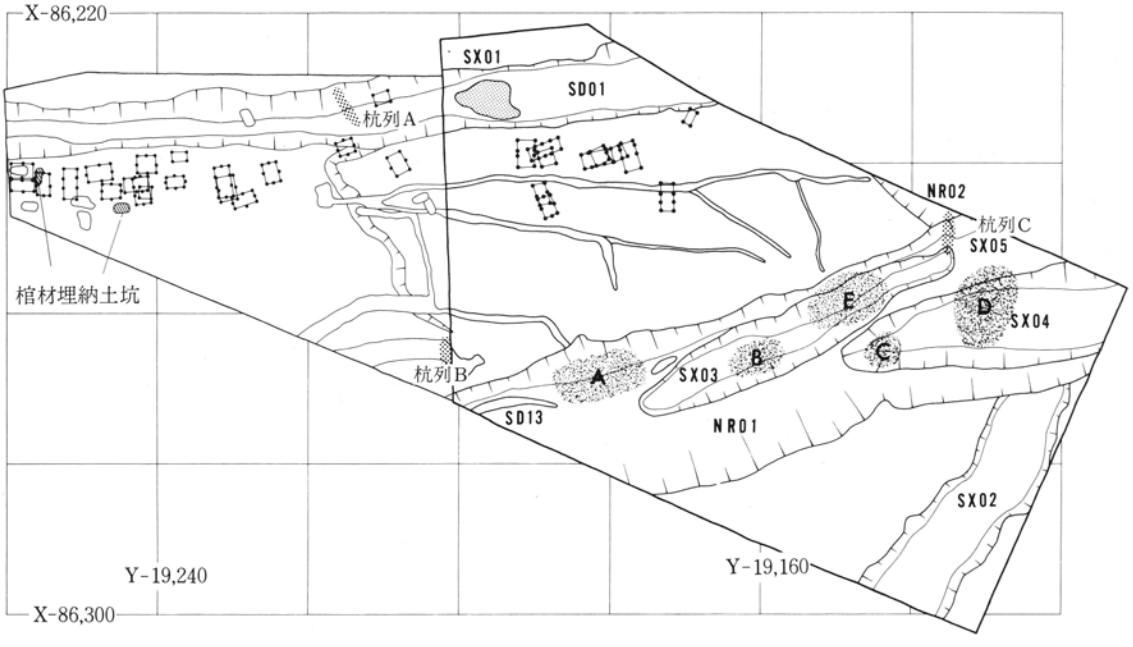
奈良・平安・鎌倉時代

奈良～平安時代にはＮＲ01内に溝が穿たれ（ＳＸ04）（第７図）、その中には勝川廃寺に伴うと考えられる遺物が認められる。後に述べる須恵器・灰釉陶器・墨書土（陶）器、人形・曲物などの木製品がそれである。これらの遺物は主としてＮＲ01からの出土である。平安から鎌倉時代の顕著な遺構は見られないが、大量の灰釉（系）陶器が出土していることから、この近辺に何らかの遺構の存在が考えられる。

弥生後期・古墳時代

弥生時代末から古墳時代にかけて、ＮＲ01の北肩付近に大量の木製品が投棄されていた。それらはＮＲ01とＮＲ02の合流部に打たれた杭列Ｃを境に時期がわかれる。杭列Ｃの西側の一群をＳＸ03、東側をＳＸ05とする（第７図）。ＳＸ05には顕著な遺構は見られず、欠山～元屋敷期の土器と共伴して約30点の木製品が出土している。

ＳＸ03は古墳時代中期に属する。杭列Ｃの西側に全長約40ｍ、幅約10ｍの溝が掘削されており、その中から約60点の木製品が出土した。



第７図　Ｂ期　主要遺跡構配置図（１：1000）

弥生時代中期

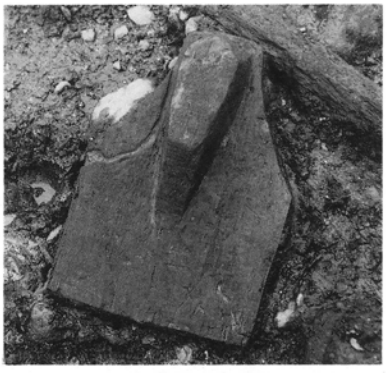
弥生時代中期末の主要遺構は、段丘直下を西へ流れるＳＤ01（57Ｉ区のＳＤ60の東延長部分）、ＳＤ01内に穿たれた木器未製品貯蔵土坑ＳＸ01、ＳＤ01と旧地蔵川に挟まれた地域に拡がる掘立柱建物群で、他に土坑・溝がある（第７図）。

ＳＤ01は62Ｆ区では約50mにわたって検出した。幅約10m・深さ約0.5mの規模を持ち、埋土は有機質を大量に含む黒色粘土で、高蔵期の洪水による砂礫層によって廃絶している。

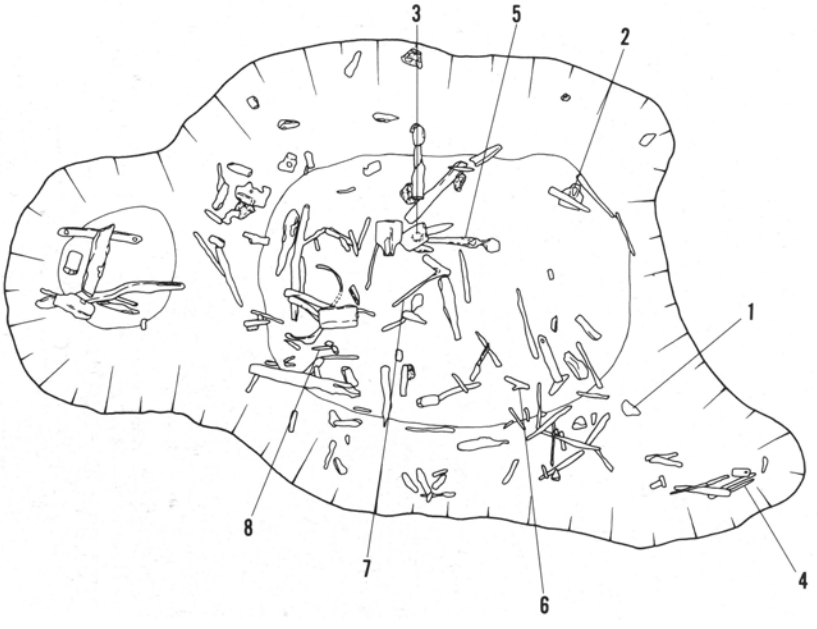
ＳＸ01はＳＤ01内の調査区西端付近にある（第８図）。規模は東西８ｍ・南北５ｍ・深さは溝底より0.5ｍで、東西に向くややいびつな洋梨形を呈する。なかから高蔵期の土器・木製品の加工の際に出たと思われる大量の木屑に伴って33点の木製品、10数点の加工用の石器類が出土した。木製品は後述するように未製品や原材がその大半を占める。その性格につ



ＳＸ01木製品出土状況



広鍬未製品

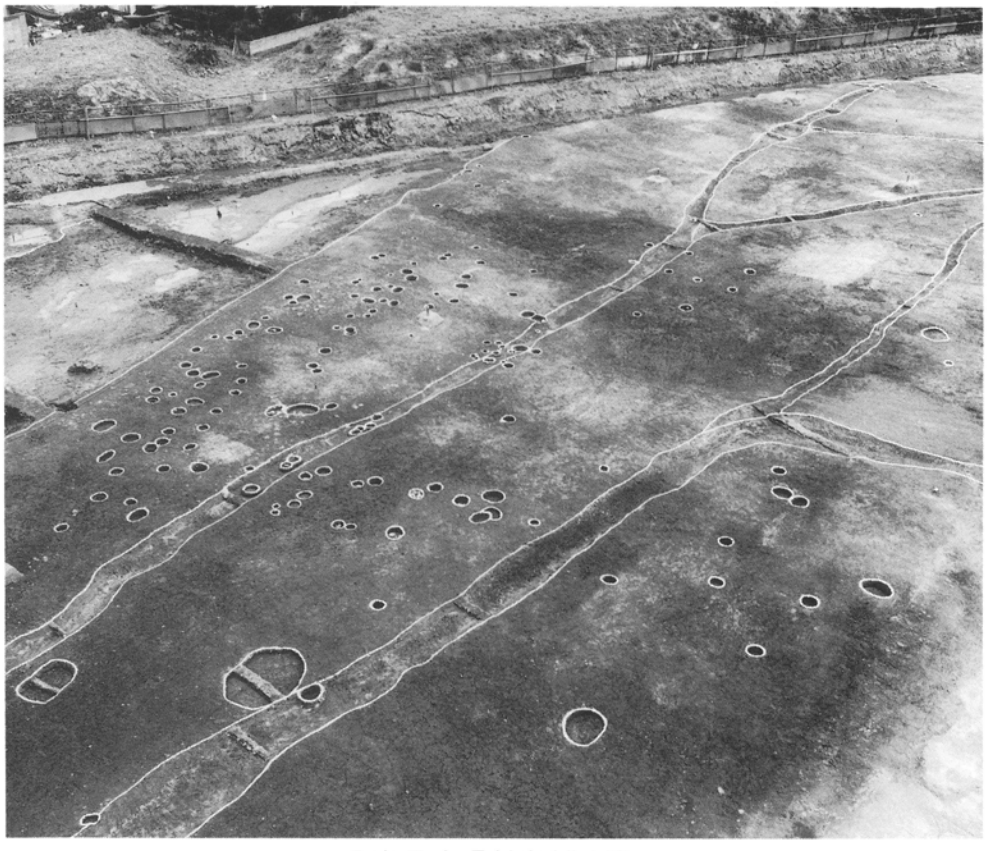


第８図　ＳＸ01木製品出土状態図（数字は第９図の遺物番号と共通）

いては、57Ⅰ区の杭列Ａによって水流を緩やかにしてＳＸ01に水を蓄え、木器の未製品を水漬け状態にして生木に含まれる樹脂を水に置き換える機能を有する一種の貯木場と考えるのが最も妥当であろう。

掘立柱建物は、57Ⅰ区の19棟に加えて、今回の調査区においても11棟が重複して検出された。その他にもピットが多数見られることから、さらに多くの建物があったものと思われる。規格は１×１間－３棟、２×１間－３棟、２×２間－１棟、３×１間－４棟で、57Ⅰ区と共通する。それぞれにほぼ同じ位置に建て替えられており、57Ⅰ区と同様、４棟で南に開く空間を持つコの字型の配列をとるものと思われる。

これらの機能については丹羽博氏が『勝川』の報告書の中で、木製品の加工に係わる作業小屋の可能性を指摘している。その後、島根県西川津遺跡で木製品の貯蔵施設を持つ川に隣接して掘立柱建物が数棟検出されたことなど、その蓋然性はより高まったと言えよう。



調 査 区 全 景(弥生時代中期)

ＳＸ01

ＳＸ01からは、前述のように高蔵期の木製品が33点出土した。完成品はわずかに６点に過ぎず、他はすべて未製品である。広鍬７点、狭鍬１、又鍬（鋤）１点、鋤４点、縦斧の柄１点、手斧の柄３点（完成品１点を含む）、タモ網の枠、杓子、弓各１点、その他原材が見られるなど、農工具がその大半を占める。うち９点について記述する。

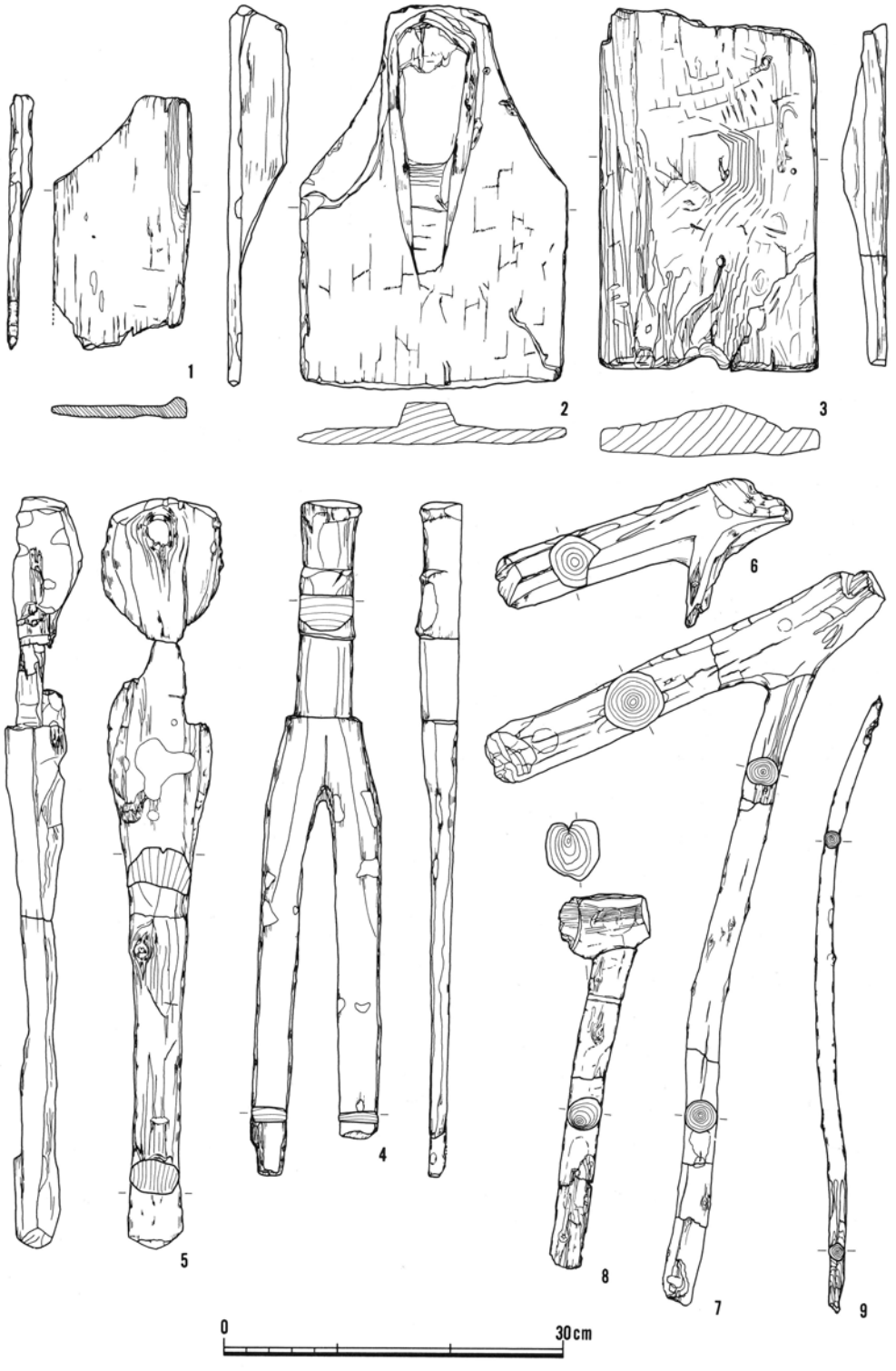
広鍬は形態の異なる２種類がある（第９図１・２・３）。１・２は上端が狭く、下端が拡がる形態を持つ。１は長さ22.5cm以上、幅12.2cm以上、厚さ1.0cmで、長さ13.2cm、幅２cm以上、厚さ1.1cmの舟形突起を持つ。２はそれよりさらにひとまわり大きく長さ34.1cm、幅23.8cm・厚さ1.2cmで、長さ22.3cm、幅8.1cm、厚さ4.2cmの舟形突起がつく。舟形突起はいずれも穿孔前で、刃先もまだ作り出していないが、そのほかの点では両者共ほぼ完成状態である。３は長さ30.3cm以上、幅19.4cm、厚さ1.8cmの長方形で、着柄部は中央に若干の盛り上がりを持つが、穿孔はされていず、刃部も作られていない。

又鍬（鋤）（４）は全長60.7cm、最大幅が11.0cmで、厚さは刃部で1.7cm、握部で3.7cmと、他の遺跡の出土例と比べてかなり大型でしかも極めて厚い。刃部および握部の断面はカマボコ型で、裏は全体に平坦に仕上げる。ほぼ完成品と言ってよいが使用された形跡はなく、さらに薄く仕上げる途中であったのか、あるいはまだ充分乾燥し切っていなかったために水漬けしてあったのか、いずれにせよここでは未製品として扱っておく。なお、弥生時代中期の出土例として東日本では最古段階に属する。

縦斧の柄（５）全長66.5cm、最大幅8.9cm、厚さ3.6cmで、先端に巨大な節が残る。握部は完成しており、節を切り落とし、穿孔して縦斧の柄とするのであろう。

手斧の柄（６・７・８）のうち（６・７）は未製品で、（８）は完成品（破損品）である。当遺跡出土の手斧の柄の未製品に見られる特徴は、柄の部分に対して着刃部が極めて長い点である。これはＳＸ01のものに限らず、ＳＸ05の出土例も同様である。（８）は恐らくＳＸ01内の未製品を加工するために用いられたのが、破損したために廃棄されたものと思われる。着刃部は柱状片刃石斧を着装するために、ソケット状に作られている。

弓（９）は現在の長さは55.4cmであるが、弭部が一方にしか見られず、他方は先端が削られているために、本来はこの２倍程度の長さであったものが折れたために、再度削り直して別の用途に使うつもりだったのであろう。　　（樋上　昇）



第９図　SX01出土木製品

ＮＲ01

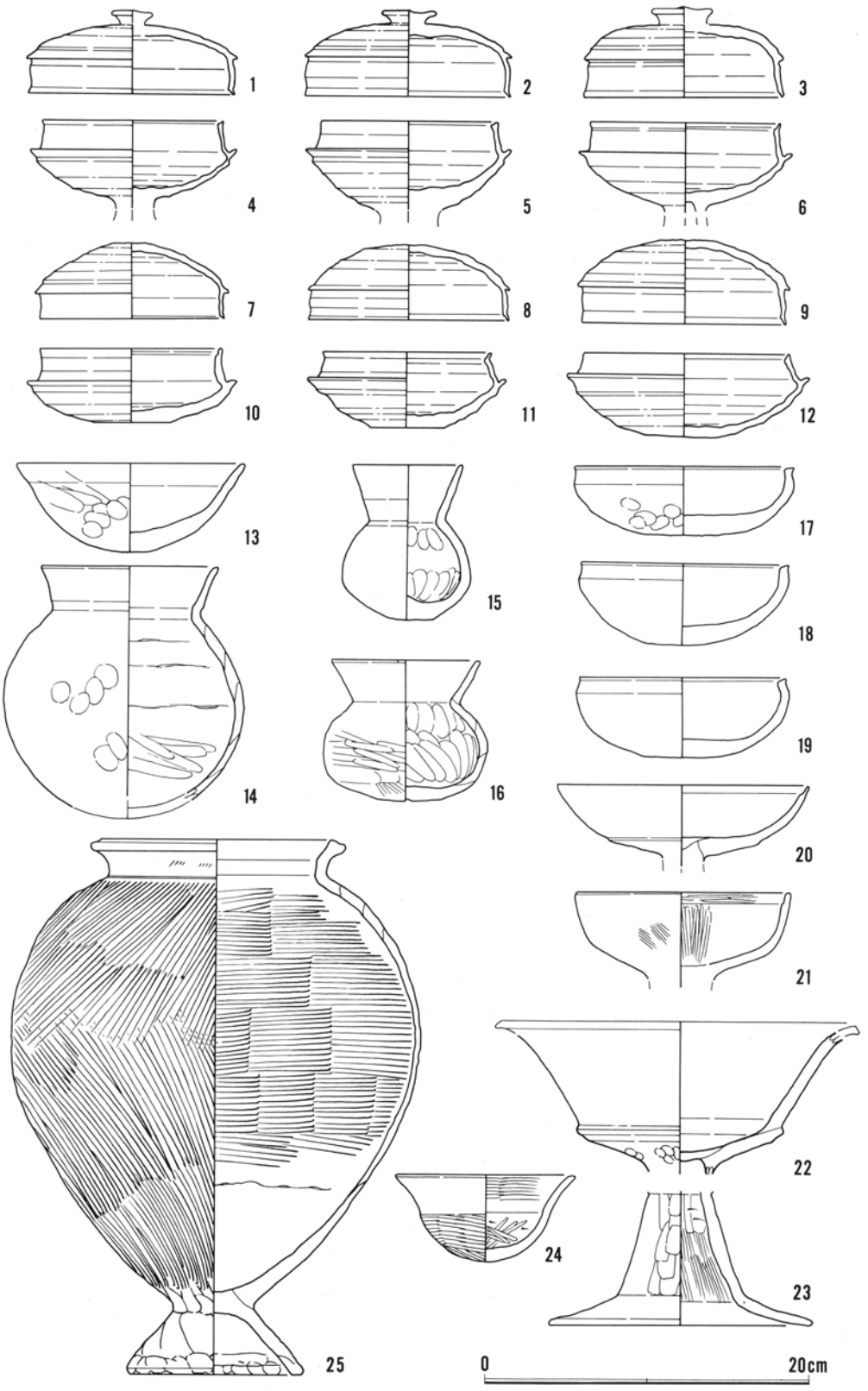
古墳時代

ＮＲ01Ｅ地点（第７図）より多量の須恵器、土師器及び木製品の出土が見られた。

木製品は種類として梯子、建築部材、鍬、手斧、錘があり、その他楯、刳物等が見られる。Ｅ地点を中心にかなり高密度で検出しえたが、使用状況等を推測させるような特徴的な出土状況を見せていない。須恵器は第10図のように蓋杯、有蓋高杯が中心である。その特徴は杯蓋では天井部が高く、回転ヘラケズリは上位に偏る傾向がみとめられる。杯身は底部に平坦部をもち、口縁端部には段が見られる。有蓋高杯は杯部が深く図示していないが、透孔を穿がない短い脚が存在する。なお口縁部と体部を区切る稜は上方へ強く突出し、その下位には明瞭な段を構成する。胎土を含め以上の特色は尾張産の須恵器に通有に見られるもので、凡そＴＫ47～ＭＴ15型式に含まれるものと考えられる。土師器は、小型丸底壺、鉢、小型の甕、台付甕、高杯等が見られる。高杯は20、21の彎曲する杯部をもつものと、22のように大型で外反する杯部を有するものと２種類ある。25の台付甕は「宇田型甕」である。Ｅ地点より出土した遺物はほぼ５世紀後半から６世紀前半にいたる時期のものを含むと思われるが第10図１～12、17～20はＳＸ03中央（Ｅ地点西側）北掘形より集中して出土しており、何らかの一括投棄が推定できる。　（赤塚次郎）



木製品出土状況（ＳＸ03　Ｅ地点）



第10図　E地点出土土器

奈良～平安時代

ＮＲ01からは百個体を超える、奈良～平安時代の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。８世紀前半のものも若干見られるが（第11図１・２）その主体は折戸10号窯式期から東山72号窯式期（虎渓山１号窯）であり、それらの時期の中には約50点に及ぶ大量の墨書土（陶）器が含まれる。また、それぞれの分布にいくつかの集中地点が見られることから（第７図Ａ～Ｄ地点）、数回にわたる一括投棄によって形成されたものと思われる。

まず、折戸10号窯式期（以下、Ｏ－10期、第11図３・４・12～14・20～22、第13図１～３）は点数が少なく、Ａ～Ｄの各地点にその分布が見られるが、Ｃ・Ｄ地点にやや集中する傾向がある（20～22）。墨書内容は、Ａ地点からは「×」（３）、Ｂ地点「足」（１）Ｃ地点「升」、Ｄ地点「巫」（２）である。Ｃ・Ｄ地点には人形２点（３）、舟形、斎串、曲物が伴う。また、(12)の杯蓋には、一部口縁を打ち欠いて、灯火器として用いた例が見られる。

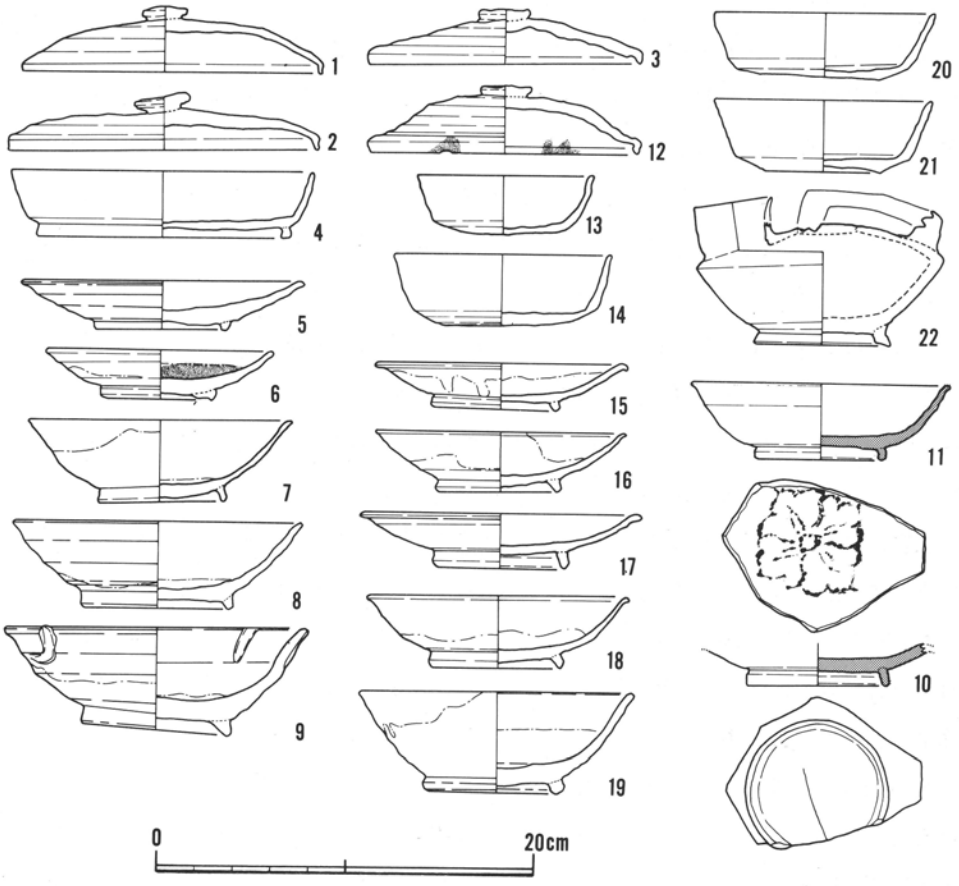
黒笹90号窯式期（Ｋ－90期）には点数が増加する傾向を見せ、特にＡ・Ｂ地点に集中して出土するようになる（第11図15～18、第13図９～11・16～18）。Ａ地点には、「口林」（９）、「寺」(10)、「宅北（周囲５か所に花弁）」(11)、「井手」等の墨書陶器がある。Ｂ地点からは「口行」(16)、「別」(17)「井上」(18）等の墨書をもつ陶器が、人形４点（１・２）、曲物７点、木簡１点と共に出土している。

東山72号窯式期（Ｈ－72期）には東濃産の虎渓山１号窯の灰釉陶器が主体を占めるようになる。この時期、灰釉陶器の出土量が爆発的に増え、特に墨書を持つものの割合が急増する（第11図６～８・19、第13図４～８・12・14)。「万」（４)、「東北」（５)、「合（人万)」（６)、「口上」（７)、「南生」（８)、「太」(12)、「元」(14）等、当遺跡出土の墨書陶器の大半はこの時期に属し、出土地点はＡ地点１か所にほぼ集中する。共伴遺物は曲物が１点見られるのみで、ほぼ純粋に土器だけが集中して出土している。また、灯火器や転用硯（第11図６、第13図14）として使われたものも見られる。

以上、３時期の主として墨書土（陶）器の出土状況について見てきた。次に、各集中地点単位でその墨書内容について検討してみよう。

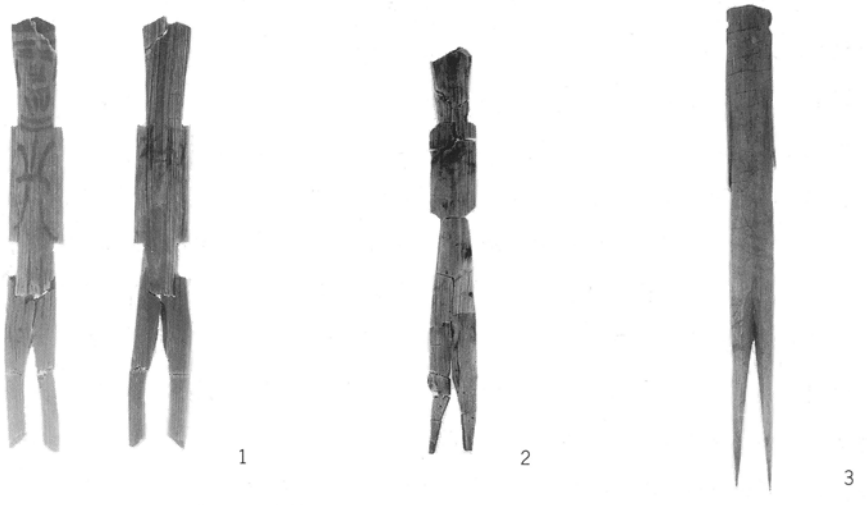
まず、Ｏ－10期には、人名（１)、記号（３）などが見られるが、特に目を引くのは「巫」（２）である。「巫女」・「巫覡」等の用例に見るごとく、呪術的な意味合いを持つものと考えてよかろう。人物、舟形・斎串といった祭祀具と共伴する点も、その傍証となろう。

Ｋ－90期Ａ地点の墨書は、「寺」(10)、「宅北」(11)、「井手」等、地名を表すと考えられる内容が見られる。「寺」・「宅北」は勝川廃寺との関連を想像させ、勝川廃寺自体の存続期間が従来よりさらに下ることを示唆する。「井手」は地蔵川からの分水施設の存在を思わせる。Ｂ地点は４点の人形・７点もの曲物が共に出土している点からも、Ｏ－10期のＣ・Ｄ地点同様、



第11図　NR01出土陶器

1～11：A地点　12～19：B地点　20～22：D地点（10・11緑釉陶器）



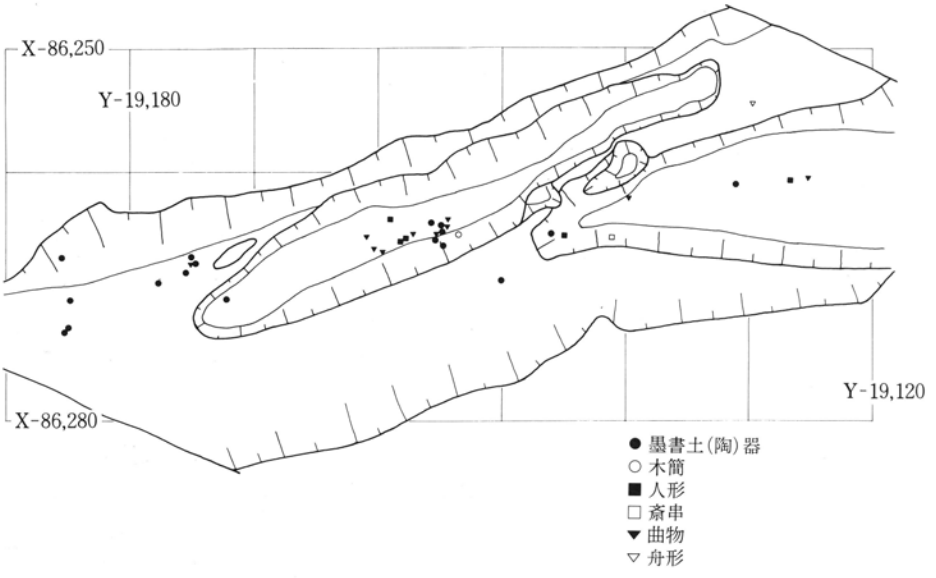
人　　形（1・2：B地点、3：C地点）

祭祀との関連が想定できる。人形4点中、(1)・(2)は同位置から出土した同型同大のものである。しかも1体は胸部に、もう1体は背部に1字ずつ文字を描いており、さらに樹種を異にしている点で興味深い。曲物も何らかの祭祀的用途に使われたのであろう。墨書内容に「口行」(16)、「井上」(18) 等、人名と思われるものが見られることは興味を引く。

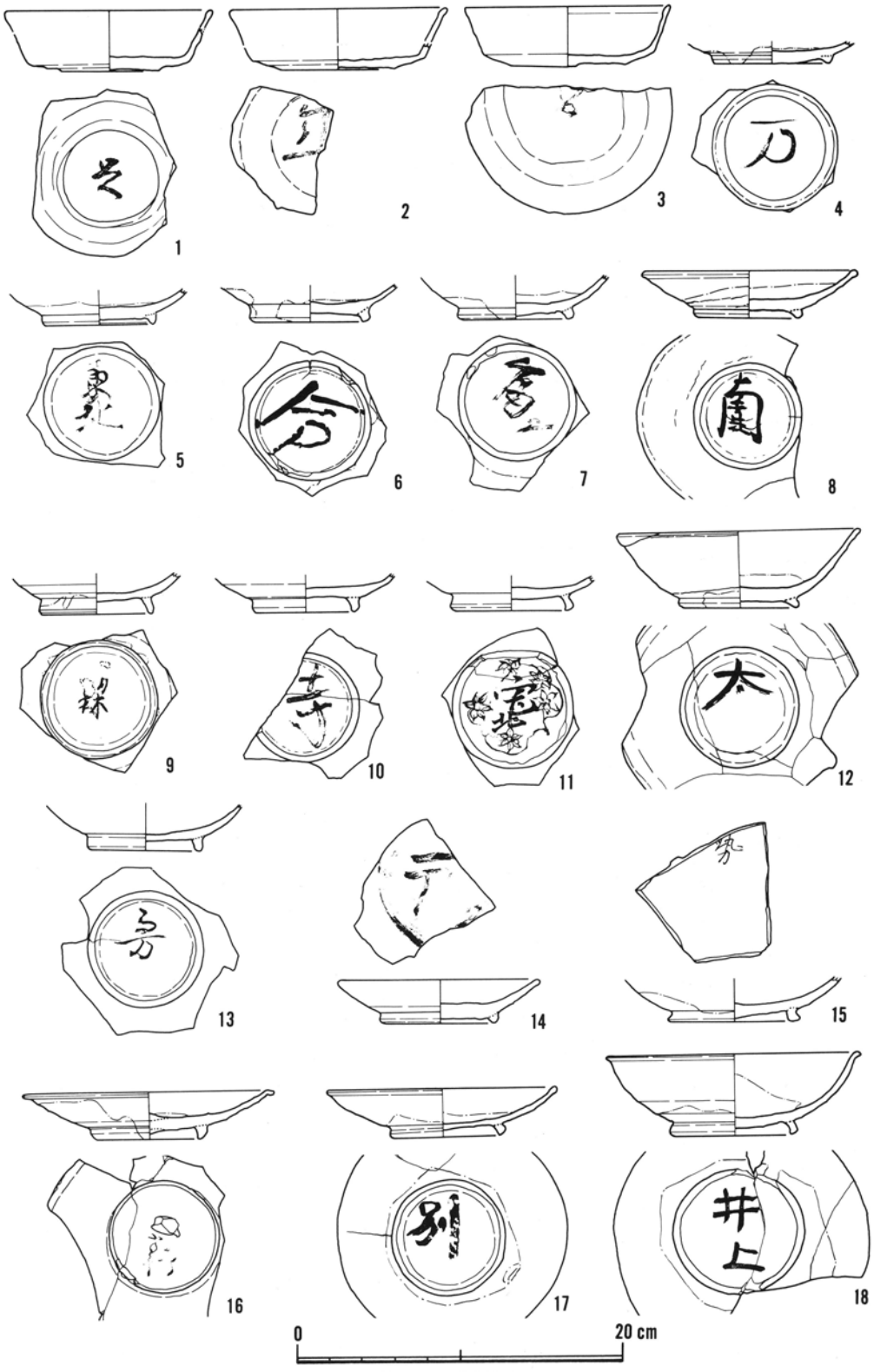
H－72期は、1か所に大量の墨書陶器、灰釉陶器のみが、投棄されている。その墨書内容は「南生」(8)、「太」(12) 等の吉祥句、「万」(4)、「人万」(6) 等の人名、その他いくつかのパターンが見られる。これら一群も、その出土状況等から見て、前二時期同様祭祀的性格を考えたい。

では、この地で行われた祭祀とはどのようなものであろうか。祭祀具の構成、祭祀行為の場が川であることなどから、祓が最も近いものと思われる。さらに言えば、人名・吉祥句を描いた墨書土（陶）器は自らのケガレ・災いを託し、流す、一種の墨書人面土器的要素を持ったものと考えたい。O－10期の人形・舟形・斎串・墨書土器から、K－90期の人形・曲物・墨書陶器、H－72期の墨書陶器への祭祀具の構成の変遷は、まさに律令的祭祀から中世的祭祀への変遷の跡を辿っているようで極めて興味深いものと言えよう。

（樋上　昇）



第12図　NR01遺物出土位置図



第13図　墨書陶器

1：C地点　2：D地点　3～12・14・15：A地点　13・16～18：B地点(15は刻書)

まとめ

今年度の調査成果を時代をおって整理しておく。

人々の徘徊　勝川の地に人々の足跡が認められるようになるのは、従来弥生時代中期であると考えられていたのであるが、62Ｆ区最下層、町田、松河戸遺跡からの縄文土器の出土により、縄文時代中期まで一気に遡る可能性がでてきた。縄文時代中～後期に庄内川中流域を中心としたかなり広い範囲の領域を徘徊する人々が想定できる。

勝川への定着　弥生時代中期から古墳時代前期まで勝川遺跡に集落が営まれる。この時期に関して次の２点が明らかとなった。第１に木製品製作場の設定、方形周溝墓の変革、大溝の消失、これらは高蔵期内の出来事であり、一つの画期がそこに存在する。第２に弥生時代末期になると町田遺跡の微高地上に集落が形成される。勝川集落の拡散が弥生時代末期に開始される。集落構造として弥生時代中期末と末期の２つの画期の存在が明確となった。

前方後円墳の時代　５世紀末～６世紀にかけて大型の古墳が築造され、それまでの勝川集落は大きく解体する。62Ｆ区ＮＲ01での須恵器・土師器・木製品の多量の出土はこれら大型古墳の造営時期と一致する。特にその位置は前方後円墳勝川大塚古墳のくびれ部北方にあたりその関係が注目されよう。また町田、松河戸遺跡でも５世紀後半～６世紀前半にかけて遺物の広がりと遺構の存在が認められ、当地域の開発が活発化することが窺われる。

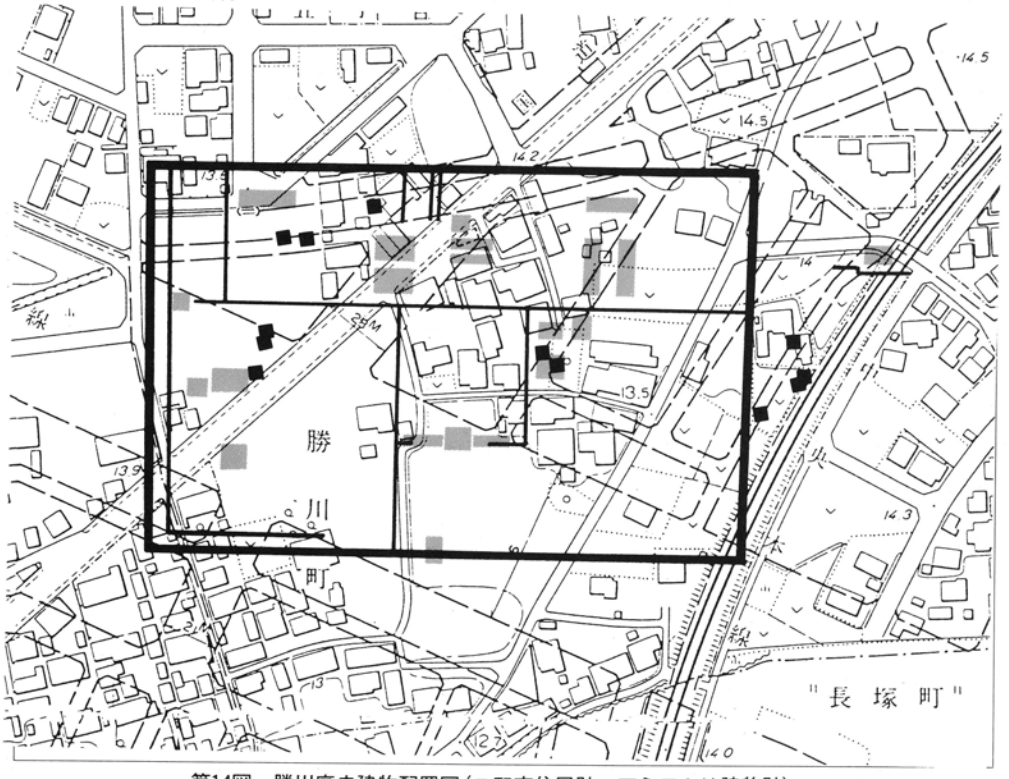
勝川廃寺と役所　700年前後勝川廃寺の建立があった。今回勝川廃寺の寺地が確定し（東西227ｍ南北148ｍ）その内部で大型の建物群が発見できた。また寺地以外でも奈良・平安時代の遺構、遺物の出土が目立つ。特に62Ｆ区ＮＲ01での緑釉、灰釉陶器、墨書陶器、木製品（人形・木簡）の出土が注目されるのであり、文字を恒常的に使用する人々の存在は、地方行政単位の中心を類推させる。

計画的な水田開発　勝川・町田・松河戸遺跡で水田跡の発見があいついでいる。その嚆矢は現状では12世紀を大きく遡るものはない。12世紀後半、庄内川中流域に存在した安食庄との関係が興味深いが、水田の開発は時に計画性（地割等において）を見せながらも地形の微妙な凹凸で場所によって水田形成は大きく時代が前後することが判明した。また遺物の検討から14～15世紀（南北朝以降）を中心として本格的な水田開発が認められることが推察できる。

勝川村と勝川宿　勝川村としての集落構成の成立が14世紀以降であり、その村落形態が江戸時代の勝川宿へ連続するとすれば、その過程は現在の「勝川」に直接結びつく重要な歴史と考えてよい。勝川宿の在り方は未だその一担を調査により明らかにしたにすぎない。「勝川村」中心部での調査研究が注目される所である。行政的な配慮を期待したい。

（赤塚次郎）

		勝川の歴史		
縄文		人々の徘徊	松河戸遺跡の縄文集落	
弥生	300 0		勝川遺跡の集落	
古墳	300	勝川への定着	木製品製作場 町田遺跡の集落	邪馬台国
		前方後円墳の時代	勝川大塚古墳・洲原山古墳	ワカタケル大王
奈良				藤原京
平安	800	勝川廃寺と役所	勝川廃寺の建立 墨書・人形 安食庄	平城京 平安京
鎌倉	1200	計画的な水田開発	水田開発の活性化	源頼朝 後醍醐天皇
室町	1400	勝川村と勝川宿		織田信長 関ヶ原の戦
江戸	1600		勝川宿	ペリー来航
明治 大正 昭和	1800 1900		発掘調査開始	第1次世界大戦
	2000			



第14図　勝川廃寺建物配置図（■竪穴住居跡・アミフセは建物跡）

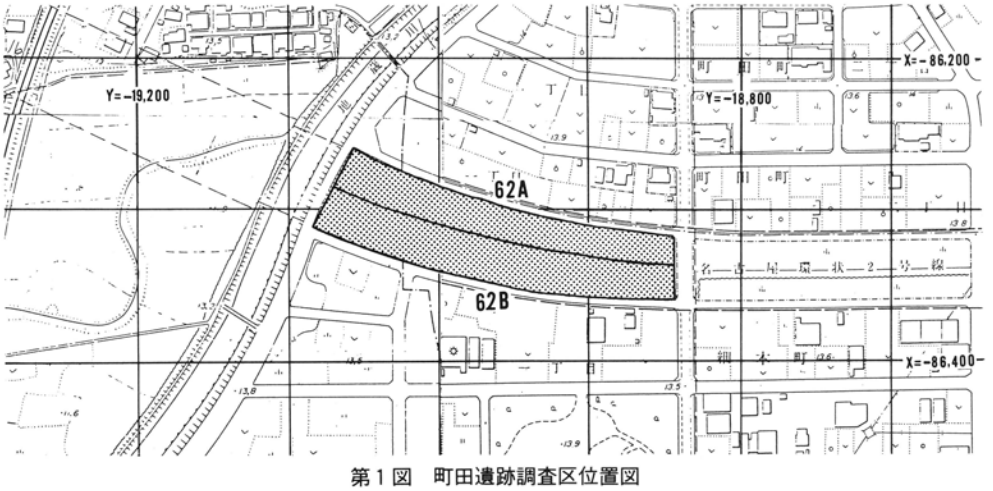
町　田　遺　跡

調査経過

町田遺跡は、地蔵川左岸の沖積地に立地し、地蔵川右岸では、鳥居松段丘面がせまり段丘下に旧地蔵川が沿って流れる。昭和61年度の試掘調査により、多量の弥生土器が出土したこと、竪穴住居跡を検出できたことから判断して、弥生時代の集落遺跡の可能性を予測した。また、現在の水田の畦畔の区画が、条里的地割に合うことから、現在の水田の下に古代・中世の条里制遺構の存在を推定した。今回の調査は、62A区と62B区と2分割して調査を実施した。その結果、2ヶ所に弥生時代の集落が微高地上に営まれ、その微高地周辺に中世の条里制遺構のあることが判明できた。

調査の概要

62A区・62B区とも調査区の基本層序（第4図参照）は同一である。上層から、青灰色（耕土）・暗黄褐色土・黄灰褐色土・暗茶褐色細～中粒砂層・灰色砂質シルト層（中世水田の耕土）・茶褐色シルト混円礫層である。条里制遺構は灰色砂質シルト層上面で畦畔を検出することができた。畦畔の高さは数～30cmであり、復元すれば30cmぐらいは持っていたであろう。東微高地の西と東側で、畦畔の地割の基本軸が異なっている。水田形成の後ＳＫ21・ＮＲ01がつくられている。ＮＲ01の西隣に南北にのびる大畦畔、東微高地の東に道と側溝を検出した。両微高地上に弥生時代中期後半の方形周溝墓4基・溝1条、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡23軒検出できた。集落跡としては良好な資料である。



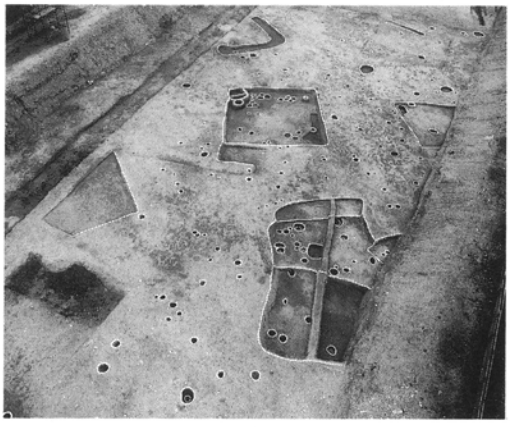
第1図　町田遺跡調査区位置図



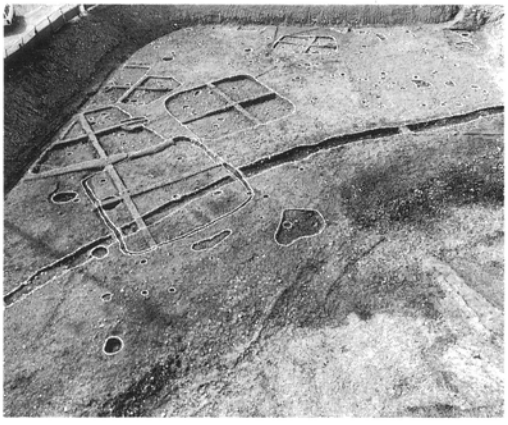
水田跡（A区　西から）



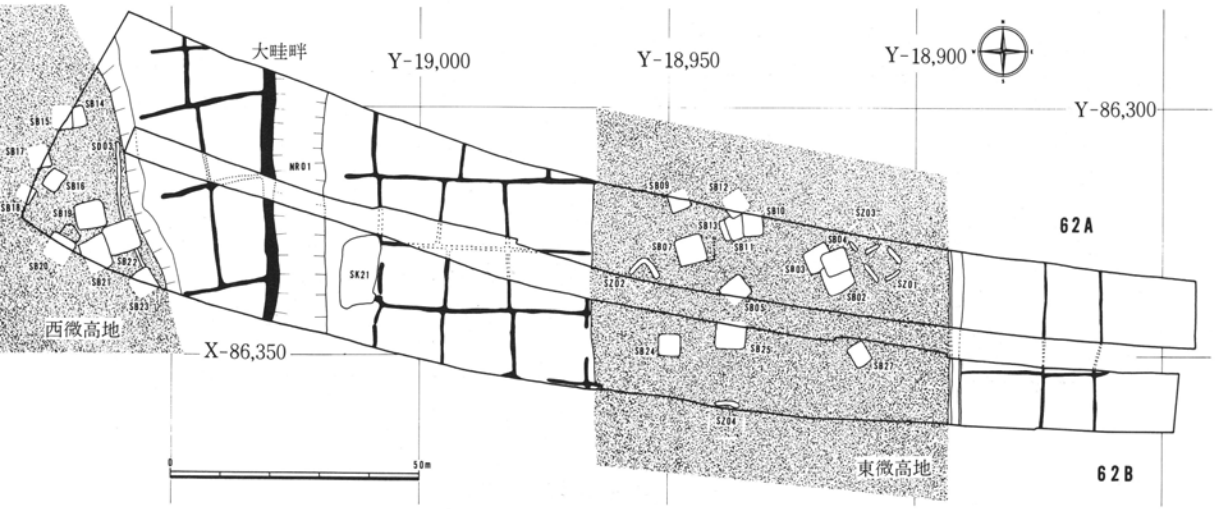
水田跡（B区　東から）



東微高地集落跡（東から）



西微高地集落跡（東から）



第２図　主要遺構配置図

遺構

水田跡

微高地縁辺において15世紀を下限とする条里制遺構を検出した。東西両微高地に狭まれた地区では、ＮＲ01の西肩に南北方向に走る大畦畔があり、その東西では水田の様相が異なる。大畦畔の東側では、東西、南北方向にほぼ規則的に畦畔が築かれているのに対し、西側では西微高地の地形に合せて、南西方向に約25度ずれて畦畔が築かれている。東微高地上には坪境があったと考えられ、その東側の水田は、長軸方向を南北にとり、東微高地西側の水田とプランが異なる。なお、微高地上は水田化されず、島畠状に残されていたものと考えられる。今回検出された条里制遺構は昭和14年地籍図とほぼ重なり、近年までその地割りが続いていたことが窺われる。

弥生時代の集落

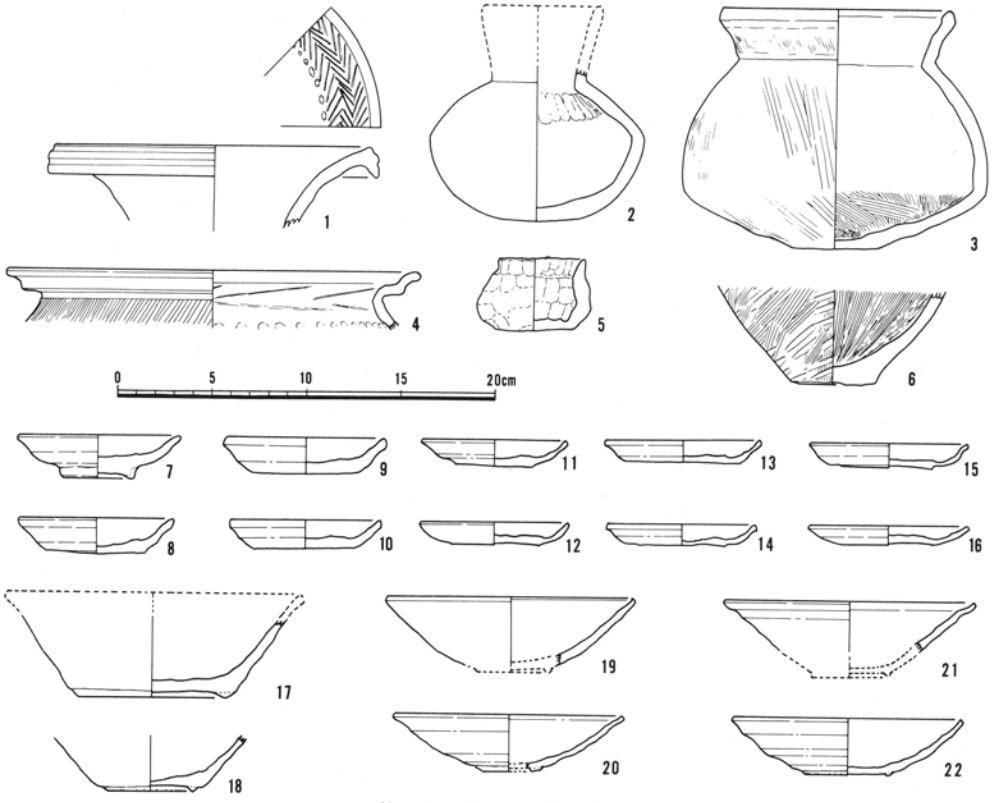
東微高地2800㎡・西微高地650㎡の上に営まれた弥生時代中期後半～古墳時代初頭頃の集落跡の一部を検出することができた。東微高地は標高11.50ｍ程であり、南北にのびる微高地である。そこに、竪穴住居跡と方形周溝墓が造られた。ＳＺ01～ＳＺ04は、弥生時代中期のものばかりと考える。ＳＺ01とＳＺ03は周溝の一部を共有するものであり、一つの溝の大きさは、幅0.6m・深さ0.5m・長さ６ｍ程である。ＳＺ02は、周溝がＬ字状になるものであり、深さ0.2m程と浅いものである。ＳＺ04は、深さ0.2m程であり、周溝の底より壺の完形品が１個出土した。西側に口縁部を向けた横位の状態であった。まず、墓域としてこの場所が選ばれたのであろう。弥生時代後期～古墳時代初頭頃の竪穴住居13軒が検出された。ＳＢ02～ＳＢ04は重複関係を示す。ＳＢ04の埋土からＳ字甕（第３図－４）が出土している。ＳＢ10～ＳＢ13は４軒が重複し、住居の建て替えを示しているのであろう。

東微高地から西方へ80m程のところに西微高地がある。西微高地は標高11ｍ程であり、東微高地とほぼ同じである。比高差0.5mの裾部に中世の水田が営まれている。ＳＤ03は、幅50cm・深さ30cmで、微高地の東端に沿って南北に延びていく溝である。との溝の底から大量の土器が出土し、その時期は弥生時代中期後半である。復元可能な土器が多くて、廃棄したものであろう。溝の廃絶の後、竪穴住居が造られている。時期は東微高地のそれと同じである。ＳＢ19は一辺７ｍ程の隅円方形であり、土器がかなり出土している。ＳＢ22は、住居の壁ぎわに周溝をもっている。ＳＢ21は、台付甕や炭化材を床面上より出土している。ＳＢ15は、甕の口縁が倒立の状態で出土している。これらの微高地上に営まれた集落は、勝川遺跡から分かれてきた人々によって営まれたものであろう。

遺物

弥生土器と中世陶器が大量に出土している。弥生土器は溝や竪穴住居から出土し、中世陶器は水田の耕土より出土している。③はＳＢ07廃絶後の土坑内から出土したものである。胴部下半が膨らむ形態をしている。④はＳＢ04の北東隅付近から出土したものである。①・②・⑤・⑥は、茶褐色シルト円礫層の西に寄った方で出土している。その層中から、須恵器なども混入している。古墳時代以後に、微高地が削平されたのであろう。特に、⑥は外面に粗い叩き（凹みの幅４㎜・深さ１㎜・間隔３㎜）の後、刷毛目で器面調整している。叩き甕の出土例は尾張平野でも稀であり、廻間遺跡60Ａ区ＳＺ01や朝日遺跡60Ｄ区環濠内などから出土し、平底で粗い叩きをもち近似する。

中世陶器（呼称＝山茶椀）の皿・椀類は、中世水田の耕土から出土している。⑦は高台付の小皿であり、12世紀の常滑窯である。⑰は、13世紀の瀬戸窯の椀である。⑧～⑪と⑱は、14世紀の小皿と椀である。⑪は美濃窯であり、他は瀬戸窯である。⑫～⑯と⑲～㉒は、15世紀の美濃窯の小皿と椀である。量的には、15世紀の陶器が最も多く出土している。また、勝川大塚古墳を示唆するように窖窯焼成の円筒埴輪片が西側の水田内に集中して出土している。



第３図　出　土　遺　物

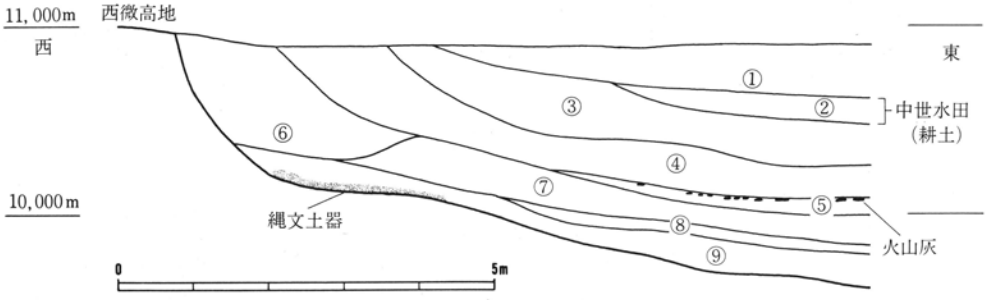
縄文土器

今回出土した縄文土器は調査当初予期していなかったものであり、調査終了時の断ち割り調査により確認したものである。縄文土器は、西微高地の東斜面で、暗灰褐色泥炭層下部よりまとまって出土した。また、間層を挟んで上層の黒灰色腐植シルト層上面より、乳白色の火山灰がレンズ状に薄く堆積していた。

縄文土器（第5図）は中期中葉に属し、以下、6類に分類して記述する。1類（1～4）は、口縁部に爪形の刺突を加えるもの（1）と隆起線上に爪形の刺突を加えるもの（2～4）である。2類（5～17）は、貼り付け突帯等で口縁部を肥厚させるものである。口縁下に爪形文を施すもの（5～7、14～16）と、平行沈線を施すもの（8～12）があり、3類（18～21）は、口縁部や胴部に横位の沈線を施すものである。4類（22、23）は、内傾する口縁に楕円貼付文を施すものである。5類（24～30）は船元系の土器群である。地文に縄文をもち、沈線を施すもの（24、27、28）、突帯により方形区画をなすもの（25）がある。29、30は沈線文、刺突文による文様が施されている。船元IIIないしIV式に比定される。6類（31、32）は勝坂系の土器である。31は、外傾する口縁部に把手を有し、器面は眼鏡状に渦巻文が沈線で施される。31の土器は勝坂III（井戸尻III）式に比定される。

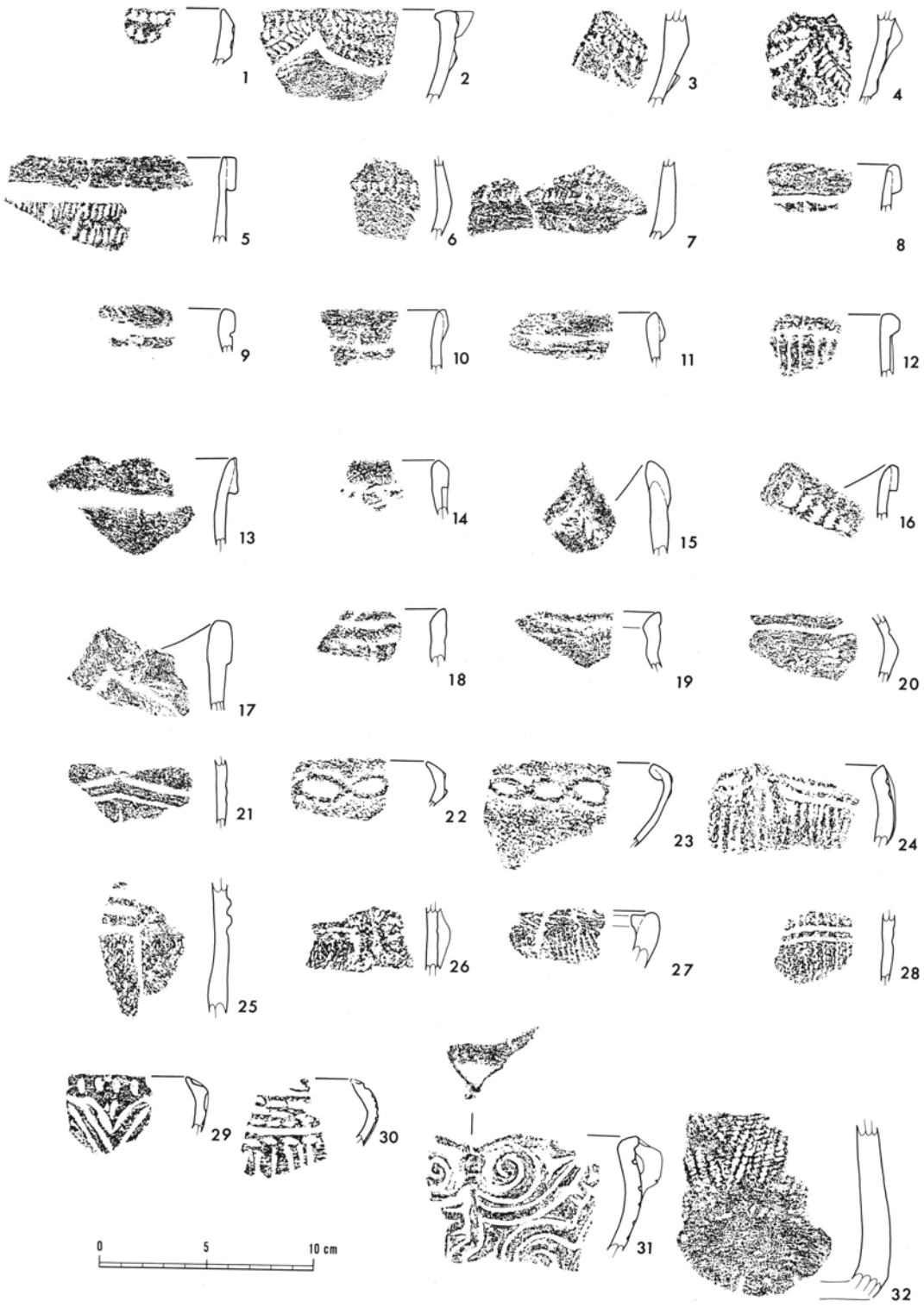
1類、2類の文様の特徴から中期中葉に属する北屋敷式土器を主体とする土器群と考えられる。北屋敷式土器は、静岡、愛知の沿岸部を中心に分布し、県内では南知多町清水ノ上貝塚等、知多半島にまとまってみられる。尾張平野部では一宮市佐野遺跡以外まとまった資料がみられず、尾張平野東部では初例である。今回出土した資料は、他地域の土器編年より中期中葉後半の北屋敷式土器の土器組成の一端を示したものと考えられる。また、中期の土器の包含層より上層で火山灰が検出されており、中期以後の火山灰としては県内初例であり、注目される。

（後藤浩一・神谷友和）



① 暗茶褐色細～中粒砂層
② 灰色砂質シルト層
③ 茶褐色シルト混円礫層
④ 暗灰色混礫シルト層
⑤ 黒灰色腐植質シルト層（黒バンドI）
⑥ 灰褐色砂質シルト層
⑦ 暗灰色シルト質粘土層
⑧ 黒灰色腐植質シルト層（黒バンドII）
⑨ 暗灰褐色泥炭層

第4図　62B区北壁断面図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
5
10 cm

第5図　縄文土器(1:3)

松　河　戸　遺　跡

調査に至る経過

松河戸遺跡は、春日井市の南東、庄内川と地蔵川に挟まれた沖積地に立地し、西は町田遺跡と接する。松河戸町一帯は近年に至るまで条里制遺構が現存し、文献・地理学的側面から醍醐寺領安食荘と関連づける研究がなされてきた地域である。

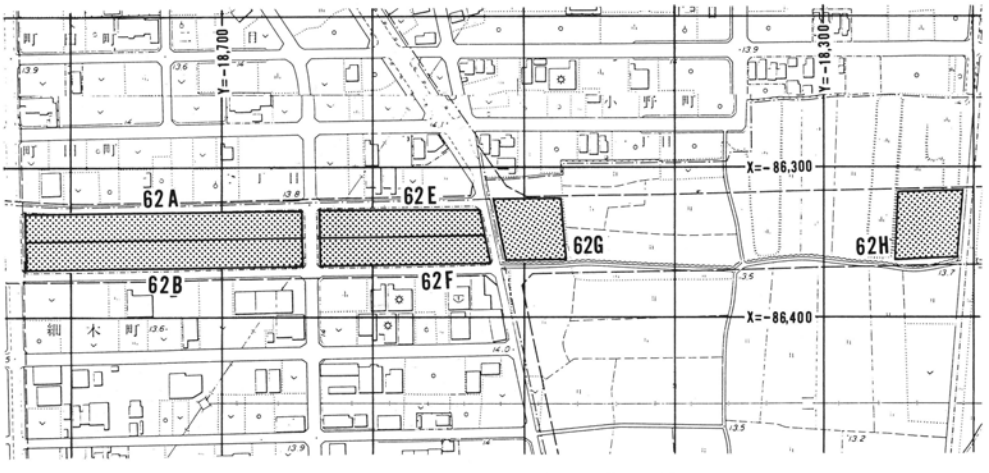
当地域が環状２号線予定地にかかるため、昭和61年度に試掘調査が実施され、条里制遺構の存在が確認された。この試掘調査の成果に基づき、昭和62年度より発掘調査を実施することとなったものである。本年度の調査は、８調査区（62Ａ～62Ｈ区）に区分して実施した。

調査の概要

調査区の周辺は、上述のように条里制地割（遺構）が広範囲に展開するところであり、また「安食庄」の故地として古くより研究がなされてきたところである。こうしたことから、調査に際しては、この条里制地割の形成過程の究明を調査の重要課題の一つとした。

発掘調査の結果、現水田面下に複数の水田面を検出し、条里制地割が少なくとも15世紀前半代にさかのぼり得ることが明らかとなった。そのほかに、水田跡の下層で当初、予期し得なかった縄文時代および古墳時代の遺構を検出した。殊に、縄文時代に関しては、縄文時代前期の遺物包含層より上の層位で従来、県下で例をみない当該の火山灰層が検出され注目をあつめた。

（北村和宏）



第１図　松河戸遺跡調査区位置図(1:5000)

縄文時代：62E・F・G区にかけて縄文中期の遺構が検出された。遺構の中心はE・F区の東半にあたり、標高約12mの微高地上に立地する。主要遺構は、「集石状遺構」、集石土坑等である。「集石状遺構」はチャート、砂岩、ホルンフェンス等の礫が、数ブロック単位に人為的に集積されている。これらの集石は立石等の存在が認められず、祭祀用の施設とは考えにくく、また礫は被熱や破損を受けた形跡が認められず、調理用の施設と考えられている関東地方の集石遺構とも異なる。「集石状遺構」の周辺、土坑より石鏃、磨製石斧、石匙、磨石等の石器とともに、フレイク、チップ等が2000点以上出土しており、石器製作が行なわれた形跡がある。石器素材の圧倒的多数はチャートであるが、他に数十点ほど黒曜石・下呂石が認められる。このことから、「集石状遺構」は石器製作に関連したものとも考えられよう。なお、町田遺跡同様の微高地の縁辺の谷状の落ち込みにおいて、縄文時代中期の遺物包含層より上の層位で火山灰層の堆積が検出された。



62E区　縄文時代遺構

(後藤浩一)

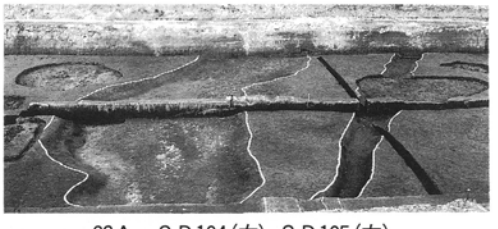
古墳時代：62A・B区および62F区で古墳時代の遺構が検出された。

62A調査区の中央微高地上で検出された土坑（SK201）は、径1.8m、深さ0.7mほどの円形プランのもので、その内から多量の土器が炭化物・灰とともに出土した。これらの土器は総じて「元屋敷式土器」に比定され、その一括性、器種の豊富さからみて、当該期の土器の編年的研究にとって、良好な資料となり得るものである。なお、この時期の遺構は、このほかに認められない。



62A区　SK201

6世紀前半代の遺構が、中央の微高地上及び東・西の低地にかけて広範囲にわたって検出された。遺構はいずれも溝で、幅0.5mほどのものから4～5mのものまでみられる。



62A　SD104(右)　SD105(左)

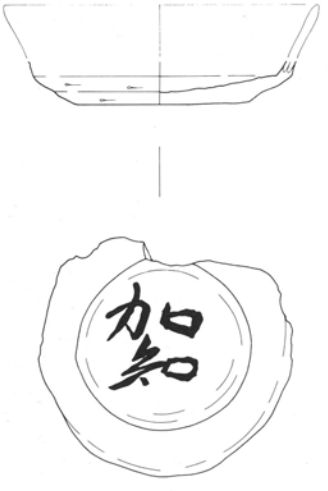
そのほか、遺物としては62A～G区にわたって奈良、平安時代のものの出土をみるが、遺構を確認するにいたっていない。

条里制遺構（水田跡）：62A～Hの各調査区において、条里制地割に基づくと考えられる水田跡が検出された。

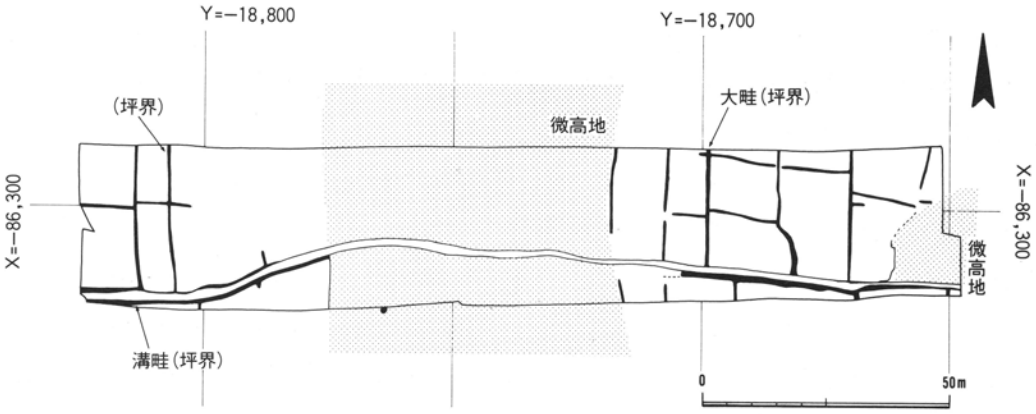
62A・B区では、調査の結果、現水田面をふくめ少なくとも5面の水田面（下より水田跡Ⅰ～Ⅴ）が認められた。断面での観察による限りでは、それぞれの水田に伴う畦の位置は概ね重複しており、したがって、ほぼ現水田面の地割は、往時の姿を伝えているものと解される。面的に発掘調査を行ったのは、その最下の水田跡Ⅰである。この水田跡Ⅰは、東西に細長い調査区のほぼ中央に存する幅40mほどの微高地（基盤は砂礫層からなる）の両側で検出された（第3図）。ちなみにこの微高地上が水田化するのは、水田跡IIないIIIの段階である。問題となる水田跡Ⅰの年代観については、目下、遺物の整理・研究の途上にあるので結論的なことをここに述べることはできないが、(ⅰ)水田跡Ⅰの覆土及び耕土上層より11・12・13・⑭・⑮世紀代の遺物（○…多）が出土、(ⅱ)畦中より、11・12・15世紀代の遺物が出土、(iii)耕作土下で方位を異にする6世紀代の溝状遺構を検出、等々より現時点では、とりあえず、少なくとも15世紀代にさかのぼるものと解しておくのが一番穏当な見解と考える。

62E～Hの各調査区では、基盤が高いことに関連してか、62A・B区の水田跡Ⅰに対応すると考えられるものは認められなかった。ただ、基盤直上において11～15世紀代の各時期のものの出土をみた。この62E～H区の様相、62A・B区における中央微高地の存在および町田遺跡の微高地のあり方等々からみて少なくとも15世紀代ごろの時期には、調査地周辺の条里制地割のなかには、水田化していない微高地がかなり存したものと考えられる。（北村和宏）

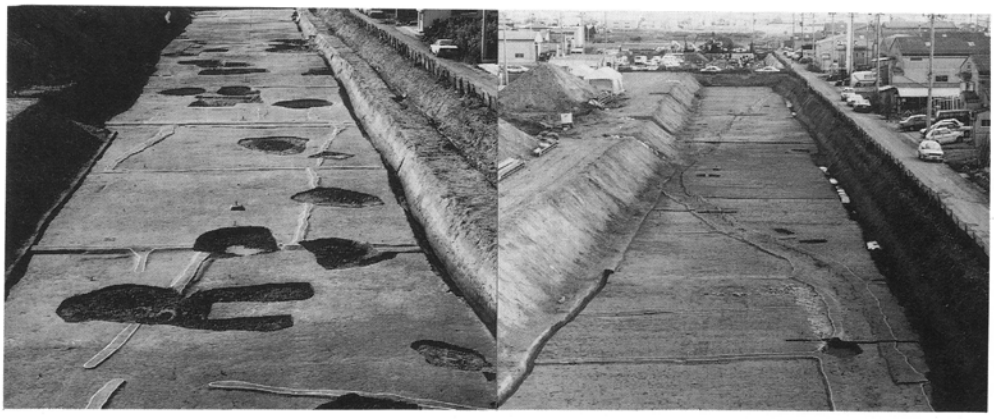




第2図　墨書「加知」須恵器62B区出土

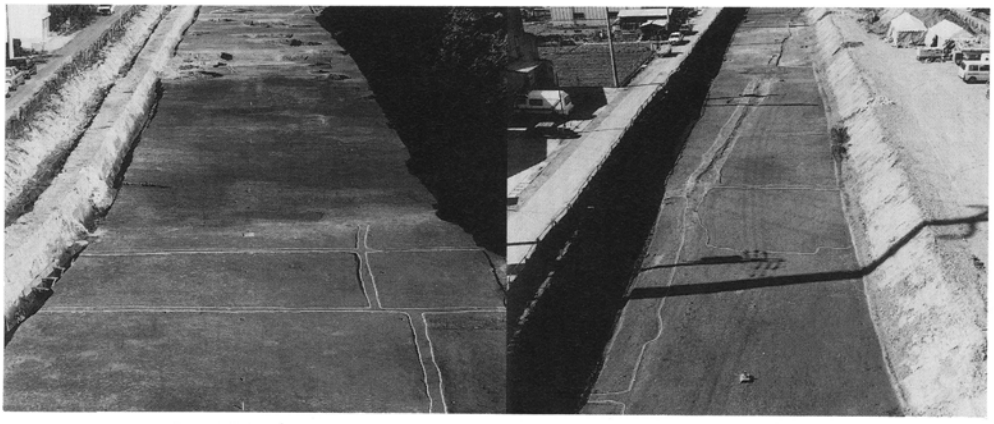


第3図　A～D区遺構図(水田跡Ⅰ)



B・D区　東より

B・D区　西より



A・C区　東より

B・D区　西より

まとめにかえて

1.「勝川廃寺」と条里制

勝川廃寺の地割と条里制地割との関連について、不十分ではあるが少し考えておきたい。第4図は、本年度の町田遺跡・松河戸遺跡及び勝川遺跡（一部57Ⅰ区）の調査で検出された15世紀代にさかのぼる水田跡と、勝川遺跡62Ｊ区で検出された「勝川廃寺」の東大溝（推定）の位置図に、町田遺跡・松河戸遺跡で検出された大畦（坪界）をもとにした条里制の「坪界」（1町＝110mで計算）を加えたものである。図の示すところによれば、「勝川廃寺」東大溝は、おおむね条里制地割上に合致してくることが知られよう。厳密に云えば、溝は10mほど西方へズレるのであるが、1町＝110mとした点、段丘の上・下、また地蔵川を介するという地形上の問題、等々を加味すれば許容範囲と云えようか。ちなみに、この「勝川廃寺」の西大溝は、東大溝の西約220m（＝2町）のところに位置している。

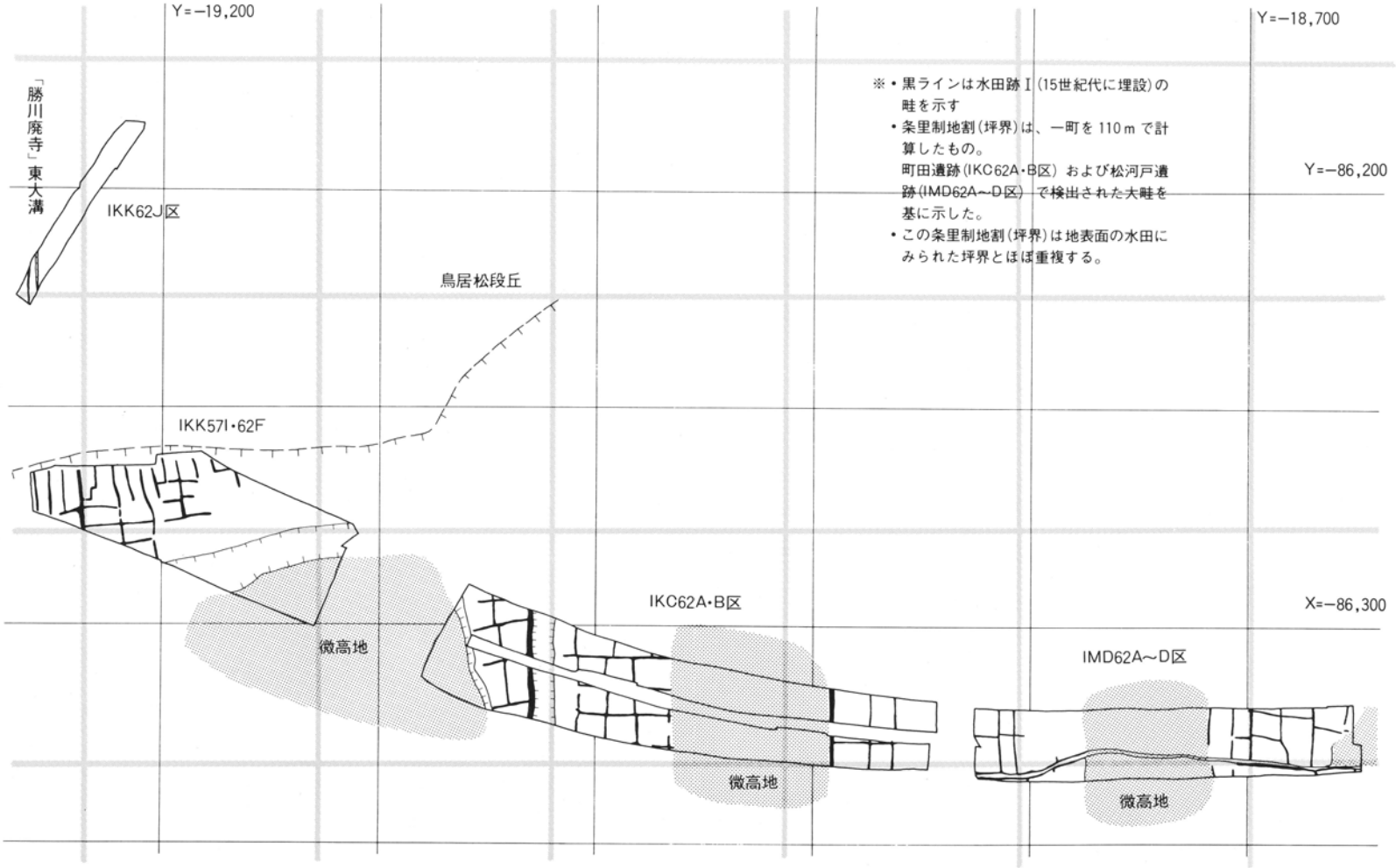
以上よりすれば、「ズレ」の問題は残るが、条里制地割と「勝川廃寺」の地割とは多分に関連する――極論すれば一連のもの――である公算が強まったと考えられる。もし、このように考えることが許されるならば、条里制に基づく水田の造成・編成の有無はともかくとして、少なくとも条里制にもとづく「地番付」は、「勝川廃寺」の東・西大溝の掘削時期までさかのぼり得る可能性がでてきたと云えよう。ちなみに、掘削時期については、西大溝下層より岩崎第17号窯式（新相）のものが出土している。

2.「安食庄」の比定について

既述のように、今回の調査区は、「安食庄」の故地に比定されるところである。条里制遺構（水田跡）の項で記したように、調査の結果、少なくとも15世紀代にさかのぼり得る水田Ⅰの段階においては、条里制地割のなかには水田化していない微高地がかなり存することが知られた。このことは、これまで故地の比定に際し、「地籍図」と康治2年（1143）検注帳案の坪付の記載との対比という方法がとられてきたのであるが、上述の点で、従来の見解について再検討を行う必要が生じたものと云えよう。ただ、従来より、畠地の割合の大きいことが指摘されてきたのであるが、かかる微高地のあり方と関連するのかも知れない。

なお、安食庄の故地の比定に際して注目される遺物が出土したので、ここに紹介しておきたい（第2図）。これは、62Ａ・Ｂ区の中央微高地東端部より出土した須恵器の杯身で、回転ヘラケズリ調整の底外面に「加知」と墨書がある。ここですぐに想起されるのが、「賀智里」である。もとより、この「加知」が「賀智里」である直接証拠はないが、きわめて興味深い資料といえよう。

（北村和宏）

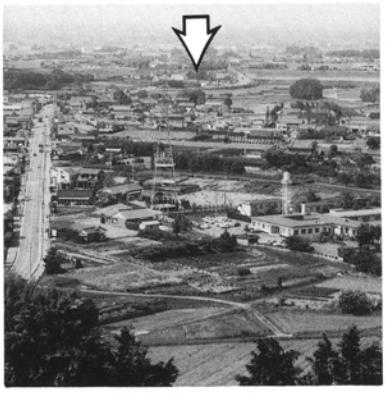


第4図　条里制遺構と「勝川廃寺」(1:600)

志 貴 野 遺 跡

1．位置及び地形

志貴野遺跡は、従来の分布調査により「中原遺跡」と仮称されていた。しかし、近年の詳細な分布調査により、同遺跡が古代を中心とする遺跡で、西尾市中原町よりむしろ隣接する志貴野町を中心に分布していることが明らかになり、改めて「志貴野遺跡」としてその調査を進めるに至った。本年度の調査は、国道23号線バイパス工事に先立ったもので、3000㎡を２ヶ所（A・B区）に分割して実施した。



遺跡遠景（南西より）

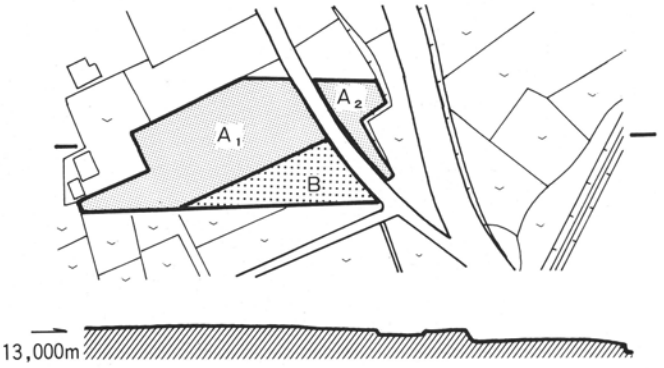
遺跡の所在地を地形的に見ると、矢作川（古川）右岸の『碧海台地』と呼称されている洪積台地縁端部に立地している。遺構検出面の標高は、13ｍを測り、この上面に厚さ20cmの包含層が覆っている状況である。遺跡の現在地目は、畑地となっている。

なお、遺跡の全面に展開する低地は、現状では水田として利用されているが、これは矢作古川堤防の整備が進むにつれて耕地化したもので、遺跡活動期には現状程安定したものではなく、湿地様を呈していた状況にあったことが、本年度実施の試掘調査により確認されている。

調査の成果は、後述する通りであるが、検出された遺構の状況から、本年度の調査区は居住域中心付近を占めていると考えられる状況にある。このようなまとまった形で検出された古代の集落遺跡は、西三河地方においては初例であり、今後、集落遺跡研究の好例になり得ると考えられる。

2．遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・溝などが見られ、調査区が居住域にあたっていることが考えられる。検出された遺構は、年代的に見るとほぼ古墳時代後期（Ⅰ期）とほぼ平安時代（Ⅱ期）の二時期に見られる。



第１図　志貴野遺跡位置図

これらは、調査区全域に一様の分布状況を呈しているのではなく、特に調査区中央を横切る市道より北方に分布の濃い部分を認めることができ、この地点より南北は徐々に薄くなっている。今回は遺跡を概観するにあたり、これらの遺構のうち、竪穴住居と掘立柱建物についてのみ記述する。

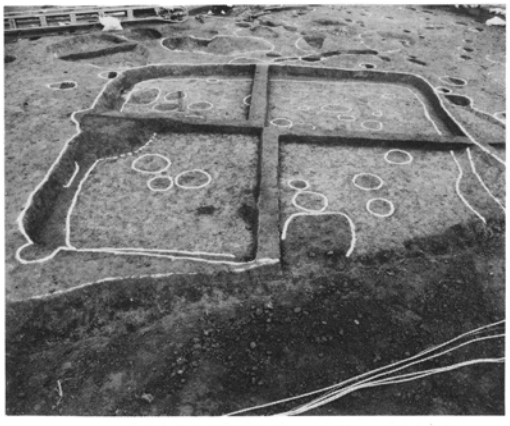


遺構近景(南より)

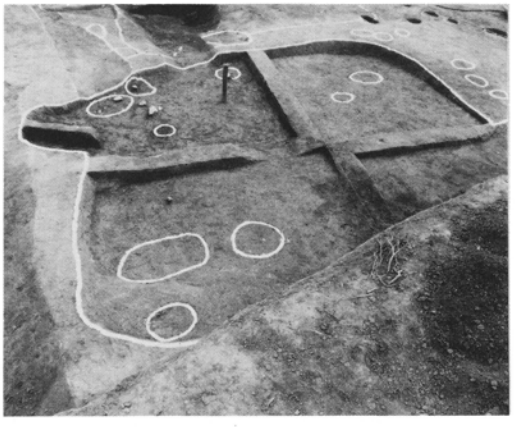
なお、A区のうち北東部分、面積50%程度については、遺跡が確認される以前に、遺構検出面となっている碧海台地面を20～30cm削る程度の、耕作に伴う深掘りを受けており、例えば竪穴住居のような掘り込みの浅い遺構は、すでに消失していると考えられる状況にあったことを付記しておく。

〈竪穴住居〉

竪穴住居は32軒検出された。時期的にはⅠ期が29軒、Ⅱ期が3軒である。Ⅰ期の住居は一辺4m程度の隅丸正方形で、遺構検出面からの掘り込みは20cm程度で、床面に直径30cm程度の主柱穴を四ヶ所有する形状が一般的である。床面の周囲には、幅20cm程度の周溝を有しているものも見られる。なお、北側もしくは東側には、幅20～30cm、長さ30～40cm程度のわずかな突出部を有しているのが通例である。この部分は埋土に焼土・炭化物が大量に見られ、時にはスサ入りの焼土塊をも含むもので、床面に被熱している部分も見られるため、カマドであったことが考えられる。Ⅱ期の住居は、Ⅰ期のものに比較して、平面形が概して小さく、やや不整形なものも見られる。床面の周囲には、Ⅰ期と同様の周溝を有している場合もある。カマドはⅠ期と同様のものも見られるが、検出できない場合もある。



Ⅰ期　竪穴住居

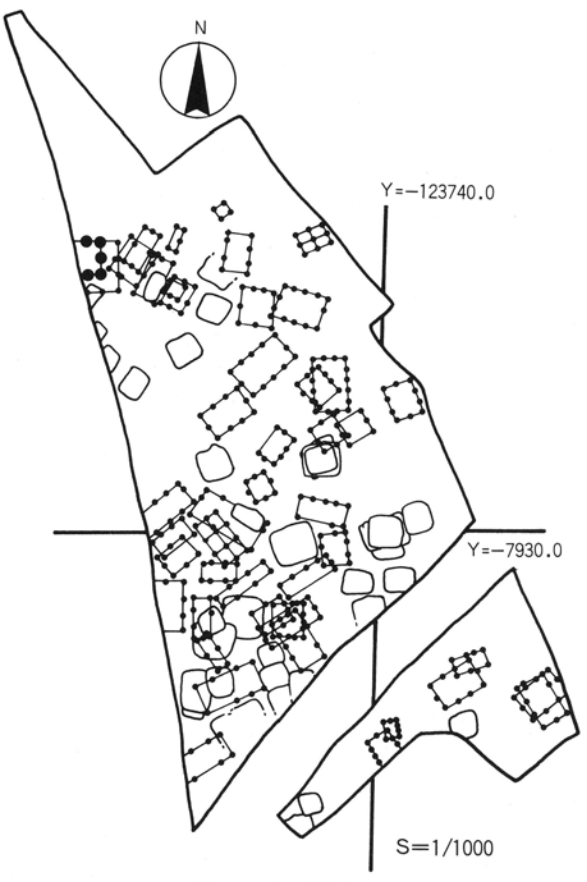


Ⅱ期　竪穴住居

これらの分布状況は、調査区全域に一様に展開するのではなく、複雑に切り合う部分を南・北両側にそれぞれ見ることができる。つまり、Ⅰ期の竪穴住居は特定の地区に数次に建て替えられたのに対し、周囲に全く竪穴住居の検出ができない地区が存在するという、極端とも言い得る状況を形成している。これをさらに調査区内の耕作時に深掘りを受けた部分に竪穴住居の存在を想定すると、直径30m程度の、結果として円形分布も考えることもできる。しかし、この状況は、Ⅱ期においては見ることはできず、数軒の住居がⅠ期の密集域とは無関係に分布している。つまり、Ⅱ期の竪穴住居は、Ⅰ期のそれとは若干異なった概念のもとで展開していることが考えられる。

〈掘立柱建物〉

掘立柱建物は46棟検出できた。これらの大半は、規模が2×3ないし2×4程度で、庇は有さない形態をとる。なかには、柱通りの悪いものも数例見られる。柱穴の掘り方は円形が最も多く、検出面で直径30cm～40cm、深さ50cm前後のものが大半で、小規模である。しかし、これらのうち1棟のみ大型の建物が検出されている（以下、大型掘立柱建物）。この建物はA区の北西部に検出されたもので、桁行は調査区外に達し、規模は不明であるが梁行は6.7mを計る。形状は、東・西・南にそれぞれ庇を有するものであったと考えられる。柱穴の規模は、検出面で母屋部分がプラン隅丸正方形で、一辺100cm、深さ60cm、柱痕径20cmを計るのに対し、庇部分はプラン円形で、直径60cm、深さ30cm、柱痕径15cmであり、調査区域内では、他の掘立柱建物とは格段の差を有していると説明しても大きな矛盾は見られない状況である。



第2図　遺構全体図

次に、これら掘立柱建物の時期であるが、周知のように掘立柱建物は、厳密な意味での床面

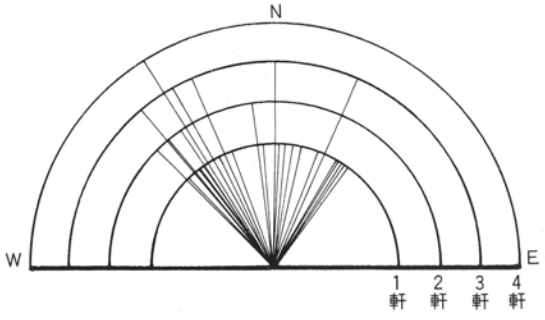
の検出が困難である場合が多い。本遺跡においてもこれは同様で、床面検出の困難さから、明確な形で伴なう遺物を検出し得た建物は1棟も見られない。従って、これらの時期を決定するためには、それぞれの柱穴について掘り方部分と柱痕部分の出土遺物を比較する方法が最も有効になって来る。しかし、これらの柱穴埋土は、多くの場合出土遺物が少なく、たとえ検出しても細片が多いため、時期を決定する資料が乏しい場合が大半である。しかし、この作業の結果、細片の形ではあるが、平安時代須恵器・灰釉陶器を、いくつかの柱穴で検出でき、これらについては、確実にII期の範囲で理解することができた。従って他の掘立柱建物についても同様である可能性が大きい。次に、遺跡全体の出土遺物の量をI期とII期とで比較してみても、後者の方が圧倒的に多く、前述した竪穴住居の、極端とも言える数量差を考え合わせると、これらの掘立柱建物は、大半がII期に属するものと理解せざるを得ないという結論に達している。



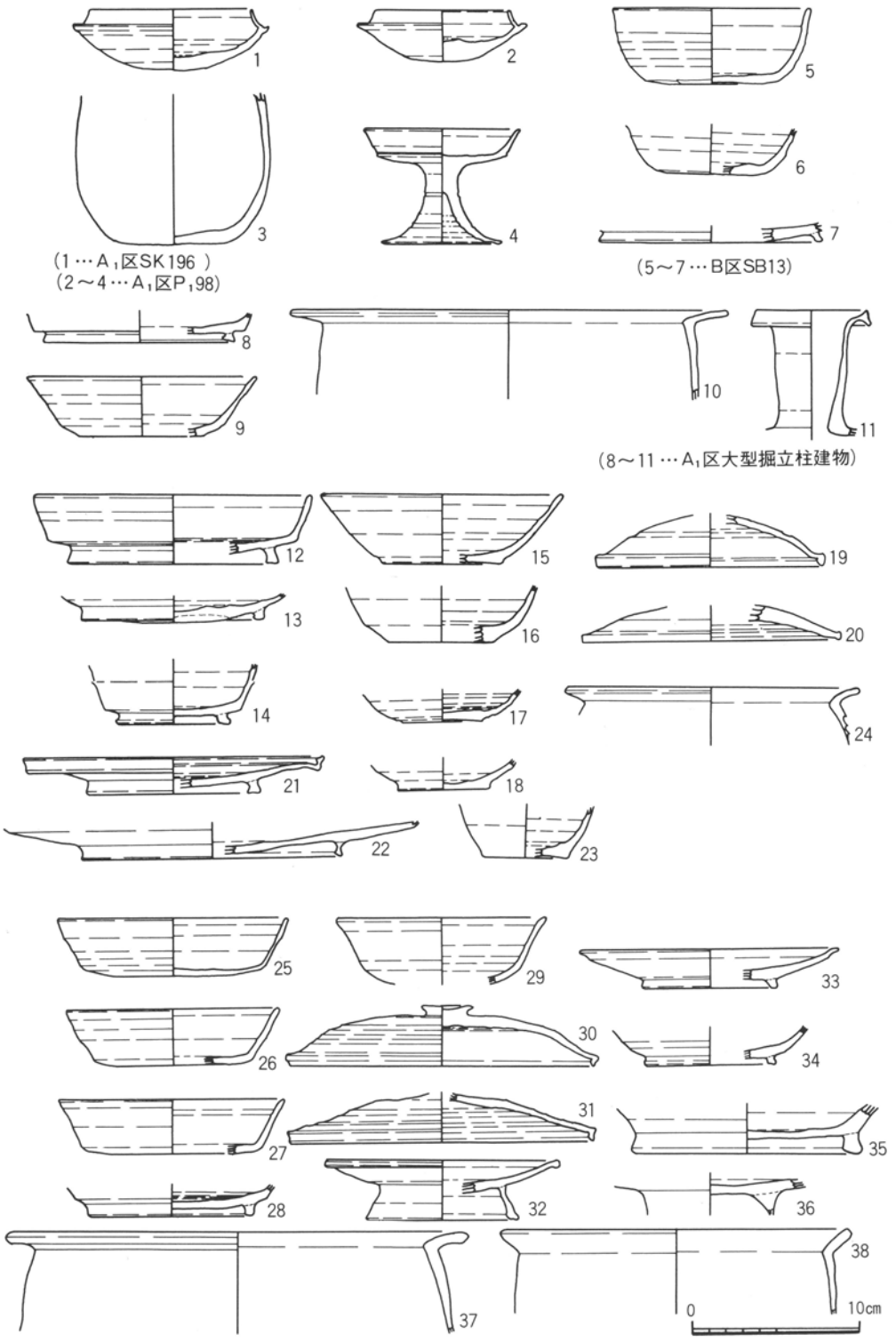
大型掘立柱建物(南より)

なお、掘立柱建物が竪穴住居と切り合う場合、ほとんど前者が新しいことを付記しておく。つまり、前述したように竪穴住居の大半をI期に属すると考えるならば、上記の想定と矛盾はしない。また、大型掘立柱建物の柱穴掘り方部分からは、II期初頭に属する遺物が見られ、(第3図－8～11)しかも、これらがいくつかの柱穴で接合関係を有することから、大型掘立柱建物の時期は、一応II期の初頭を考えている。

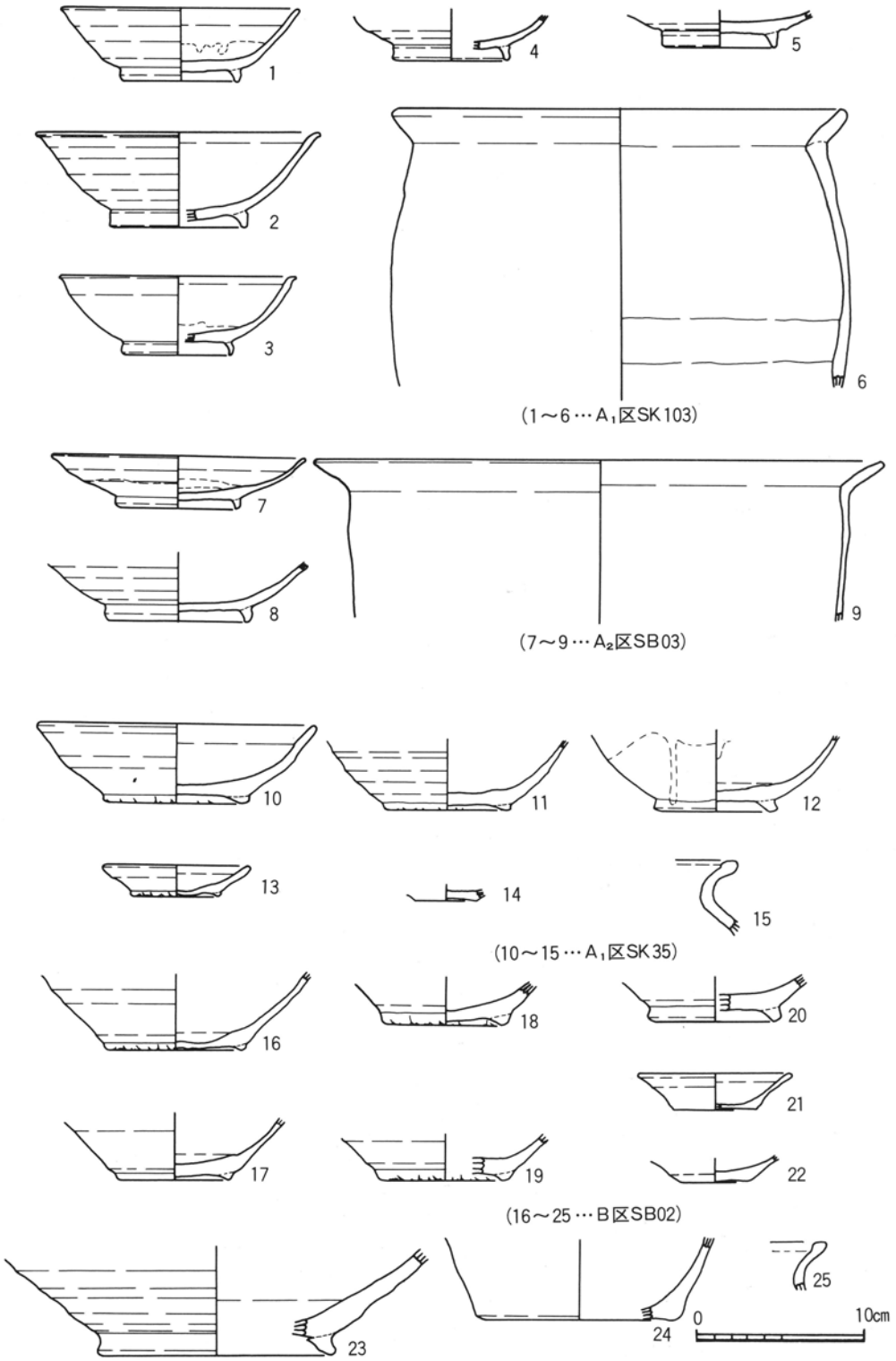
第3図は、今回検出された掘立柱建物の軸線を模式化したものである。図示されるラインの長さは建物数を示し、方位は真北を基準にしている。また、この表の示す方位は、南北ラインに近い軸線を用いたもので、必ずしも建物の主軸を表現してはいない。この表からは、今回検出した掘立柱建物が大きく四グループに分けられることを読み取ることができる。しかし、これらの差は明確なものではなく、しかも同一グループ内でも方位のばらつきを持ってい



第3図　掘立柱建物方位グラフ



第4図　志賀野遺跡出土遺物①



第5図　志貴野遺跡出土遺物②

る。従って、掘立柱建物の方位に厳密な差異を認めるためには、若干の検証を必要とするであろう。

なお、掘立柱建物の分布には、前述のⅠ期に属する竪穴住居のような様相は見られない状況にある。これは、前述した方位によるグループのみを抽出しても同様である。

次に、掘立柱建物のうち、特異な構造を有している例について若干触れておく。志貴野遺跡では掘立柱建物のうち、床面の一部に土坑を有しているものが2棟検出されている。これら2棟はいずれもほぼ同様の構造を有している。注意したいのは床に設置されている土坑である。この土坑には、建物の外側に煙道を有するカマドが設置されている。土坑のプランは長径350cm、短径170cm程度の隅丸長方形で、面積は建物床面のほぼ1／4を占め、検出された床面より10cm程度掘り込まれている。建物の柱通りは悪いが、検出された2棟とも同位置に土坑を有すること、土坑単独では屋根構造も想定し難く、床面積も狭すぎることから、これらが一連のものであることは間違いあるまい。さてこの建物の機能であるが、前述した構造上の特色から、カマドを設置するための施設であったと考え、機能を想定できる掘立柱建物として注目したい。

3．遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器類・石製品類・瓦類などが見られるが、量的には、土器・陶磁器類が最も多い。ここでは出土遺物のうち、土器・陶磁器類のみを扱い主要な遺構に限定して概観する。

志貴野遺跡出土の土器・陶器類には、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・中国陶磁などが見られる。数量的には前三者が圧倒的に多く、後者二者は数点見られるにすぎない状況で、時期的にはほぼ古墳時代後期（Ⅰ期）とほぼ平安時代を中心とする時期（Ⅱ期）に大別できる。今回は紙面と時間の関係で、その詳細については遺物実測図（第4図・第5図）及び法量表に代えることとし、アウトラインのみを記したい。

Ⅰ期の遺物は量的に乏しいが、供膳形態を須恵器で煮沸形態を土師器で占める土器様相が想定できる。供膳形態の主体は杯で古墳時代的なかえりを有する有蓋杯（第4図－1・2）に加え、高台を有する有蓋杯（第4図－7）と、これに伴なう宝珠鈕を有する蓋などが見られる。煮沸形態は、土師器の長胴甕（第4図－3）である。

Ⅱ期に属する遺物は、志貴野遺跡の主体を占める。供膳形態は、須恵器のみで構成される段階（B区SB03）から、これに灰釉陶器が加わり（A_2区SK03）、主体が灰釉陶器化する段階（A_1区SK103－A_2区SB03）をへて、山茶椀に若干の土師器が加わる段階（A_1区SK35）へと移行する。煮沸形態は、Ⅰ期以来の長胴甕（第4図－10・24・37・38・第5図－6・9）が、Ⅱ期最終段階で伊勢型鍋と交代している状況である。

なお、貯蔵形態は、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて須恵器甕が主体を占めていると考えられる。

4．まとめ

以上見てきたように、志貴野遺跡の調査は、当地域における古代集落の一様相について提示し得たものと考えられる。今後、付近に所在する志貴野廃寺（西尾市志貴野町）・寺領廃寺（安城市寺領町）、羽角山古墳群（西尾市上羽角町・下羽角町）などの遺跡との比較を通じ、『墓』と『寺』のみに終始していた当地の古代について再検討を試みねばならない。

（池本正明）

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
第4図－1	須恵器杯	9.3	3.9	3.7		35	灰釉陶器長頸瓶	－	13.2	－	
2	〃　〃	－	7.3	－		36	土師器杯	－	－	－	ロクロ使用・小片
3	〃　甕	7.9	3.5	3.2		37	〃　甕	26.9	－	－	
4	〃　高杯	9.1	6.7	7.0		38	〃　甕	20.4	－	－	
5	〃　杯	11.4	5.0	4.5		第5図－1	灰釉陶器椀	13.9	6.6	4.4	
6	〃　〃	－	5.2	－		2	〃　〃	16.7	7.8	5.7	
7	〃　〃	－	13.0	－		3	〃　〃	13.9	6.2	4.8	
8	〃　〃	－	11.4	－		4	〃　〃	－	6.6	－	
9	〃　〃	13.6	7.6	3.6		5	〃　〃	－	6.5	－	
10	土師器甕	25.8	－	－		6	土師器甕	26.4	－	－	
11	須恵器長頸瓶	6.6	－	－		7	灰釉陶器皿	14.8	6.8	3.1	
12	〃　杯	16.2	6.0	4.1		8	〃　椀	－	7.8	－	
13	〃　〃	－	10.7	－		9	土師器甕	33.2	－	－	
14	〃　〃	－	6.6	－	双耳を有する	10	山茶椀椀	16.2	7.8	4.7	高台モミ圧痕あり
15	〃　〃	14.0	6.8	4.2		11	〃　〃	－	6.8	－	高台モミ圧痕あり
16	〃　〃	－	6.3	－		12	〃　〃	－	6.4	－	高台モミ圧痕あり
17	〃　〃	－	7.1	－		13	〃　小椀	8.5	4.8	1.9	高台モミ圧痕あり 内底部墨書
18	〃　〃	－	5.4	－		14	土師器小皿	－	3.6	－	ロクロ使用・小片
19	〃　蓋	13.2	－	－		15	〃　鍋	－	－	－	口縁部小片
20	〃　〃	15.2	－	－		16	山茶椀椀	－	7.8	－	高台モミ圧痕あり
21	〃　盤	17.8	10.0	2.2		17	〃　〃	－	7.0	－	高台砂圧痕あり
22	〃　〃	－	15.0	－		18	〃　〃	－	6.5	－	高台モミ圧痕あり
23	〃　瓶	－	4.8	－		19	〃　〃	－	7.0	－	高台モミ圧痕あり
24	土師器甕	17.2	－	－		20	〃　〃	－	7.0	－	高台砂圧痕あり
25	須恵器杯	13.6	7.0	3.5		21	〃　小皿	9.0	4.6	2.2	
26	〃　〃	12.4	6.7	3.3		22	〃　〃	－	3.9	－	
27	〃　〃	13.2	7.0	3.3		23	こね鉢	－	13.5	－	
28	〃　〃	－	9.6	－		24	壺	－	11.0	－	
29	〃　〃	12.2	－	－		25	土師器鍋	－	－	－	口縁部分
30	〃　蓋	17.8	－	3.6							
31	〃　〃	18.2	－	－							
32	〃　盤	13.6	8.8	3.5							
33	灰釉陶器皿	15.2	7.8	2.4							
34	〃　椀	－	7.6	－							（数値はcm）

表1　出土遺物法量表

岡　島　遺　跡

1．調査の経過

岡島遺跡は、西尾市岡島町・江原町に所在する弥生時代を中心とした遺跡である。今年度は、県道蒲郡・碧南線建設に伴う事前調査として、調査区をA・B・Cの3区に分け調査を行った。

遺跡は、矢作古川左岸の自然堤防上に立地する。付近を矢作古川の他、広田川などが流れており、これらの河川あるいはその支流がひんぱんにその流路を変えて流れていたことが想定される。

調査は昨年度行われた試掘調査結果より、遺構面が2面あることが確認されており、上面、下面に分け順次調査を行った。



第1図　調査区位置図(1/20000)

遺跡の現地表面の標高は5m程である。土地改良により客土が1m程積まれており、この下に厚さ20cm程の中世の遺物を含む黒褐色土が堆積する。この下が最初の遺構面であり、標高3.8～4m程である。この遺構面は、炭化物を若干含む厚さ40cm程の層を地山とする。そして、この下に厚さ20cm程の弥生時代中期の包含層が堆積する。その下が弥生時代中期の遺構面で、標高3.2～3.4m程である。

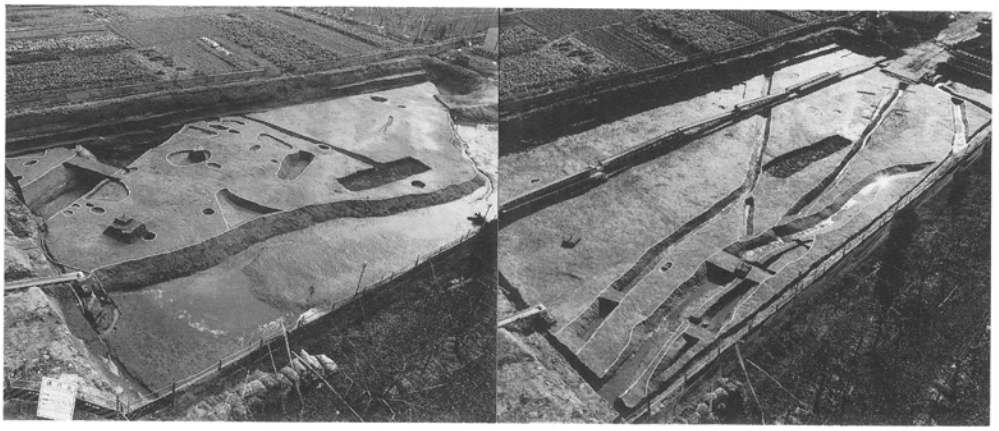
2．調査の概要

設定した3つの調査区のうち、先に調査の完了したB区について概要を述べ、A・C区について若干補足を加える。また、厳密な時期区分は行わず、下面の弥生時代中期の遺構面を第1遺構面、上面の遺構面を第2遺構面とする。

A．第1遺構面

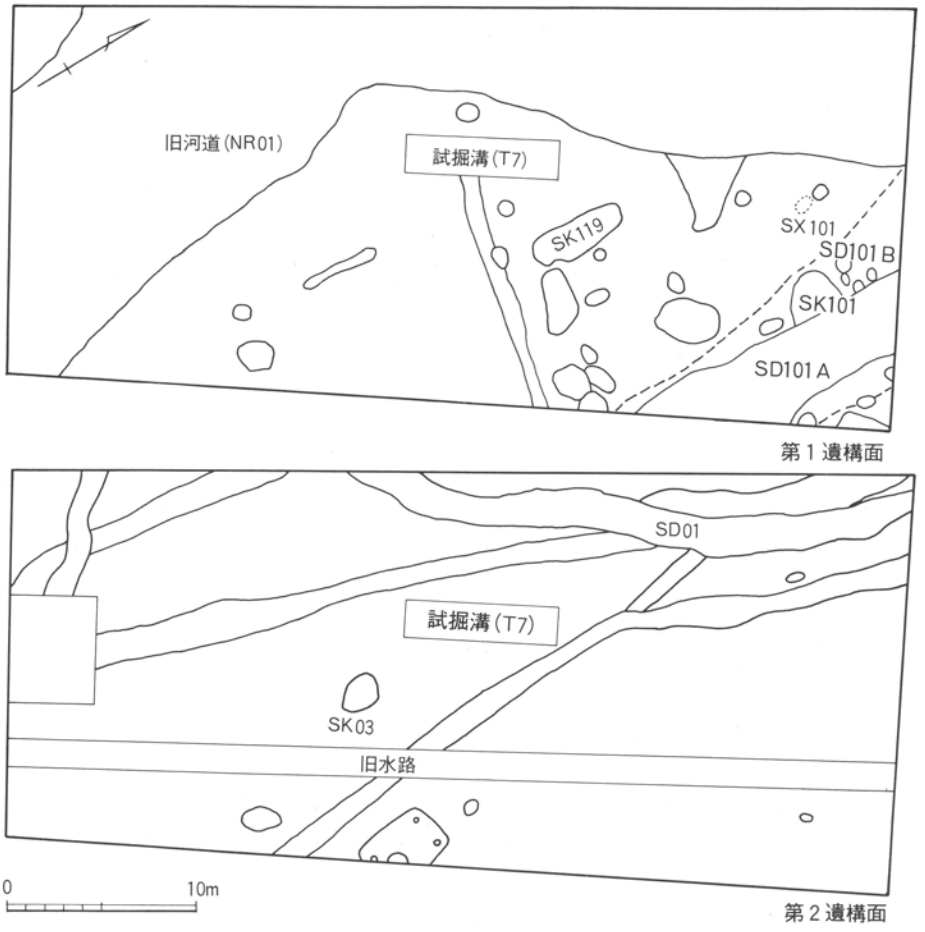
遺構

SD101　再掘削の行われた2時期の溝である。最初の溝が掘削され、この溝が埋没しかけたころ再び掘削が行われた。この溝から弥生時代中期の土器が出土した。C区において、この続きがほぼ南北方向に検出されている。以下再掘削された溝をSD101A、最初に掘削された溝をSD101Bとする。



B区　全　　景(北から)

左：第１遺構面　　右：第２遺構面



第２図　B区遺構配置模式図

ＳＫ101　ＳＤ101Ｂを切り、ＳＤ101Ａに切られる。ＳＤ101Ａ出土の土器とほとんど時間差が見られず、ＳＫ101が埋没した後、短期間にＳＤ101Ａが掘削され埋没したようである。このことより、ＳＫ101は掘削されてから埋没するまでの時間が短かったと考えられる。

ＳＫ119　南北に細長く伸びた大型の土坑である。ＳＤ101Ａ、ＳＫ101と同じく弥生時代中期の土器がまとまって出土している。他の遺構と切合わず一括性の高い良好な資料となる。

ＳＸ101　落込みは見られず、遺構面上に炭化した植物質のものが楕円形状に広がり、その上に胴下半部を欠損した弥生時代中期の壺が正位に置かれた状態で出土した。

旧河道（ＮＲ01）　Ｂ区北半で検出した。Ａ区では調査区中央で、Ｃ区では北端より検出した。河の存続時期については、なお詳細な検討が必要であるが、弥生時代中期の包含層が河の中に流れ込んでおり、また、Ａ区で古墳時代の高杯が出土していることより、少くとも弥生時代中期から古墳時代までは河であったと考えられる。

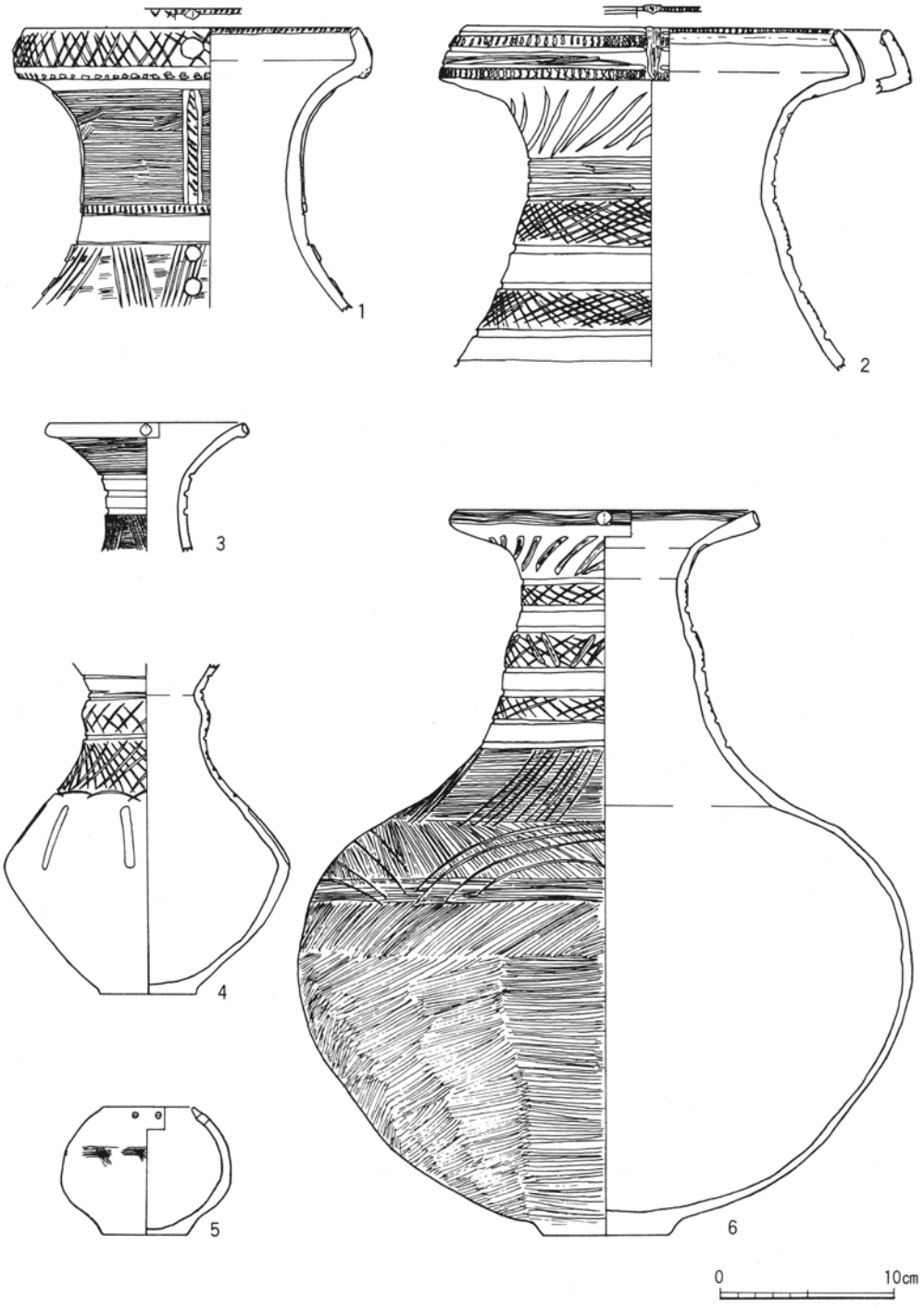
遺物

土器　弥生時代中期の土器が多量に出土している。ＳＤ101Ａ・Ｂの関係により、最低２時期に分けられる。

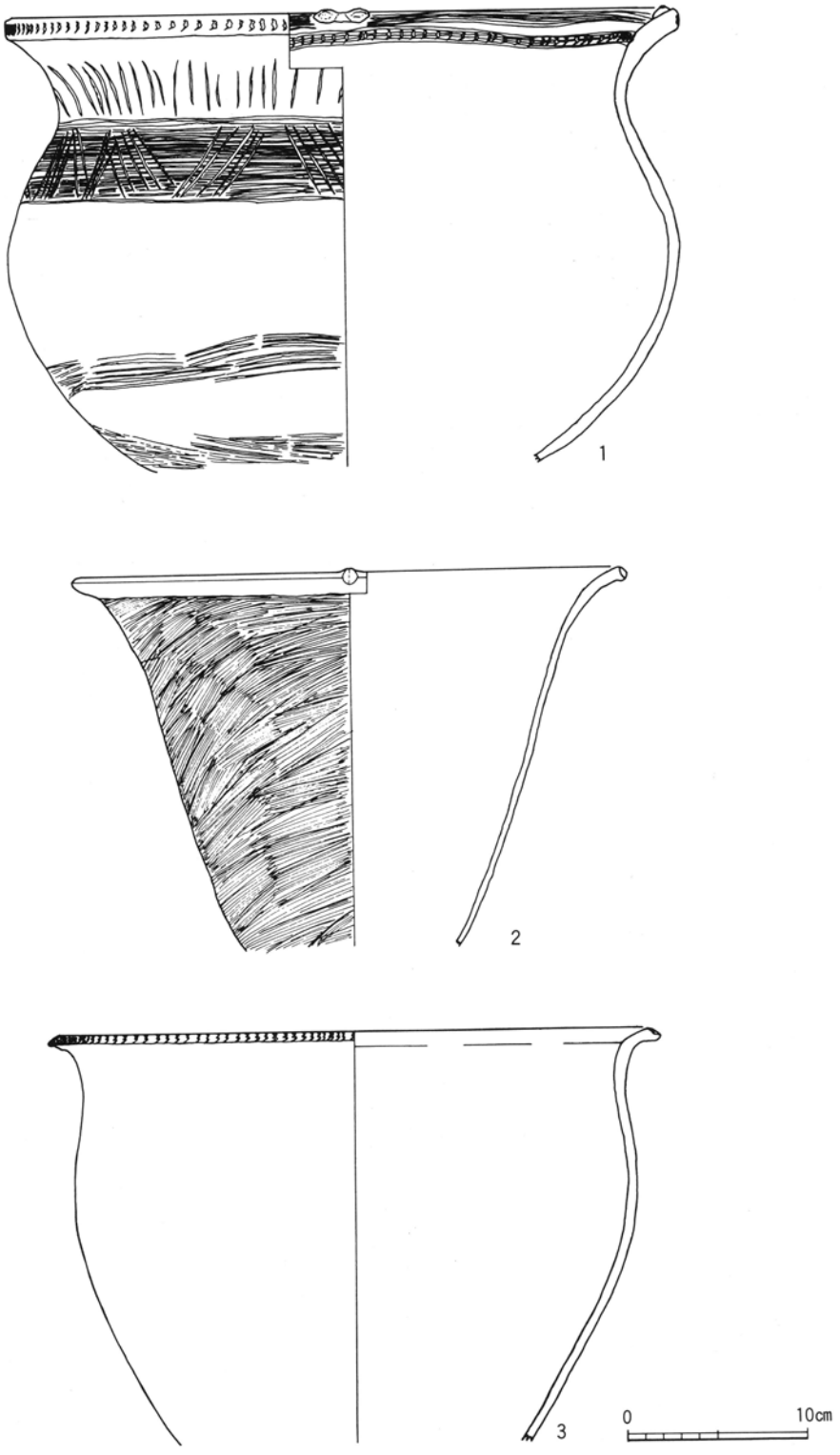
Ⅰ期　Ｂ区では、ＳＤ101Ｂからのみ出土している。基本的な器種構成は壺と甕である。壺（第３図）は、１・２のように広口で口縁部が内湾するものと、３・６のように口縁部がゆるやかに外反し、頸部が細くなるものが見られる。主な施文具としては篦、貝殻などが用いられる。文様は、篦による斜格子目文・数条一組の沈線文、貝殻による刺突・刻目文、撚上げ文、条線文、貼付文などが主となる。２・６は横位の沈線で区画された無文帯が磨かれる。５は無頸壺である。口縁部に一対の穴を対称的な位置に２箇所施す。同様の無頸壺の破片が数点見られる。

甕は、第４図－２のように口縁部に最大径があり、底部に向って直線的にすぼまっていく深鉢形を呈する器形のみに限られる。２のように口縁端部に単独圧痕を施すものや、口縁部内面に櫛あるいは貝殻による模様を施すものも見られる。器表面の調整は、板もしくは二枚貝によって行われる。図５－１は、偏平で口縁部と胴部に最大径があり、胴部が球形に脹む。口縁部内面に突起がつけられている。Ⅰ期の土器は三河地方弥生時代中期の瓜郷式に属する。

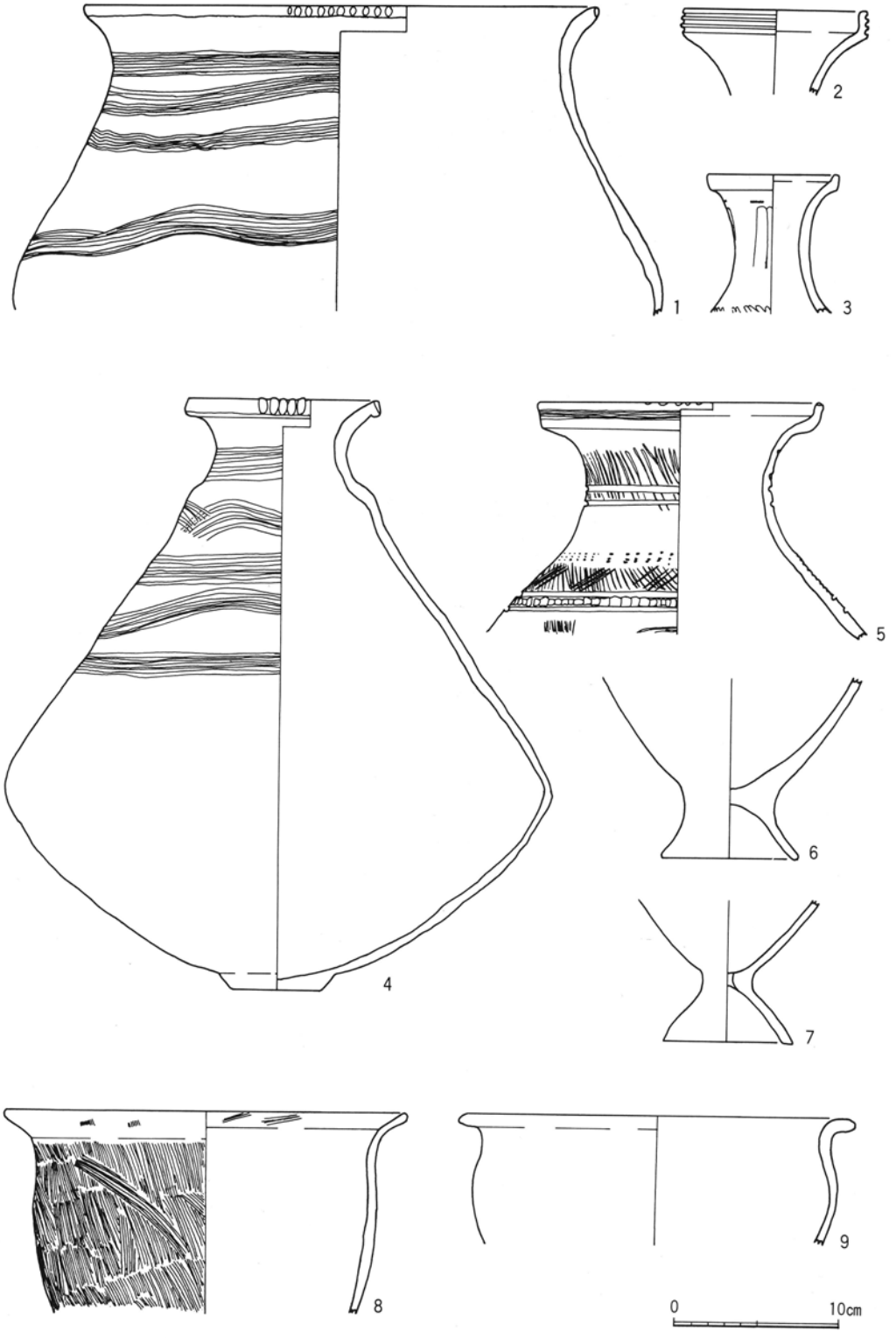
Ⅱ期　基本的な器種構成は、Ⅰ期と同じく壺と甕である。壺（第５図－２～５）は、口縁部が内湾するものが見られなくなり、３・５のような受口状の口縁が出現する。４のように口縁部が小さく胴下半部に最大径がくるものも見られるようになる。施文具は、ほとんど櫛だけに限られ、櫛描横線文・波状文、口唇部に施される数個一組の圧痕文が主文様となる。５は横位の沈線文による区画帯の中の篦描斜格子目文や、貝殻による押し引き文など



第3図　第1遺構面出土土器（Ⅰ期1～6：SD101B）



第4図　第1遺構面出土土器(Ⅰ期 1･2：SD101B、Ⅱ期 3：SD101A)



第5図　第1遺構面出土土器(Ⅱ期 2～8：SD101A、1･9：SK119)

Ⅰ期の影響が残る。Ⅰ期が装飾的であったのに比べ、Ⅱ期は文様が簡素化する。また、篦から櫛へという施文具の変化が見られる。2は尾張地方の沈線文土器であり、この時期の三河地方と尾張地方との併行関係を考える上で重要である。

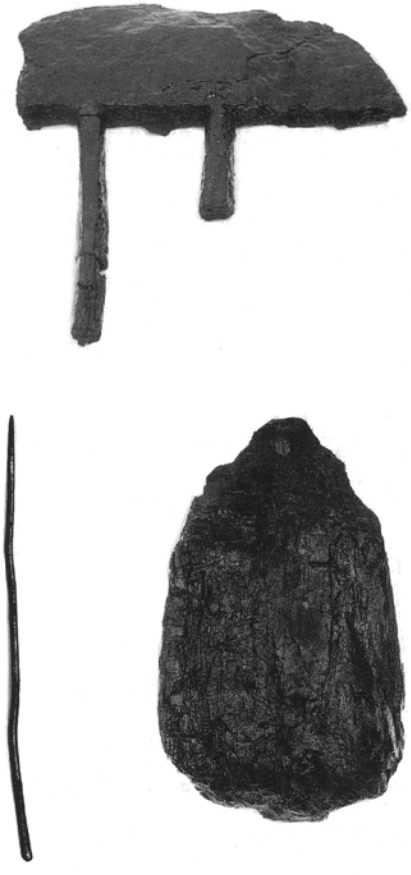
甕（第4図－3、第5図－8・9）は、Ⅰ期と異り、若干形態の違うものが見られるようになる。図5－3は、口唇部に貝殻による刺突文を施す。また、第5図－6・7のような台も多く出土している。全景の分る資料に乏しいが、台付甕の台と思われる。7のように焼成後底部穿孔が行われたものが半数ほどある。これらの台が、Ⅰ期に見られずⅡ期に見られるようになることや、底部穿孔など台付甕の出現や機能などを検討する必要がある。Ⅱ期の土器は三河地方弥生時代中期の古井式に属する。

木製品

又ぐわ　身・歯を部分的に欠損する。刃幅27cm6本歯である。歯の断面形は長方形である。現存する長さは16cm程であるが、もう少し長くなる。身丈は現存部で10cm程である。現存部のすぐ上が頭部で、丸くなるようであり着柄隆起はなかったと考えられる。

すき　すき身のみ出土している。一木すきであり、刃幅13cm・身丈22cm程である。

弓　一端を欠損していると思われるが、ほぼ完形あるいは完形の可能性がある。弓幹はあまり屈曲せず直線的である。長さ64cm程である。断面は不定形な円形をなす。筈と思われる部分は先端を尖らせただけであり、もう一端は弓幹の中で最も太く、先を丸く仕上げる。欠損した後に丸くしたものか、最初からこのような形態の筈だったのか検討を要する。木枝を利用して作られたもののようであり、加工は面取りを行う程度である。



ＳＤ101Ｂ出土木製品
（上：又ぐわ、左下：弓、右下：すき）

これらの木製品は、いずれもＳＤ101Ｂより出土し、弥生時代中期に属する。

この他、包含層中より多量の弥生時代中期の土器と、石斧・石包丁などの石器が出土している。また、ＳＤ101Ｂ、旧河道内より、種子・獣骨などの自然遺物も出土している。

Ｂ．第２遺構面

遺構

溝　５条検出されている。埋土、形状などより、比較的時期の近接した溝と考えられる。旧河道埋没後に掘削されたものであり、旧河道が古墳時代までは河であったことから、これらの溝の時期は、早くともこれ以降である。Ａ・Ｃ区でＢ区の続きの溝が検出されたものもあり、弧状を呈するようである。

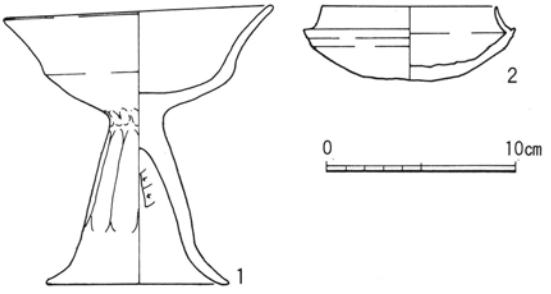
土坑　５基検出されている。ＳＫ03内より、古墳時代の高杯が４点つぶれた状態で出土した。

竪穴住居跡　１軒検出されている。一部調査区外に出るが、平面形は隅丸方形であり、柱穴３基、土坑１基を検出した。

どの遺構も遺物の量が少く、出土しているものもローリングを受け、摩滅しているものが多く、時期決定は困難である。

遺物

土器　第２遺構面での土器の出土量は少く、大多数は摩滅しており残存状況は不良である。第６図－１はＳＫ03より出土した古墳時代の土師器高杯である。また、ＳＤ01上層より古墳時代の須恵器杯（第６図－２）が出土した。



第６図　第２遺構面出土遺物　（左：SK03、右：SD01）

３．まとめ

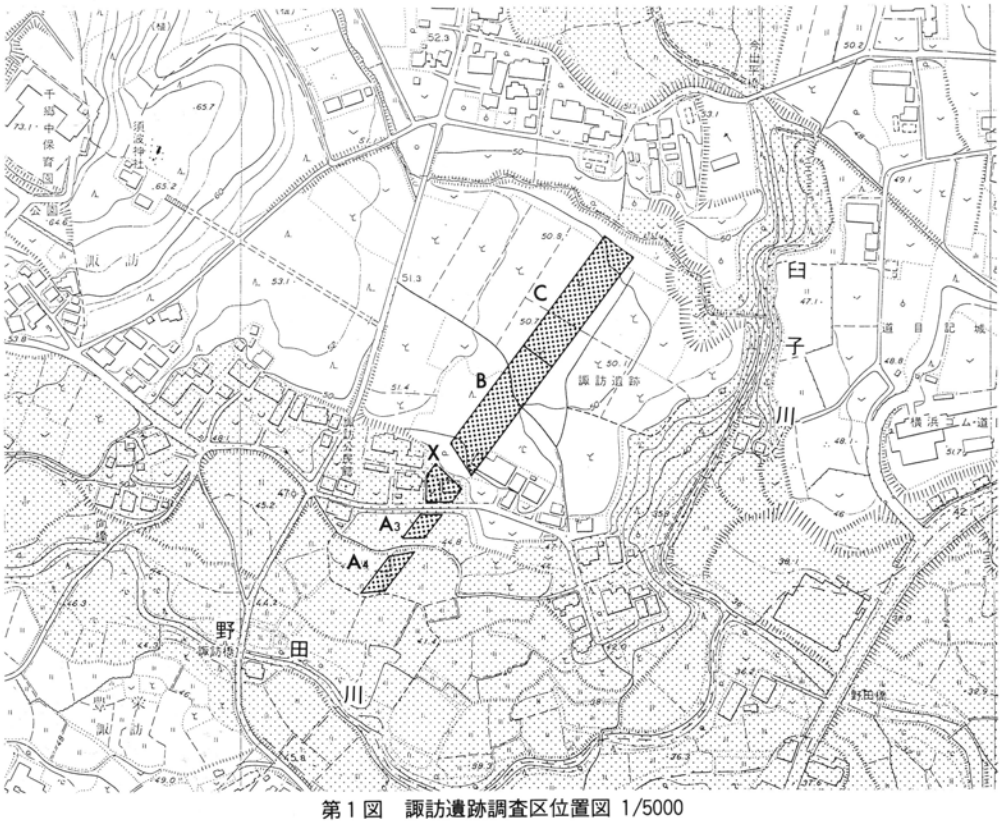
今年度は、岡島遺跡の外縁部に当る箇所の調査を行った。遺構、遺物とも量的に多くはなかったが、第１・２遺構面の遺構の厳密な時期決定や、性格の究明による遺跡景観の復元や、遺跡の時間幅、また、弥生時代中期の土器の良好な資料による、いまだ不明な点の多い三河地方のこの時期の土器編年の再検討、確立、といったように今回の調査によって今後検討すべき重要な問題が提起された。　（野口哲也）

諏　訪　遺　跡

1．調査の経過

諏訪遺跡は、豊川中流域である新城地域の右岸に発達する河岸段丘の中位面に立地し、標高約50mを測る。位置する段丘は、幅300mほどの舌状をなし、臼子川の小支流がはいり込むが、平坦な地形である。段丘南側は、低位段丘面と比高差３～４mの崖面を形成し、豊川支流の野田川まで階段状の水田によって高度を下げる。北側も数mの崖面をなすが、臼子川の流れる低位段丘面は緩傾斜である。北西方向は同じ中位段丘が広がり、西方向は高位段丘となる。東側は、比高差10数mから20mの臼子川の河谷であり、対岸の段丘上には道目記城跡がある。なお、杉山遺跡は臼子川をはさんで、北東方向に位置する。

諏訪遺跡は、昭和30年代には遺物散布地として認識され、文化庁編集の全国遺跡地図に記載されている。当初、範囲は中位段丘上とされていたようであるが、事前調査の遺物分布の状況から、中位段丘面にＢ・Ｃ区、低位段丘上位面にＸ・Ａ３、同中位面にＡ４区の調査区を設定した。（第１図）



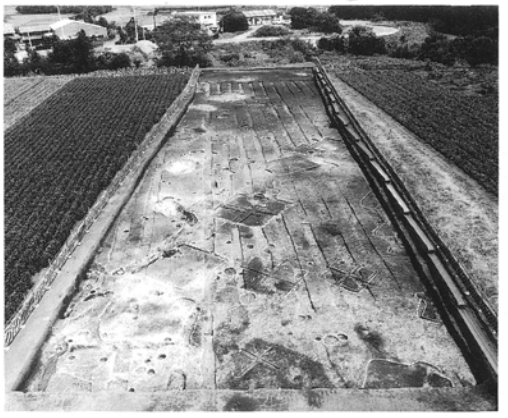
第１図　諏訪遺跡調査区位置図 1/5000

2．調査の概要

検出された遺構・遺物群は、Ⅰ期：縄文時代　Ⅱ期：弥生時代後期　Ⅲ期：奈良時代～平安時代前期　Ⅳ期：近世の4時期に大別される。以下各時期について概略を述べる。また、各調査区の基本層序については、B・C区　耕作土→黒色土（いわゆる黒ボク）→黄褐色土、X・A3区　耕作土→黒色土→砂礫土　A4区の現耕作土下は水田造成による堆積土であり、過去の水田面が幾層か認められ、層序は一定していないが、基盤は砂礫土である。

Ⅰ期　B区で土坑が1基検出され、内部から中期の同一個体の土器が出土した。諏訪遺跡全体でも、遺物出土量は少量で、遺構も希薄である。

Ⅱ期　後期の竪穴住居9軒・方形周溝墓2基・溝2条・大型土坑3基などが検出された。X区の溝1条、A3区の若干のピット・土坑以外はB・C区である。竪穴住居は後期前半（山中期並行）5軒、後期後半（欠山期）3軒・時期不明一軒である。後期後半の住居跡と後半の1軒は、B区SD04と、B区とX区の境の中位段丘崖との間に位置し、SD04以北には後半の2軒がある。遺構・遺物の遺存状況は、前半・後半各1軒以外はあまり良好でない。SD04は、西壁面で幅1.5m×深さ0.9mを測り、断面V字型である。X区SD01も東壁面で幅2.3m×深さ1.4mのV字型で、両溝の上層部より後期後半の土器が多量に検出された。SD01・04の断面形状・遺物出土状況は近似しており、同時に掘削され、同過程を経て埋没したと考えられる。方形周溝墓2基は、SD04の北側にある。SZ01は、1ヶ所には陸橋があり、SZ02は「コ」の字形で2ヶ所の陸橋部をもつ形状である。マウンドはいずれも不明である。この時期の遺構は全体として、SD04以南に密である。なお、中期の遺物がA4区の旧自然河道部より少量検出されている。

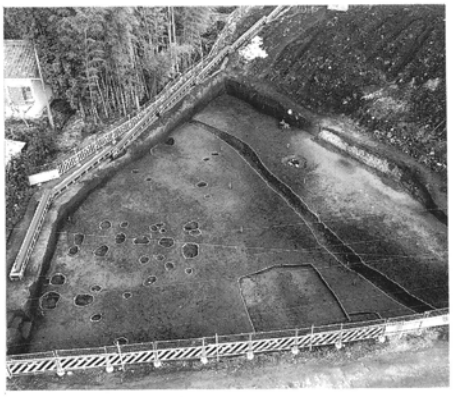


C区　全　景（南より）



B区　全　景（北より）

Ⅲ期　9世紀前半を中心とする時期の竪穴住居37軒、掘立柱建物10棟などが検出された。竪穴住居はB・C区の北部は分布が希薄であるが、その全体にわたってある程度の群構成を示しながら分布している。長辺は2m～7m、明確な柱穴を有するものはなく、無柱穴の可能性がある。竈は、検出されたものでは北辺あるいは東辺中央にあり、構造は石組を有するものが2軒ある。遺構の状況が良くないため、住居址内の一括した遺物は多くはないが、須恵器蓋杯と土師器の甕類の編年的な関係を推定させる資料がある。掘立柱建物は竪穴住居群内の空間地を占める形で位置し、軸方向に統一性があることなどから竪穴住居に時期的に対応すると考えられる。3間×2間、3間×3間の規格のものが多く、後者は倉庫の可能性がある。竪穴住居・掘立柱建物は、3時期程度に識別されるが、切り合い関係は少ない。また、X区から竪穴住居3軒が検出されており、低位段丘上位面にも居住域が広がることが確認されている。なお、平安時代中期の灰釉陶器も検出されているが遺構は希薄である。



X区　全　景(南より)

Ⅳ期　B区で方形土坑1基が検出され、土師器皿、鉄釉陶器類が出土している。墓坑の可能性がある。

その他の時期：古墳時代の須恵器、14世紀代の陶器類がA4区の遺物包含層中に、少量検出されている。時期不明の遺構としては、C区北半に大型土坑7基と、A4区南に溝2条がある。土坑は最大のもので、平面4.8m×3.5mの楕円形で、深さ約1.5m、出土遺物はほとんどなく、埋土は掘り下げた土が一方向から流入しているという共通した様相を示し、中世以降の遺構と考えられる。A4区の溝は、伴う遺物がなく、現在の水田の造成以前の水田の用水路と推測される。



A3区　全　景(北より)



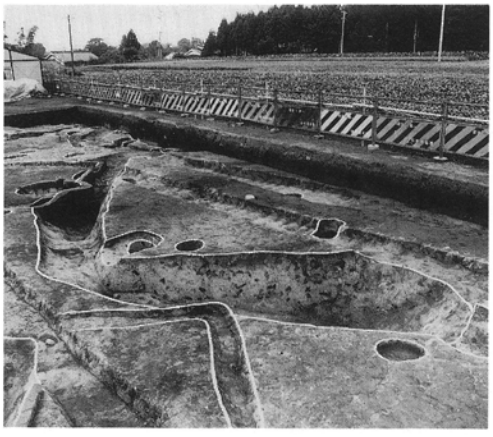
A4区　全　景(北より)

3．まとめ

弥生時代集落構造：中位段丘上と、その段丘崖下に後期前半に掘削された溝が検出され、その間の区域に当該時期の竪穴住居が存在することから、２つの溝は居住域の外縁を画す溝と考えられる。Ｂ区ＳＤ04は、ほぼ直線方向に伸び、臼子川の河谷が形成する段丘崖の屈曲部に至って居住域の北側を画す。Ｘ区ＳＤ01は、段丘崖直下より数m隔てて並行していることから、裾部をやはり臼子川河谷まで廻り、南側を画すものと推定される。しかし、集落の防御上の観点から両溝が河谷の付近で結合するかは不明である。居住域の西側については、段丘崖が西方向に連続するため、ＳＤ01がある程度の所で断絶し、ＳＤ04がその部分に向って方向を転換して、居住域を画すように廻ると推測される。以上の推定から、居住域の範囲は南北約120m、東西100m以上となる。また、ＳＤ04の北側居住域外に方形周溝墓が検出されているが、これより西の地域に対応する墓域が形成されているものと予想される。段丘上の突出部という防御に適した自然地形を利用して居住域が形成され、利用価値が低かったと考えられる中央部に墓域が設定されている。

また、農耕地、特に水田の位置は推測の材料はないが、居住域の南と東側は傾斜地で水田造成することは困難と考えられ、若干距離を隔てるが、北側の臼子川流域の平坦な低位段丘面などに存在したものと推定される。

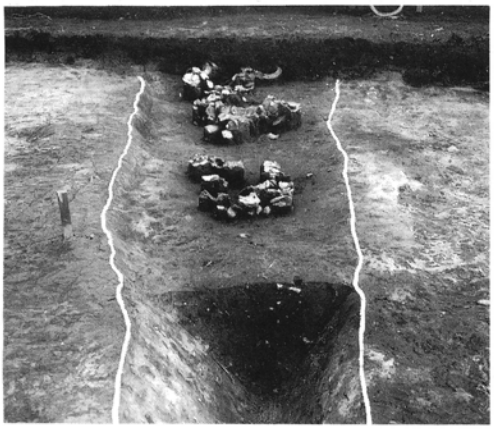
奈良～平安時代前期の集落：この時期の住居等は段丘の南半を中心に広がると予想される。調査区内において、竪穴住居と掘立柱建物との配置は計画性が認められ、９世紀前半を中心とする短期間に存続し廃絶することから、自然村落とは性格的に異なるものと考えられる。平安時代前半の人口増加による東三河地域の郡郷の改変に見られるような現象が、集落の構成に何らかの影響を与え、このような形で現れたと思われるが、この問題については今後の検討課題である。



Ｃ区　ＳＺ01　東側より



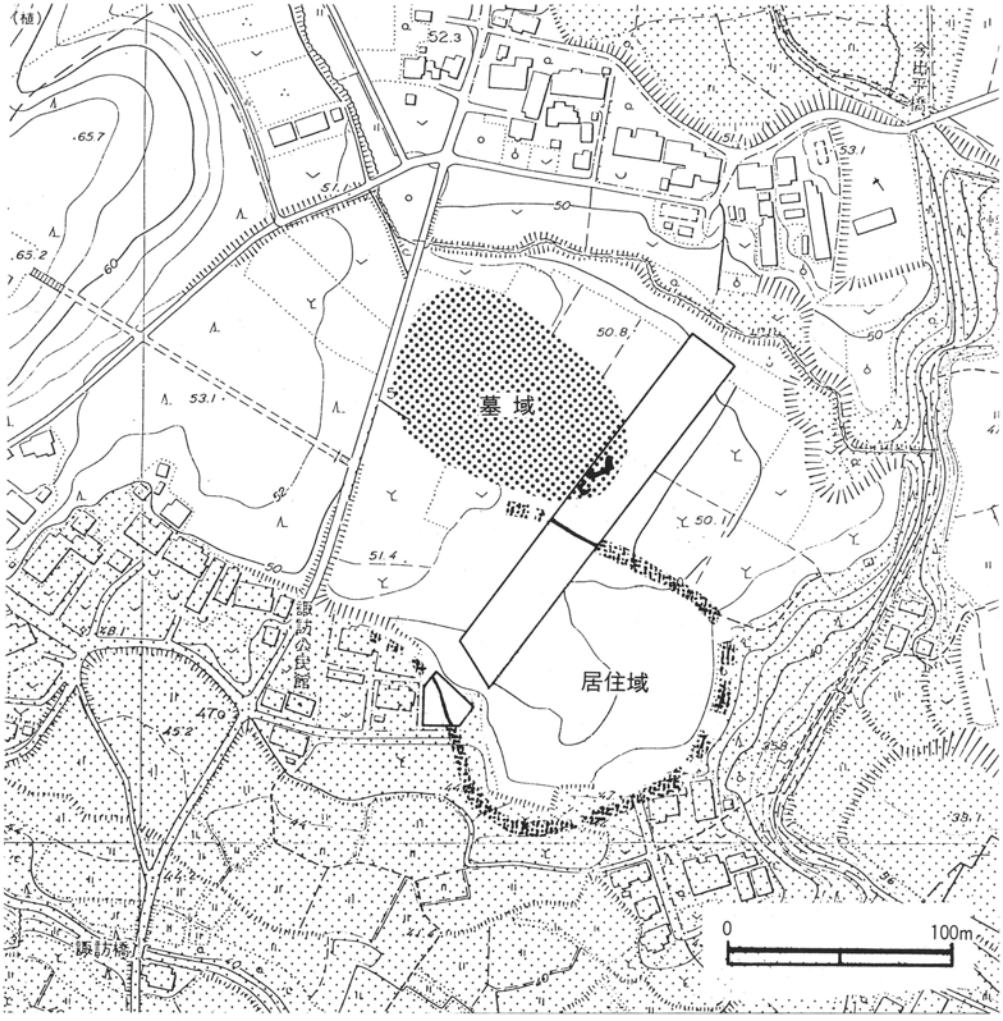
弥生時代後期竪穴住居遺物出土状況



B区　ＳＤ04　遺物出土状況（西より）



Ｘ区　ＳＤ01（東より）



第２図　諏訪遺跡、弥生時代集落概念図　約1/3333



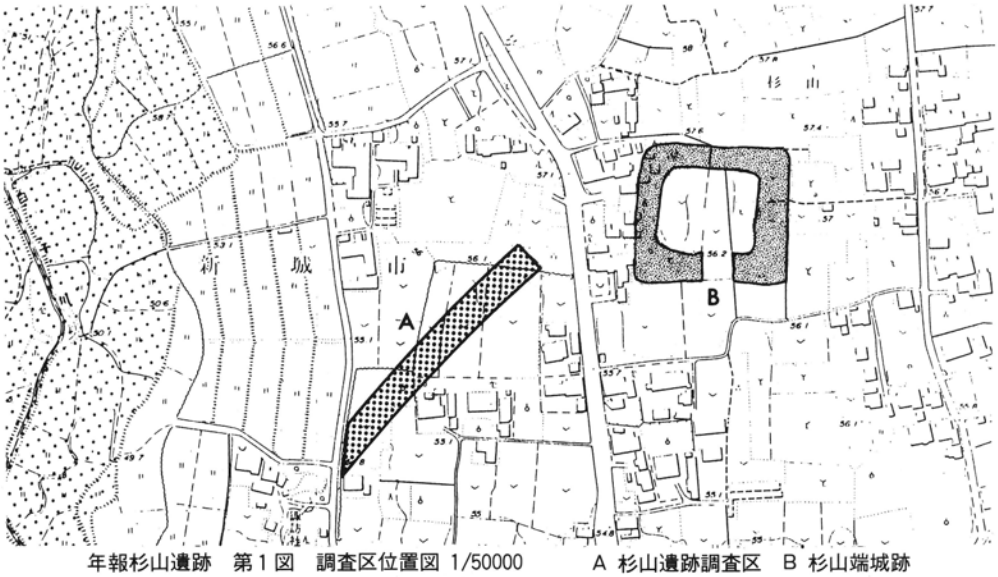
X・B・C区　全　景(南より)

第3図　諏訪遺跡遺構配置図 1/1000

杉　山　遺　跡

調査の経過：　杉山遺跡は、新城市杉山字杉山地内に所在し、豊川中流域右岸に展開する河岸段丘の中位段丘上に位置する。標高は約56ｍを測る。国道151号線バイパスの建設工事に伴う事前調査として、昭和61年度はＡ・Ｂの２調査区2300㎡を調査し、今年度はＢ区の西側の隣接部1000㎡の調査を実施した。（第２図）

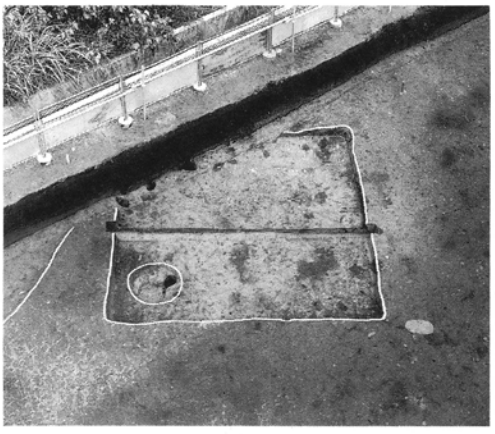
遺構：　出土遺物・遺構は、Ｏ期：縄文時代　Ⅰ期：奈良時代　Ⅱ期：室町時代（15・16世紀）　Ⅲ期：江戸時代　Ⅳ期：19世紀代（幕末～明治期）の５時期に大別される。Ｏ期：遺構は未検出　Ⅰ期：竪穴住居１棟を検出する。（ＳＢ01）　柱穴は未検出で無柱穴と考えられ、貯蔵穴と思われる土坑が南西隅にある。竈は発掘区外の北辺にある可能性が高い。同時期の遺構が認められないため単独か、あるいは、集落の外縁部に位置する住居と推定される。Ⅱ期：調査区中央部に一連の溝が検出された。61年度の調査において、杉山端城との地割あるいは時期の関連から、当時の「屋敷地」を区画したと推測される溝である。現地表面の畑地の角に対応して方向転換し、現在の土地区画とも比較的一致している。Ⅳ期：調査区南半に５基の方形土坑と、中央部の小土坑群が検出された。方形土坑は、長辺が約0.5～１ｍ、深さは約0.3～0.7ｍ程度である。Ⅴ期：調査区南半のほぼ東西南北方向に交差する一連の溝、および、２棟の掘立柱建物がこの時期に属す。溝は３時期に細別されるが、大きな時期差はなく、現地表面の土地区画と部分的に一致する。掘立柱建物は溝の廃絶以降の時期で、柱穴は、素掘りと底に礎石を置くものとが混在する。ＳＢ02は、１回



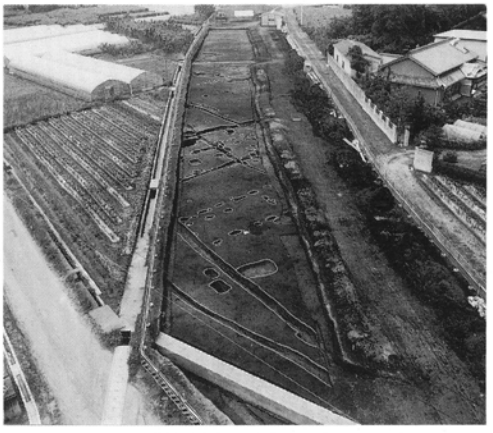
年報杉山遺跡　第１図　調査区位置図 1/50000　　A 杉山遺跡調査区　B 杉山端城跡

建て替えられており、ＳＢ03と同時存在と推定されるが、いずれも規模・構造から住居とは考えない。

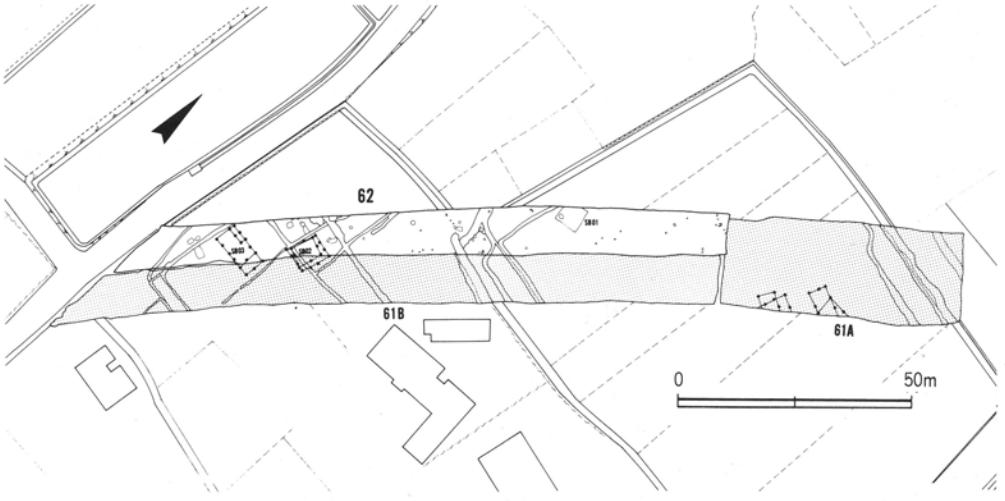
遺物　Ｏ期：時期不明の数点の土器と打製石斧を検出している。Ⅰ期：住居跡内の土坑より、須恵器数個体分が出土した。Ⅲ期：溝より鉄釉陶片が少量出土している。Ⅳ期：各方形土坑より土師皿が出土している。最南の土坑からは土師皿とともに、寛永銭７点が検出されており、これらは形状から墓坑の可能性が高い。また、小土坑内からは寛永銭、鉄器片・陶器類が出土している。Ⅴ期：ＳＢ02南側を中心とする溝より、19世紀中頃と考えられる陶磁器・土師器（鍋・皿）等の日常雑器・雑貨類が出土している。出土状況から廃絶時に一括して投棄したものと考えられる。今回の調査では、杉山端城に関連する新たな遺構は検出されなかったが、８世紀代の集落の存在を示す遺構を確認したことにより、同様の遺構を検出した諏訪遺跡との関連について検討が必要となった。　（酒井俊彦）



ＳＢ01（南より）



調査区全景（南より）



杉山遺跡　第２図　遺構配置図 1/1600

試　掘　調　査

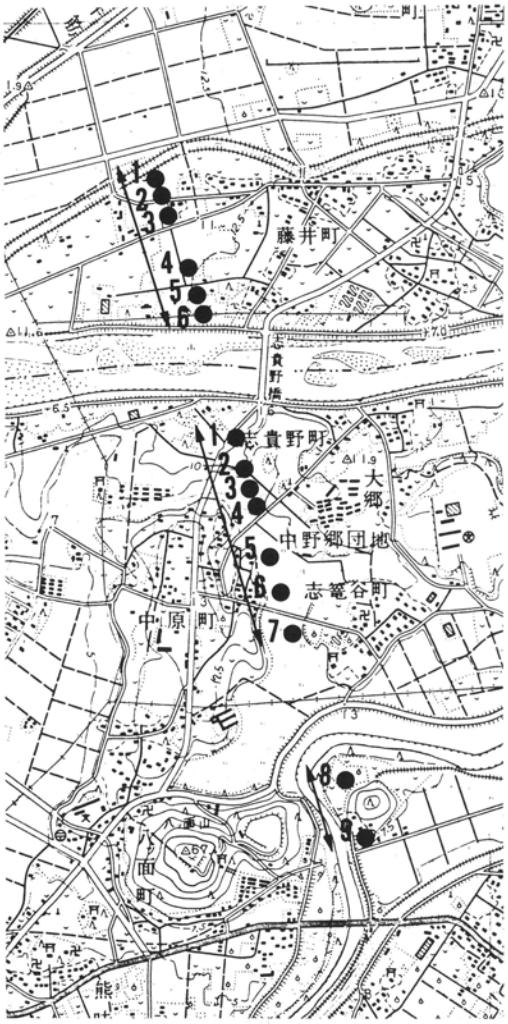
国道23号線バイパス予定用地における、矢作川をはさんで、碧海台地縁辺部周辺に所在する遺跡の、範囲・密度確認を主目的として断面観察及び分層発掘を行った。

西山・藤井遺跡（安城市藤井町）遺構は全く見られず、古墳時代後期を中心とした遺物が若干出土した。

志貴野遺跡（西尾市志貴野町、中原町、志籠谷町）T．１では竪穴住居、掘立柱建物等を、T．２では土坑１基を検出。T．３においては遺構は見られず、再堆積層が観察できた。T．４以降は、当時沼沢地であったことがうかがわれた。従って、遺跡の範囲はT．２付近までと推定できる。

小島遺跡（西尾市小島町）T．８は旧河道内、T．９においても遺構は見られなかった。しかし、後者では、すぐ北の台地より転落したと考えられる、中世を中心とする多量の遺物が出土しており、この台地上に遺跡が存在する可能性を残した。

（菅沼良則）



トレンチ位置図（1:25000）


T．１全景（西から）


T．２全景（南から）

調査研究

朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告

渡　辺　　誠*
田　中　禎　子**

1．はじめに

1986年度に引き続き、1987年度も朝日遺跡の貝層ブロック・サンプリング資料を調査することになった。今年度は地区・層位を相談の上、サンプリング自体は愛知県埋文センターで実施して、名古屋大学考古学研究室に搬入して頂いた。それらは**第1表**に示した38件で、B～Hは搬入日と地区の違いを示している。なお前年度分はAで示すことにした。それらの資料は昨年度の年報に報告したが（渡辺1987）、若干残された資料は本報文中にあわせて報告することにする。

資料の所属時期は前年度と同様に、弥生時代中期前葉の朝日式期より同後葉の高蔵式期までである。これらを時期別に整理すると、次のとおりである。

朝日式期（前葉）　No.B７……１件（ 2.6%）
貝田町式期（中葉）　No.B１～６．C１・２．F１～３．H15～19.……16件（42.1%）
高蔵式期（後葉）　No.D１・２．E１～３．G１・２．H１～14.……21件（55.3%）

前年度は、朝日式期・３件・13.0%、貝田町式期・９件・39.1%、貝田町～高蔵式期・７件・30.4%、高蔵式期・３件・13.0%、であり、中期中葉の貝田町式期に主体があったのに対し、今年度は前年度少なかった同後葉・高蔵式期の資料が主体となった点に特徴がみられる。

水洗選別の結果検出された遺物名は、**第2表**に示すとおりである。そのほとんどは自然遺物であり、人工遺物はごく少量である。自然遺物の主体をなすものは貝類であり、他に少量の動物遺体と植物遺体がある。これらの調査結果は、以下に記すとおりである。

2．人工遺物

土器片：ほとんどのブロックから検出されたが、いずれもごく少量の細片のみである。
石錐：Ｂ６（貝田町式期）より破片１点が検出された。チャート製？（**写真１－１**）。
石鏃：Ｈ５（高蔵式期）より完形の無茎石鏃１点が検出された。下呂石製（同２）。
フレイク：すべて細片であるが、石質はほとんど黒雲母石英安山岩（いわゆる下呂石）である。

＊　名古屋大学文学部助教授
＊＊名古屋大学文学部学生

第1表　ブロック・サンプリング一覧表

ブロック名	サイズ（タテ・ヨコ・厚さ）	地区	層位	構成	時期
B 1	30×30×10	IAS61E・F（Ⅵ）	8	混土貝層	貝田町
B 2	30×30× 5	〃	9	〃	〃
B 3	30×30× 8	〃	11	〃	〃
B 4	30×30× 5	〃	12	混貝土層	〃
B 5	30×30× 5	〃	13	〃	〃
B 6	30×30×10	〃	17	混土貝層	〃
B 7	30×30×10	〃	18	〃	朝日
C 1	30×30× 5	IAS 61G　SD01.03.05セクション	10	破砕貝層	貝田町(古)
C 2	30×30× 5	〃	11	〃	〃
D 1	30×30×10	IAS 61I　河道トレンチ（西）セクション	24	混貝土層	高蔵
D 2	30×30×10	〃	48	〃	〃
E 1	30×30× 5	IAS 61I　河道トレンチ（中央）セクション	44	〃	〃
E 2	30×30×10	〃	45	〃	〃
E 3	30×30×10	〃	48	〃	〃
F 1	30×30× 5	IAS 61J Ⅶ J 13b～cセクションベルト		〃	貝田町
F 2	30×30× 5	〃		〃	〃
F 3	30×30× 5	〃		〃	〃
G 1	30×30× 8	IAS 61H　河道セクション	38	混貝土層	高蔵
G 2	30×30× 8	〃	42	〃	〃
H 1	30×30×10	IAS61KL　ⅦJ20e～Ⅷ2e セクションベルト	10	混土貝層	〃
H 2	30×30×10	〃	11	〃	〃
H 3	30×30× 5	〃	12	〃	〃
H 4	30×30×10	〃	14	〃	〃
H 5	30×30×10	〃	16	〃	〃
H 6	30×30×10	〃	17	混貝土層	〃
H 7	30×30× 4	〃	18	混土貝層	〃
H 8	30×30× 4	〃	19	〃	〃
H 9	30×30× 5	〃	21	〃	〃
H10	30×30× 5	〃	23	混貝土層	〃
H11	30×30× 5	〃	25	〃	〃
H12	30×30×10	〃	26	〃	〃
H13	30×30× 5	〃	30	〃	〃
H14	30×30× 5	〃	72	〃	〃
H15	30×30× 5	〃	31	混貝土層	貝田町
H16	30×30× 5	〃	38	〃	〃
H17	30×30× 3	〃	32	混土貝層	〃
H18	30×30× 8	〃	42	混貝土層	
H19	30×30× 5	〃	49	〃	〃

第２表　ブロック・サンプリング別遺物名一覧表

種類	人工遺物							自然遺物																	
ブロック名	土器片	石錐	石鏃	フレイク	骨製ヤス	加工痕のある獣骨	貝輪	貝類	真珠	微小貝	フジツボ類	カニ類	ウニ類	魚骨	魚鱗	カエル類	ヘビ類	鳥・獣骨	炭化米	豆類	ヒョウタン類	ウリ類	オニグルミ	不明堅果類	微細種子
A 1	○							○		○				○		○		○	○						○
A 2	○							○		○	○			○			○		○						○
A 3	○							○		○				○	○		○		○						○
A 4	○							○		○				○	○			○	○						○
A 5	○							○		○		○	○	○	○			○	○						○
A 6	○							○		○	○			○	○				○						○
A 7	○							○		○				○				○	○						○
A 8	○							○		○	○	○	○	○	○				○						○
A 9	○							○		○			○	○	○	○		○	○						○
A10	○							○		○			○	○	○			○	○						○
A11	○			○		○		○			○		○	○	○		○	○	○						○
A12	○							○		○	○		○	○	○			○	○						○
A13	○							○		○			○	○	○	○			○	○					○
A14	○							○		○	○		○	○	○	○			○						○
A15	○			○				○		○	○		○	○	○				○						○
A16	○							○		○				○	○			○	○						○
A17	○							○			○			○	○				○						○
A18	○							○		○	○			○	○			○	○						○
A19	○			○				○		○	○			○	○			○	○		○	○			○
A20	○							○			○			○				○	○			○	○		○
A21	○							○		○	○		○	○	○				○			○			○
A22	○			○				○		○	○		○	○	○				○		○	○			○
B 1	○			○				○		○				○	○		○		○						○
B 2	○							○		○				○					○						○
B 3	○				○			○		○			○	○	○				○						○
B 4	○							○		○			○	○	○			○	○						○
B 5	○							○		○				○	○		○		○						○
B 6	○	○		○				○		○	○		○	○	○		○	○	○	○					○
B 7	○			○				○		○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○			○
C 1	○							○			○			○	○		○		○		○	○			○
C 2	○							○			○			○	○				○		○	○			○
D 1	○			○				○		○	○		○	○	○				○		○	○	○		○
D 2	○			○				○		○	○		○	○	○		○		○	○		○	○		○
E 1								○						○											○

種類	人工遺物							自然遺物																			
ブロック名	土器片	石錐	石鏃	フレイク	骨製ヤス	加工痕のある獣骨	貝輪	貝類	真珠	微小貝	フジツボ類	カニ類	ウニ類	魚骨	魚鱗	カエル類	ヘビ類	鳥・獣骨	炭化米	豆類	ヒョウタン類	ウリ類	オニグルミ	不明堅果類	微細種子
E 2				○				○			○	○		○	○						○	○			○
E 3								○			○				○				○		○	○			○
F 1	○							○			○			○	○				○						○
F 2	○			○				○		○	○			○	○				○						○
F 3	○							○		○				○	○	○		○	○						○
G 1	○			○				○		○	○		○	○	○		○	○	○		○	○	○		○
G 2	○			○				○		○	○			○	○				○			○			○
H 1	○							○		○	○			○	○		○	○	○				○		○
H 2	○			○				○		○				○	○	○		○	○						○
H 3	○			○				○	○	○	○		○	○	○			○	○						○
H 4	○			○				○		○	○			○	○			○	○						○
H 5	○		○			○		○		○			○	○	○		○	○	○						○
H 6	○			○				○		○	○			○	○	○	○	○	○						○
H 7	○			○				○		○	○		○	○	○	○	○	○	○						○
H 8	○							○		○	○		○	○	○				○						○
H 9	○							○		○	○		○	○	○		○	○	○						○
H10	○			○				○		○	○			○	○	○		○	○					○	○
H11	○							○		○	○			○	○	○	○		○		○	○			○
H12	○			○				○		○				○	○	○		○	○						○
H13	○			○				○		○	○			○	○	○		○	○						○
H14	○							○		○	○			○	○			○	○						○
H15	○			○			○	○		○				○	○			○	○						○
H16	○			○				○		○				○	○			○	○						○
H17	○							○		○	○			○	○			○	○						○
H18	○			○	○			○		○	○			○	○		○	○	○						○
H19	○			○				○			○			○	○			○							○
件数	57	1	1	25	2	2	1	60	1	50	39	3	23	59	54	12	17	34	57	4	9	14	2	2	60

骨製ヤス：細片２点が検出された。第１例はＢ３（同３）、第２例はH18（同４）からであり、ともに貝田町式期に属す。

加工痕のある獣骨：刃物による切截痕のみられる２点が検出された。第１例はA11（貝田町式期）からで、シカの右中手骨近位端（同５）、第２例はＨ５（高蔵式期）からで不明

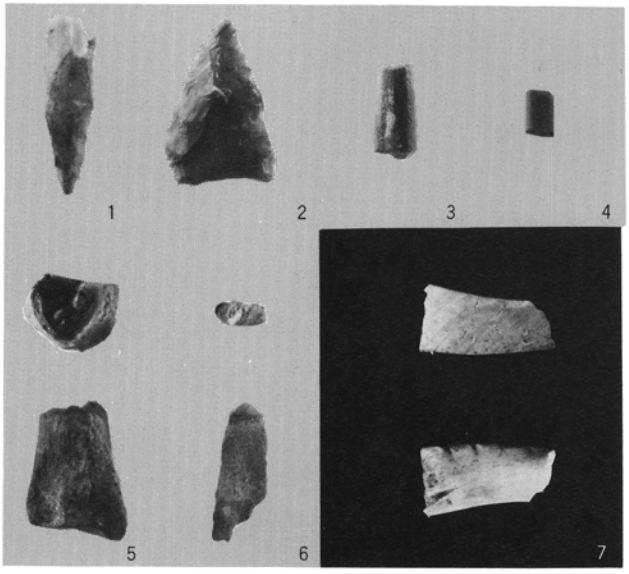


写真1　人工遺物(実大)
1：石錐、2：石鏃、3・4：骨製ヤス、
5・6：加工痕のある獣骨、7：貝輪.

管状骨片（同6）である。これらは本遺跡に多い骨製ヤスの製作に当って生じたものである。

貝輪：H15（貝田町式期）より破片1点が検出された。ベンケイガイ製（同7）。ベンケイガイ製腕輪はきわめて縄文時代的であるばかりでなく、この貝自体が本例以外には出土しておらず、下呂石同様交易によってもたらされたことを示していて興味深い。

3．貝の種類と構成

前年度および今年度において検出された貝類は、43種である（**第3表**、**写真2**）。前年度資料では24種であり若干の増加（○印）がみられるが、逆に前年度に検出されていながら、今年度には検出されていない種（●印）が7種ある。これらのいずれかの年度にのみ検出された種は、G1のチリメンカワニナを除き、すべて5％以下の少量にすぎない。

これらの大部分は食用に供せられたものとみられるが、なかには幼貝も含まれていて、食用価値の乏しいものもある。なお微小貝については次項において記すこととする。

また、ベンケイガイが貝輪として1点検出されたにすぎないことは、上に記したとおりである。

今年度検出の34種の各ブロックにおける構成比は、**第4表**にしめすとおりである。

第3表　貝類種名一覧表

A．腹足綱　GASTROPODA

・1．ツタノハガイ科ヨメガカサ	*Cellana toreuma* Reeve
◦2．ユキノカサ科ヒメコザラ	*Patelloida (Asteracmea) pygmaea* Dunker
3．ニシキウズガイ科キサゴ	*Umbonium (Suchium) costatum* Kiener
・4．リュウテン科ササエ	*Turbo (Batillus) cornutus* Solander
◦5．リュウテン科サンショウスガイ	*Neocollonia piluda* Kiener
・6．アマオブネ科アマオブネ	*Nerita (Theliostyla) albicilla* Linnaeus
◦7．アマオブネ科アマガイ	*Puperita (Heminerita) japonica* Dunker
8．タニシ科オオタニシ	*Cipangopaludina japoncia* Martens
9．タニシ科マルタニシ	*Cipangopaludina malleata* Reeve
10．タニシ科	Cipangopaludina sp.
11．カワニナ科カワニナ	*Semisulcospira bensoni* Philippi
◦12．カワニナ科チリメンカワニナ	*Semisulcospira reiniana* Brot
13．ウミニナ科ウミニナ	*Batillaria multiformis* Lischke
14．ウミニナ科イボウミニナ	*Batillaria zonalis* Bruguiere
15．ウミニナ科ヘナタリ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata* Bruguiere
16．ウミニナ科フトヘナタリ	*Cerithidea* (S.S)
17．ウミニナ科カワアイ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis* K.Martin
18．ウミニナ科	Potamididae sp.
◦19．タマガイ科ツメタガイ	*Neverita (Glossaulax) didyma* Röding
◦20．アクキガイ科アカニシ	*Rapana thomasiana* Grosse
・21．アクキガイ科イボニシ	*Purpura clavigera* Küster
22．アクキガイ科レイシ	*Thais bronni* Dunker
◦23．エゾバイ科シワホラダマシ	*Pollia mollis* Gould
・24．エゾバイ科オガイ	*Cantharus cecillei* Philippi
25．オリイレヨウバイ科アラムシロ	*Triria (Hinia) festivas* Powys
・26．イトマキボラ科イトマキボラ？	*Pleuroploca trapezium* Linnaeus
◦27．オカミミガイ科オカミミガイ	*Ellobium chinense* Pfeiffer

B．斧足綱　PELECYPODA

◦1．フネガイ科サルボウ	*Anadara (Scapharca) subcrenata* Lischek
◦2．タマキガイ科ベンケイガイ	*Glycymeris (Veletuceta) albolineata* Lischke
・3．イタボガキ科イタボガキ	*Ostea (s.s) denselamellosa* Lischke
4．イタボガキ科マガキ	*Grassostrea gigas* Thunberg
・5．カワシンジュガイ科カワシンジュガイ	*Margaritifera magaritifera* Linnaeus
◦6．イシガイ科イシガイ	*Unio (s.s) douglasiae nipponensis* Martens
7．フナガタガイ科ウネナシトマヤガイ	*Trapezium (Neotrapezium) liratum* Reeve
8．シジミ科ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime
9．マルスダレガイ科ハマグリ	*Meretrix lusoria* Röding
10．マルスダレガイ科カガミガイ	*Dosinia (Phacosoma) japonica* Reeve
11．マルスダレガイ科オキシジミ	*Cyclina sinensis* Gmelin
12．バカガイ科シオフキ	*Mactra veneriformis* Reeve
◦13．リュウキュウマスオ科ムラサキガイ	*Soltellina (s.s) diphos* Linnaeus
◦14．サラガイ科サラガイ	*Peronidia venulosa* Schrenck
◦15．マテガイ科マテガイ	*Solen strictus* Gould
16．エゾオオノガイ科オオノガイ	*Mya (Arenomya) arenaria oonogai* Makiyama

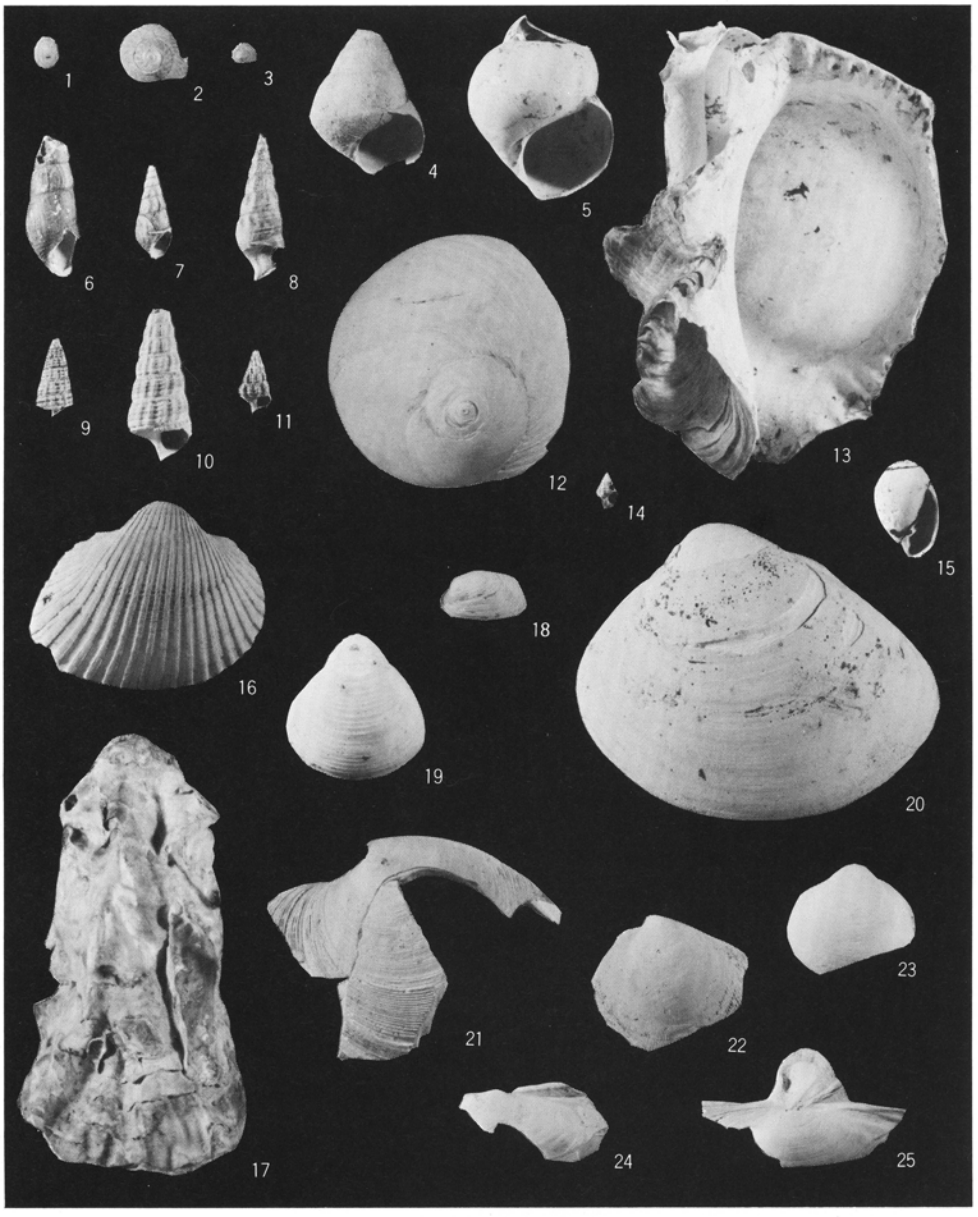


写真２　貝類（縮尺３分の２）

１：ヒメコザラ、２：キサゴ、３：サンショウスガイ、４：オオタニシ、５：マルタニシ、６：カワニナ、７：チリメンカワニナ、８：イボウミニナ、９：ヘナタリ、10：フトヘナタリ、11：カワアイ、12：ツメタガイ、13：アカニシ、14：アラムシロ、15：オカミミガイ、16：サルボウ右殻、17：マガキ左殻、18：ウネナシトマヤガイ左殻、19：ヤマトシジミ左殻、20：ハマグリ左殻、21：カガミガイ左殻、22：オキシジミ左殻、23：シオフキ左殻、24：ムラサキガイ左殻、25：オオノガイ左殻．

第4表　貝類構成比一覧表

種名	ブロック番号 / 構成比	B1 左殻/右殻	B1 最少個体数	B1 %	B2 左殻/右殻	B2 最少個体数	B2 %	B3 左殻/右殻	B3 最少個体数	B3 %	B4 左殻/右殻	B4 最少個体数	B4 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		10	5.21		1	0.93		3	1.91		1	1.41
	カワニナ		0	0		0	0		1	0.64		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		1	1.41
	イボウミニナ		11	5.73		3	2.80		8	5.10		1	1.41
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		0	0		0	0		1	1.41
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		1	0.64		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	0.52		0	0		3	1.91		2	2.82
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		22	11.46		4	3.73		16	10.20		6	8.46
斧足綱	サルボウ	1/0	1	0.52		0	0		0	0		0	0
	マガキ	11/5	11	5.73	13/4	13	12.15	4/2	4	2.55		0	0
	イシガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	26/26	26	13.54	7/8	8	7.48	16/17	17	10.83	3/5	5	7.04
	ハマグリ	117/122	122	63.54	64/68	68	63.55	53/65	65	41.40	49/53	53	74.65
	カガミガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ	2/0	2	1.04		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ	0	0	0		0	0		0	0	0/1	1	1.41
	マテガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	8/6	8	4.17	11/14	14	13.08	42/55	55	35.03	6/16	6	8.45
	小計		170	88.54		103	96.26		141	89.81		65	91.55
	総計		192	100.00		107	99.99		157	100.01		71	100.01

種名	ブロック番号 / 構成比	B5 左殻/右殻	B5 最少個体数	B5 %	B6 左殻/右殻	B6 最少個体数	B6 %	B7 左殻/右殻	B7 最少個体数	B7 %	C1 左殻/右殻	C1 最少個体数	C1 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		1	0.74		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		10	7.41		0	0		0	0
	マルタニシ		1	2.78		1	0.74		0	0		0	0
	タニシ科		0	0		6	4.44		2	3.64		0	0
	カワニナ		0	0		1	0.74		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		6	4.44		0	0		0	0
	ヘナタリ		0	0		0	0		1	1.82		0	0
	フトヘナタリ		1	2.78		4	2.96		0	0		0	0
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	2.78		1	0.74		3	5.45		1	1.00
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		1	0.74		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		3	8.34		31	22.95		6	10.91		1	1.00
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ		0	0	2/1	2	1.48	5/1	5	9.09	98/38	98	98.00
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	9/10	10	27.78	17/10	17	12.59	4/4	4	7.27	1/0	1	1.00
	ハマグリ	20/16	20	55.56	79/83	83	61.48	30/40	40	72.73		0	0
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	2/3	3	8.33	2/1	2	1.48		0	0		0	0
	小計		33	91.67		104	77.03		49	89.09		99	99.00
	総計		36	100.01		135	99.98		55	100.00		100	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	C2			D1			D2			E1		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		1	0.41		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		0	0		2	0.49		1	0.40		0	0
	カワニナ		0	0		0	0		1	0.40		0	0
	チリメンカワニナ		1	5.00		7	1.72		11	4.44		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		3	0.74		3	1.21		0	0
	ヘナタリ		0	0		1	0.25		2	0.81		0	0
	フトヘナタリ		0	0		1	0.25		0	0		0	0
	カワアイ		0	0		1	0.25		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	5.00		8	1.97		4	1.61		0	0
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		2	10.00		23	5.67		23	9.27		0	0
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	18/8	18	90.00	333/83	333	82.02	208/98	208	83.87	87/37	87	100.00
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0	5/6	6	1.48		0	0		0	0
	ヤマトシジミ		0	0	25/34	34	8.37	2/4	4	1.61		0	0
	ハマグリ		0	0	9/5	9	2.22	11/10	11	4.44		0	0
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ		0	0	0/1	1	0.25	1/2	2	0.81		0	0
	小計		18	90.00		383	94.34		225	90.73		87	100.00
	総計		20	100.00		406	100.01		248	100.00		87	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	E2			E3			F1			F2		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		0	0		0	0		9	5.63		20	20.62
	カワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		0	0		2	1.25		0	0
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		0	0		1	9.63		0	0
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	0.43		1	0.62		0	0		1	1.03
	レイシ		0	0		0	0		1	0.63		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		1	0.43		1	0.62		13	8.14		21	21.65
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		1	1.03
	マガキ	229/120	229	99.57	165/89	165	99.40	95/57	95	59.38	26/10	26	26.80
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0	0/1	1	0.63		0	0
	ヤマトシジミ		0	0		0	0	2/1	2	1.25		2	2.06
	ハマグリ		0	0		0	0	22/24	24	15.00	34/20	34	35.05
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ		0	0		0	0	14/25	25	15.63	5/13	13	13.40
	小計		229	99.57		165	99.40		147	91.89		76	78.34
	総計		230	100.00		166	100.02		160	100.03		97	99.99

種名	ブロック番号 / 構成比	F3 左殻/右殻	F3 最少個体数	F3 %	G1 左殻/右殻	G1 最少個体数	G1 %	G2 左殻/右殻	G2 最少個体数	G2 %	H1 左殻/右殻	H1 最少個体数	H1 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		1	0.43
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		1	0.48		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		16	10.19		7	3.37		0	0		14	5.98
	カワニナ		0	0		9	4.33		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		47	22.60		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		2	1.27		4	1.92		0	0		3	1.28
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		2	0.96		0	0		4	1.71
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		3	1.91		2	0.96		5	6.49		3	1.28
	レイシ		0	0		0	0		0	0		1	0.43
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		1	0.48		0	0		1	0.43
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		21	13.37		73	53.10		5	6.49		27	11.54
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	45/36	45	28.66	61/23	61	29.33	69/43	69	89.61	61/14	61	26.07
	イシガイ		0	0		0	0		0	0	0/1	1	0.43
	ウネナシトマヤガイ	0/1	1	0.64	8/4	8	3.85		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	9/12	12	7.64	18/26	26	12.50	1/3	3	3.90	19/18	19	8.12
	ハマグリ	49/51	51	32.48	38/36	38	18.27		0	0	101/117	117	50.00
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0	2/1	2	0.85
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	8/27	27	17.20	0/2	2	0.96		0	0	5/7	7	3.00
	小計		136	86.62		135	64.91		72	93.51		207	88.47
	総計		157	99.99		208	100.01		77	100.00		234	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	H2 左殻/右殻	H2 最少個体数	H2 %	H3 左殻/右殻	H3 最少個体数	H3 %	H4 左殻/右殻	H4 最少個体数	H4 %	H5 左殻/右殻	H5 最少個体数	H5 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		1	0.58
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		1	0.56		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		12	6.78		28	13.33		2	1.28		7	4.09
	カワニナ		0	0		1	0.48		4	2.56		1	0.58
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		2	1.17
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		1	0.56		3	1.43		1	0.64		5	2.92
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		1	0.58
	フトヘナタリ		5	2.82		2	2.38		0	0		12	7.02
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		4	2.26		2	0.95		1	0.64		2	1.17
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		23	12.98		39	18.57		8	5.12		31	18.11
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	25/12	25	14.12	16/8	16	7.62	4/14	14	8.97	32/30	32	18.71
	イシガイ	0/1	1	0.56		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	2/2	2	1.13	3/1	3	1.43		0	0	1/0	1	0.58
	ヤマトシジミ	17/12	17	9.60	30/23	30	14.29	4/1	4	2.56	17/21	21	12.28
	ハマグリ	102/78	102	57.63	89/101	101	48.10	101/125	125	80.13	66/77	77	45.03
	カガミガイ	1/0	1	0.56	1/1	1	0.48		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ	1/0	1	0.56	1/1	1	0.48	3/1	3	1.92	1/0	1	0.58
	ムラサキガイ		0	0	1/0	1	0.48		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0	1/0	1	0.48		0	0		0	0
	オオノガイ	2/5	5	2.82	14/17	17	8.10	2/1	2	1.28	6/8	8	4.68
	小計		154	86.98		171	81.46		148	94.86		140	81.86
	総計		177	99.96		210	100.03		156	99.98		171	99.97

種名	ブロック番号 / 構成比	H6 左殻/右殻	H6 最少個体数	H6 %	H7 左殻/右殻	H7 最少個体数	H7 %	H8 左殻/右殻	H8 最少個体数	H8 %	H9 左殻/右殻	H9 最少個体数	H9 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		2	1.18
	サンショウスガイ		0	0		1	0.58		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		15	9.32		36	20.81		7	4.79		17	10.06
	カワニナ		1	0.62		0	0		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		6	3.73		8	4.62		1	0.68		0	0
	ヘナタリ		0	0		1	0.58		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		8	4.62		1	0.68		6	3.55
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		3	1.86		2	1.16		0	0		2	1.18
	レイシ		0	0		0	0		1	0.68		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		1	0.59
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		26	16.15		52	30.06		9	6.15		28	16.56
斧足綱	サルボウ	0/1	1	0.62		0	0		0	0		0	0
	マガキ	35/12	35	21.74	21/12	21	12.14	23/20	23	15.75	32/14	32	18.93
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	1/0	1	0.62		0	0	2/0	2	1.37	0/2	2	1.18
	ヤマトシジミ	9/7	9	5.59	22/17	22	12.72	11/9	11	7.53	15/9	15	8.88
	ハマグリ	80/47	80	49.69	42/60	60	34.68	91/83	91	62.33	72/75	75	44.38
	カガミガイ	1/0	1	0.69		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ	1/0	1	0.62		0	0		0	0	0/1	1	0.59
	シオフキ		0	0	3/2	3	1.73	1/3	3	2.05	4/2	4	2.37
	ムラサキガイ		0	0	3/1	3	1.73		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0	0/1	0	0.58		0	0		0	0
	オオノガイ	4/7	7	4.35	11/5	11	6.36	6/7	7	4.79	12/12	12	7.10
	小計		135	83.85		121	69.94		137	93.82		141	83.43
	総計		161	100.00		173	100.00		146	99.97		169	99.99

種名	ブロック番号 / 構成比	H10 左殻/右殻	H10 最少個体数	H10 %	H11 左殻/右殻	H11 最少個体数	H11 %	H12 左殻/右殻	H12 最少個体数	H12 %	H13 左殻/右殻	H13 最少個体数	H13 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		6	5.56		5	4.67		12	10.62		7	7.95
	カワニナ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		2	1.87		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		1	0.93		3	2.65		1	1.14
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		3	2.78		1	0.93		2	1.77		0	0
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	アカニシ		1	0.93		1	0.93		0	0		1	1.14
	レイシ		0	0		0	0		0	0		1	1.14
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	小計		10	9.27		14	13.05		17	15.04		10	11.37
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	21/9	21	19.44	17/14	17	15.89	15/6	15	13.27	21/8	21	23.86
	イシガイ		0	0	0/1	1	0.93		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	3/5	5	4.63	3/10	10	9.35	6/8	8	7.08	7/9	9	10.23
	ハマグリ	68/64	68	62.96	57/54	57	53.27	69/57	69	61.06	43/43	43	48.46
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0	0/1	1	0.93		0	0		0	0
	シオフキ	1/0	1	0.93	0/2	2	1.87		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0	2/1	2	1.87		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	3/2	3	2.78	3/3	3	2.80	4/3	4	3.54	5/1	5	5.68
	小計		98	90.74		93	86.91		96	84.95		78	88.63
	総計		108	100.01		107	99.96		113	99.99		88	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	H14			H15			H16			H17		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		1	1.11		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		2	2.22		3	4.84		10	12.82		9	10.23
	カワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		1	1.11		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		5	5.56		5	8.06		5	6.41		7	7.95
	ヘナタリ		1	1.11		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		1	1.11		0	0		1	1.28		1	1.14
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		3	3.33		2	3.23		1	1.28		3	3.41
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		1	1.14
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		14	15.55		10	16.13		17	21.79		21	23.87
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	22/4	22	24.44	8/3	8	12.90	9/3	9	11.54	8/3	8	9.09
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	0/1	1	1.11		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	12/9	12	13.33	5/14	14	22.58	10/8	10	12.82	11/15	15	17.05
	ハマグリ	34/33	34	37.78	28/23	28	45.16	31/35	35	44.87	40/23	40	45.45
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0	0/1	1	1.61		0	0		0	0
	シオフキ	1/0	1	1.11		0	0	0/1	1	1.28		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	6/2	6	6.67	1/0	1	1.61	6/16	6	7.69	4/4	4	4.55
	小計		76	84.44		52	83.86		61	78.20		67	76.14
	総計		90	99.99		62	99.99		78	99.99		88	100.01

種名	ブロック番号 / 構成比	H18			H19		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0
	タニシ科		3	3.23		1	1.45
	カワニナ		1	1.08		1	1.45
	チリメンカワニナ		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0
	イボウミニナ		4	4.30		4	5.80
	ヘナタリ		0	0		0	0
	フトヘナタリ		2	2.15		2	2.90
	カワアイ		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0
	アカニシ		2	2.15		2	2.90
	レイシ		0	0		0	0
	ツワホラダマシ		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0
	小計		12	12.91		10	14.50
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0
	マガキ	32/21	32	34.41	23/14	23	33.33
	イシガイ		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	14/15	15	16.13	13/10	13	18.84
	ハマグリ	30/14	30	32.26	17/7	17	24.64
	カガミガイ		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0	0/1	1	1.45
	シオフキ		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0
	オオノガイ	3/4	4	4.30	5/1	5	7.25
	小計		81	87.10		59	85.51
	総計		93	100.01		69	100.01

第5表　貝層類型と時期の関係

時期　類型	A	B	C	D	E	F
朝日式期			B7			
貝田町式期	C1	F1	B4	A9.A16.A20. B1.B2.B5. B6	A8.A18	A7.A17.B3. F2.F3.H15. H16.H17.H18. H19
貝田町～ 高蔵式期			A4	A5.A12.A14		A6.A13
高蔵式期	D1.D2.E1. E2.E3.G2		H4	A1.A2.A3. H1.H2.H3. H5.H6.H8. H10.H11.H12		G1.H7.H9. H13.H14

34種のうち腹足綱（巻貝）は21種みられ62%を占めるが、個体数は少なく、G1の53%、H7の30%を除き、他はすべて全体の24%以下である。これに対し斧足綱（二枚貝）は13種で38%にすぎないが、個体数においてはG1・H7を除き、圧倒的に腹足綱を上回っている。

そのなかでももっとも多いのはハマグリであり、発育のよい大型品が多い。これに次いで多いのはマガキ・ヤマトシジミ・および腹足綱のタニシ類である。

このタニシ類（オオタニシ・マルタニシ）と、カワニナ・チリメンカワニナ・カワシンジュガイ・イシガイの6種が淡水産で、ヤマトシジミは汽水産であるが、他はすべて鹹水産である。そしてこれら鹹水産貝類のうちでも主体をなすハマグリ・マガキは、典型的な内湾の砂質～砂泥質底に棲む種類であり、他の多くの種類も同様である。そのなかにあってごく少量ではあるが、ヨメガカサ・ヒメコザラ・サザエ・サンショウスガイ・アマオブネ・アマガイ・イボニシ・レイシ・シワホラダマシ・イトマキボラ？などの岩礁性貝類も含まれることは、後に記す少量のウニ類とともに注目されることである。

これらの貝類の構成比からみると、貝層は次の6群に大別される。

A．ほぼマガキのみの貝層

B．マガキ主体の貝層

C．ほぼハマグリのみの貝層

D．ハマグリ主体の貝層

E．ヤマトシジミ主体で、ハマグリの比重も高い貝層

F．単独優先種をもたない貝層

Fで多いのはマガキ・ハマグリ・ヤマトシジミなどであるが、稀にタニシ類・オオノガイの多い場合もある。

そしてこれらと時期の関係を整理すると、**第5表**のとおりである。なお個体の絶対数の少ないA10・A11・A15・C2については、省いて検討することにする。

第6表　微小貝種名一覧表

A．陸産	
1．ケシガイ科ニホンケシガイ	*Carychium nipponense* Pilsbry & Hirase
2．キバサナギガイ科スナガイ	*Gastrocopla (Sinalbinula) armigerella* Reinhardet
3．キセルガイ科	*Clausiliidae sp.*
4．オカチョウジガイ科オカチョウジガイ	*Allopeas clavulinum kyotoensis* Pilsbry & Hirase
5．オカチョウジガイ科ホソオカチョウジガイ？	*Allopeas pyrgula* Schmacker & Boettger
6．コハクガイ科ヒメコハクガイ	*Hawaiia minuscula* Reinhardet
7．ベッコウマイマイ科ヒメベッコウガイ	*Discoconulus sinapidium* Reinhardet
8．ベッコウマイマイ科	Helicarionidae sp.
B．淡水産	
1．ヒラマキガイ科ヒラマキミズマイマイ	*Cyraulus heimantium* Westerlund
2．ヒラマキガイ科ヒラマキガイモドキ	*Polypylis hemisphaerula* Benson
C．汽水産	
1．ミズゴマツボ科ミズゴマツボ	*Stenothyra glabra* A. Adams
2．カワサンショウガイ科ムシヤドリカワサンショウガイ？	*Angustassiminea parasitologica* Kuroda

これによれば、朝日式期のマガキ主体の貝層から始まり、貝田町式期にはハマグリ主体の貝層が出現し、同時にヤマトシジミ主体の貝層や、単独優先種をもたない貝層が出現する。これらをさらに巨視的にみれば、マガキに加えてハマグリおよびヤマトシジミ・タニシ類など汽水・淡水産貝類の増加傾向があるとみなされる。そしてこれらの諸類型が並存した状態で、本遺跡の貝層は消滅している。ただし朝日式期の貝層資料が他時期に比べて少ないことも、留意しておくべきであろう。

4．微小貝と貝層の堆積環境

前項に記した貝類の他に、微小貝も多数検出されている。前者は主として食料資源、後者は主として堆積環境の研究上重要である。なおこれらの微小貝について前年度には報告していないので、本年度分とあわせて報告することにする。

検出された微小貝は12種である（**第6～8表、写真3**）。淡水・汽水産微小貝も含まれているが、大部分は陸産微小貝である。堆積環境の研究上特に検討を加えたいのは、この陸産微小貝である。

まず第8表をみてみると、A・B・H群に対し、C～G群ではほとんど陸産微小貝は検出されていない。第1表に記されているように、これらはほとんど河道における水中堆積層中資料であり、発掘現場での観察の正しさを確認することができた。そして第7表においてもA15～22では検出されていない。このうちA20～22についても当初より水中堆積と

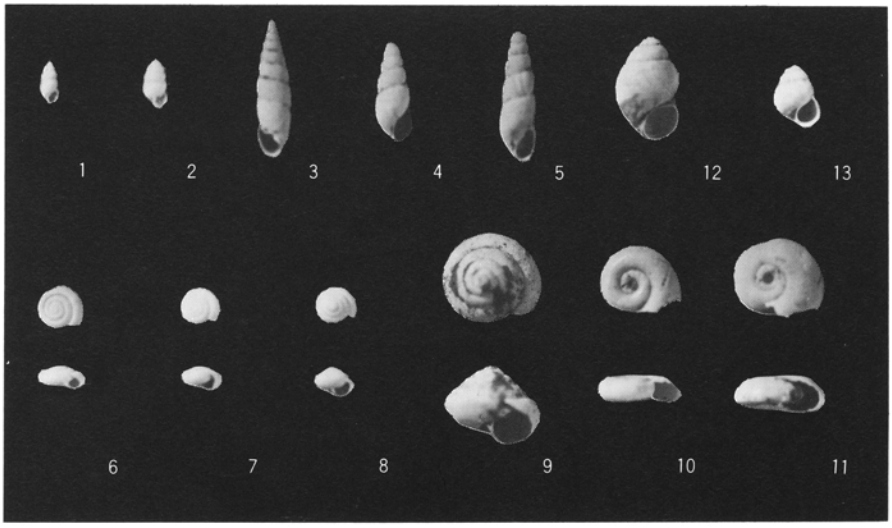


写真３　微小貝（３のみ2.5倍、他は５倍）
１：ニホンケシガイ、２：スナガイ、３：キセルガイ科、４：オカチョウジガイ、５：ホソオカチョウジガイ？、６：ヒメコハクガイ、７：ヒメベッコウガイ、８・９：ベッコウマイマイ科、10：ヒラマキミズマイマイ、11：ヒラマキガイモドキ、12：ミズゴマツボ、13：ムシヤドリカワザンショウガイ．

みられていたのであり、陸産微小貝が堆積環境の研究上きわめて有効であることが分かる。

またその含有率にも差があり、さらに詳細な検討も可能である（**第９表**）。ただしこれは総合的に行われるべきであり、ここでは可能性を指摘するに留めたい。

陸産微小貝８種のうち主体を占めるのは、オカチョウジガイとヒメコハクガイである。前者は人家庭園の地表、後者は平地の准木の根元や落葉下に棲む種類であり、貝層形成期の環境復元に示唆する点が多いのである。

５．魚類

魚類についても、前年度分を本年度分とあわせて報告することとする。

検出された魚類は16種である（**第10･11表、写真４**）。それらはニシン科（多くはマイワシであろう、上野輝弥先生御教示）などの海産魚類の他に、ウナギ・ドジョウ科・フナ属などの淡水産魚類も、かなり含まれていることに大きな特徴がみとめられる。

水田の拡大に伴って哺乳類の生息域が後退し、縄文時代のようにはシカやイノシシなどによる動物質蛋白の確保が難しくなり、淡水産魚類の比重が高まってきたのであろう。北集落環濠中に検出されたヤナは、このような新しい農村型漁業を典型的に示すものである。

第７表　ブロック別微小貝構成比一覧表（ただしA11・17・20、C１・２、D２、E１～３、F１、H19では検出なし）

種名			ブロック番号 / 構成比	A１		A２		A３		A４		A５	
				個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ		4	44.44	1	20.00	11	27.50	0	0	0	0
		スナガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ		0	0	0	0	1	2.50	0	0	14	25.00
		ホソオカチョウジガイ？		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ		5	55.56	4	80.00	20	50.00	18	90.00	42	75.00
		ヒメベッコウガイ		0	0	0	0	8	20.00	2	10.00	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計		9	100.00	5	100.00	40	100.00	20	100.00	56	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ		0		0		1		0		0	
		ヒラマキガイモドキ		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		1		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ		0		0		0		0		0	
		ムシヤドリカワザンショウガイ？		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		0		0		0	
	不　明			0		0		1		0		2	
	総　計			9		5		42		20		58	
斧足綱	不　明			0		0		0		0		0	

種名			ブロック番号 / 構成比	A６		A７		A８		A９		A10	
				個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ		0	0	0	0	0	0	1	2.08	0	0
		スナガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ		1	33.33	2	50.00	0	0	14	29.17	0	0
		ホリオカチョウジガイ？		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ		2	66.67	1	25.00	1	100.00	30	62.50	0	0
		ヒメベッコウガイ		0	0	1	25.00	0	0	2	4.17	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明		0	0	0	0	0	0	1	2.08	0	0
		小　計		3	100.00	4	100.00	1	100.00	48	100.00	0	0
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ		0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ		0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？		0		0		0		1		0	
		小　計		0		0		0		1		0	
	不　明			7		2		0		7		5	
	総　計			10		6		1		56		5	
斧足綱	不　明			0		0		0		0		0	

種名			ブロック番号 / 構成比	A12		A13		A14		A15		A16	
				個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ		25	8.50	0	0	4	13.79	0	0	0	0
		スナガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ		11	3.74	3	23.08	2	6.90	0	0	1	100.00
		ホリオカチョウジガイ？		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ		237	80.61	9	69.23	21	72.41	3	100.00	0	0
		ヒメベッコウガイ		21	7.14	1	7.69	2	6.90	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計		294	99.99	13	100.00	29	100.00	3	100.00	1	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ		1		0		1		0		0	
		ヒラマキガイモドキ		0		0		0		0		0	
		小　計		1		0		1		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ		0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		0		0		0	
	不　明			3		7		4		1		2	
	総　計			298		20		34		4		3	
斧足綱	不　明			0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	A18		A19		A21		A22		B 1	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6.25
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	0	0	0	0	0	0	2	66.67	8	25.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	0	0	0	0	0	0	1	33.33	16	50.00
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3.13
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	5	15.63
		小　計	0	0	0	0	0	0	3	100.00	32	100.01
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		2		1		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		2		1		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
		不　明	0		9		1		35		5	
		総　計	3		9		3		39		37	
斧足綱		不　明	3		0		0		ℓ5 r3		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	B 2		B 3		B 4		B 5		B 6	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	1	6.67	1	3.70	2	6.45	0	0	0	0
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	1	3.22	0	0	1	25.00
		オカチョウジガイ	5	33.33	9	33.33	6	19.35	3	42.86	1	25.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	7	46.67	17	62.96	15	48.39	4	57.14	2	50.00
		ヒメベッコウガイ	2	13.33	0	0	5	16.13	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	2	6.45	0	0	0	0
		小　計	15	100.00	27	99.99	31	99.99	7	100.00	4	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
		不　明	0		1		0		3		1	
		総　計	15		28		31		10		5	
斧足綱		不　明	0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	B 7		D 1		D 2		F 2		F 3	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	4	36.36
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	0	0	1	100.00	0	0	0	0	0	0
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	1	100.00	0	0	0	0	1	100.00	7	63.64
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	1	100.00	1	100.00	0	0	1	100.00	11	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	1		0		0		0		0	
		小　計	1		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		4		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		7		0		0		0	
		小　計	0		11		0		0		0	
		不　明	2		16		8		1		1	
		総　計	4		28		8		2		12	
斧足綱		不　明	0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	G 1		G 2		H 1		H 2		H 3	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	1	33.33	0	0	0	0	0	0	1	1.03
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	1	1.05	1	1.03
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	1	33.33	0	0	21	35.00	28	29.47	18	18.56
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	1	50.00	2	3.33	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	1	33.33	1	50.00	37	61.67	60	63.16	76	78.35
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	4	4.21	1	1.03
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	2	2.11	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	3	99.99	2	100.00	60	100.00	95	100.00	97	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ヒラマキガイモドキ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
	汽水産	ミズゴマツボ	6	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ムシラドリカワザンショウガイ？	1	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	7	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		不　明	76		0		1		8		2	
		総　計	86		2		61		103		99	
斧足綱		不　明	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−

種名		ブロック番号 / 構成比	H4		H 5		H 6		H 7		H 8	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		スナガイ	0	0	0	0	2	1.31	1	1.14	2	8.00
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	1	1.14	0	0
		オカチョウジガイ	13	23.21	43	44.79	66	43.14	28	31.82	4	16.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	41	73.21	50	52.08	84	54.90	55	62.50	17	68.00
		ヒメベッコウガイ	2	3.57	3	3.13	1	0.65	3	3.41	2	8.00
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	56	99.99	96	100.00	153	100.00	88	100.01	25	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ヒラマキガイモドキ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
	汽水産	ミズゴマツボ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		不　明	3		6		4		3		1	
		総　計	59		102		157		91		26	
斧足綱		不　明	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−

種名		ブロック番号 / 構成比	H 9		H10		H11		H12		H13	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	3	1.22	2	2.56	1	20.00	0	0	2	7.14
		スナガイ	25	10.20	0	0	0	0	1	2.17	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	97	39.59	49	62.82	1	20.00	13	28.26	14	50.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	108	44.08	23	29.49	3	60.00	32	69.57	12	42.86
		ヒメベッコウガイ	8	3.27	4	5.13	0	0	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	4	1.63	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	245	99.99	78	100.00	5	100.00	46	100.00	28	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		1		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		1		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
		不　明	13		1		2		0		0	
		総　計	258		79		8		46		28	
斧足綱		不　明	0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	H14		H15		H16		H17		H18	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	1	25.00	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	4	57.14	1	100.00	1	100.00	1	25.00	29	61.70
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	3	42.86	0	0	0	0	1	25.00	18	38.30
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	1	25.00	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	7	100.00	1	100.00	1	100.00	4	100.00	47	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
	不　明		0		0		1		0		2	
	総　計		7		1		2		4		49	
斧足綱	不　明		0		0		0		0		0	

第８表　地区別微小貝構成比一覧表（ただしＣ・Ｅ群では検出なし）

種名		ブロック番号 / 構成比	A		B		D		F		G	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	46	8.70	6	5.13	0	0	4	33.33	1	20.00
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	2	1.71	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	51	9.64	32	27.35	1	100.00	0	0	1	20.00
		ホソオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20.00
		ヒメコハクガイ	394	74.48	62	52.99	0	0	8	66.67	2	40.00
		ヒメベッコウガイ	37	6.99	8	6.84	0	0	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	1	0.20	7	5.98	0	0	0	0	0	0
		小　計	529	100.01	117	100.00	1	100.00	12	100.00	5	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	6		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		1		0		0		0	
		小　計	6		1		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		4		0		6	
		ムシヤドリカワザンショウガイ？	1		0		7		0		1	
		小　計	1		0		11		0		7	
	不　明		89		12		24		2		76	
	総　計		625		130		36		14		88	
斧足綱	不　明		ℓ5　r3		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	H		総計	
			個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	9	0.80	66	3.67
		スナガイ	34	3.00	34	1.89
		キセルガイ科の一種	1	0.09	3	0.17
		オカチョウジガイ	431	38.07	516	28.73
		ホリオカチョウジガイ？	2	0.18	3	0.17
		ヒメコハクガイ	620	54.77	1086	60.47
		ヒメベッコウガイ	29	2.56	74	4.12
		ベッコウマイマイ科の一種	6	0.53	6	0.33
		不明	0	0	8	0.45
		小　計	1132	100.00	1796	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	1		7	
		ヒラマキガイモドキ	0		1	
		小　計	1		8	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		10	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		9	
		小　計	0		19	
	不　明		47		250	
	総　計		1180		2073	
斧足綱	不　明		0		ℓ5　r3	

第９表　陸産微小貝の含有率（1000㎤当りの個体数）

ブロック番号	体積(㎤)	個体数	含有率	ブロック番号	体積(㎤)	個体数	含有率
A 1	18000	9	0.50	C 2	4500	0	0
A 2	4500	5	1.11	D 1	9000	1	0.11
A 3	4500	40	8.89	D 2	9000	0	0
A 4	18000	20	1.11	E 1	4500	0	0
A 5	9000	56	6.22	E 2	9000	0	0
A 6	4500	3	0.67	E 3	9000	0	0
A 7	4500	4	0.89	F 1	4500	0	0
A 8	3000	1	0.33	F 2	4500	1	0.22
A 9	9000	48	5.33	F 3	4500	11	2.44
A10	4500	0	0	G 1	7200	3	0.42
A11	1800	0	0	G 2	7200	2	0.28
A12	9000	294	32.67	H 1	9000	60	6.67
A13	4500	13	2.89	H 2	9000	95	10.56
A14	4500	29	6.44	H 3	4500	97	21.56
A15	4500	3	0.67	H 4	9000	56	6.22
A16	4500	1	0.22	H 5	9000	96	10.67
A17	2700	0	0	H 6	9000	153	17.00
A18	2700	0	0	H 7	3600	88	24.44
A19	2700	0	0	H 8	3600	25	6.94
A20	7200	0	0	H 9	4500	245	54.44
A21	9000	0	0	H10	4500	78	17.33
A22	9000	3	0.33	H11	4500	5	1.11
B 1	9000	32	3.56	H12	9000	46	5.11
B 2	4500	15	3.33	H13	4500	28	6.22
B 3	7200	27	3.75	H14	4500	7	1.56
B 4	4500	31	6.89	H15	4500	1	0.22
B 5	4500	7	1.56	H16	4500	1	0.22
B 6	9000	4	0.44	H17	2700	4	1.48
B 7	9000	1	0.11	H18	7200	47	6.53
C 1	4500	0	0	H19	4500	0	0

6．その他の動物遺体

真珠：H３（高蔵式期）より１点検出された。直径0.9㎜（写真４－20）。

フジツボ類：各時期のブロックより検出されているが、いずれも細片のみである。

カニ類：A５・８、E２（貝田町～高蔵式期）より爪が数点検出されている。

ウニ類：各時期のブロックより検出されているが、その種名は次の３種と不明種である。

ラッパウニ科アカウニ　*Pseudocentrotus depressus* A.AGASSIZ

オオバフンウニ科バフンウニ　*Hemicentrotus pulcherrimus* A.AGASSIZ

ナガウニ科ムラサキウニ　*Anthocidaris crassispina* A.AGASSIZ

その部位・数量は**第12表**に示すとおりであり、ごく少量である。

第10表　魚類種名一覧表

A．軟骨魚綱　CHONDRICHTHYES

1．サメ目	Pleurotremata sp.

B．硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

1．ニシン科	Clupeidae sp.
2．アユ科アユ	*Plecoglossus altivelis* Temminck et Schllegel
3．ウグイ属	Tribolodon sp.
4．フナ属	Carassius sp.
5．コイ属コイ	*Cyprinus carpio* Linnaeus
6．ドジョウ科	Cobitididae sp.
7．ウナギ科ウナギ	*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel
8．スズキ科スズキ	*Lateolabrax japonicus* Cuvier
9．キス科	Sillaginidae sp.
10．アジ科	Carangidae sp.
11．サバ科	Scombridae sp.
12．タイ科クロダイ	*Acanthopagrus schlegeli* Bleeker
13．ハゼ科	Gobiidae sp.
14．カレイ科	Pleuronnectidae sp.
15．不明	

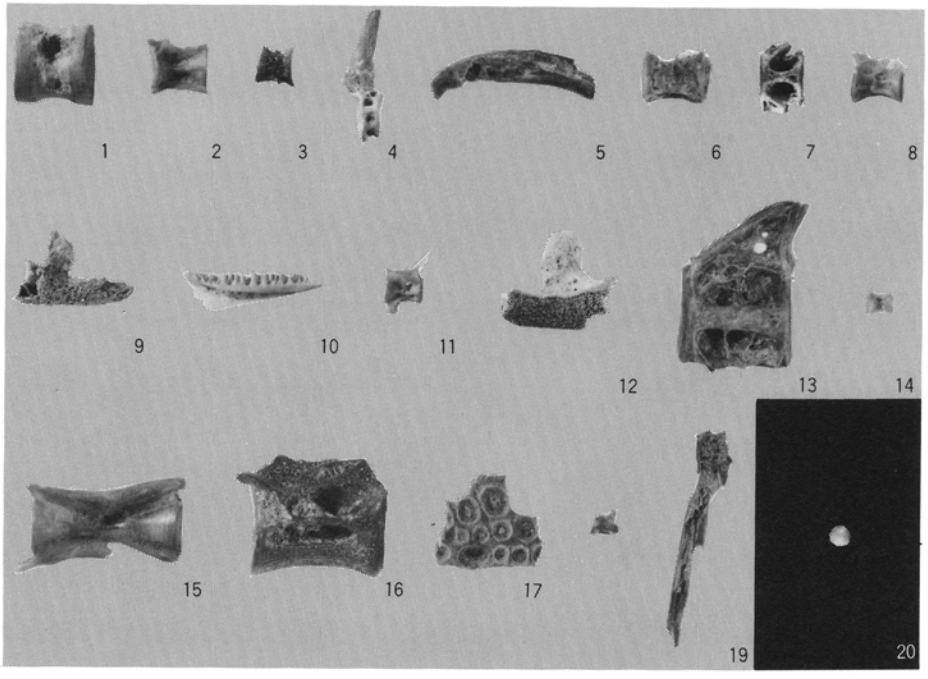


写真4　魚骨他（7・12：実大、4：2.5倍、他は5倍）

1：サメ目脊椎骨、2：ニシン科脊椎骨、3：アユ脊椎骨、4：ウグイ属脊椎骨、5：フナ属下顎歯骨r、6：同脊椎骨、7：コイ脊椎骨、8：ドジョウ科脊椎骨、9：ウナギ上顎骨r、10：同下顎歯骨l、11：同脊椎骨、12：スズキ前上顎骨、13：同脊椎骨、14：キス科脊椎骨、15：アジ科脊椎骨、16：サバ科脊椎骨、17：クロダイ前上顎骨r、18：ハゼ科脊椎骨、19：カレイ科脊椎骨、20：真珠．

第11表　ブロック別魚骨数量表

種　名	番号 / 部位	A1	A4	A5	A6	A8	A9	A10	A11	A12	A13	A14	A15	A16	A22	小計	B1	B2	B3	B4	B5
サメ目	脊椎骨						1						2			3				1	
ニシン科	脊椎骨		1	1			3			1	2	2	1		2	13		1	4		2
アユ	脊椎骨																			1	1
ウグイ属	脊椎骨						1									1					
フナ属	下顎歯骨 r				1											1					
	脊椎骨	1		2	6		5	1		2		2	1			20		3	4	2	1
コイ	脊椎骨			1				1								2					
ドジョウ科	脊椎骨			1			1									2	2		4		
ウナギ	上顎骨 r				1											1	1				
	下顎歯骨 l																				
	下顎歯骨 r																				
	脊椎骨			2	1		6			1	3		1			14	4	2	5	1	
スズキ	前上顎骨 l							1								1					
	脊椎骨							1	1					1		3					
キス科	脊椎骨						1									1					
アジ科	脊椎骨			1						1	1					3					
サバ科	脊椎骨				1											1					
クロダイ	前上顎骨 r																				
ハゼ科	脊椎骨																				
カレイ科	脊椎骨											1				1					
不　明	咽頭骨 l										2					2		1			
	咽頭骨 r							1								1	1		1		
	脊椎骨	2		6		1	5	2	0	0	2		2		1	21	1	3	7	1	7

種　名	番号 / 部位	B6	小計	C1	C2	小計	D2	小計	E1	E2	小計	F1	F2	F3	小計	H1	H2	H3	H4	H5	H6
サメ目	脊椎骨	1	2																		
ニシン科	脊椎骨	5	12				1	1				5	1		6	4	4	4	8	13	4
アユ	脊椎骨		1													1		1	1		
ウグイ属	脊椎骨																				
フナ属	下顎歯骨 r																				
	脊椎骨	2	12									1			1	4	12	10	5	4	3
コイ	脊椎骨				1	1										1	2		1		
ドジョウ科	脊椎骨	1	7	1		1	3	3								2	8	2	1	1	3
ウナギ	上顎骨 r		1																1		
	下顎歯骨 l																		1		
	下顎歯骨 r																				
	脊椎骨	3	15		1	1			3	1	4	2	6		8	4	17	8	7	9	6
スズキ	前上顎骨 l																				
	脊椎骨	1	1													1					
キス科	脊椎骨																				
アジ科	脊椎骨																				
サバ科	脊椎骨																				
クロダイ	前上顎骨 r															1	1				
ハゼ科	脊椎骨																				
カレイ科	脊椎骨																				
不　明	咽頭骨 l	1	2													1	2	1	1		1
	咽頭骨 r		2														1	2	1	1	
	脊椎骨	6	25		1	1	2	2				1	4	1	6	2	6	11	9	5	7

種　名	番号 部位	H７	H８	H９	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	小計	総計
サメ目	脊椎骨										1			1	6
ニシン科	脊椎骨	3		3				1		1	2			47	79
アユ	脊椎骨													3	4
ウグイ属	脊椎骨						1							1	2
フナ属	下顎歯骨ｒ														1
	脊椎骨	1		2	1								2	44	77
コイ	脊椎骨	1												5	8
ドジョウ科	脊椎骨	2		1	1			1						22	35
ウナギ	上顎骨ｒ	1												2	4
	下顎歯骨ｌ													1	1
	下顎歯骨ｒ	1												1	1
	脊椎骨	198		5	8		1	1	1		1		6	272	314
スズキ	前上顎骨ｌ														1
	脊椎骨			1								1	1	4	8
キス科	脊椎骨														1
アジ科	脊椎骨														3
サバ科	脊椎骨														1
クロダイ	前上顎骨ｒ													2	2
ハゼ科	脊椎骨	1												1	1
カレイ科	脊椎骨														1
不　明	咽頭骨ｌ													6	10
	咽頭骨ｒ	1												6	9
	脊椎骨	9	1	2	3	2	1	2	1	1	1	1	3	67	122

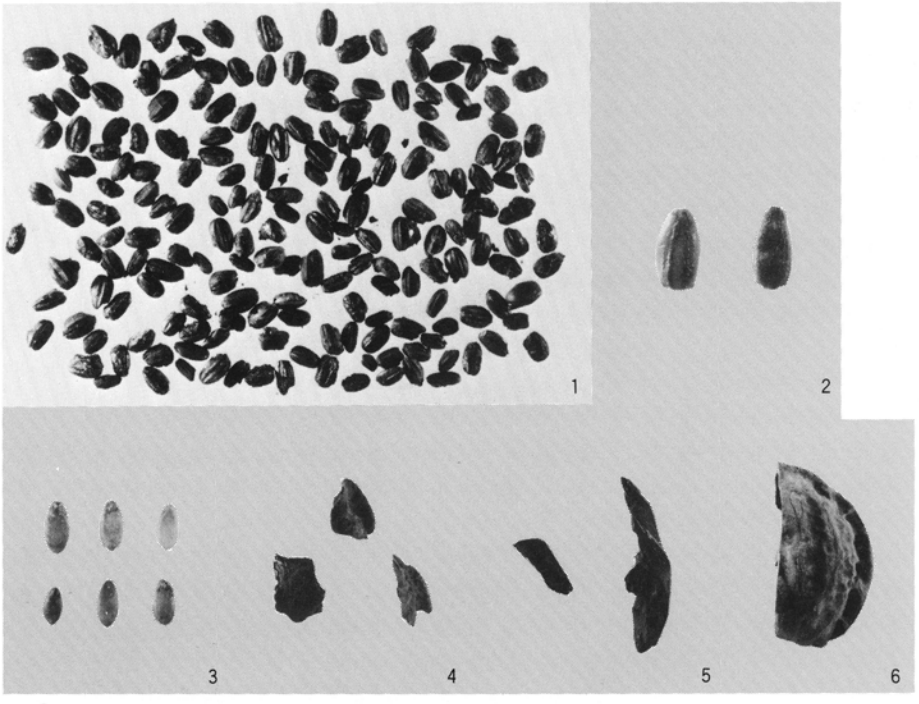


写真５　植物遺体（実大）

１：炭化米、２：ヒョウタン類、３：ウリ類、４～６：オニグルミ．

魚鱗：各時期のブロックより検出されているが、いずれも細片のみであり、種の同定は困難である。

カエル類：各時期のブロックより、脊椎骨が少量検出されている。

ヘビ類：各時期のブロックより、脊椎骨が少量検出されている。

鳥・獣類：各時期のブロックより検出されているが、いずれも細片のみで、種の同定は困難である。

7．植物遺体

炭化米：ほぼ全ブロックにわたって、多量に検出されている（**第13表**）。いずれも短粒型である。（**写真5－1**）。

豆類：各時期のブロックより、種子が少量検出されている。

ヒョウタン類：各時期のブロックより、種子および果皮の細片が少量検出されている（同2）。

ウリ類：各時期のブロックより、種子が少量検出されている（同3）。

オニグルミ：A20、D1（同4）、D2（同5）、G1（同6）などから、核破片が少量検出されている（貝田町～高蔵式期）。

以上の他に、若干の不明堅果類と多量の微細種子も検出されている。後者には水田雑草などが多量に含まれている可能性が高い。炭化米をはじめとするこれら各種の植物遺体は、それぞれの専門家の調査に委ねる必要がある。

8．おわりに

濃尾平野における弥生時代の代表的な遺跡である朝日遺跡の貝層には、縄文時代のそれとは異なるいくつかの特徴のあることを、前年度の報告に記しておいた。今年度の調査においても、それらの特徴をさらに明確に確認することができた。

その第1は人工遺物があまり含まれないこと、第2は埋葬人骨がみられないこと、第3は獣骨がきわめて少ないことである。

これらの背景には、単に方形周溝墓が発達したばかりでなく、貝塚が霊の送り場から単なるゴミ捨て場へと変質しつつあることが示唆されている。また水田の発達による平野部における狩猟活動の衰退も示唆されている。汽水・淡水産貝類や魚類の比重の増加やヤナの存在などは、このような新時代に適応した農村型漁業によって、動物質蛋白の欠乏を補おうとする姿勢の反映である。

第12表　ウニ類数量表（単位 g、＋印は微量を示す）

種名＼ブロック名	部位	A 5	A 8	A 9	A10	A11	A12	A13	A14	A15	A21	A22	B 3
アカウニ	殻板						0.02						
	棘						＋		0.01				
バフンウニ	殻板				0.02	＋		0.04				0.06	
ムラサキウニ	殻板	0.03	0.12	0.07					0.02	0.10		0.13	0.02
	棘		0.03	0.01						0.01	0.01		
不明	殻板						0.01	0.01			0.04	0.02	0.01
	棘											1.15	
同定不可	殻板							0.01	0.01				

種名＼ブロック名	部位	B 4	B 6	B 7	D 1	D 2	G 1	H 3	H 5	H 7	H 8	H 9
アカウニ	殻板						0.04	0.02				
	棘		＋									
バフンウニ	殻板	0.01	0.01	0.01								
ムラサキウニ	殻板				0.04	0.03	0.06					
	棘						0.01					
不明	殻板				0.01				0.02	0.01		0.01
	棘											
同定不可	殻板	＋									＋	

第13表　炭化米数量表

残存状態＼番号	完形	破片	残存状態＼番号	完形	破片	残存状態＼番号	完形	破片
A 1	0	○	A20	4	○	G 2	2	○
A 2	0	○	A21	0	○	H 1	19	○
A 3	0	○	A22	2	○	H 2	25	○
A 4	2	○	B 1	1	○	H 3	5	○
A 5	8	○	B 2	8	○	H 4	9	○
A 6	7	○	B 3	6	○	H 5	31	○
A 7	33	○	B 4	2	○	H 6	49	○
A 8	14	○	B 5	29	○	H 7	2	○
A 9	14	○	B 6	58	○	H 8	3	○
A10	42	○	B 7	212	○	H 9	7	○
A11	13	○	C 1	0	○	H10	23	○
A12	15	○	C 2	1		H11	39	○
A13	32	○	D 1	5	○	H12	4	○
A14	24	○	D 2	3	○	H13	7	○
A15	22	○	E 3	1		H14	2	○
A16	1	○	F 1	5	○	H15	1	○
A17	2	○	F 2	3	○	H16	1	○
A18	1		F 3	2	○	H17	2	○
A19	1	○	G 1	21	○	H18	6	○

ただしこのような本遺跡の生活の復元に当っては、小体積のブロック・サンプリングでは把握しがたい獣骨・魚骨の資料の問題もある。またこれらの縄文時代の延長上に位置づけられる食料とは別に、コメなどの弥生時代を特徴づける栽培植物などもさらに重要であるが、これらの検出には、貝層以外でのブロック・サンプリングも重要な作業である。

そして最後に今後の課題として、貝層内の遺物の分析ばかりでなく、住居址群との関係において、貝層の形成プロセスを検討する必要のあることを強調しておきたい。

謝　辞

本稿をまとめるに当っては多くの方々の御教示と御協力を仰いだが、特に下記の方々に負うところが大である。末尾ながら御名前を銘記して深謝の意を表する次第である。

上野輝弥（国立科学博物館）、山田耕治・石黒立人・松田　訓（愛知県埋文センター）、久保和士（名古屋大学考古学研究室）

引用文献

渡辺　誠、1987：朝日遺跡61Ｂ区貝層のブロック・サンプリング。愛知県埋蔵文化財センター年報、昭和61年度．87～94頁。名古屋。

勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境

森　勇一

Ⅰ．はじめに

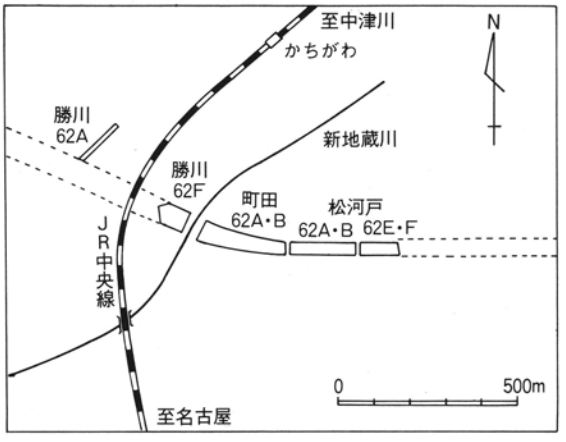
昆虫は、すべての生物群のなかでもっとも多い種類数を誇り、全世界のあらゆる環境に適応して生息している。そのため、昆虫化石（昆虫遺体ともいう）を調べることによって得られる情報はすこぶる多い。

遺跡を取りまく古環境の復元にあたって、昆虫化石は微化石以上に重要な役割を果たすことがあるのにもかかわらず、これまでほとんど考古学に寄与することなく、うち捨てられてきた。

今回、愛知県春日井市勝川遺跡周辺の低地性の遺跡を発掘するにあたって、赤塚次郎氏をはじめ現場担当者の協力によって、昆虫化石を計画的、組織的に採集することができた。昆虫化石の出土点数は約4000点（個体数ではなく節片ないし破片数である）に達し、検出された昆虫化石は、まだクリーニングすら行なわれていないものも多く、同定・分類作業も未完成ではあるが、ここにこれまでの調査結果の概要をその第一報として報告する。

研究を進めるにあたり、大阪市立自然史博物館の宮武頼夫・那須孝悌の両氏には、博物館所蔵の現生昆虫標本を借用させていただき、文献の手配をはじめ有益な助言をいただいた。また、岡崎国立共同研究機構・生理学研究所の太平仁夫博士には、コメツキムシの同定と、昆虫化石の電子顕微鏡下における検鏡の便宜を計っていただき、合わせて写真撮影





第１図　遺跡位置図

をしていただいた。野尻湖昆虫グループの春沢圭太郎・桂孝次郎の両氏には、糞虫及びネクイハムシの同定や生態について、国立科学博物館の藤山家徳博士には、ヒメカンショコガネの同定にあたってご教示いただいた。

昆虫化石の抽出・分類作業にあたっては、愛知教育大学研究生の伊藤隆彦・永草康次両君及び整理・現場作業員の皆さんに大変お世話になった。これらの方々に心よりお礼申し上げる。

II．層位と検出方法

A．層　位

昆虫化石を検出した遺跡の層位とその相対年代は、以下のとおりである。相対年代はいずれも土器編年であり、一部放射性炭素年代値を加味した。

勝川遺跡62Ｆ区の弥生時代中期の試料は、木製品の生産に関連した貯蔵施設及びその周辺の堆積物、弥生時代後期～平安時代までの試料は、すべて庄内川水系に属する旧地蔵川の自然流路ないし溝状遺構内の堆積物から産したものである。

また、勝川遺跡62Ａ区の試料は、低位段丘（鳥居松面）上に立地した江戸後期の遺構に沿った溝中の堆積物から産した。

松河戸遺跡62Ｅ区とＡ区の縄文時代中期及び後・晩期の試料は、町田遺跡62Ｂ区同様、遺跡の基盤層直上に堆積した泥炭質シルト中のものである。町田遺跡62Ａ・Ｂ区の平安時代及び松河戸遺跡62Ａ区の古墳時代の試料は、それぞれその時代の包含層中から産した。

B．検出方法

発掘現場の進行に合わせて、層序が明確になった時点で、地層断面及びトレンチ穴から分析用試料を採取した。合わせて地層断面図を記入し、試料の採取地点を記録した。

昆虫化石の試料採取地点では、同時により詳細な古環境の復元をめざして、大型植物遺

	勝川遺跡(62Ｆ・62Ａ)	町田遺跡(62Ａ・Ｂ)	松河戸遺跡(62Ａ・62Ｅ)
江戸時代(後期)	灰白色シルト		
平安時代	植物片まじり腐植質シルト	灰白色砂質シルト	
奈良時代	黒灰色シルト		
古墳時代	腐植質シルト		黒灰色シルト質粘土
弥生時代後期	植物片まじり腐植質シルト		
弥生時代中期	黒灰色シルト質粘土		
縄文時代後・晩期			黒灰色泥炭質シルト
縄文時代中期		泥炭質シルト	泥炭質シルト

体と微化石用サンプル（珪藻及び花粉）も採取し、可能な限り、放射性年代測定用の有機物のサンプリングも行なった。

持ち帰った試料は冷暗所に保管し、できるだけ早い期間に主にブロック割り法によって分離し、昆虫化石を検出した。なお、昆虫化石の検出にあたっては、アサヒペンタックス20倍単眼顕微鏡を利用した。昆虫化石が発見されると、土の小片ごと一つずつプラスチックのケースに納め、遺跡名・産出層準・採取年月日のラベルをつけて仮保存した。この際、ケース底部に不織布と脱脂綿をしき、これに50%エチルアルコールをそそいで、乾燥とカビの防止に努めた。

その後、実体顕微鏡下で面相筆を使って、昆虫化石のクリーニングを実施し、同時に周囲の土から新たな部位の検出を行なった。

昆虫化石の同定は、筆者の採集による現生標本及び大阪市立自然史博物館所蔵の標本の各部位と顕微鏡下で比較・検討しながら、一つずつの節片について行なった。

Ⅲ．記載と同定

以下に、同定上及び古環境を考察するうえで重要な若干の種について述べる。

ミヤマカマキリ　*Massicus raddei* (Blessig)〈第２図－４〉

奈良時代（IKK62F、SX04・CD境界ベルト）

右鞘翅（上部を欠く）。全長34.0㎜、最大幅10.8㎜。化石から推定される鞘翅長約37㎜、体長約53㎜。

黒褐～黒色。鞘翅上面に黄灰色の微毛が密生する。翅端はまるく、会合線角付近に短刺を有する。翅端がまるく、鞘翅上半部に黒色の顆粒状の点紋を配しないことで近似種のクワカミキリと、鞘翅が赤褐色を呈しないこと及び鞘翅上に３本の隆起する条線を持たないことでウスバカミキリと区別し、本種と同定した。

暖帯樹林帯のクリ・クヌギ・コナラなどの木に集まり、幼虫はこれらの木のほか、アラカシ・ウバメガシ・キリ・イチジク・クワなどの樹皮の下や材部に住み、食害する。

名のとおり、比較的深山性である。

オオセンチコガネ　♂　*Geotrupes auratus* Motschulsky〈第２図－７〉

弥生時代後期（IKK62F、SX03・D－１）

右前脛節前半部。化石の全長3.5㎜、最大幅1.6㎜。

黒色。４個の鋸歯状の歯（外歯）を有し、裏面に下側を向く数本の突起（ただし本標本

では脱落）があるので、オオセンチコガネと同定した。

第一外歯が突出し、下向きに曲がる特徴からオスの前脛節である。

大型獣たとえばウシやウマ、ヒトなどの糞に集まり、ときに動物の死骸にも来る。やや山地性である。

コブマルエンマコガネ　♀　*Onthophagus atripennis* Waterhouse〈第2図－5〉

弥生時代中期（IKK62F、SX01）

前胸背板。最大幅4.9㎜、縦3.8㎜。

黒色。マルエンマコガネに似るが、現生標本と比較検討の結果、前胸背板上の点刻が小円形で疎であることから、本種と同定した。

前胸背板上にコブ状の隆起を欠くので、♀である。本標本には、食糞生昆虫にしばしば見られるキチン質表面の損耗が認められる。

犬の糞によく集まり、獣や人糞にも来る。

ツヤマルエンマムシ　*Atholus pirithous*（Marseul）

縄文時代中期（IKC62B、黒バンドⅠ下位泥炭）　〈第2図－6〉

右鞘翅。全長2.0㎜。黒色で弱い光沢がある。鞘翅の6条の背条のうち、第1～第4背条は完全、第5背条は基半部を欠き、第6背条はそれより少し長いという特徴を有する。外副肩条、内副肩条は不明瞭で、破線状となる。

鞘翅から推定される体長が約3.6㎜と小型であることと、背条及び肩条の特徴から本種と同定した。

腐敗した動植物や糞に集まり、ウジなどの小動物を捕食する。

オオミズスマシ　*Dineutus orientalis*（Modeer）〈第2図－3〉

奈良時代（IKK62F、SX04）

左鞘翅。全長6.7㎜、最大幅3.2㎜、化石から推定される体長10㎜。

黒色で、金銅色～緑色の金属光沢を呈する。鞘翅側縁部は黄褐色を帯びる。鞘翅上面は、全体に微細な印刻におおわれ、光沢の違いによって縞模様が観察される。鞘翅先端と、鞘翅後部に、黒色の2本の顕著な刺状突起を有すること、鞘翅会合部に縁どりが見られないことから本種と同定した。

ふつう止水域から流れのゆるやかな水域に住む。

イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire〈第2図－9〉

弥生時代後期（IKK62F、SX03・D-1)

前胸背板。最大幅1.3㎜、縦1.0㎜。

光沢を帯びた黒緑色。中央背板上に細かいちり目状のしわが見られる。前角突起が発達し、中央縦溝が不明瞭であることによって、本種と同定した。

ジュンサイ・ヒツジグサ・ヒシ・コウホネなどの浮葉を食害する。また、幼虫がイネ科植物、とくにイネの根を加害することで古くから文献に登場し、有名である。

低地の周辺が開けた池沼、ため池、廃田などに多い。近縁種のガガブタネクイハムシと生態・食性ともに似るが、野外では住み分けがみられ、本種はガガブタネクイハムシより人里に近く、水田付近の水路にふつう。現在は、農薬の影響で個体数が激減した。

イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire〈第2図－10〉

平安時代（IKK62F、SX03)

右鞘翅。全長4.0㎜、最大幅1.5㎜。

やや青味を帯びた緑色で、光沢を有する。点刻は、基部近くではほぼ円形で、翅端に近づくにつれてやや楕円形から長柱状になる。鞘翅は、ガガブタネクイハムシのそれと酷似し、実体顕微鏡下での識別は困難である。鞘翅全体が薄く弱いこと、点刻がやや小型であることなどによって見分けることが可能である。

電子顕微鏡下では、点刻はすり鉢状を呈し、先端部は細まって深い。点刻の直径は、鞘翅上半部では30～40 μm、鞘翅縁辺部の間室には、個体によってわずかに横じわが伴われる。

ガガブタネクイハムシ　*Donacia lenzi* Schonfeldt〈第2図－11〉

弥生時代後期（IKK62F、SX03・D－1）

右鞘翅。全長5.5㎜、最大幅1.5㎜。

黒色で金緑色の光沢がある。

鞘翅には、11条の点刻列が認められる。点刻は、鞘翅上半部及び第9条、第10条では円形だが、他の点刻はやや楕円形を呈する。間室には、実体顕微鏡下においても、細かな横じわが伴われる。

電子顕微鏡下では、点刻は円形ないし楕円形の陥没状を呈し、平底で浅い。点刻の直径は、鞘翅上半部では50～60 μmである。

野尻湖昆虫グループ（1985）によれば、本種はやや丘陵性で、周囲に林を伴う自然度の

高い池や沼に住み、成虫はジュンサイ・ヒツジグサ・コウホネ・ヒルムシロ属などの浮葉を加害し、幼虫はジュンサイの根やヒツジグサの水中茎及び葉を食べるという。

キンイロネクイハムシ　*Donacia japana* Chujo and Goecke〈写真２－３a，b，c〉

奈良時代（IKK62F、SX04・CD境界ベルト）

右鞘翅。全長6.1㎜、最大幅1.7㎜。

金銅色。翅の基部と会合部に沿って、縦長の赤斑が見られる。点刻に伴うしわは明瞭で、深く、斜めにつながる。点刻は粗く、点刻列の配列はやや不規則である。

電子顕微鏡下では、点刻は長円形の陥没状を呈し、平底である。点刻の直径は、鞘翅上半部では50～60μmである。

成虫、幼虫とも挺水植物帯のミクリなどを食害する。

野尻湖昆虫グループ（1985）によれば、低地の、林を伴う開水面の狭い湿地や池沼に生息し、丘陵の水田脇の酸性度の高い小さなため池に見られることもあるという。

ツヤネクイハムシ　*Donacia nitidior*（Nakane）　〈第２図－12〉

奈良時代（IKK62F、SX04・CD境界ベルト）

右鞘翅。全長5.1㎜、最大幅1.3㎜。

暗銅色で、細かな長柱状の点刻を配する。点刻列には浅い横じわを伴い、鞘翅全体に強い光沢がある。翅端部は、やや切断状に終わる。第１間室及び第11間室には希薄な横じわが認められる。

丘陵地、山地の林を伴う小湿地や廃田に多い。成虫は、岸辺に近いところに生える挺水植物帯のスゲ科植物を多く訪れ、イネネクイハムシやガガブタネクイハムシとは明瞭に住み分けている。

科及び属レベルまで同定できた昆虫化石

昆虫の科及び属名	時代	縄文時代			弥生時代		古墳		奈良	平安		江戸
		中期		後・晩期	中期	後期						
	遺跡名	町田	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	勝川
		62B	62E	62A	62F	62F	62F	62A	62F	62F	62B	62A
水生	カワトンボ科 CALOPTERYGIDAE					1	1		1			
水生	ガムシ科 HYDROPHILIDAE				1	1	2	3	5	1		
水生	ゲンゴロウ科 DYTISCIDAE	1	1			2	10	1	24	1		
水生	マメゲンゴロウ属 *Agabus* sp.		43									
水生	ミズスマシ属 *Gyrinus* sp.		2					1	1			
湿地性	ネクイハムシ亜科 DONACIINAE	3	1	1	1	4	2	1	23			
食糞性	エンマコガネ属 *Onthophagus* spp.		7		3	2						2
食糞性	マグソコガネ亜科 APHODIINAE		1		1	1						
地表性	ゴミムシ科 HARPALIDAE	11	35	1	13	23	11	16	26	18	2	37
地表性	アオゴミムシ属 *Chlaenius* spp.	1					5		6			
地表性	ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE				1		1					
食植性	コメツキムシ科 ELATERIDAE	6	13						5		1	
食葉性	ハムシ科 CHRYSOMELIDAE		7		1	5	2	1	17	6		
食葉性	オトシブミ科？ ATTELABIDAE					2			1			
食葉性	コガネムシ科 SCARABAEIDAE	24	59*	1	11	16	21	3	58	4	1	384
食葉性	スジコガネ亜科 RUTELINAE		2		3	2		1				12
食葉性	サクラコガネ属 *Anomala* spp.								20	1		
食葉性	ハナムグリ亜科 CETONIINAE	7	3		3				3			2
食葉性	カメムシ科 PENTATOMIDAE						1					
森林性	クワガタムシ科？ LUCANIDAE	1		1					1			
所属不明及び未分類の甲虫目		262	488	9	17	237	13	29	236	8	5	242

＊　雑木林や森林の樹液に集まる昆虫群で大部分が占められる。

種レベルまで同定できた昆虫化石（その1）

昆虫種名	時代	縄文時代			弥生時代		古墳		奈良	平安		江戸
		中期		後・晩期	中期	後期						
	遺跡名	町田	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	勝川
	生態	62B	62E	62A	62F	62F	62F	62A	62F	62F	62B	62A
ハグロトンボ *Calopteryx atrata*	水生 食肉性								W2			
ガムシ *Hydrophilus acuminatus*	水生 食植性				W1	W1 H1 P1	W2 T2 F2		W3 L2	P1	W1	
コガタガムシ *Hydrophilus cashimirensis*	水生 食植性								W1			
コガムシ *Hydrochara affinis*	水生 食植性											W3
ゲンゴロウ *Cybister japonicus*	水生 食肉性				W1				W5 T4 A2	W1		
コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus*	水生 食肉性						W1		W1 H1 B1			
オオミズスマシ *Dineutus orientalis*	水生 食肉性					W1	W2		W5			
ミズスマシ *Gyrinus japonicus*	水生 食肉性	W1	W5									
コミズスマシ？ *Gyrinus curtus*	水生 食肉性				W1							
ガガブタネクイハムシ *Donacia lenzi*	水生 食植性					W6 B1	W2		W20 H1 P4	W4	W1	
イネネクイハムシ *Donacia provosti*	水生 食植性					W10 P3 B1	W2 P2		W8 P2	W19 T1	W7 P1	
キンイロネクイハムシ *Donacia japana*	水生 食植性					W4 P1	W4		W21 P2	W1		
ツヤネクイハムシ *Donacia nitidior*	水生 食植性						W4		W1	W4		
フトネクイハムシ？ *Donacia fukiensis*	水生 食植性			W1								
オオセンチコガネ *Geotrupes auratus*	地表性 食糞性					L1						
コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*	地表性 食糞性		P1		P1							
クロマルエンマコガネ *Onthophagus ater*	地表性 食糞性					W1						
ツヤマルエンマムシ *Atholus pirithous*	地表性 食屍性	W1										
オオトックリゴミムシ？ *Oodes vicarius*	地表性 雑食性								P1			
クロナガオサムシ？ *Leptocarabus procerulus*	地表性 食肉性								P1			
ミカワオサムシ？ *Carabus arrowianus*	地表性 食肉性					H1						

種レベルまで同定できた昆虫化石（その２）

昆虫種名	時代	縄文時代			弥生時代		古墳		奈良	平　安		江戸
		中期		後・晩期	中期	後期						
	遺跡名	町田	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	勝川
	生態	62B	62E	62A	62F	62F	62F	62A	62F	62F	62B	62A
アカガネサルハムシ *Acrothinium gaschkevitchii*	陸　生 食植性								W4			
イモサルハムシ *Colasposoma dauricum*	陸　生 食植性							W1				
トゲアシクビボソハムシ *Lema coronata*	陸　生 食植性					W1						
ヒメアカホシテントウ *Chilocorus kuwanae*	陸　生 食肉性											W1
ミヤマカミキリ *Massicus raddei*	森林性 食植性								W1 F1			
タマムシ *Chrysochroa fulgidissima*	森林性 食植性		F1		F5	F3			F4			
クシコメツキ *Melanotus legatus*	陸　生 食植性				P1		W1		P1			
アカアシオオクシコメツキ *Melanotus cete*	陸　生 雑食性	W2							W1 P1			
ゲンジボタル *Luciola cruciata*	半水生 食肉性								W1			
ホソセスジムシ *Yamatosa nipponensis*	陸　生 食植性					W1						
コガネムシ *Mimela splendens*	陸　生 食植性						W1	P1	W3			
ドウガネブイブイ *Anomala cuprea*	陸　生 食植性		P1				W1		W1 A1			W23 A2 P16 T1
ヒメコガネ *Anomala rufocuprea*	陸　生 食植性					L1			W1			W181 S1 P57 H5
ハンノヒメコガネ *Anomala puncticollis*	陸　生 食植性							P2	P1			
ヒラタアオコガネ *Anomala otiescostata*	陸　生 食植性						F1		W6			W1
ヒメカンショコガネ *Apogonia amida*	陸　生 食植性		W2			W1	W3	W3	W15 P5			
コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*	陸　生 食植性	W4 S2 T1 F3	W5 P1		W1 P1	W2	S1	L1	W11	W1		
アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi*	陸　生 食植性	W1	W8 F3				W1		W1	W3		
カナブン *Rhomborrhina japonica*	森林性 食植性		F5						W1 S1			W1
カブトムシ *Allomyrina dichotoma*	森林性 食植性								P1			
コカブトムシ *Eophileurus chinensis*	森林性 雑食性					W1 H1			W1			W1
ヒラタクワガタ？ *Serrognathus platymelus*	森林性 食植性					T1						

【検出部位凡例】
W；鞘翅　H；頭部　T；胸部　A；腹部　P；前胸背板　S；小楯板　L；腿脛節
B；ほぼ一体分　F；破片
（例：W12－鞘翅12点が検出されたことを示す）

Ⅳ．指標性昆虫と古環境の復元

A．昆虫化石の指標性

昆虫はあらゆる生物のなかでも、環境による住み分けと種の分化が顕著にみられる生物の一つである。また、微化石にくらべて死後の移動が少ないので、遺跡を取りまく特殊な微環境の復元に示相化石として重要な役割を果たす。

「タデ食う虫も好きずき」のことわざにあるように、昆虫は種によって食草や食べ物を異にしている。そのため、昆虫化石の種レベルの同定が進めば、当時の植物相や遺跡の性格を推定するのに役立つ。

日浦ら（1984）は、昆虫化石の指標性について、次の５項目をあげている。ここでは、それにならって勝川遺跡周辺から産した昆虫化石の中から、古環境の復元に役立つ指標昆虫の可能性について述べる。

１．水域環境の指標昆虫

昆虫化石を産した地層の多くは、泥炭及び腐植質シルト・粘土などの低湿地性水成層である。これらの地層が堆積した水域が遺跡の立地していた当時、どういう環境下にあったのかを推定するために、ネクイハムシ亜科に属する昆虫群が有効である。ネクイハムシは、日本に19種類生息していて、種による住み分けが最も顕著にみられる昆虫として知られている。体長が約７㎜前後と大変小さいこと、及び体全体がキチン質でおおわれてこわれにくいので、遺跡からの検出例も多い。とくにイネネクイハムシとガガブタネクイハムシの湿地帯における住み分けは、人間による低湿地の自然改変の程度を知るうえで重要である。

ゲンゴロウ科及びガムシ科、ミズスマシ科などの水生昆虫も出現頻度が高い。これらの水生昆虫のなかには、池や水たまりなどの止水を好むものや流水性のもの、自然度の高い水域を好むものなどがあり、分析方法を工夫すれば水域環境の把握に貢献できる。

２．植生環境の指標昆虫

人間の居住によって森林が伐採され、そこに人為的空間が出現する。それとともに裸地が拡大して、二次林や帰化植物（史前帰化植物）が侵入することになる。こうした植生の変遷にともなって、昆虫相も変化する。

甲虫目、なかでもコガネムシ科の多くは食植性昆虫群であり、これらを調べることによって、遺跡のまわりの植生の理解に役立つ。コアオハナムグリやスジコガネ亜科に属するヒメコガネなどの食葉性昆虫は、人里に近い草木や果樹などの葉を食害する。また、カナ

ブンやカブトムシ、ヒラタクワガタなどは、クヌギやカシ類の樹液に集まる昆虫として有名である。

しかし、これら大型の食植性昆虫は、大部分広食性であり、昆虫化石のデータだけから植物の種類を特定することは難しい。さらに詳細な植生環境の復元には大型植物遺体の検出に努める一方、狭食性の昆虫の特定とその同定システムを確立しなければならない。

3．栽培及び農耕の指標昆虫

人間が農作物の栽培をはじめて以来、昆虫のうちの何種類かは農業害虫として、人類の敵にまわることになった。しかし、現在知られている農業害虫が、栽培植物の出現というインパクトに対してどのように反応し、害虫化したのか、そのプロセスはまだほとんどわかっていない。

日本土着の種が、栽培植物の出現によって食性を変え、害虫化したというのが一般的な考えだが、イネを食害する害虫のなかには、稲作の伝播とともに日本に渡ってきて帰化したということも考えられる（史前帰化昆虫）。古くから、イネの害虫として知られるイネネクイハムシの場合は、本来、イネネクイハムシが生息していた場所に人類が水田開発を行なったために、やむなくイネを食草として選ぶようになった、ということも考えられる。

ヒメカンショコガネやイモサルハムシは、現在はイモ類などの畑作物の葉を食べる害虫として知られ、ドウガネブイブイは人間が植栽した果樹などの葉を加害する。

これらの昆虫を、現在の食性とともに詳しく分析することによって、先史農耕や人類の生産活動の跡を考察することも可能である。

4．汚物集積の指標昆虫

人間生活の営みによって、自然に放出される汚物は少なくない。人間そのものの糞尿はもとより、生活に伴うゴミや腐敗物、家畜の糞、屍体など、これらの処理に一役買っているのもまた昆虫である。

食糞性昆虫と呼ばれる一群がそれに当たる。オオセンチコガネは主に大型草食獣の糞に集まり、コブマルエンマコガネは犬などの糞、ツヤマルエンマムシは腐肉や動物の死骸に多い。このように、食糞性昆虫を調べることによって得られる情報は考古学上重要である。

また、ゴキブリやゴミムシの仲間には、人間の居住空間に近接したところに住むものも多く、これらの種群もまた指標昆虫として有効である。

5．地表環境の指標昆虫

地表歩行性の昆虫のなかには、砂地を好むものや湿地に多いもの、落ち葉や枯れ草がないと住めないものなど、地表環境を特定できる昆虫も少なくない。

その多くはゴミムシ科やオサムシ科などに属する種群である。しかし、これらの仲間は遺跡からの出現個体数がもっとも多いものの、単一節片による種の同定が難しく、しかも成虫のまま土中にもぐって越冬することがあり常に混入のおそれを含んでいて、指標昆虫としての取り扱いに注意が必要である。

B．古環境の復元

勝川遺跡及びその周辺から産した昆虫化石は、現時点での集約数で3253点である。遺跡の現場からの出土点数としては、これまでに例のない数に達した。そのうち174点がネクイハムシ類で、ネクイハムシをのぞく水生昆虫159点、食糞性及び食屍性昆虫22点、食植性昆虫1142点、地表性歩行虫210点、所属不明及び未分類の甲虫目1546点である。うち種レベルまで同定できた昆虫43種633点、科及び属レベルまで同定できた昆虫11科903点・4亜科77点・5属94点であった。これらをもとに、古環境の復元を試みた。

1．江戸時代（後期）　勝川A区

ヒメコガネ（244点）、ドウガネブイブイ（42点）及びコガネムシ科の多産によって特徴づけられる。コガネムシ科の昆虫は、詳細に検討すればそのほとんどがサクラコガネ属に分類されるべきものである。これらはいずれも陸生の食葉性昆虫である。

ヒメコガネは、マメ科植物やブドウ・クリなどの草木の葉を加害し、ドウガネブイブイは植栽されたカキやブドウなどの果樹の葉を好んで食べる。水生昆虫は、コガムシの鞘翅3点だけであった。これはおそらく灯火に飛来したものであろう。

この結果から、果樹等が植えられた人家の近く、あるいは人里に近い村はずれの草地や林縁などが推定され、きわめて人の気配の濃い環境といえる。

なお、考古学的な発掘成果から、下街道に沿った勝川宿の跡が復元されている。

2．平安時代　　勝川F区　町田A・B区

イネネクイハムシを多く産した。イネネクイハムシの全出土点数56点のうち、半数の28点が勝川F区及び町田A・B区の平安時代の試料から得られている。ネクイハムシ亜科として、他にガガブタネクイハムシ、ツヤネクイハムシ及びキンイロネクイハムシを伴う。少数の水生昆虫と食葉性昆虫のアオハナムグリ及びコアオハナムグリも得られた。科のレ

ベルでは、ゴミムシ科とハムシ科、コガネムシ科を産した。

人工改変の進んだ低湿地、開発された水田の姿が想定される。考古学的には、町田A・B区でこの時期のものと推定される水田遺構が検出されている。

3．奈良時代　　勝川F区

カナブンやカブトムシなどのクヌギ・カシ類の樹液に集まる昆虫やミヤマカミキリ、タマムシ、コカブトムシ、クシコメツキ、アカアシオオクシコメツキなどの主に広葉樹の木や葉を食害する昆虫を多く産した。

ネクイハムシ亜科ではガガブタネクイハムシ、キンイロネクイハムシ、その他の水生昆虫ではゲンゴロウ、コガタガムシ、オオミズスマシ、ゲンジボタルなどを産出した。現在では、イモ類などの畑作物の葉を害するヒメカンショコガネの産出点数も多い。大型植物遺体では、クヌギやマテバシイ、アカガシ亜属などの堅果類とヒシの実及びカボチャの仲間の種子（?）を産した。

このことから周囲に林を伴う自然度の高い低湿地が推定される。低湿地には、ジュンサイやヒツジグサ、コウホネなどの浮葉植物が浮かび、流れのゆるやかな水域の存在が考えられる。

考古学的には、この時期の木製品を多く産した旧地蔵川水系の自然流路ないし溝状遺構が検出されている。

4．古墳時代　　勝川F区　松河戸A区

全体に昆虫化石の出土点数が少なく、資料不足である。ネクイハムシ亜科では、ガガブタネクイハムシ、イネネクイハムシ、キンイロネクイハムシ、ツヤネクイハムシの4種がそろって見つかる。ヒメカンショコガネ、コアオハナムグリをはじめとしたコガネムシ科の食葉群と地表性のゴミムシ科が比較的多く産出した。それに止水域や流れのゆるやかな水域を好むオオミズスマシなどの水生昆虫も産した。

環境要因が多様化していたことが推定され、自然度の高い止水性の水域の存在が考えられる。

考古学的な成果では、この時期の溝状遺構から木製品と土器類が発見されている。

5．弥生時代後期　　勝川F区

イネネクイハムシが多く出現した。ほかにゴミムシ科やコガネムシ科の出現点数も多い。オオセンチコガネ、クロマルエンマコガネをはじめ、計5点の食糞性昆虫が発見された。

水生昆虫ではガムシ、オオミズスマシなど。ほかにコカブトムシ、タマムシが見つかった。大型植物遺体では、ヒメビシ、ヒシモドキの実が多数検出された。

水田開発に伴う自然の改変が進行した。オオセンチコガネの発見から、当時大型草食獣がいたことが推定される。

考古学的には、昆虫化石を産した土と同層準の堆積物から弥生時代後期の木製品が大量に出土している。

6．弥生時代中期　　勝川Ｆ区

種レベルまで同定できた昆虫化石７種12点、科及び属レベルまで同定できた昆虫化石５科・４亜科・１属38点、不明17点の計67点であった。昆虫化石の資料が少なく、昆虫化石のデータだけからは環境復元は困難である。コブマルエンマコガネなど５点の食糞性昆虫と13点のゴミムシ科及び５点のタマムシが発見された。

発掘時に土坑中の土から、大量のモモやクルミ（オニグルミ）の種子が発見された。これは人間が食べて捨てたものであろうと推定される。同じ土より史前帰化植物の可能性の高いオナモミやジュズダマなどの水田雑草、コメ粒、ウリやヒョウタンの種子が見つかった。また、並行して調査を進めた珪藻遺骸の分析結果から、止水性種や水質汚濁に耐性のある種群が高い頻度で検出された。

これらの結果を総合すると、汚れた水たまり的様相の止水域、人及び犬などの動物の気配、近くにエノキやサクラなどの樹木が生えていた状況が推定される。

昆虫化石を産した土の付近から、考古学的には、木製品の貯蔵施設とその生産に関連した建物群が検出された。

7．縄文時代後・晩期　　松河戸Ａ区　町田Ｂ区

昆虫化石では、まったく資料不足である。松河戸Ａ区から、種レベルでは現在のところ、フトネクイハムシに同定される昆虫化石１点と、科及び亜科のレベルではネクイハムシ亜科を含む３科３点、１亜科１点と、不明種９点が見つかったのみである。

この時期に、山陰起原と考えられるテフラ（詳しくは別稿の予定）の降灰があり、環境が変化した様子が珪藻遺骸の分析結果から明らかになった。(この結果の詳細についても、近く「町田遺跡」報告書にて報告の予定)

好アルカリ性の種群が減少し、変わって好酸性種が増加した。珪藻の水流性・生態性についても、それまでの好止水性種から不定性種へ、浮遊生種から底生・付着生種へ変化している。

この結果から、自然度の高い湿地帯と、ゆるやかな流れを伴った清澄な酸性水域が存在したことが伺われる。

考古学的には、これまでのところ縄文時代後・晩期にあたる土器及び遺構は検出されていない。

8．縄文時代中期　　松河戸Ｅ区　町田Ｂ区

主として、山間の渓流や流れの付近に住むマメゲンゴロウ属の一種のクロマメゲンゴロウ（?）を多産した。ほかに雑木林や森林の樹液に集まるカナブンなどのコガネムシ科の種群、及びアオハナムグリ、コメツキムシ科を多く産した。ネクイハムシはほとんど検出されなかった。珪藻遺骸の分析結果は、pHについては好アルカリ性から不定性種、水流性については止水性種でほとんどが占められた。

これらの結果から、木立に囲まれた止水域、水辺にはハンノキや広葉樹が茂り、開水面は閉ざされていた。池のまわりには、ヨシやマコモなどの湿地性植物はなく、水底に落ち葉が静かに堆積するような林床内のやや薄暗い環境が推定される。

考古学的な発掘成果からは、昆虫化石を産した泥炭質シルト中から縄文時代中期の土器、及び近接した微高地上で同じく縄文時代中期の石器生産に関連した住居跡、配石遺構などが検出されている。

Ⅴ．あとがき

発掘作業のかたわら、昆虫化石や植物遺体の採集を心がけるようになって10ヶ月余。当初は、現場から新しい昆虫化石が発見されるたびに喜んだものである。昆虫化石の出土点数がふえるにつれて、ことの重大性をヒシヒシと痛感するようになった。

2000年、3000年の長いときを越えて出土した昆虫化石は、小さいながらどれも美しい輝きを放っている。しかし、時間の経過とともに、その色は見る見る退色し、標本も劣化する。昆虫化石の保存の方法すら、まだ確立されていない。同定の方法も、これまでの分類は、一個体まとまった状態で種を決定するのが昆虫分類学の基本とされてきた。顕微鏡下における単一節片、とくに鞘翅による同定と分類のシステム化がいそがれるところである。

浅学にもかかわらず、調査研究と発表の機会を与えてくださった愛知県埋蔵文化財センターの皆さんに感謝するとともに、多くの未分類の昆虫化石に正しい名前を与えるべく、これからも努力していきたく思う。

補　遺

松河戸遺跡A区の火山灰層直下の黒灰色泥炭質シルトの放射性年代値がこのほど明らかになった。その結果は3120±120年B.P.ということであり、このことからテフラの降灰はほぼ3120年B.P.直後か、少なくともそれ以降ということになり、縄文後・晩期という相対年代をよく裏づけた。

放射性年代は、学習院大学理学部の木越邦彦研究室で測定していただいた。また、テフラの給源火山を山陰地方と推定するにあたって、群馬大学の新井房雄先生にずいぶんお世話になった。詳しい火山灰のデータとその年代論については、別の機会に述べる予定である。

参考文献

日浦　勇（1980）昆虫遺体．鬼虎川遺跡調査概要，1，44．（東大阪市遺跡保護調査会）

日浦　勇・宮武頼夫・那須孝悌（1983）　昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学，昭和57年度年次報告書，文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班，467—479

日浦　勇・宮武頼夫・那須孝悌（1984）　昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究．古文化財の自然科学的研究，古文化財編集委員会編，同朋舎，411—429

森本　桂ほか（1986）　原色日本甲虫図鑑（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ）保育社

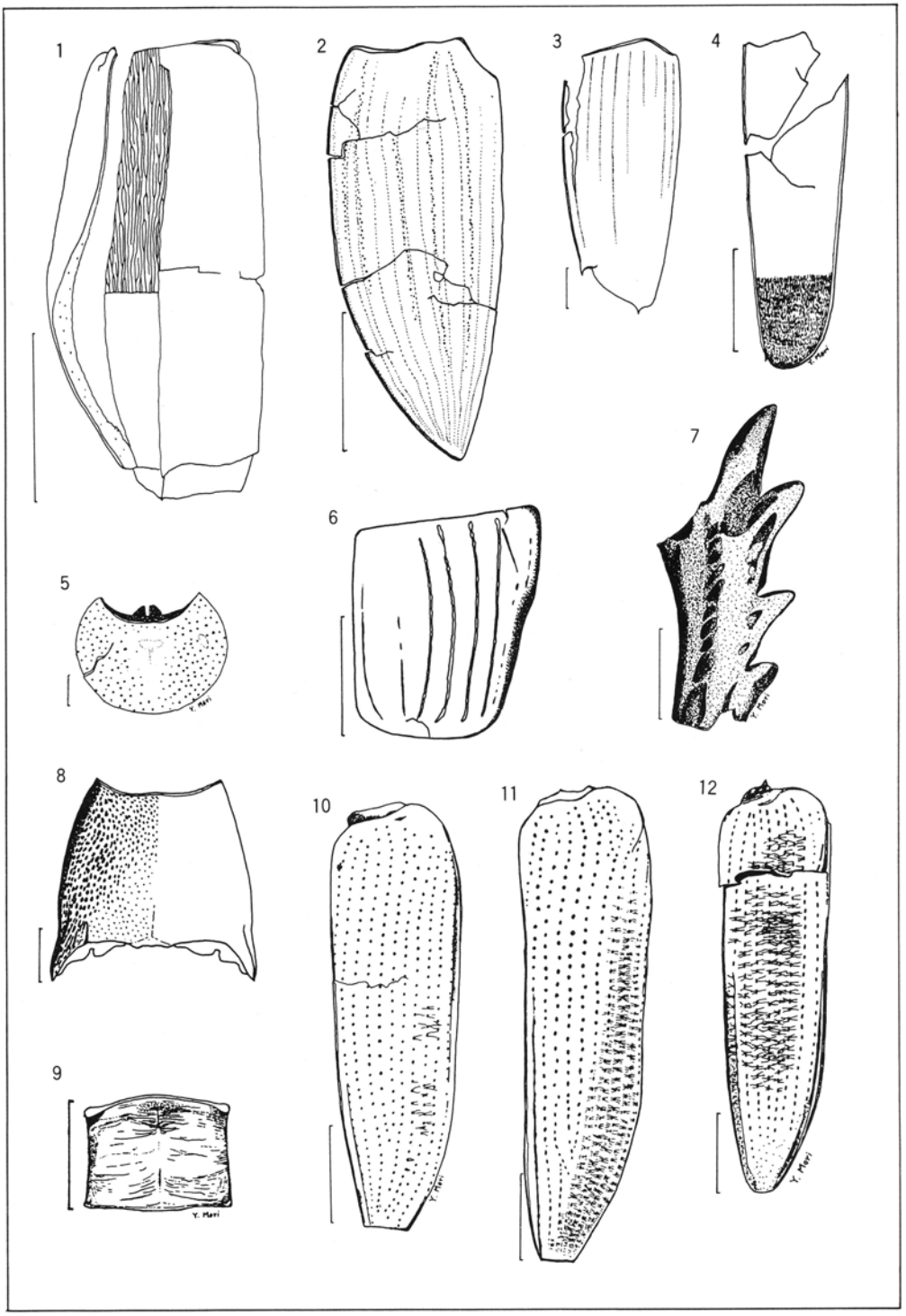
中根猛彦ほか（1975）　学研中高生図鑑．昆虫Ⅱ・甲虫，学習研究社

中根猛彦ほか（1975）　原色日本昆虫図鑑（上）・（下）保育社

野尻湖昆虫グループ（1984）　野尻湖発掘（1978～1982）で産出した昆虫化石．地団研専報，27，137—156

野尻湖昆虫グループ（1985）　アトラス・日本のネクイハムシ——化石同定の手びき．——182pp

野尻湖昆虫グループ（1987）　第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘で産出した昆虫化石．地団研専報，32，117—136



第2図

第2図の説明

1．ゲンゴロウ　*Cybister japonicus* Sharp　♀　左鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
2．ガムシ　*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky　左鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
3．オオミズスマシ　*Dineutus orientalis*（Modeer）　左鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
4．ミヤマカマキリ　*Massicus raddei*（Blessig）　右鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
5．コブマルエンマコガネ　*Onthophagus atripennis* Waterhouse　♀　前胸背板（勝川遺跡：弥生時代中期）
6．ツヤマルエンマムシ　*Atholus pirithous*（Marseul）　右鞘翅（町田遺跡：縄文時代中期）
7．オオセンチコガネ *Geotrupes auratus* Motshulsky　♂　右前脛節前半部（勝川遺跡：弥生時代後期）
8．アカアシオオクシコメツキ　*Melanotus cete* Candeze　前胸背板（勝川遺跡：奈良時代）
9．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　前胸背板（勝川遺跡：弥生時代後期）
10．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　右鞘翅（勝川遺跡：平安時代）
11．ガガブタネクイハムシ *Donacia lenzi*（Schonfeldt）　右鞘翅（勝川遺跡：弥生時代後期）
12．ツヤネクイハムシ　*Donacia nitidior*（Nakane）　右鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）

（スケールは1・2・4は1㎝、あとはすべて1㎜）

写真1の説明（すべて勝川遺跡産）

1．カナブン　*Rhomborrhina japonica* Hope　左鞘翅（奈良時代）　標本の長さ22㎜
2．コアオハナムグリ　*Oxycetonia jucunda*（Faldermann）　左鞘翅（古墳時代）　標本の長さ12㎜
3．コカブトムシ　*Eophileurus chinensis*（Faldermann）　左鞘翅（弥生時代後期）　標本の長さ14㎜
4．コガネムシ　*Mimela splendens* Gyllenhal　右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ13㎜
5．ドウガネブイブイ　*Anomala cuprea* Hope　左鞘翅上半部（奈良時代）　標本の長さ8㎜
6．ヒメカンショコガネ　*Apogonia amida* Lewis　左右鞘翅（弥生時代後期）　標本の長さ6㎜
7．アオゴミムシ属　*Chlaenius* sp.　左右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ13㎜
8．ゴミムシ科　Harpalidae　右鞘翅（弥生時代中期）　標本の長さ15㎜
9．オオトックリゴミムシ属　*Oodes* sp.　前胸背板（弥生時代後期）　標本の最大幅6㎜
10．サクラコガネ属　*Anomala* sp.　右後腿節及び脛節（奈良時代）　腿節3㎜、脛節2.8㎜
11．クシコメツキ　*Melanotus legatus* Candeze　前胸背板（奈良時代）　標本の長さ6㎜
12．トゲアシクビボソハムシ　*Lema coronata* Bary　右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ3.5㎜
13．ハグロトンボ　*Calopteryx atrata* Selys　右後翅（奈良時代）　標本の長さ16㎜
14．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　前胸背板（弥生時代後期）　標本の長さ1.3㎜
15．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　右鞘翅（古墳時代）　標本の長さ6.0㎜
16．ガガブタネクイハムシ　*Donacia lenzi*（Schonfeldt）　右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ6.1㎜

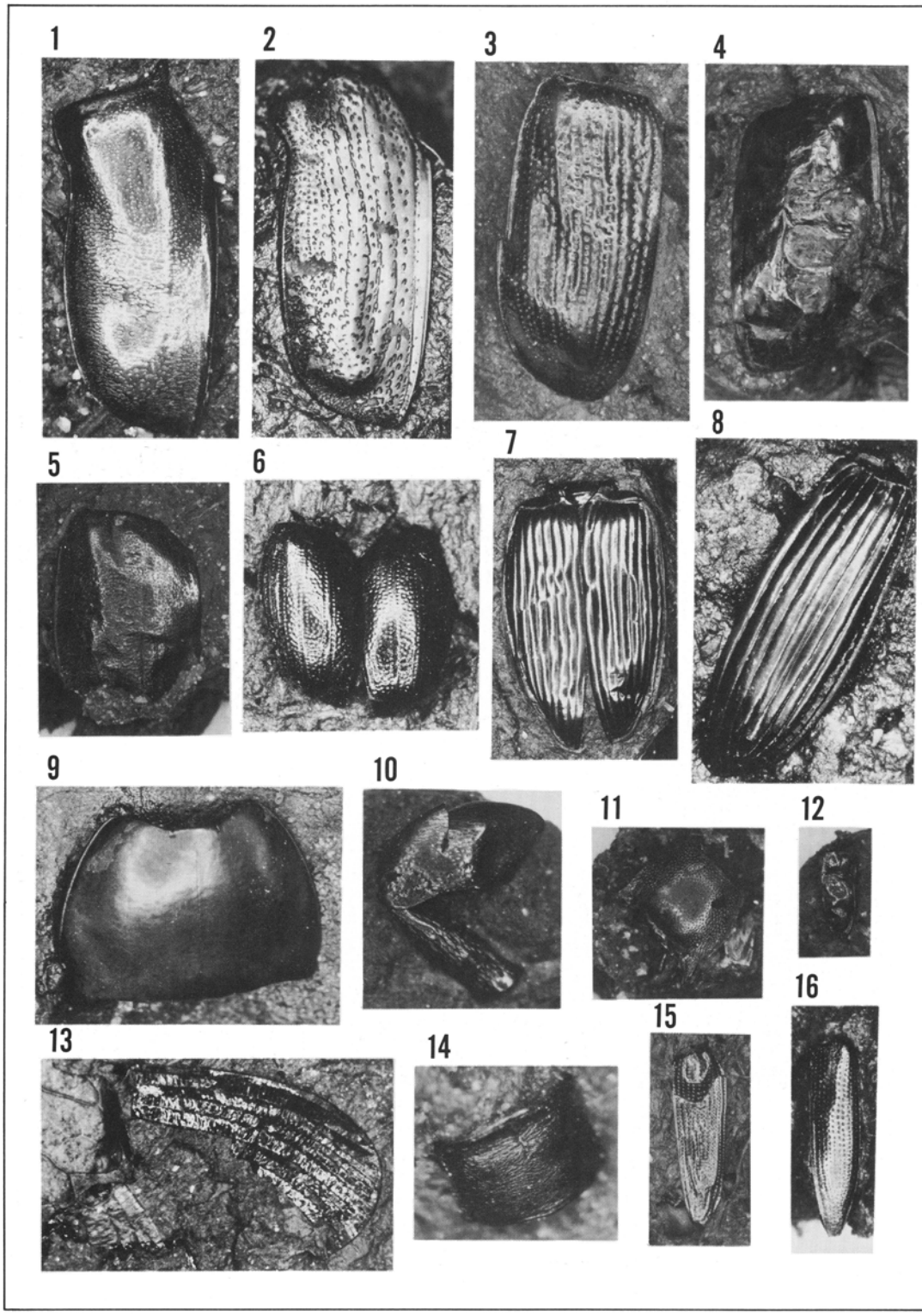


写真 1

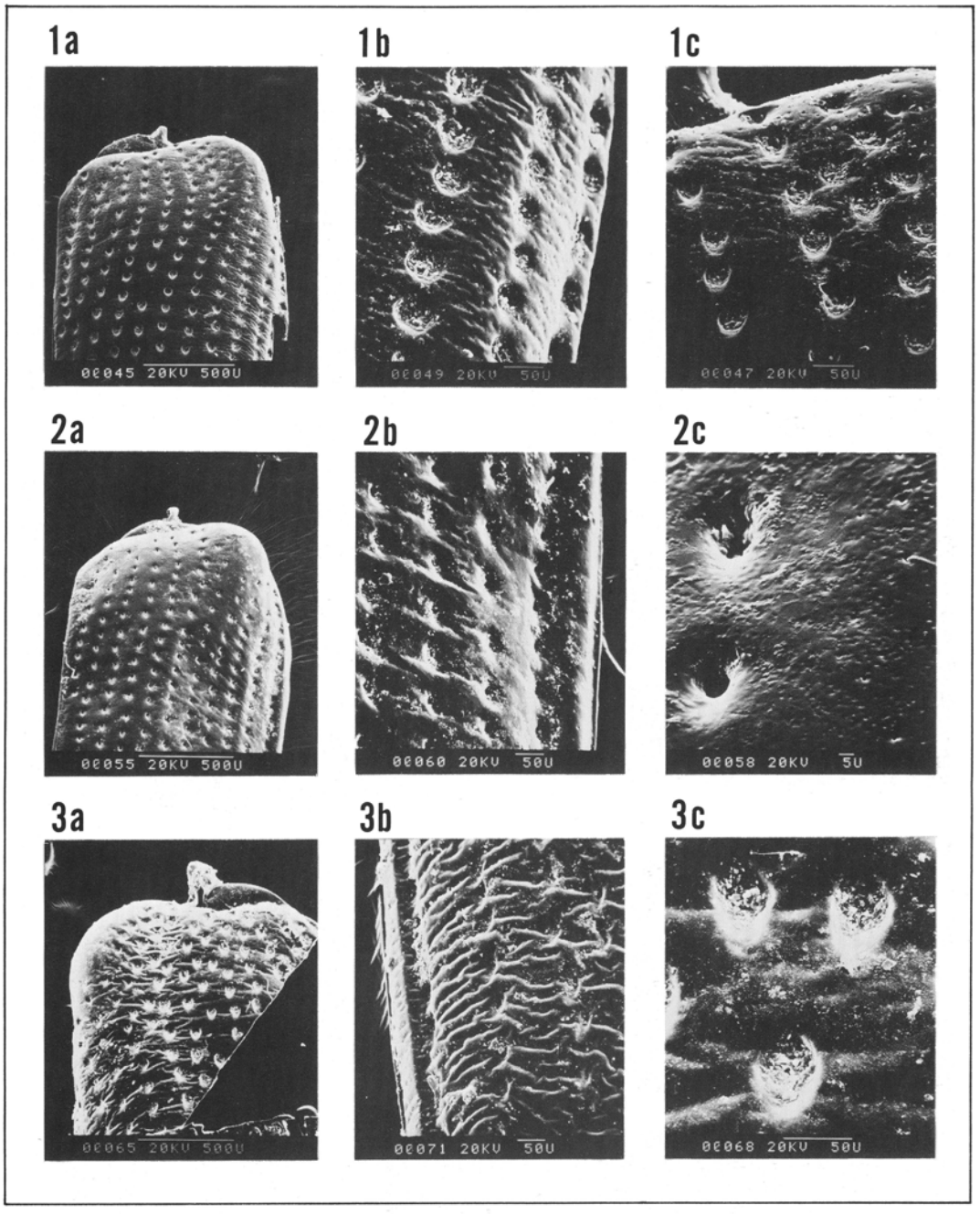


写真２　ネクイハムシ３種の走査型電子顕微鏡写真

１ａ・１ｂ・１ｃ　ガガブタネクイハムシ（勝川遺跡：弥生時代後期）

２ａ・２ｂ・２ｃ　イネネクイハムシ（勝川遺跡：平安時代）

３ａ・３ｂ・３ｃ　キンイロネクイハムシ（勝川遺跡：奈良時代）

伊勢湾地方から見た近江系土器

—とくに弥生中期をめぐっての断想—

石　黒　立　人

I

畿内地方にはあまり見られないある特徴をもった土器が、近江地方の土器であるとして「近江型」あるいは「近江系」と呼称されるようになってからすでに久しい。にも拘らず、そうした名称付与以後の年月とは裏腹に、「近江系」あるいは「近江型」土器の何たるかは、未だもって茫漠とした感がある。それは、近江地方の土器としての「近江（系）型」土器と、畿内地方とは異質な型式学的特徴をもって近江地方に多く分布する土器としての「近江（系）型」土器が、区分の曖昧なるままに一括されてきたことに因る。すなわち、製作地の問題と、そうした土器を作り出した集団の技術的・精神的基盤の問題が峻別されなかったのである。換言するなら、地理的区分のアプリオリな適用の妥当性の評価と、地域性の歴史的把握ということ。このことが、土器を理解する上で最も重要であるにも拘らず、便宜性を優遇したためにあまり考慮されることがなかったのである。

ところで最近、弥生時代中期の「近江（系）型」土器について幾つかの論述がなされている。従来見ることのなかった滋賀県の研究者によるものもある。以下、そうした諸論の比較検討をとおして、また伊勢湾地方で出土したいわゆる「近江（系）型」土器と思われるものを取り上げ、問題の一端を明らかにできればと考えている。(以下、近江系と単純表記する。)

II

伊勢湾地方で出土する近江系は、甕の場合外観上から大きく２類に分けることができる。すなわち、口縁部は厚手で二段口縁といった形状をなして上端が波状（「山形状口縁」とも呼称される）をなすもの－**A類**、口縁部が単に受け口状をなすもの－**B類**である。壺については、近江地方での型式確定ができていない現状において積極的に提示することはできないが、とりあえず議論に供するために敢えて２、３挙げておく。

さて、甕A類は、伊勢：納所遺跡・亀井遺跡、尾張：朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡、などで出土し、共伴土器は中期２を中心とする。口縁部の屈曲部分外面の稜には連続した刻みを、

波頂部には単独の刻みを施す例が多い。また、紋様は口縁部直下外面に直線紋といった趣の横ハケメ、口縁部内面にハケメと同一原体による波状紋が施される。それに対し、甕B類は、上記遺跡のほか伊勢：永井遺跡・起A遺跡・北端遺跡、尾張：大渕遺跡、などで出土し、中期3に伴うものと中期4に伴うものがある。前者はやや厚手であり、口縁部直下の紋様も直線紋（横ハケメではない）が主のようである。しかし、後者になると全体に薄手で口縁部もきっちりした受け口状をなす。紋様も直線紋だけでなく刺突紋（列点紋）や波状紋が加わり複雑となる。以上のように大雑把には、A類→B類という変遷を考えることができる。

ところで、甕B類については問題となる点がある。伊勢地方においては近江系甕から受け口状口縁部のみを取り去ったという状況の形態・紋様をもつ甕がかなりの頻度で出土しており、両者の違いをどう考えるかが問われるからである。中期3に属す例は未だ十分ではないが、中期4に属す例は亀井遺跡を始めとする津市周辺の諸遺跡や鈴鹿市周辺においてかなりの資料集積をみているし、散発的には伊勢全域において出土しているという状況である。中期3にあって尾張地方との関係が強いとはいえ近江地方に隣接する伊勢地方であれば散発的に出土することもありうるが、中期4では瀬戸内・畿内系土器群の波及経路からいって近江地方からの流れは主要であろうから、そこにおいて何故受け口状口縁部を持つ甕＝近江系では無くして受け口状口縁部を取り去った〈擬似近江系〉が高頻度に展開するかが問題である。ここで今結論をだすには至らないけれども、近江地方内部か近江・伊勢の境界付近、あるいは伊勢地方内部に近江系と直接しないセクションがあって、そこで甕について独自に情報変換－この場合は消去－が行われそれが広まった。つまり近江系自体に移動を促す要因がなく瀬戸内・畿内系の動きとは同調しなかったのかもしれない。見方を換えるならば、中期4に至り緊密の度を増し情報変換が非常に限定されて部分的にしか行われないほど近い関係を取り結んだ－固定した－ということであろうか。(故に大和地方に繋がらないことだけは確か。)

上記甕分類には加えなかった、単純に外反する口縁部の端面（口唇部）を突起状に拡張するものや口縁部内面に波状ハケメを施すものは、伊勢：東庄内B遺跡、尾張：朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡、などで出土しているけれども、私は今これらを（かって私も行ったのであるが）限定的に「近江型」と呼称することには賛成できない。このての特徴をもつものは近江地方に固有かというと決してそうではないようである。口唇部に単独圧痕あるいは2個一対の圧痕を加える例は伊勢湾地方においては中期1から出現するし、さらに口縁部内面に波状紋を施す例も同様、伊勢湾地方との関係で理解する余地がある。

口縁部内面紋の出現は、いわゆる櫛描紋という点でみると、条痕紋系土器とくに水神平式壺や岩滑式深鉢に先行現象がある。しかも、前記内面波状紋は調整具としてのハケ原体によって施紋されるのが通常であり、この点も条痕紋系土器の手法と極めて共通している。また、体部外面の直線紋状の横ハケメも同一原体によることは注目して良い。(とはいっても、甕形としての畿内との共通性は否定できないところであるが。)

壺はよくわからない点も多いが、私がこれまで「伊賀型」としてあつかってきたものの中にあるかもしれない。実際、「伊賀型」と呼称しながらその実態はほとんど不明と言うしかないものであり、その資料的な不十分さからまとまった考察をくわえることのできなかったという否定面がある。従って、今後資料の集積をみて体系だてる必要を感じる。ここでは、そうした現状を鑑みて、若干見通し的に述べておこうと思う。

伊勢地方では、中期2になると貝田町式細頸壺とは別に「伊賀型」と呼称したような受け口状口縁部をもちやや頸部の長い壺(太頸と細頸がある)が目立つようになる。伊勢地方は尾張地方との関係も強く、中期1以来緊密な情報交流のあったことをうかがわせるが、こと壺の一部にあっては独自性を表出し、尾張地方にはない－貝田町式壺とはことなる－受け口状口縁壺を採用するのである(「採用」するといったのは、受け口状口縁壺の成立はいわゆる朝日式土器分布圏ではなく、岩滑式土器分布圏で行われるからである。従って、そこにスムーズな型式変化は認められないのであり、新しい形態の波及あるいは採用というとらえ方になるのである)。この点では、近江地方の受け口状口縁壺も同じであり、伊勢と近江のどちらか一方から一方ということではなく、どちらも同じようにある地域から影響を受けたと考えるのが妥当であろう。すなわち、尾張地方を囲んで三河、伊勢、近江、美濃において類似した特徴をもつ土器が分布することを見れば、である(現れ方にはかなりの差がありとても同じ部類に見えないようなものもあるが、相互に比較すれば内実において近似性の高いことは十分理解できると思う。伊勢でみられる頸部のやや長い壺の肩部の段は重要)。

いずれにしても、類似点は決して表面的ではないので、広範囲に比較検討するなかで近江系の範囲を縮小する必要があろうかと思う。と言うより、近江系についての議論が、その範囲を問題外として進められている現状にあること。換言するなら、現状の拡大しきった近江系土器の範囲に対して、いま一度再検討をする必要があること。このことを抜きにしては議論の深化は望めないと思うのである。さらに重ねて言えば、近江系について検討するのに、その内部にあって行うのと外部にあって行うのとでは、結果の見え方も大きく違ってくるだろうこと。極めて、重要な点と思うが。

III

ここでは、国下多美樹・浜崎悟司両氏の論考に焦点をあて、問題の一端を提示したい。

さて、国下論文であるが、考察の進め方はオーソドックスであり、資料についても比較的細かくあたっているようである。しかし幾つかの問題点がある。

（1）近江型甕の規定方法が曖昧である。『土器集成』の佐原分類を前提とし、全く無批判に範囲を設定している。更には、論述の進行から言って初めにもってくるべき「近江系要素の抽出」を後にもってきている。従って、結論的には従来の近江型甕論を踏襲したものとなっている。

（2）弥生中期～後期の地域間交流を扱っているにしては、近江型甕の型式変化に対する認識及び分類の時間性が不明瞭である。

（3）『近江型甕についての一試論』というテーマに規定されたわけでもあるまいが、壺についての認識が甘い。伊勢湾地方の資料をほとんど参照していない。

それでは、浜崎論文はどうであろうか。国下論文に比べて論点はやや明瞭と言えるけれども、やはり次のような問題がある。

（1）「近江型甕」と「近江的特徴」（口縁端部の押圧、口縁部内面の波状ハケメ、頸部外面の横ハケメ）を区別したことは評価できるとはいえ、「近江的特徴」の位置ずけは依然曖昧となっている。本当に近江を規定する特徴であるのか。

（2）近江型甕口縁部の分類の妥当する空間的範囲がはっきりしない。近江地方内において地域的に限られるのかあるいは一般化できるのかどうか。

（3）（2）に係わり、本稿でも重要な点があるが、井藤暁子の指摘した伊勢納所遺跡出土甕の評価について「近江に一般的にみられるものではなく、ましてその初源的形態をとっているとは考え難いこと」は事実としても、近江系に含まれないのかどうか。

（4）地域的な境界設定にまで論を進めているわりには、様式的な視点に欠けるのではないか。すなわち、壺抜きである。いったい甕のみで区分できる境界とはどういった性格のものなのか。甕のみで地域性を強調することは危ういのではないか。

以上両氏の論点のうち問題となる点の一部を抽出してみたが、通して言えることは、「近江型甕」について語っていながら、その本質把握へのアプローチが不十分である。様式とは切り離された著しく不安定な存在としての「近江型甕」をすでに明白な事実とした上での極めて表面的な土器論に終始していると言わざるをえないのであり、その根底には近江系＝畿内系という意識があるように思える。その点では両氏ともとりあげていないが、遺跡調査紹介の小文ではあるとはいえ、岩崎直也による堤ヶ谷遺跡出土土器の分析を十分評

価すべきであると考える。(研究史も大切ではあるが、尊重しすぎればかえって拘束されることにもなりやすい。)

Ⅳ

近江系の型式的特徴は、個体の移動を考慮するなら、単に分布状況で決まるものではない。時間的な前後の型式組列があるかないかが重要であろう。つまり、ここでは口縁部の形成過程を追うことができるかどうかにかかっている。かかる条件の有無を判断材料として考えるならば、波状及び受け口状口縁部をもつ「近江甕」の生成については近江地方以外にはありえない。多少の境界付近での情報交流があり、当該土器に関する情報が流れたとしても、それは周辺の偏差として処理されるにすぎず、中心を変動させるものとはならない。

しかし、浜崎の区別した「近江的特徴」なるものは、個別的な手法差を除いて内面施紋という点から大局的にみるならば、極めて分布範囲が広く、畿内東部周辺を北（能登・加賀）から南（伊勢・三河・遠江）へ帯状につながっている。そしてこの範囲はまた受け口状口縁部をもつ壺の分布域でもあることは、ともかくも両者の間に少なからず関係のあることを示している。

このことは岩崎直也も指摘しているように水神平式を含めた条痕紋系土器との関係において理解すべきものと考えられるのである。その意味で「近江的特徴」という名称について仮であると断ったとしても、用語の不十分さは拭えない。ではどういった範疇で枠付けしたらよいのか。とくにこれといった用語は用意していないが、敢えて言えば、〈伊勢湾・北陸的特徴〉とでも言ったほうが「近江的」に比べればより妥当性はあるかと思う（あるいは、〈弥生文化中部弧状帯〉という地域的枠組みを設定するのもどうか)。

ところで、私の乏しい知識をもとに近江系を考えても、従来行われてきたような畿内地方との対比（多くの場合は、畿内を基準としてそれに当て嵌めていた）に果たしてどれだけ有効性があったのであろうか、私は疑わしいと思う。つまり、近江系という用語の使われ方からみて明らかなように、そこには畿内様式を大枠とした上での地域区分といった意味があることは否定できない。畿内的認識基準から離れて対等に近江系をとらえるにはどうしたらよいのかといった点は何等考慮されていないといったら言い過ぎであろうか。もちろん、研究の取っ掛かりというのであれば十分に意味はあるが、すでに年月の経過した今、同じように使うことにためらいはあるはずである。

畿内様式は、個性を持たない（あるいは過少評価でしか見ようとしない）からこそ、(ある意味でアプリオリな）地域区分によって一定枠内で個性を浮き彫りにしようとした。それに対し、近江地方の土器は見るからに個性の塊であり、素直に土器と対話すれば自ずか

ら様式の姿を現すはずであった。しかし、研究の方向は畿内の延長であったばかりに個性を見落とした。と言うより個性を背後に隠したと言うべきか。畿内的思考の枠に嵌まらないものを除外したことが、近江地方の土器を分からなくしたのではあるまいか。

V

近江地方の土器の重要性は、指標的にみるならば、こと土器に止まらず、恐らくは歴史的な範疇にまで及ぶものであるかもしれない。土器に限って言えば、中期以来の独自性が古墳時代の初めまで維持されること、その独自性も自己完結することなく周辺に対して何等かの形で影響を与えていること等、地域としての在り方は対畿内のレベルにおいて理解することができると考える。あるいは、畿内を規定するものとしての位置に「近江」があると見るのは肩入れしすぎであろうか。　　(1988．1．10)

引用文献・参考文献

国下多美樹　「近江型甕についての一試論」『長岡京古文化論叢』　中山修一先生古希記念事業会編　1986。

浜崎悟司　「弥生土器甕にみられる地域色」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要1　昭和60年度』　滋賀県埋蔵文化財センター　1987。

岩崎直也　「湖東における高地性集落の調査」『滋賀文化財だより』　No.68　財団法人滋賀県文化財保護協会　1982。

三重県教育委員会　「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　1970。

〃　「亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1973。

〃　「辻の内遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1976。

〃　『納所遺跡』　1980。

〃　「起A遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1983。

四日市市教育委員会　『永井遺跡発掘調査報告』　1973。

愛知県教育委員会　『朝日遺跡』　1982。

財団法人愛知県教育サービスセンター　『埋蔵文化財発掘調査年報』　Ⅰ～Ⅲ　1984～1985。

松本洋明　「弥生土器の考察」『末永先生米寿記念献呈論文集』　1985。

拙稿　「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書　'86」『東日本における中期後半の弥生土器』　北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究会・群馬考古学談話会　1986。（時期区分は本稿による）

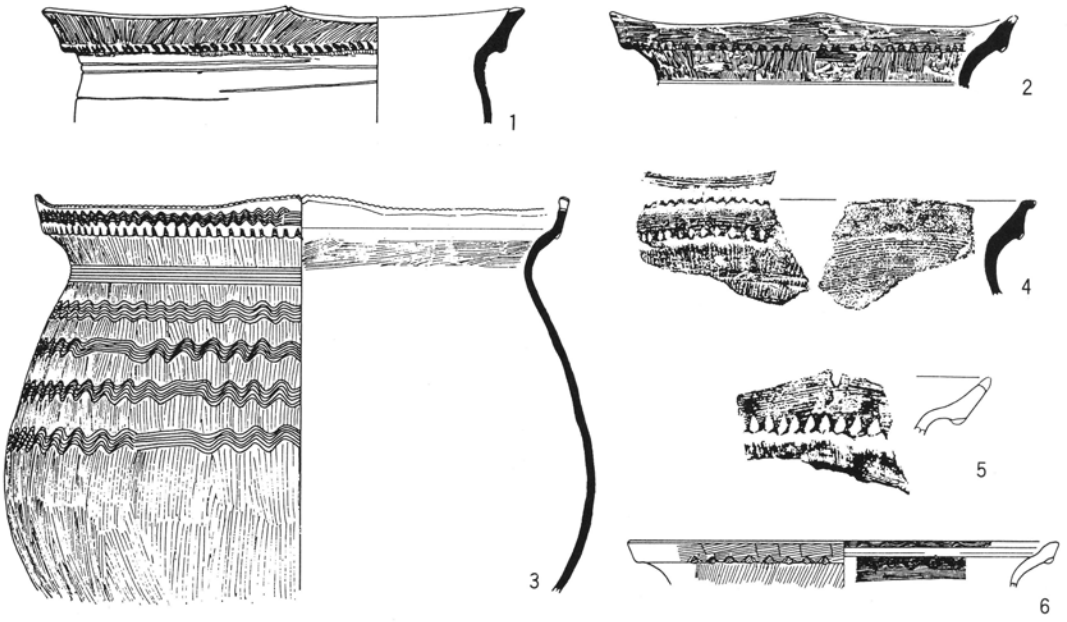


Fig.1　近江系甕A類　12 納所　3・4 亀井　5 朝日　6 阿弥陀寺

資料解説

Fig.1は近江系甕A類、Fig.2は肩部に横ハケメをもつ甕である。6は破片からの復元であるため口縁部が直線的になっているが、他と同じ物であると思われる。口縁部内面へ波状紋を施す例は余り見られない。3を除いて1～6は中期2に属す。3は中期3か。Fig.2の7は中期2、他は中期2～中期3。11・12は肩が丸みを帯びてやや張り出しており、新しい様相を示す（中期3か）。伊勢地方に固有の甕と思われる。口唇部の面が特徴的。

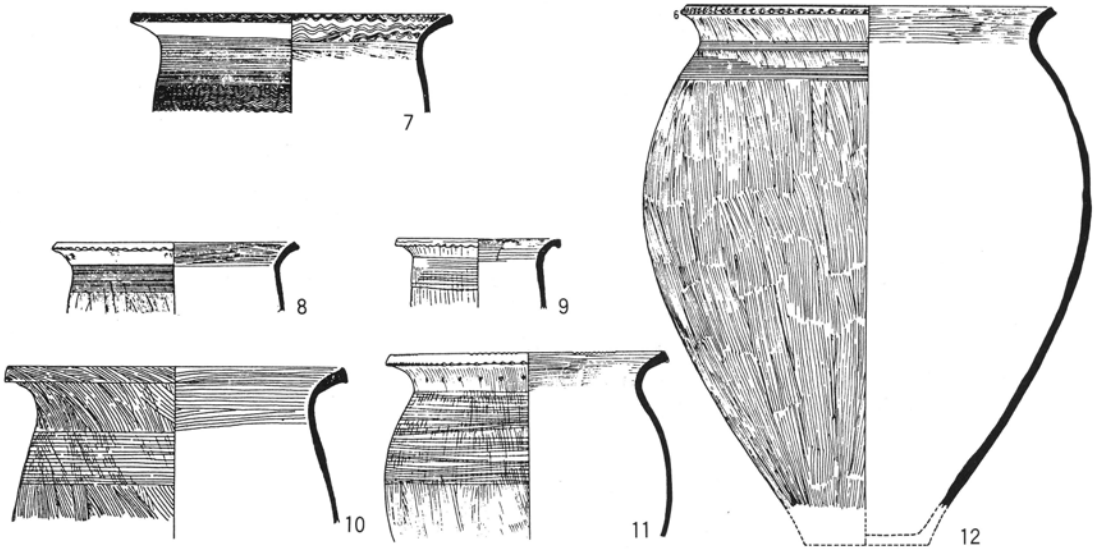


Fig.2 肩部に横ハケメをもつ甕　7・11 東庄内B　8～10 北切　12 地蔵僧

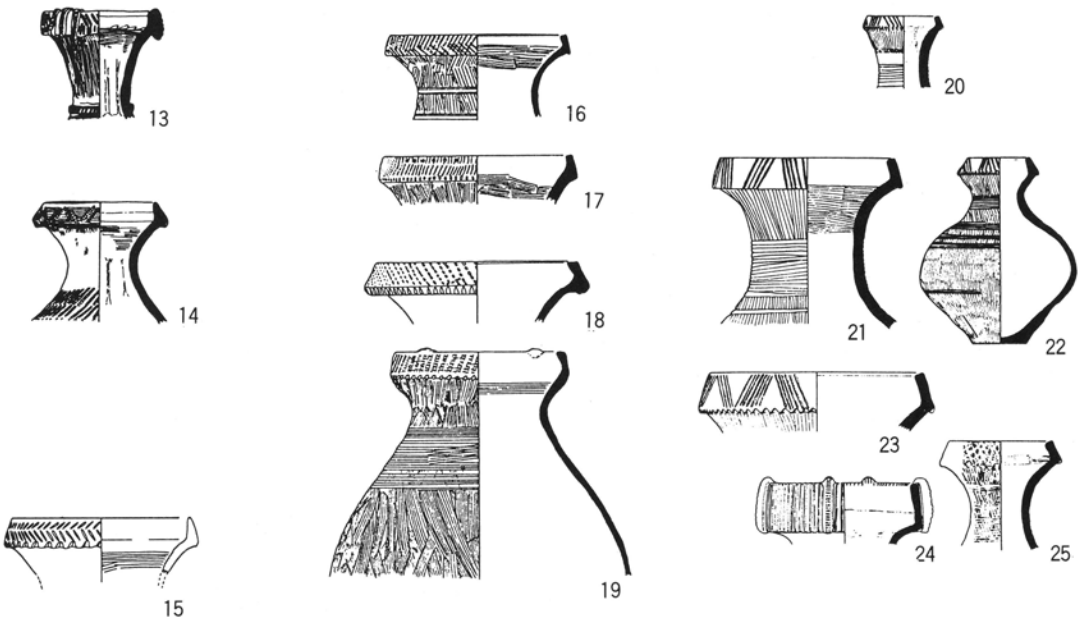


Fig.3　受口状口縁壺　13・14 納所　15 平田　16～19 北切　20～25 東庄内B

Fig.3は中期２の受け口状口縁壺、Fig.4は中期３（～中期４）の受け口状口縁壺。受け口部外面稜に見られる連続した刻みは、岩滑式の刻み突帯に系譜を辿ることができる。棒状浮紋も同様である。19は口唇部が部分的に突出しており、岩崎直也のいう近江系に類似する。13・15・16・18の受け口部外面の列点紋あるいは刺突紋は北陸地方にも類似例がある。
Fig.4の26・27・31は前者の系譜を引くが、28～30は他からの影響を受け部分的に変換している。しかし頸部下の刺突紋は消去されていない。

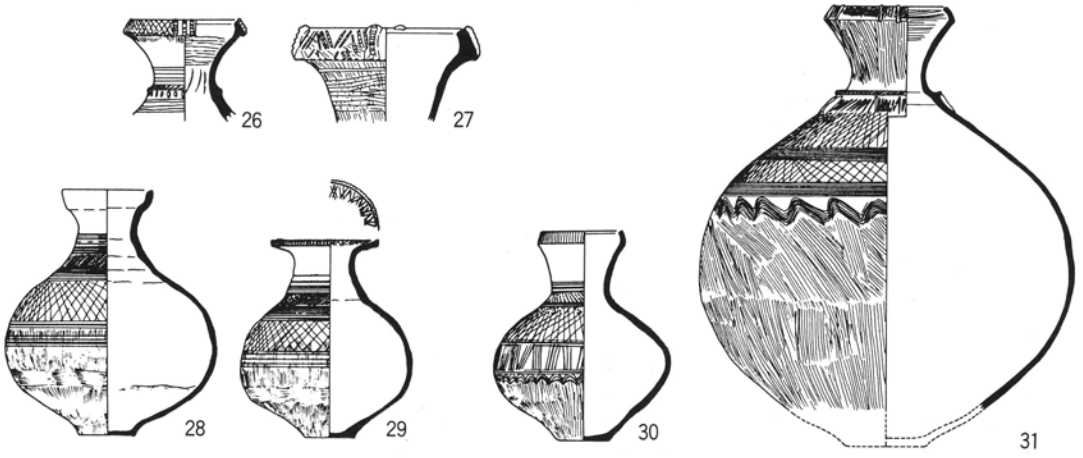


Fig.4　受口状縁壺及びその他　26～31 地蔵僧

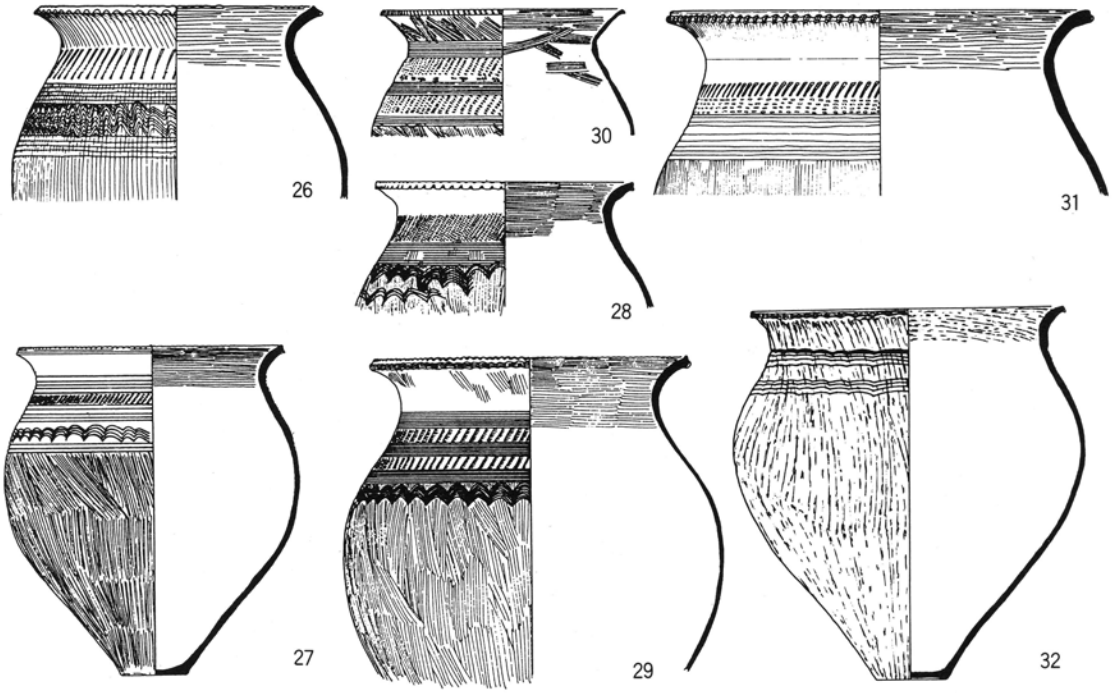


Fig.5　擬似近江系甕　26・31 辻の内　27～30 亀井　32 永井

Fig.5は32が中期３。他は中期４でいずれも擬似近江系甕。肩部の列点・直線（横ハケメと言うよりは紋様）・波状の各紋様の組み合わせのうち、直線と列点は基本となるようだ。口唇部の刻みも同様。Fig.6は33・34が中期２に属し、近江系甕Ｂ類の祖型になる。先に紹介したＡ類とは別系統（地域差）ということになるのであろうか。35～38は近江系甕Ｂ類としたもので、すべて中期４に属す。列点と直線の基本施紋に波状紋を加えるという在り方は、Fig.5・6の両者の系譜的関係が密接なことを物語っている。しかし、筆者の管見に上った限りでは、近江地方において擬似近江系の出土例はなさそうである。とりあえず、源流は近江にあると言うべきか。いずれにしても、甕を賑々しく紋様で飾り立てるのは縄紋的ではないか。

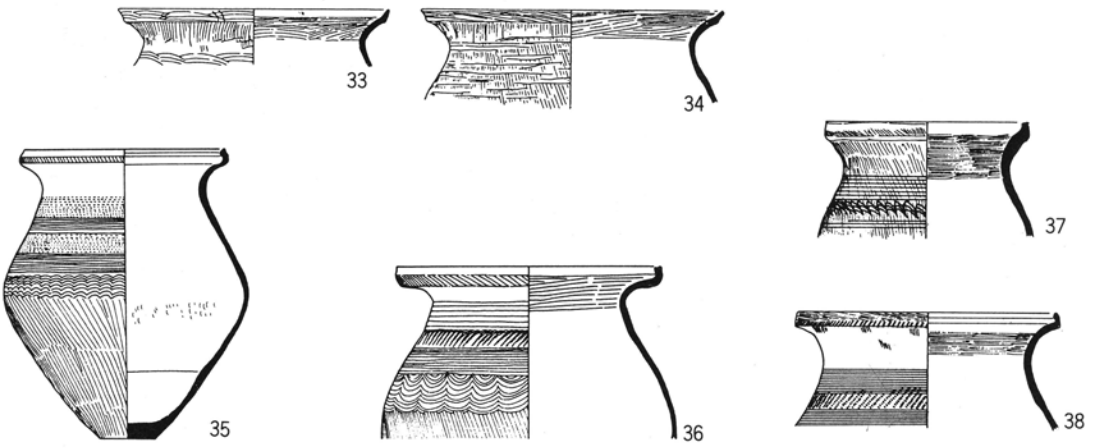


Fig.6　近江系甕Ｂ類　33～36 北切　37・38 亀井

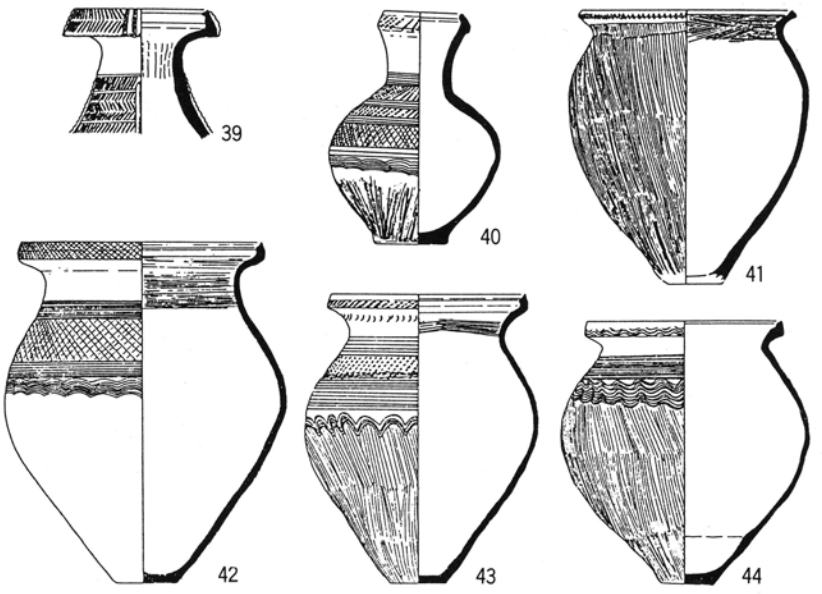


Fig.7　起Ａ遺跡ＳＢ-05出土土器

Fig.7は三重県鈴鹿市起Ａ遺跡SB05出土の土器である。中期４に属す。40はFig.4のグループに近い。42～44は近江系甕Ｂ類である。39はあまり類例のないものであるが、Fig.8の45を参考にすれば、大きくはFig.4のグループに入る。しかし、形態的に見て頸部の長頸傾向は東日本的な特徴と言えるのではないか。特に、頸部から肩部の段に注意が引かれる。Fig.8は全て尾張地方出土の土器である。47は要素がかなり消去されているので近江系甕の範疇から外れるが、受け口状口縁部と肩部の横ハケメ（直線紋というには躊躇する）に見られる共通性はどう見るべきか。あるいは、尾張地方で特徴的な内面ケズリ甕に受け口部を付加したものなのであろうか。

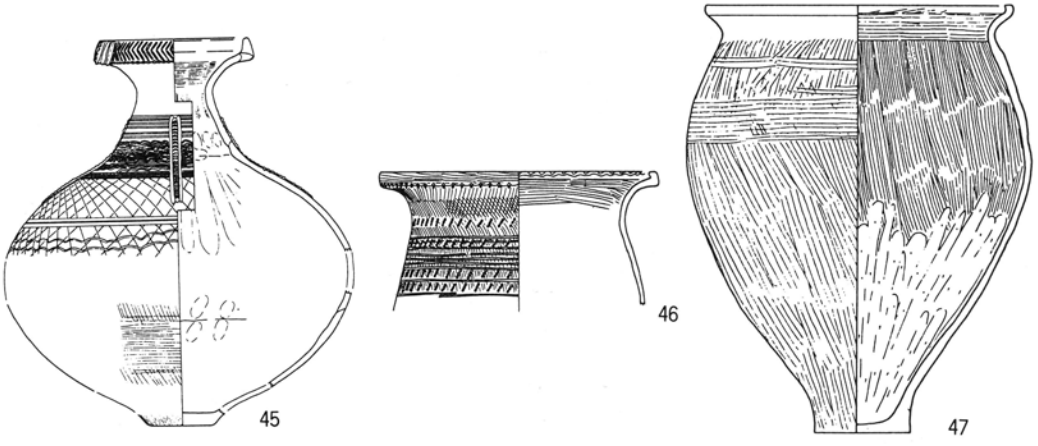


Fig.8　その他　44 阿弥陀寺　45 大渕　46 朝日

朝日遺跡の異形土器について

—鳥形土器を考えるにあたって—

飴谷　一

1．はじめに

本稿は、朝日遺跡から出土した「異形土器」を中心に、弥生時代の幾つかの遺跡から出土例の報告されている「鳥形土器」について若干の考察を試みるものである。

2．朝日遺跡の異形土器

この異形土器（図1）は、下半部が欠損しており、全体の形を知ることは困難である。しかし全体に空洞をなしていること、また下半部に連続する部分の残存状況から、下半部へは壺形土器の体部が続いていたと考えられる。以下、残存部を頭部と呼ぶ。

頭部は皮袋状のふくらみを呈し、その一端に注口をもつ。注口部に相対する尾部には空気孔のような小孔が穿たれ、頂部には刻み目をつけた突帯を付している。

法量は、最大長17cm、最大幅８cm、注口径５cm、である。

頭部は、側部を粘土板によって舟形につくった後、別の粘土紐で頂部をふさいで筒状にしている。

注口部、尾部の両付近は磨耗している。器面は刷毛状工具で調整した後、ナデ調整を施している。

この異形土器の頭部は、その形が従来報告されている弥生時代の「鳥形土器」[(1)]、さらには須恵器の「鳥形瓶」[(2)]にほぼ類似している。また刷毛調整やナデ調整にも、「鳥形土器」同様に鳥の羽を想わせるかのように施されている部分がある。よってこれが「鳥形」をなすものとみる。

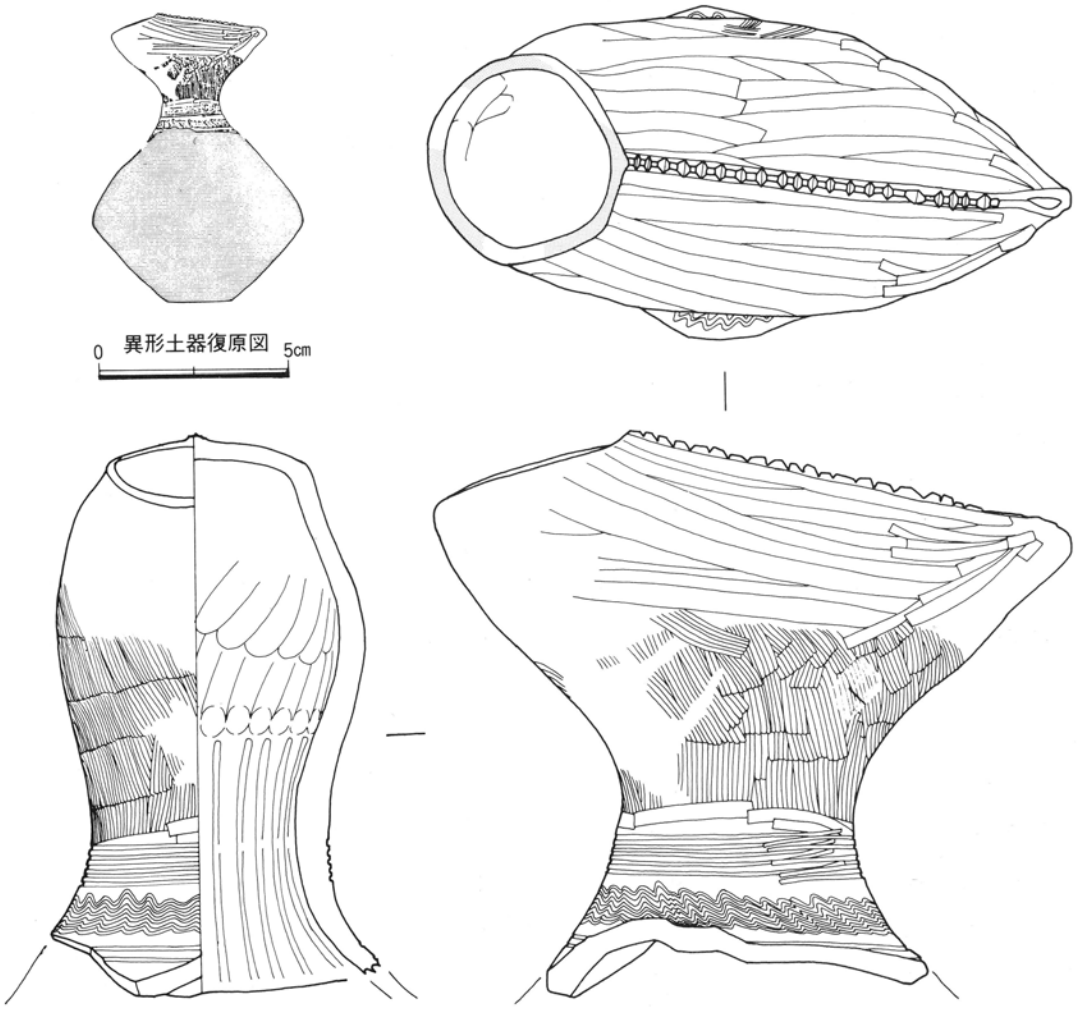
下半部が欠損していること、器形が特殊であることからこの土器の時期を決定することは難しいが、しかし文様構成や共伴遺物からみて弥生時代中期後半の高蔵式期頃に属するものと考える。

この異形土器は朝日遺跡61ＫＬ区で検出した溝（ＳＤ01）から出土した。この溝は、弥生時代中期の朝日遺跡では集落を囲む環濠の外（環濠の南側）に位置している。そしてこの時期には既に溝内に貝層が形成されていたことが調査で確認できた。このことから当時ＳＤ01は集落における廃棄物処理の場としての役割を担っていたと見られる。

3．弥生時代の鳥の表現方法

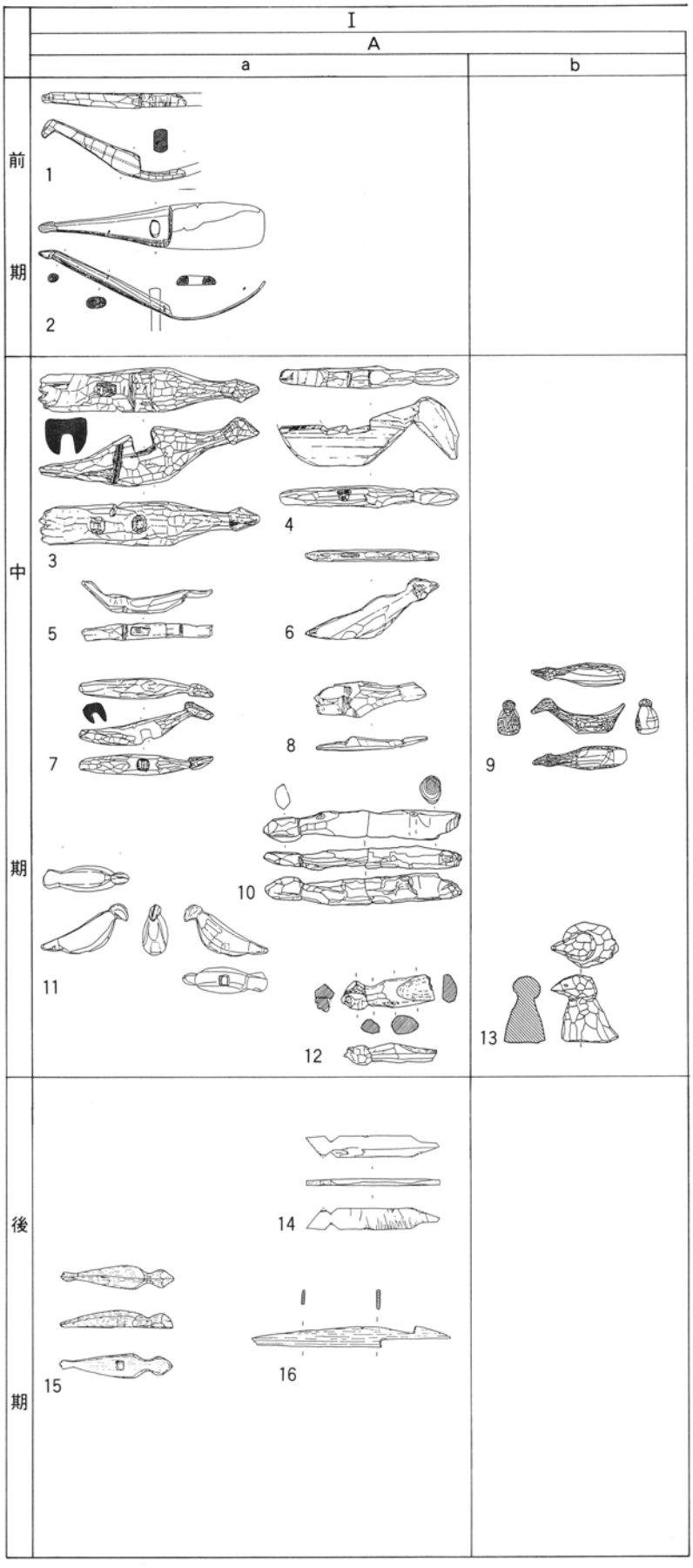
「鳥」のモチーフの多用は弥生時代に始まる。すなわち大陸からの稲作農耕文化の伝播に伴い、鳥は「穀霊を招く」存在[3]として人々に受け入れられたのである。このことは縄文時代の遺跡からは鳥をイメージした遺物は少ないが、稲作文化が基調となる弥生時代に西日本を中心として、それが多くみられる例からも窺うことができる。

弥生時代の遺跡から出土する鳥を表現した遺物は、鳥形木製品、鳥形土製品、鳥形土器がある。また鳥の線刻画やスタンプ文様を施した土器、銅鐸も加えることができる。

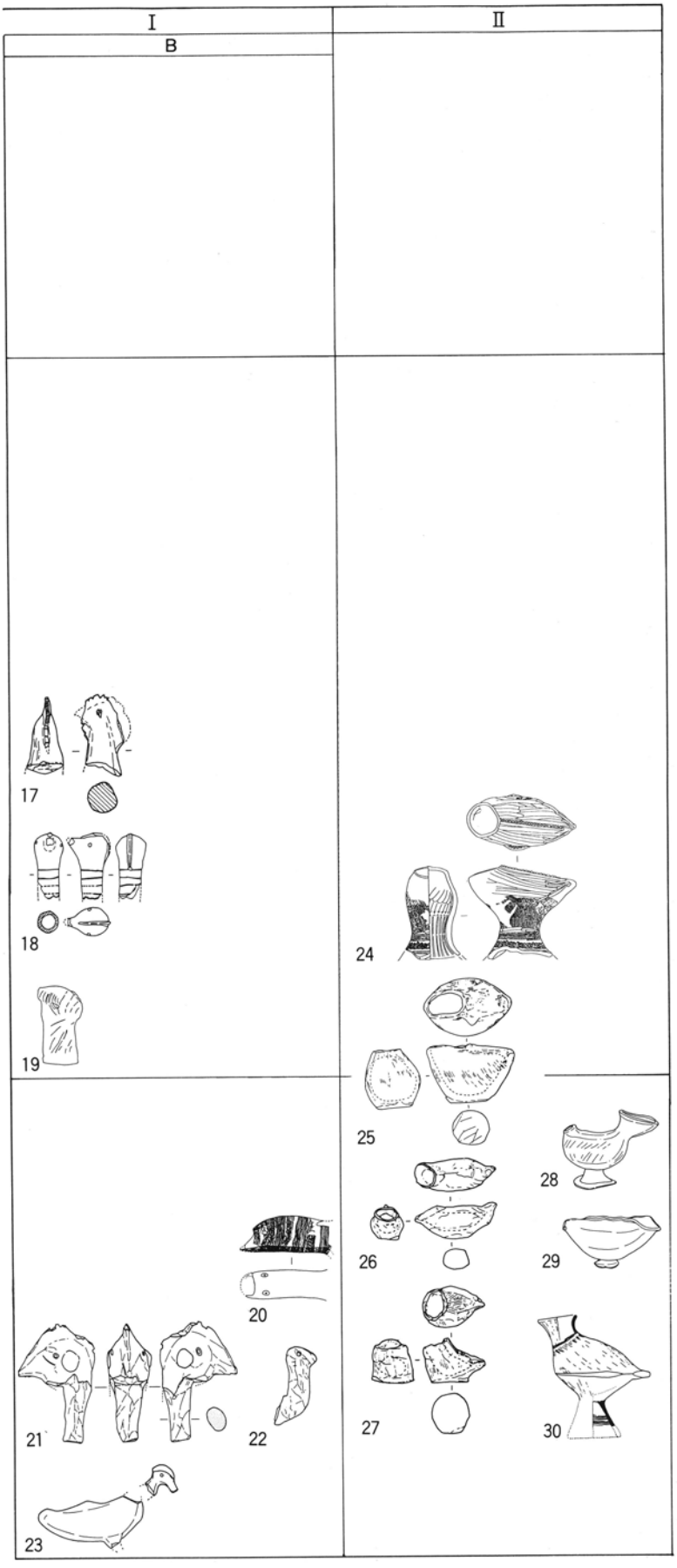


第1図　朝日遺跡61KL区出土異形土器

第2図　弥生時代「鳥形製品」分類図（井上義光氏作成の原図をもとに筆者改編）



第2図 (2)



遺跡名
1 山賀遺跡
2 西川津遺跡
3 ～ 8 池上遺跡
9 詫田西分貝塚
10巨摩廃寺遺跡
11亀井北遺跡
12・14瓜生堂遺跡
13宮ヶ久保遺跡
15・16・24～27
朝日遺跡
17中久世遺跡
18下稗田遺跡
19吉行遺跡
20瑞穂遺跡
21唐古・鍵遺跡
22・28漆町遺跡
23雲山鳥打遺跡
29中村松田遺跡
30蔵平遺跡

ここでは、「鳥」をイメージとして造形されたものを「鳥形製品」とよび、これを「鳥」として完結している鳥形木製品、鳥形土製品をⅠ類（以下両者を合わせて「鳥形模造品」と呼ぶ）、鳥のモチーフを容器に使用した鳥形土器をⅡ類とする。Ⅰ類は木製品と土製品とでは材質が異なっているので、木製品をⅠ—A類、土製品をⅠ—B類に区分する。

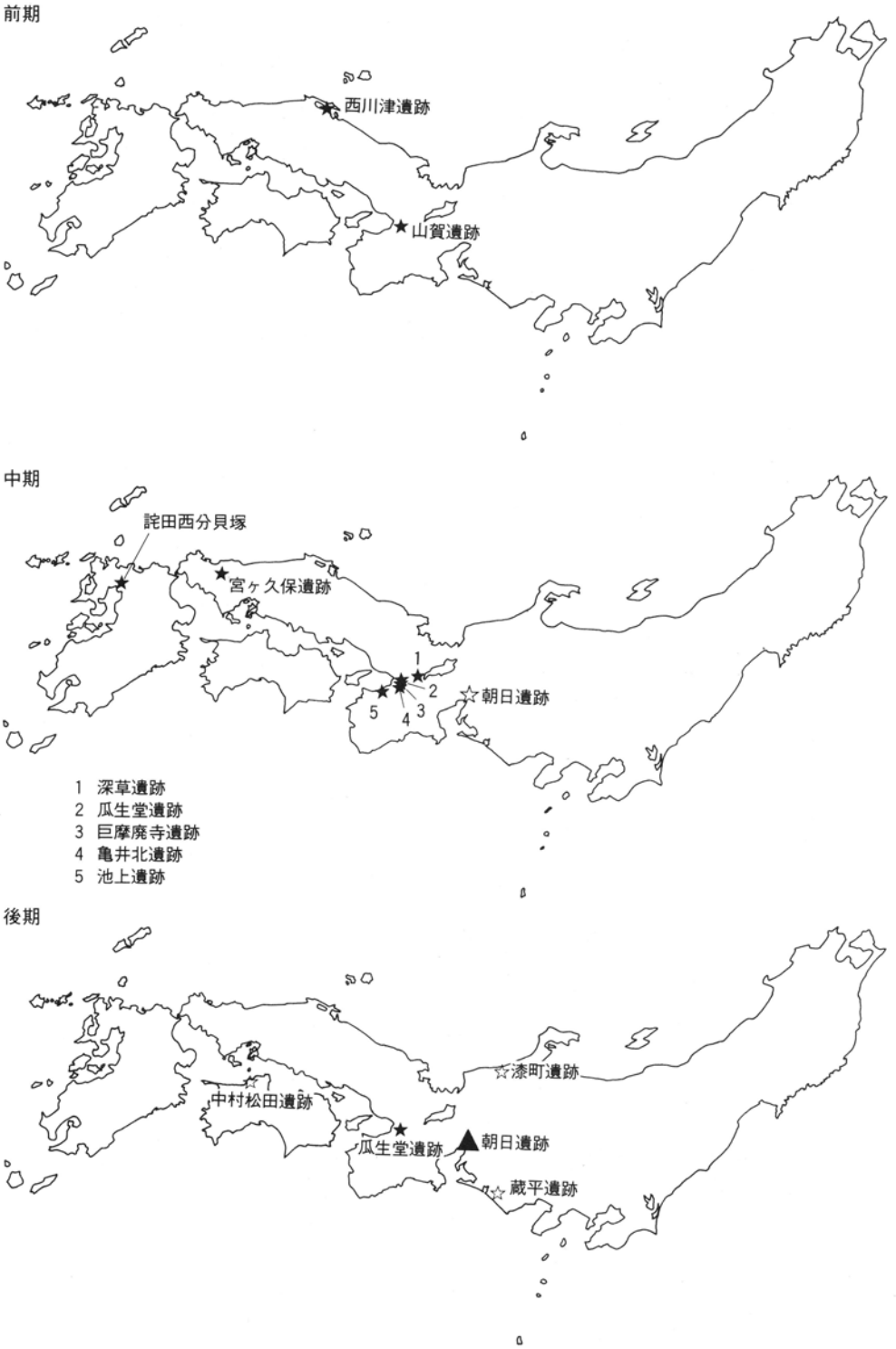
なお鳥の線刻画やスタンプ文様は、鳥を器物として表現したものではないので、この分類から除く。

Ⅰ—A類　井上義光氏の分類を援用[4]し、形態の差異から、「鳥の飛翔を表現したもの（池上遺跡出土例[5]）、「鳥の静止態を表現したもの（宮ヶ久保遺跡出土例[6]）の二種類に細分される。前者をⅠ—Aa類、後者をⅠ—Ab類とする。

Ⅰ—B類　鶏形土製品（唐古・鍵遺跡出土例[7]）と水鳥形土製品（漆町遺跡出土例[8]）の二種類がある。両種ともに全体の形が判るものが少なく、構造形態にも不明な点が多い。従ってここでは、二種類ある、というだけにとどめておく。



第3図　鳥形木製品、鳥形土製品、鳥形土器、鳥の骨出土地分布図



★鳥形木製品 ☆鳥形土器 ▲鳥形木製品と鳥形土器

第4図　弥生時代鳥形木製品と鳥形土器時期別分布図(時期区分は畿内の区分を用いた)

II類　脚部の有無はあるが、いずれも注口をもつ容器である。形態もⅠ—Ａｂ類と同じ鳥の静止態を表している。

今回報告した異形土器は、その形態から、「鳥形」の頭部（口縁部)をもった壺形土器、すなわち「鳥形複合壺」と考えられる。これは抽象化した「鳥」を容器の一部に取り入れたものである。よってここでいう「鳥形土器」の範疇に含むことができる。

以上の分類から、弥生時代の「鳥形製品」は、材質や形態の違いにより、使用形態や場所が異なっていたものと推察される。

4．鳥形土器についての考察

「鳥」の形を写しとった鳥形模造品との関連性をふまえ、弥生時代の鳥形土器について考えていく。

鳥形木製品（Ⅰ—Ａａ類）については、金関恕氏の研究がある[9]。氏はこれを「『魏志東夷伝』馬韓の条に見える蘇塗に関連」させ、「穀霊を招く鳥」としている[10]。

鳥形土製品は、今日までの資料が少なかったことから十分な研究がなされていない。ただ鶏形土製品については、「鶏が農耕儀礼のための犠牲禽であった可能性が強い[11]」ことから、農耕の節目の儀礼の際に「鶏の代役」として用いられたと考えられる。

農耕儀礼[12]の中で「鳥」は人間と「穀霊」との仲介をする重要な位置にあるとされている。鳥形模造品も、(民族例を含めた）民俗事例にみられるように、重要なものであった。さらに「鳥」に注目すれば、鳥をモチーフとした鳥形土器もそれと同等に扱われるものであった可能性が強い。

鳥形模造品が人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は、農耕儀礼の場において人から人へ渡るという行為に伴って、人間と（神聖な液体と化した）「穀霊」とを媒介する「もの」であるといえる[13]。そしてこれらを出土する遺構は、集落を囲む環濠や居住区外の溝、廃棄（特殊）土坑といった生活から除外された場である。従って非日常的行為としての農耕儀礼の後に、そこで使われた鳥形土器は、鳥形模造品と同様、このような場所に投棄されたとみることができる。

最後に弥生時代の鳥形製品の分布状況について少し触れる。

現在まで鳥形木製品、鳥形土製品を出土した遺跡数は、前者が11、後者が８を数える。また鳥形土器の場合は４遺跡から出土している。興味深いのはそれらの多くが伊勢湾地方以西の西日本から出土していることである（鳥形模造品に限ればすべて西日本、図３参照)。この分布の範囲は奇しくも弥生時代前期の「遠賀川式土器」が波及した地域とほぼ重なる。

最近、東日本の弥生時代の遺跡でも水田跡がしばしば発見され、中には前期に遡ると言われているものもある。しかし土器や石器の組成からみて、なお前時代的特徴が色濃く残っているように見受けられる。つまり東日本へは稲作の技術のみが伝播し、西日本的性格を強くもった文化内容は伝播しなかったと考えられる。そのことは稲作農耕儀礼に欠くことのできない「鳥形製品」の分布からも窺われる。(ただ、群馬県御布呂遺跡から出土した鶏の肉塊は、「鳥形製品」に代わる「鳥」が東日本にも存在した可能性を示唆するものかもしれない。しかし、これは後期に下る資料なので、弥生時代の開始に遡ってこの考えをあてはめることは困難である。)

弥生時代の日本列島を概観するとき、西日本と東日本では、明らかに文化内容に差のあることに気がつく。その差異を示す資料は様々であるが、今回とりあげた鳥形土器もそのちがいを知る上で一つの重要な資料を提供したと言える。

今後、弥生時代の「鳥」を考える場合、そのような分布をもたらした要因も併せて考えていかなければならない。資料の増加を期待したい。

5．まとめ

以上の内容を要約すると次のようになる。

1．鳥形模造品が「鳥」を土や木などにうつしかえたものに対し、鳥形土器は鳥のモチーフを容器に採用したものである。

2．今回報告した異形土器は、その形態から鳥形土器の範疇に含むことができる。「鳥形複合壺」である。

3．鳥形模造品は人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は人間の行為に伴い、それらを物理的に媒介する「もの」である。

4．鳥形土器は、その分布状況から、鳥形模造品同様、弥生時代における西日本の特色の1つである。

本稿を作成するにあたり、母校奈良大学の水野正好、酒井龍一両先生より資料の提供や数多くの有益な御教示をいただいた。記して謝意を表する。

1988．2．5

〔注〕

(1) これまで「鳥形土器」を報告している調査例は、朝日遺跡（加藤安信他「土製品」『朝日遺跡』愛知県教育委員会　1982)、蔵平遺跡（柴田稔「静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器」『考古学雑誌』第66巻第1号　1980)、中村松田遺跡（月刊文化財発掘出土情報10　1987)

(2) 原口正三　1979　「須恵器」『日本の原始美術』4　講談社

(3) 金関　恕　1982　「神を招く鳥」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　平凡社

(4) 井上義光　1985　「祭祀研究の一視点　—鳥形模造品を中心として—」『末永先生米寿記念献呈論文集』明新社

(5) ㈶大阪文化財センター　1978　『池上遺跡』　第4分冊の2「木器編」

(6) 中村徹也　1979　「木製品動物群と土器に装飾された動物文—山口県宮ヶ久保遺跡」『考古学雑誌』第65巻第3号

(7) 寺沢　薫　1980　「唐古・鍵遺跡第10次・11次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編

(8) 石川県立埋蔵文化財センター　1982　『漆町遺跡』

(9) 注③参照

(10) 金関氏とは別に水野正好氏は、「村境にあった鳥居の上に立てられていた」とみている（水野正好　1982「弥生時代のまつり—その成立と展開—」『歴史公論』第8巻第9号

(11) 古代学研究会　1987　「鶏の考古学」〈シンポジウム〉　『古代学研究』114号

(12) 金関　恕氏は鳥取県淀江町稲吉遺跡出土の壺形土器に描かれた線刻画を解釈し、弥生時代の農耕儀礼のあり方を捉えようとした（金関　恕　1985　「考古学から観た古事記歌謡」『天理大学学報』145)

(13) 水野正好氏の御教示によれば、「古代において鳥形土器は水鳥を形どったものであった。それは祭の宴に使われ、そこに注がれた液体（酒）を飲むことにより体の内面が浄められる、と信じられた。また水鳥が「霊の放鳥」と呼ばれていたことから、祖霊を迎える儀式に用いられた」といわれる。

〔引用文献〕

行橋市教育委員会　1983　「下稗田遺跡発掘調査概報Ⅳ」

㈶大阪文化財センター　1981　『巨摩・瓜生堂』

〃　1983　『瓜生堂』

〃　1983　『山賀』その2

〃　1986　『亀井北』その3

瀬川芳則　1983　「稲作農耕の社会と民俗」『稲と鉄』（日本民俗文化大系3）小学館

春成秀爾　1987　「銅鐸のまつり」国立歴史民俗資料館研究報告　第12集

宮腰健司　1986　「祭りと道具」『埋蔵文化財　愛知』No.7

吉田富夫　1937　「尾張国瑞穂発見の動物形土器」『考古学』8・9

月刊文化財発掘出土情報　1983　5月号

〃　1984　6月号

〔追　記〕

「鳥形製品」の分類図に、鳥形土製品（Ⅰ－B類）の追加資料として南東山遺跡（愛知県春日井市）出土例をあげておく。これは「水鳥の特徴をよくとらえている」と報告されている。（宮川芳照「鳥形土器」『南東山遺跡』（春日井市遺跡発掘調査報告第4集）春日井市教育委員会　1970)

朝日遺跡出土の外来系土器について—2—

宮腰健司

I

外来系土器の中には、①直接搬入されたものと、②それらをモデルとして在地で製作されたものがあり、②の受容の仕方としては、Ⓐ新出のものとして在来の器種組成の中に組み入れられたり取って変わったりして、部分的に変容しながらも在地化してしまうもの、Ⓑ模倣はされるが器種組成には組み入れられないもの、Ⓒ部分的なところでの模倣が行なわれ、それが器種組成の中に組み入れられるもの、Ⓓ部分的なところでの模倣が行なわれるが、器種組成の中には組み入れられないものがある。ただそれらの区分は、—1—でも述べられていたとおり、明確にはされておらず、多くの問題が含まれている。また、朝日遺跡が位置する尾張地方においては、外来系土器が進出した次の段階には在地化するという現象が幾度となく生じており、後期にいたると縄文時代又は弥生時代前期からの型式的な連続性を保つ純粋な意味での在地土器はみられなくなってしまい、ますます外来系土器の抽出を困難・複雑なものにしている。今回この文においては、朝日遺跡で出土し、昭和62年度までの整理中にピックアップされた後期以降土器のうち、比較的選出しやすい①、②—Ⓑのみを取り上げることとした。また、外来系の区別は土器型式の上での区分であり、胎土については深く言及し得ていない。

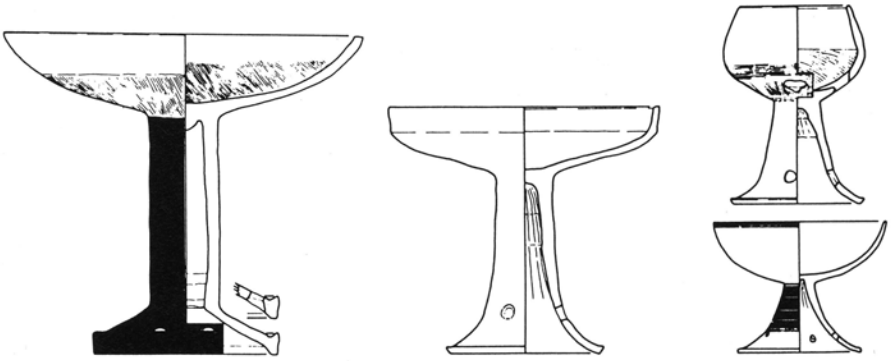
II

現在朝日遺跡で出土している外来系土器を大きく、1—畿内系土器、2—近江系土器、3—北陸・山陰系土器、4—伊勢湾東部系土器の4地域に分ける。また時期区分は弥生時代をⅠ～Ⅵ期に分け、元屋敷古期をⅦ期、中期をⅧ期として記述していきたい。

1．畿内系

Ⅴ期—畿内系の影響が大きく現れるのがⅤ期前半であり、Ⅳ期にみられた大規模な波及の第二波といえる。高杯・長頸壺・器台が大きく変化する器種としてあげられ、搬入土器と思われるものも何点か出土している。そしてそれらの土器はⅤ期後半には在地化し、外来系土器としては扱えなくなってしまい、東海地方に広く分布していく。

Ⅵ期—Ⅵ期後半には、南居住域の内環濠より第1図1のタタキが施されている甕や、第1図2の高坏が出土しているが、量的には極僅かであり、Ⅴ期までの圧倒的な影響はみられなくなる。またこれらは搬入土器であると思われる。



第１図　SX162出土土器(1:6)

Ⅷ期―小型精製土器を始め、畿内系の影響が再び強くなり、柳ヶ坪型壺にと関連づけられる二重口縁壺（第２図１）の出現や、布留式甕（第２図２）が出土している。

２．近江系

尾張に隣接しており、後期以降の当地に多大な影響をもってくる地域として重要な位置を占めているものと考えられる。

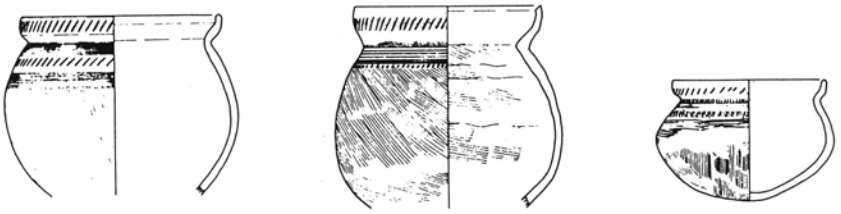
Ⅴ期―近江型の受口鉢がⅤ期に現われてくることは確実であるが、それが前半になるのか後半になるのかは不明である。

Ⅵ期―近江型の受口甕がこの時期に尾張に現われ、Ｓ字状口縁甕の成立を始め大きな影響を与えたものと考えられるが、Ⅵ期のどの時期に流入するのかについては不明である。

３．北陸・山陰系

本来ならば北陸系と山陰系とに分けなければならないところであるが、区別し得ていないので、ここではとりあえず同一地域として取扱う。

Ⅵ期―南居住域の内環濠より出土した台付壺の台（第１図４・５）は、有段をなす台部口縁に擬凹線が廻り、同じ形態の口縁部をもつ壺が上部に付くものと思われる。甕（第１図３）は倒卵形の体部をもち、口縁外面に粘土を貼付し有段口縁状の形状を作り出している。



第２図　朝日遺跡出土の近江系土器(1:6)

Ⅶ～Ⅷ期―外反する杯部をもつ高坏（第２図３）や、有段口縁をもち球形の体部をなす甕（第２図４）があり、双方とも搬入土器かと思われる。

３．伊勢湾東部系

漠然とした地域区分であるが、遠江を中心とした地域を設定し、これに三河地域も加えたい。

Ⅵ期―第１図の６・７は施文方法などに東海東部系の影響を受けているもので、61Ｌ区ＳＺ01より出土している。

Ⅶ～Ⅷ期―下体部が明確に屈折したり、口縁部が折り返されるような壺（第２図５・６・７）をこの地域のものとしてあげたい。

Ⅲ

次に、弥生時代後期以降の朝日遺跡を遺構の推移からたどるとどのような変遷を示すかみてみたい。

Ⅴ期―前半にはⅣ期以来の不安定さが続いており、西及び北墓域に方形周溝墓が築かれるのみである。

後半には、北・南の居住域に環濠が廻らされ、その掘削に前半期の方形周溝墓の溝を利用したり、切断したりしている。当初は１条だけで内側のものより作られており、Ⅴ期末かⅥ期に外側のものが付加されたと考えられる。

Ⅵ期―Ⅵ期前半については不明な点が多く、良好な資料については未検出である。

後半には、北居住域に２条及至５条、南居住域には２条の環濠が廻らされる。南居住域では環濠によって突出部や交錯する出入口が作られており、強固な防禦体制が敷かれていたことが考えられる。しかしこの体制も、Ⅵ期の終りには、環濠への土器の大量廃棄という現象をもって途絶し、61Ｌ区ＳＺ01にみられるように、環濠内にも造墓が行なわれ、環濠の機能停止・集落の縮小を窺わせる。また、弥生時代中期には墓域として用いられていた東微高地に、Ⅵ期の土器が廃棄された溝や井戸状遺構が検出されており、南・北居住域の縮小に伴った集落の分散と考えてよいであろう。

Ⅶ～Ⅷ期―北居住域は不明であるが、南居住域での生活の痕跡はほとんどみられなくなり、Ⅵ期後半に分散した東微高地上に生活の場が続けて営なまれたと思われる。また、弥生時代中期の大型方形周溝墓の周溝が窪地状に残っている場所に土器廃棄を行ったり、周溝を繋げることにより溝を作ったりしている。

以上朝日遺跡の弥生時代後期以降の画期をまとめると下記のようになる。

１．Ⅴ期後半の環濠掘削

２．Ⅵ期後半の環濠への土器廃棄、集落の縮少・分散化

Ⅳ

いままでに外来系土器の推移と遺跡の変遷を述べたが、以下この両者がどのように関連して動いていったか、推定されるところを記してみたい。

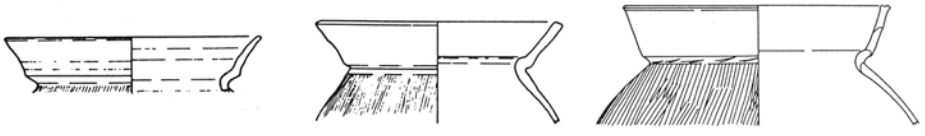
○ＳＸ162より出土した一群に代表される畿内系土器の影響がみられ始めるのはⅤ期前半であり、当初は搬入土器のかたちで朝日遺跡に出現し、その後Ⅴ期後半の土器群を決定づけるのに多大な力をもっていたと考えられる。このことは、Ⅵ期後半に再度構築される〝環濠集落〟に対峙するものが畿内系土器をもつ集団以外であった可能性を示唆しているものと思われる。

○次に外来系土器がみられるのはⅥ期後半である。ただしこれらの一群はⅤ期前半のような衝撃を朝日遺跡の土器には与えておらず、畿内系土器にみられるような搬入土器としてとか、北陸・山陰系土器にみられる折衷土器として採用されるだけで、唯一器種組成の中に影響を与えたものは近江系土器である。このことはⅥ期後半の土器型式が外来系土器の影響を受けず在地の中より生まれてきたことを示しており、その分布から伊勢湾や遠江までの地域に多大な影響力をもっていたことを窺わせている。この在地の力や一体化を作り出したものは、環濠を用した紛争であり、その紛争後Ⅵ期後半土器群が出現してくるものと思われる。逆に言えば、Ⅵ期前半は紛争が生じている混沌の時期とも言える。

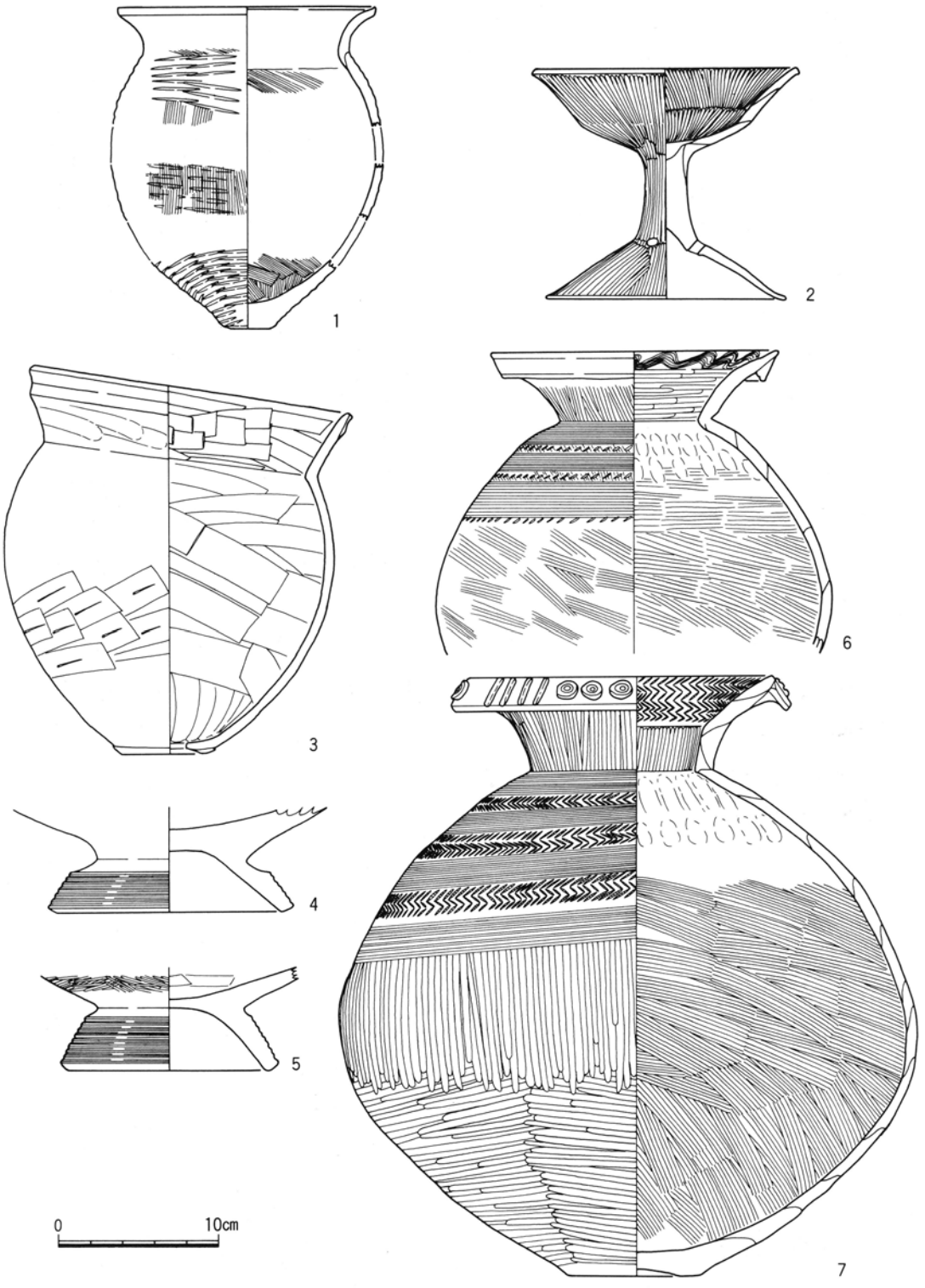
また、Ⅵ期後半の外来系土器は、環濠や周溝墓の周溝への大量廃棄の中より出土しているが、このことは大量廃棄の原因となったものの中に土器の交流によって示される外的な要因があった可能性を示唆しており、この土器交流にみられる広範囲な動向が次のＳ字状口縁甕Ｂ類に代表されるⅦ期に繋がっていくと考えられる。つまり、Ⅵ期後半という時期を生み出した要因と、Ⅶ期を生み出した要因とは質的に相違するものであったことが考えられるのである。

○Ⅷ期には、畿内系土器の二重口縁壺や小型精製土器、及びその影響を受けた柳ヶ坪型土器や、北陸・山陰系土器の影響を受けた有段口縁とＳ字状口縁甕の体部との折衷甕等にみられるように、土器の交流が盛んになり、大きな画期のあったことが窺われる。

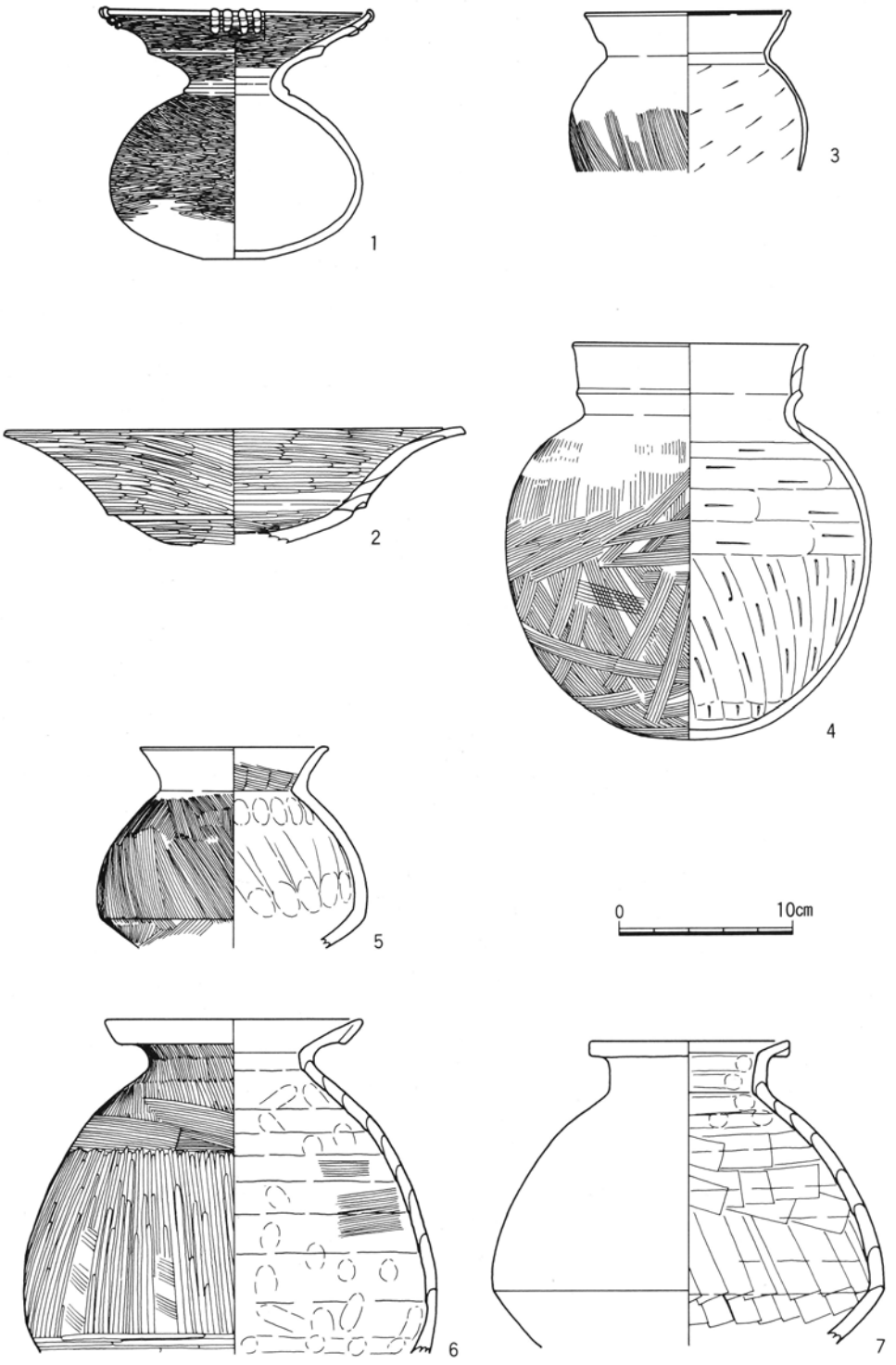
以上、朝日遺跡の後期以降の外来系土器についてまとまりのない記述をしてきた。またこれらのものは整理中であり、点数も少いことから、様相が変わることも多々考えられるし、詳細な器種分類やその消長を追うことによりもっと明確な外来系土器の区分をしなければならない。今後の検討課題として報告書を待ちたいと思う。　(つづく)



第３図　朝日遺跡出土の有段口縁をもつ折衷甕(1:6)



第4図　朝日遺跡出土の外来系土器（Ⅵ期後半）



第5図　朝日遺跡出土の外来系土器(Ⅶ～Ⅷ期)

図版番号	地区・層位	法　量(cm)	口頸部	体　部	底部(脚部)	色調・胎土	残存度
第1図 1	61D SD03上層	口径15.7、器高(19.8) 最大径(16.7)、器厚0.6	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ	外—タタキ後ハケ 内—ハケ又ナデ	外—ナデ 内—ハケ	淡橙褐色 1～2mの砂粒を含む	1/12以下
〃 2	61D SD03上層	口径16.1　器高14.3 底径15　器厚0.4～0.6	外—ナデ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ・ナデ・透し穴3方向 内—ヨコナデ	淡褐色 細かい砂粒・雲母を含む	口縁・体部4/5 脚部欠損
〃 3	61J SD02	口径—　器高— 底径13.7　器厚1.2	—	外—ナデ・ヘラミガキ 内—ナデ	外—擬凹線 内—ヨコナデ・ナデ 底部別粘土貼付	外—丹彩、内—灰褐色 0.5mmの白色・石英砂粒を含む	底部のみ
〃 4	61J SD02	口径—　器高— 底径12.2　器厚1.2	—	外—ナデ・ヘラミガキ 内—板ナデ	外—擬凹線 内—ヨコナデ・ナデ 底部別粘土貼付	外—丹彩、内—灰褐色 1mmの白色砂粒を含む	底部のみ
〃 5	61J SD02	口径19.6　器高22.8 最大径20.4　器厚0.5	外—ヨコナデ 内—板ナデ	外—ケズリ・ナデ 内—板ナデ	別粘土貼付 底部穿孔	淡橙褐色 1mmの白色・黒色・褐色砂粒を含む	完形
〃 6	61L SZ01	口径18　器高— 最大径25　器厚0.7	外—ヨコナデ 内—クシ波状、ヘラミガキ	外—横線後刺突ハケ・丹彩 内—ユビナデ・ハケ	—	淡褐色 1mm以下の砂粒を含む	口縁4/5 体部1/3
〃 7	61L SZ01	口径18.7　器高37.5 最大径35.7　器厚0.7～1	外—ヨコナデ、棒状浮文4、円形浮文4、4対 内—刺突、ヘラミガキ	外—横線後刺突、ヘラミガキ 内—ユビナデ、ハケ	外—ヘラミガキ 内—ハケ	淡褐色 2～4mの砂粒を含む	口縁1/3 体部完形
第2図 1	62I SK01上層	口径15.0　器高14.3 体部最大径14.4 器厚0.4	外—ヘラミガキ後棒状浮文4、4対 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 内—ナデ	外—ヘラミガキ 内—ナデ	灰橙色 1～3mm白色・黒色・雲母砂粒を含む	口縁3/4 体部完形
〃 2	61U SD02	口径25.9　器高— 最大径—　器厚0.7	外—ヘラミガキ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ後屈曲部ナデ、 内—ヘラミガキ後屈曲部ナデ	—	淡黄褐色 2mmの白色砂粒わずかに含む	坏部完形
〃 3	62I SK01上層	口径11.7　器高— 最大径13.6　器厚0.3	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ 端部肥厚	外—ハケ 内—ヘラケズリ	—	灰黄色 1～3mmの白色・黒色・雲母砂粒を含む	口縁1/4 体部3/4
〃 4	61T SD02	口径13.2　器高22.3 最大径20.8　器厚0.4	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ	外—細いハケ 内—横位のヘラケズリ	外—細いハケ 内—縦位のヘラケズリ	淡茶褐色 1mm以下の石英、3mm以下のチャートを含む	全体1/6
〃 5	61T SD02	口径10.6　器高— 最大径15.5　器厚0.6	外—ヨコナデ 内—ハケ後ヨコナデ	外—細いハケ 内—ユビナデ	—	灰白色 0.2mmの白色砂粒を多く含む	全体1/3
〃 6	61T SD02	口径14.5　器高— 最大径23.6　器厚0.7	ヨコナデ 粘土折り返し	外—ハケ後ヘラミガキ 内—ユビナデ	—	赤褐色 3mm以下の白色砂粒をわずかに含む	体部のみ
〃 7	61T SD02	口径11.4　器高— 最大径22.4　器厚0.8	ヨコナデ 粘土貼付	外—ハケ後ナデ 内—板ナデ	—	淡褐色 0.1～0.5mmの石英砂粒を多く含む	口縁2/3 体部1/3

第1表　土器観察表

清洲宿についての一考察

中　野　良　法

1．清洲宿の概要

昭和61年から行われた五条川河川改修に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査において、江戸時代以降の遺構・遺物が確認された。この時期の遺構・遺物が検出された調査地点は61A区、62C区、61B区である（第1図）。これらの地区は江戸時代に清洲宿の町並が形成されたところである。

1610年（慶長15年）から行われた清洲城及び城下町の名古屋移転（いわゆる「清須越」）ののち、その故址に1616年（元和2年）、名古屋と大垣を結ぶ美濃街道の宿駅として、清洲宿が桑名町に設置された。1624年（寛永元年）には本成寺を建立し、久証寺を甚目寺から移転させるなど町としての様相を確立していった。1668年（寛文8年）、火災のため宿駅を神明町に移転した。第1図は天保年間に作られた「清洲宿詳細図」(1)及び「清洲町史」を基に作製したものである。当時旅篭は15軒、揚屋・置屋が40軒ほどあった。明治に入り、政治体制が変革するとともに、1871年（明治4年）清洲邑宰所（旧代官所）が廃されるなど清洲宿の政治的な重要性の衰えが窺われる。その後、1886年（明治19年）には東海道線が敷設されると、清洲宿の運輸面の衰退も窺われる。また1891年（明治24年）の濃尾地震により清洲周辺も多大な被害を受け、宿場の衰退に拍車をかけた。



第1図　清洲宿主要施設配置図

2．遺構が語るもの

清洲町では、現在も宿場の町屋が残されていたり、美濃街道が生活道路として重要な位置にあるなど、清洲宿当時の生活面と現代の生活面がほぼ同レベルに存在すること、また土地事情や開発などによる掘削によって、宿場町の遺構の残存状況はあまり良好とはいえない。この2年間の発掘調査では、井戸・廃棄土坑・溝など比較的深く掘り込まれた遺構しか確認しえなかった（第4図）。したがってここでは溝・井戸・廃棄土坑から発掘調査地区での宿場町の地割を想定してみたい。

61A区では4箇所の地割が想定される。いずれも溝によって区画され、井戸または廃棄土坑が配されている（第2図）。それはSD01によって区画され、SE01を含む地区、SD01・03・07・SK33によって区画され、SK01を含む地区、SD03・07によって区画され、SE11を含む地区、SK33・SD06によって区画され、SK02・SE02・03・04を含む地区である。この調査区の地割は、長方形を示す箇所、正方形を示す箇所が組み合わされた不整区割が想定される。

62C区では大きく3箇所の地割が想定される。それはSE04・13・14によって構成された地区、SE06・10・11によって構成された地区、SE05・08・09によって構成された地区である。これらの井戸群はいずれも3基づつの切り合い関係にあり、段階的に南に移行する傾向を示している（第3図）。SE14及びSE11は、現存する美濃街道からの距離がほぼ等しい。SE13及びSE10、SE04及びSE06の位置関係もほぼ等しい。したがって、62C区では、短冊型の地割が少くとも3箇所想定される。

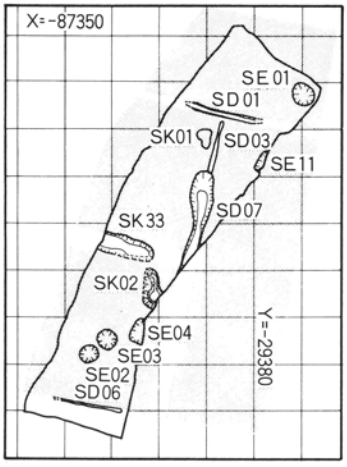
61B区ではSK45のみであるため、この調査区は町屋が展開する区域の外側にあたると思われる。

3．出土遺物

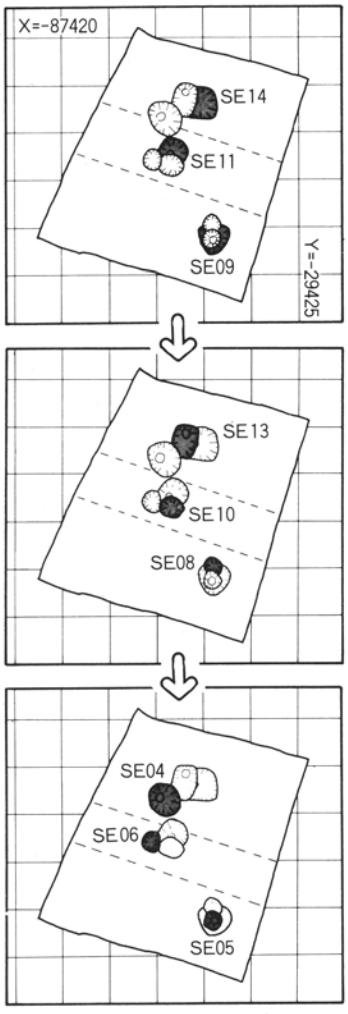
ここでは主な遺構から出土した遺物を紹介する。いずれの遺構も・瀬戸・美濃系の陶磁器が大多数を占める。

61A区SK01からは陶器・磁器ともに椀類（第6図1・2）、皿類（第6図4・5）、瓶類（第6図10・11・12）、灯明具（第6図8・9）、蓋類（第6図6）、蓋物（第6図7）などの日用雑器がほとんどである。いずれも瀬戸・美濃系で、第6図8・12は磁器である。第6図3は産地は不明であるが、文様を全て細い線で描いた、造りの丁寧な磁器である。SK02では陶器の椀類（第6図13・14・15・16）が多くを占める。他には皿類（第6図17・18）、鉢類、灯明具などがあり、この遺構も日用雑器がほとんどである。第6図にあげた遺物はいずれも瀬戸・美濃系の陶器である。

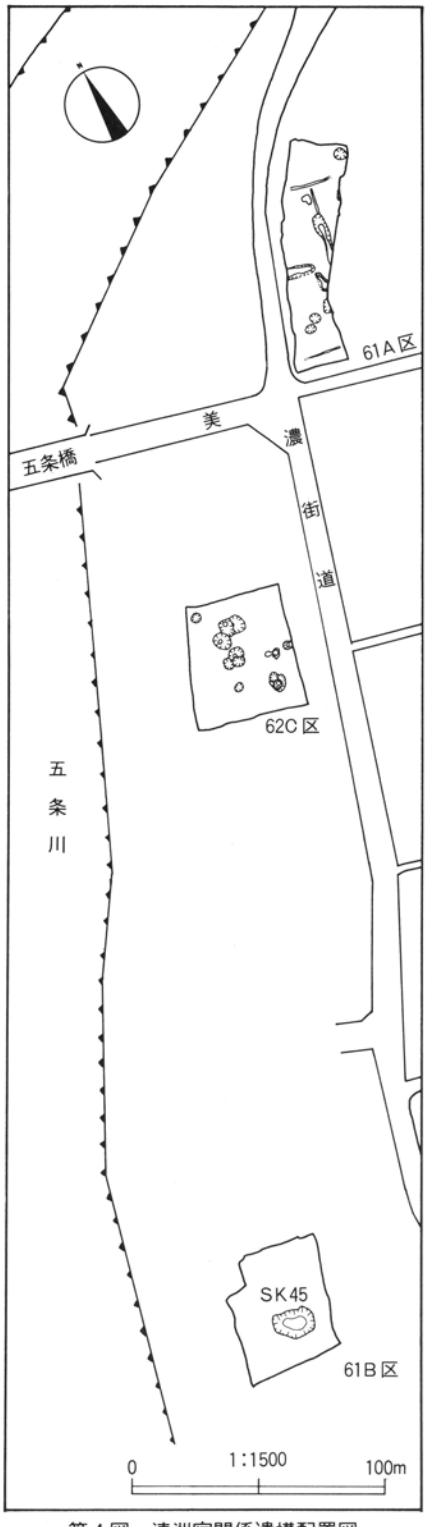
61B区SK45は、61A区SK01・02に比べ遺物がかなり多量に出土した。㈶愛知県埋



第2図　61A区地割想定図



第3図　62C区地割想定図



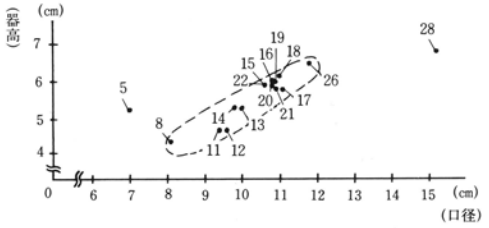
第4図　清洲宿関係遺構配置図

表－1　61A区ＳＫ01出土磁器椀（瀬戸・美濃系）計測値

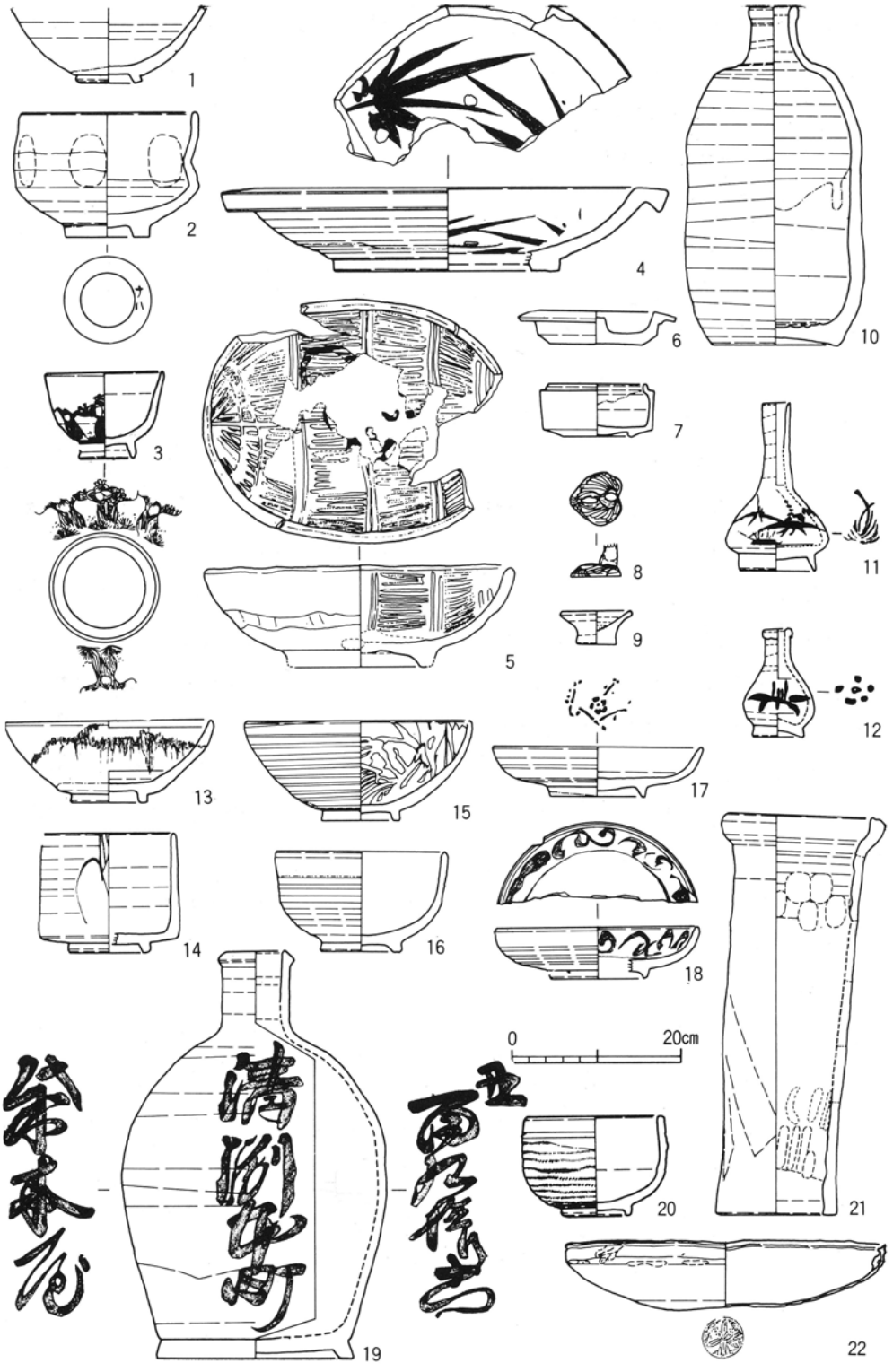
（単位はcm）

遺物番号	口径	底径	器高	文　様	備考
第５図－１		2.0			Ⅰ類
2		2.6		源氏香に植物文	〃
3		2.1			Ⅱ類
4		2.8		花文	〃
5	7.0	3.4	5.15	宝珠文	〃
6	7.6			鳥文	〃
7		6.0		笹文	〃
8	8.1	3.0	4.3	花文	Ⅲ類
9	8.7			渦文	〃
10		3.3			〃
11	9.4	4.0	4.6	蝶文	〃
12	9.6	4.0	4.6	梅花文	〃
13	10.0	3.9	5.2	花に蝶文	〃
14	9.8	3.6	5.2	花文	〃
15	10.6	4.0	5.8	山水と漢詩文	〃
16	10.8	4.1	5.95	芒文	〃
17	11.1	4.0	5.7	菊唐草文	〃
18	11.0	4.0	6.05	植物文	〃
19	10.9	4.2	5.9	菊文	〃
20	10.8	4.4	5.8	笹文	〃
21	10.9	4.3	5.7	丸文	〃

遺物番号	口径	底径	器高	文　様	備考
第５図－22	10.6	4.2	5.8	丸文	Ⅲ類
23		4.2		唐草文	〃
24		4.3			〃
25		4.3		雲に縦線文	〃
26	11.8	5.0	6.4	花文	〃
27		4.7		植物文	〃
28	15.2	5.8	6.7	花と文字文	Ⅳ類
29		3.0		植物文	Ⅴ類
30		3.3		植物文	〃
31		3.0		源氏香に河骨文	Ⅵ類
32		6.0			Ⅶ類



第５図　61A区SK01出土磁器椀（瀬戸・美濃系）（1:4）



第6図　主な遺構の出土遺物(1～20は1:4、21・22は1:8)

蔵文化財センターの「昭和61年度年報」に概要を記してあるため、ここではごく一部を紹介しておく。第6図19にみられるように、比較的法量の大きい瓶類（通称「通い徳利」）には屋号・町名・番号が必ず記されている。第6図19は呉須を使用しているが、他に鉄釉などもみられる。瀬戸・美濃系である。第6図21は、常滑系のいわゆる「アカモノ」と称される非型押しの土管である。第6図22は土師器ナベ（焙烙ナベ）である。

第6図20は、62C区SE04出土の椀（鐙茶椀）で、産地は瀬戸・美濃系である。

次に、清洲宿関係のほとんどの遺構から確認された瀬戸・美濃系の磁器について、61A区SK01出土の碗類を例に紹介する。

この椀類は7分類できる。I類は器高に対して口径が2～3倍ある、いわゆる「小杯」である（第5図1・2）。II類は器高に対して口径が1.4倍あり、胴部がかなり立ち上がるタイプである（第5図3～7）。III類は器高に対して口径が1.8～1.9倍あり、口縁部が外反するタイプである（第5図8～27）。III類の中でも法量により5類に小区分できる。口径9cm以下の器形（第5図8～10）、口径9.5cm前後の器形（第5図11・12）、口径9.9cm前後の器形（第5図13・14）、口径10.6～11.1cmの器形（第5図15～25）、口径11.8cmの器形（第5図26・27）である。IV類は口径が15.2cmと大ぶりの椀である（第5図28）。V類は底径に対して、腰部から胴部にかけて立ち上がりの緩やかなタイプである（第5図29・30）。VI類は高台脇と腰部がほぼ同じ高さを測り、胴部は直立するタイプである（第5図31）。VII類は高台が高く、高台脇から口縁部にかけてほぼ直行する、いわゆる「広東茶椀」である（第5図32）。

器形からは7類に分類できたが、この分類は必ずしも文様[2]には反映されていない[3]（表－1）。

61A区・62C区・61B区で検出された清洲関係の遺構から出土した遺物は、若干18世紀のものがみられるが、そのほとんどは19世紀のもの[4]である。

4．結語

以上述べてきた遺構の展開と出土遺物から考察を加えるならば、五条橋以東（特に発掘調査区付近）において町屋が展開するのは、19世紀に入ってからのことと考えられる。

ところで、筆者の認識不足のためにまとまりのない考察となったが、本稿が、今後清洲宿についてより詳細な考察を行う第1歩となれば幸いである。

最後に、この小稿をまとめるにあたって御教示をえた愛知県陶磁資料館学芸員仲野泰裕氏、㈶愛知県埋蔵文化財センター職員諸氏に記して厚く謝意を表します。

〔注〕

(1)わかりやすく書き改めたものが清洲町民センターに所蔵されている。原図は徳川黎明会所蔵。

(2)文様の名称を記すにあたっては、小川啓司「そば猪口絵柄事典」光芸出版　1987、　東北大学埋蔵文化財調査委員会「東北大学埋蔵文化財調査年報１」1985　を参考にした。

(3)但し、第５図13・15・16・19は口縁部内面に幾何学文を配している。

(4)ここ数年、各遺跡でかなり時期的なところがおさえられているが、19世紀についてはいまだ不確定なところが多いことを考慮して、ここでは19世紀を小区分していない。

埋蔵文化財センターの活動

埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会

本年度の「埋蔵文化財展」は、三河会場では、愛知県教育委員会と豊田市教育委員会との共催により、「愛知の源」のテーマで、また尾張会場では、愛知県教育委員会との共催により、「弥生のむら　朝日遺跡」をテーマに開催した。両会場共、会期中に、併せて、「埋蔵文化財講演会」を開催した。

埋蔵文化財展

	尾張地区	三河地区
会場	愛知県埋蔵文化財調査センター 資料管理閲覧室	豊田市棒の手会館 特別展示室
会期	12月2日(水)～12月8日(火)（7日間）	8月15日(土)～8月27日(木)（11日間）
展示品	1．出土品（475点） 朝日遺跡 小型彷製鏡、卜骨、腕輪 イノシシの下顎骨、鹿の骨にささった石鏃 ユハズ形鹿角製品、牙製装身具 勾玉、ガラス玉、管玉 丹彩壺、台付壺、鳥形複合壺 動物文様の土器片など 大渕遺跡（古墳時代） 甑、平瓶、提瓶など 石堂野遺跡（古墳～平安時代） 短頸壺、碗、甕など 阿弥陀寺遺跡（弥生時代） 円窓付壺、無頸壺、柱状片刃など 清洲城下町遺跡（安土・桃山時代） 文禄二年銘椀、黒楽茶椀、赤楽茶椀など 2．写真パネル類（25点）	1．出土品（305点） 石堂野遺跡（古墳～平安時代） 短頸壺、須恵器杯、甕など 杉山遺跡（平安～室町時代） 陶丸、灰釉皿、菊皿など 朝日遺跡（弥生時代） 小型彷製鏡、イノシシ下顎骨 牙製装身具、動物模様の土器片 卜骨、勾玉、管玉 玉作り関連遺物など 清洲城下町遺跡（安土・桃山時代） 天正十四年銘丸瓦、金箔瓦 堆黒香合、長石釉椀など 廻間遺跡（古墳時代） 線刻文土器 勝川遺跡（古墳時代） 刻書埴輪 2．写真パネル類（56点）
入場者	834人（1日平均119人）	1449人（1日平均132人）
その他	解説用パンフレット（B5判8頁）を配布	解説用パンフレット（B5判4頁）を配布

埋蔵文化財講演会

	尾張地区	三河地区
会場	愛知県埋蔵文化財調査センター 2階、研修室	豊田市棒の手会館 学習室
開催日	12月6日(日)	8月23日(日)
講師 演題	名古屋大学教授　楢崎彰一氏 「中世のやきもの」	信州大学教授　大参義一氏 「先史時代の愛知」
入場者	194人	122人

発掘調査技術等研修会

愛知県教育委員会との共催で、市町村の埋蔵文化財担当職員を対象とした発掘調査技術等研修会を実施した。参加者は、基礎研修会が33名、専門研修会が66名であった。

基礎研修会日程

9月8日(火)	9月9日(水)
開講式	講　義　Ⅳ 「補助金制度の活用」 講　師　文化財課 赤羽一郎氏
講　義　Ⅰ 「愛知県における埋蔵文化財行政の現状と課題」 講　師　愛知県埋蔵文化財調査センター 伊藤　稔氏	講　義　Ⅴ 「出土遺物の保存と活用」 講　師　愛知県埋蔵文化財調査センター 加藤安信氏
講　義　Ⅱ 「遺跡調査の方法」 講　師　㈶愛知県埋蔵文化財センター 鷲野　勉氏	閉　講　式
講　義　Ⅲ 「発掘調査に関する予算編成の実際」 講　師　文化財課 遠藤才文氏	「勝川遺跡」発掘調査現場見学

専門研修会日程

1月26日(火)	1月27日(水)
閉　講　式	講　義　Ⅳ 「条痕文系土器」 講　師　信州大学教授 大参義一氏
講　義　Ⅰ 「木材の同定」 講　師　名古屋大学教授 木方洋二氏	講　義　Ⅴ 「古代の瓦」 講　師　京都国立博物館 森　郁夫氏
講　義　Ⅱ 「世界の中の縄文・弥生」 講　師　奈良国立文化財研究所 佐原　真氏	開　講　式
講　義　Ⅲ 「愛知県における埋蔵文化財行政の現状と課題」 講　師　愛知県埋蔵文化財調査センター 伊藤　稔氏	愛知県埋蔵文化財調査センター 施設見学

資料の貸出・提供

財団法人愛知県埋蔵文化財センター保管資料の利用については、出土品の貸出について5件、写真等の資料の使用について10件の依頼があったが、いずれもその要望に応じた。

出土遺物の貸出

貸出先	目的	貸出資料	期間
滋賀県立近江風土記の丘資料館	特別展「県外出土の信楽焼」	朝日西遺跡、清洲城下町遺跡出土品　計3点	62年9月3日〜11月25日
大阪市立博物館	特別展「動物の考古学」	朝日遺跡出土品　計40点	62年9月16日〜11月20日
瑞浪陶磁資料館	特別展「東海の形象はにわ展」	勝川遺跡出土刻書埴輪片　計1点	62年9月22日〜11月25日
岐阜市歴史博物館	特別展「東海のあけぼの」	朝日遺跡、廻間遺跡、出土品　計19点	62年10月3日〜11月25日
尾西市歴史民俗資料館	特別展「土鈴－その彩と形－」	清洲城下町遺跡、阿弥陀寺遺跡出土品　計4点	62年10月20日〜12月12日

写真等資料の提供

提供者	目的	提供資料	提供日
株式会社　浜島書店	『改訂総合資料日本史』掲載	朝日遺跡方形周溝墓写真1点	62年7月23日
尾張社会教育研究会	『尾張の文化財とくらし』掲載	朝日遺跡　写真5点 逆茂木、ヤナ、遺跡全景など 清洲城下町遺跡　写真7点 天正十四年銘瓦、将棋駒など 朝日西遺跡　写真1点 文禄弐年「楽師」銘碗	62年8月13日
東海農政局濃尾用水第二期農業水利事業所	『活きづく木曽の清水』掲載	朝日遺跡　写真8点 調査風景、柵、櫛など	62年8月31日
名古屋市立浮野小学校	浮野小学校の展示コーナーへの展示	朝日遺跡　写真52点 住居跡群、鳥形、人形など	62年9月1日
朝日新聞社出版局	『アサヒグラフ』87古代史発掘総まくり掲載	朝日遺跡　写真6点 柵、タテ	62年11月1日
株式会社　学習研究社	『6年の学習』63年5月号掲載	朝日遺跡　写真4点 全景、柵	63年1月21日
朝日新聞社出版局	『新・古代史発掘－1983〜1987新遺跡カタログ』掲載	朝日遺跡　写真6点 柵、タテ	63年1月22日
株式会社　有斐閣	『探訪弥生の遺跡　畿内・東日本編』掲載	勝川遺跡の紹介	63年2月2日
中央公論社	『日本の古代』第14巻掲載	勝川遺跡　刻書埴輪片　写真1点	63年3月1日
雄山閣出版株式会社	『季刊考古学』第23号掲載	朝日遺跡　写真2点 大溝、環濠	63年3月3日

現地説明会

昭和62年度の現地説明会は、弥生時代の木製品工房跡等で注目を集めた勝川遺跡、古代から中世にいたる水田跡の町田遺跡、弥生時代中期の大溝や又鍬、鋤、弓等が出土した岡島遺跡など、各遺跡で実施され、参加者も、のべ2000人以上に達した。

現地説明会等開催状況

遺跡（発掘区）	開催日	所在地	内　容	参加者
朝日遺跡 （C・D・E区）	62.6.13	名古屋市西区中沼町	弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の溝、土坑等と土器・石器の展示。61年度出土の土器・石器・骨角器もあわせて展示。	約250名
町田遺跡 （A・C・E・G区）	62.7.11	春日井市町田町	古代から中世にいたる水田跡、弥生時代の竪穴住居跡群等と中世の陶磁器、弥生土器の出土品の展示。	約250名
勝川遺跡 （F・G・H・I区）	62.9.12	春日井市勝川町	弥生時代中期末の掘立柱建物群、木製品工房跡等と鍬、鋤をはじめとする出土品の展示。	約350名
志貴野遺跡	62.10.31	西尾市志貴野町	古墳時代後期の竪穴住居跡と平安時代の掘立柱建物、竪穴住居跡等と出土品の展示。	約200名
諏訪遺跡	62.11.14	新城市豊栄	弥生時代の竪穴住居跡、方形周溝墓、溝状遺構、平安時代前半の竪穴住居跡、掘立柱建物群等と出土品の展示。	約300名
岩倉城遺跡	63.3.5	岩倉市本町	室町時代中期から後期にかけての岩倉城の内堀と推定される溝、土坑等と茶篦、箕等の出土品の展示。	約300名
岡島遺跡	63.3.19	西尾市岡島町	弥生時代中期の大溝、土坑等と又鍬、鋤、弓等の出土品の展示。	約300名
清洲城下町遺跡	63.3.19	西春日井郡清洲町	清洲町民センターにおいて62年度調査成果の報告会と出土品の展示	約250名

付　　篇

受贈図書目録

(昭和62年２月～昭和63年１月)

北海道

二風谷遺跡－砂龍川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内） 埋蔵文化財発掘調査報告書－	室蘭開発建設部
弁天貝塚１－幕末期以降に於けるアイヌ貝塚の発掘調査報告書－	平取町
苫小牧東部工業地帯の遺跡群II	苫小牧市埋蔵文化財調査センター
－厚真町厚真７遺跡・共和遺跡・早来町遠浅１遺跡発掘調査報告書－	苫小牧市教育委員会
釧路市桜ヶ岡１・２遺跡調査報告書	苫小牧市埋蔵文化財調査センター
〃　　３遺跡調査報告書	釧路市埋蔵文化財調査センター
深川市向陽２遺跡－北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃
木古内町建川２・新道４遺跡－津軽海峡線建設工事 埋蔵文化財発掘調査報告書－	財北海道埋蔵文化財センター
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
第１分冊　調査の概要	〃
〃	〃
第２分冊　美沢川流域の遺跡群X	〃
〃	〃
第３分冊　フレッペ遺跡群II	〃
〃	〃
第４分冊　ペンケナイ川流域の遺跡群I	〃
千歳市ママチ遺跡III（本文編・図版編）	〃
上磯町矢不来２遺跡－一般国道228号上磯町矢不来方面防災工事 埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃
登別市亀田公園遺跡－北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃
鷹栖町嵐山２遺跡　－　〃　－	〃
砂川市空知太２遺跡－　〃　－	〃
江別市西野幌３遺跡－野幌総合運動公園線改良工事 埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃

青森県

史跡根城跡発掘調査報告書IX（昭和60・61年度） 八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集	八戸市教育委員会

宮城県

里浜貝塚II　東北歴史資料館資料集７ －宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査研究II－	東北歴史資料館
里浜貝塚III　東北歴史資料館資料集９ －宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査研究III－	〃

福島県

夏井廃寺跡I　県指定史跡夏井廃寺塔跡周辺範囲確認調査概報	いわき市教育委員会
矢吹地区遺跡分布調査報告書VII	福島県教育委員会
母畑地区遺跡調査報告21	〃
福島空港用地内埋蔵文化財分布調査報告	〃
母畑地区遺跡発掘調査報告22　蛭館B遺跡	〃
〃　　23　蛭館跡	福島県教育委員会
国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告V 清水上遺跡・中江聖の宮遺跡	財福島県文化センター
矢吹地区遺跡発掘調査報告１ 二木松遺跡・北大久保B・C遺跡	〃
国道113号バイパス遺跡調査報告III 三貫地遺跡（原口地区）	〃
東北横町自動車道遺跡調査報告２ 牧場山遺跡・菖蒲根遺跡・小屋館遺跡	〃
真野ダム関連遺跡発掘調査報告IX 稲荷塚B遺跡・岩下向遺跡	〃
真野ダム関連遺跡発掘調査報告X 羽白D遺跡・羽白E遺跡	〃
	福島県教育委員会
	日本道路公団
	財福島県文化センター
	財福島県文化センター

群馬県

荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡	群馬県教育委員会
昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
〃	〃
遺物観察表	〃
下触牛伏遺跡	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 別冊　遺構・遺物の一覧表	
新保遺跡Ⅰ　弥生・古墳時代大溝編（本文編）(図版編)	群馬県教育委員会
関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集	
三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡	〃
－一般国道17号線（月夜野バイパス）改良工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅱ	
大原Ⅱ遺跡・村主遺跡	〃
－一般国道17号線（月夜野バイパス）改良工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅲ	
三原田城遺跡・八崎城・八崎塚・上青梨子古墳	〃
後田遺跡	〃
日高遺跡	〃
鳥羽遺跡G・H・Ⅰ区（本文編・図版編）	〃
上野国分僧寺・尼寺中間地域（本文編・図版編・図表編）	〃
糸井宮前遺跡Ⅱ（本文編・実測図版編・写真図版編）	〃
下東西遺跡（本文編・図版編）	〃
小角田前遺跡	建設省
－一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	群馬県教育委員会
	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	群馬県教育委員会
－平安時代須恵器生産工人集落と中・近世集落の調査－	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
	日本鉄道建設公団
	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
本郷尺地遺跡	
－一級河川笹川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１－	
中筋遺跡発掘調査概要報告書	渋川市教育委員会
有馬廃寺跡発掘調査概報	〃
前山遺跡発掘調査報告書	前橋市教育委員会
	前橋市埋蔵文化財調査団
中島遺跡	山武考古研究所

埼玉県

鶴ヶ島遺跡群発掘調査概報	鶴ヶ島町教育委員会
－天狗遺跡　U・V地点－	
東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅵ－	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鍛治谷・新田口遺跡	
〃　－Ⅶ－	〃
神明・矢垂	
上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告－X－	〃
北八幡谷・相野谷　（本文編・図版編）	
国道254号線関係埋蔵文化財発掘調査報告	〃
下道漆遺跡	
国道298号線関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅱ－	〃
猿貝北・新田口遺跡	
児玉工業関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅱ－	〃
将監塚－縄文時代－	
（本文編・写真図版編・遺物図版編）	
〃　－Ⅲ－	〃
将監塚・古井戸古墳－歴史時代編Ⅰ－	
（第１分冊・第２分冊）	

千葉県

堺遺跡	(財)君津郡市文化財センター
真里谷城跡－少年自然の家建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃
星谷上古墳・野馬木戸古墳	〃
塚原遺跡	〃
下中郷塚	〃
畠子台遺跡－関栄企業山砂採取事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書－	〃
本名輪遺跡	〃

東郷台遺跡（川原井廃寺） －南総ゴルフ場増設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書－	〃
富津火力線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
上総火力線　〃	〃
中六遺跡 －町道蔵波・木瓜台線道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃
三箇遺跡群II －県営ほ場整備事業平川東部地区埋蔵文化財確認調査－ －排水対策特別事業平川地区埋蔵文化財確認調査－	〃
二間塚遺跡群確認調査報告書II（昭和59年度） －富津古墳群周溝確認調査－	〃
飯野陣屋跡発掘調査報告書	〃
請西遺跡群確認調査報告書（昭和62年３月）	木更津市教育委員会
大関・大曲遺跡・柳沢牧・御成街道発掘調査報告書	株式会社　丸長 丸萬商事K.K.　八街町 ㈶印旛郡市文化財センター
第21ユーカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書	山万株式会社 ㈶印旛郡市文化財センター
四街道総合運動公園予定地内埋蔵文化財調査報告書	四街道市 ㈶印旛郡市文化財センター
弥栄台遺跡・岩富萩山遺跡発掘調査報告書	㈶日本老人福祉財団 ㈱松本建材・㈶印旛郡市文化財センター
大蛇要行寺脇遺跡発掘調査報告書	佐倉市 ㈶印旛郡市文化財センター
古沢南II遺跡発掘調査報告書	酒々井町 ㈶印旛郡市文化財センター
四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書 中山・水流・東原遺跡	四街道市 ㈶印旛郡市文化財センター
谷津坂遺跡発掘調査報告書	山武考古研究所
聖人塚遺跡発掘調査報告書	〃
東京都	
上小岩遺跡	東京都教育委員会
留原－東京都五日市町郡道32号線留原遺跡発掘調査報告書－	都道32号線留原遺跡調査会
南橋遺跡	北区教育委員会
中里遺跡１　遺跡と古環境	東北新幹線中里遺跡調査会
〃　２　〃	〃
自證院遺跡－新宿区立富久小学校改築工事に伴う緊急発掘調査報告書－	新宿区教育委員会
吹之江遺跡	新島本村教育委員会
式根島吹之江遺跡	〃
多摩ニュータウン遺跡　昭和60年度 （第１～第５分冊）	㈶東京都埋蔵文化財センター
真砂遺跡	真砂遺跡調査会
倉輪遺跡	八丈町教育委員会
神奈川県	
三ツ保遺跡－都市計画道路飯泉国府津線外１線（穴部国府津線） 及び主要地方道松田国府津線の改良に伴う小田原市国府津所在遺跡の調査－ （第１分冊・第２分冊）	神奈川県立埋蔵文化財センター
宮久保遺跡Ｉ－県立後瀬西高等学校建設に伴う調査－	〃
日向南新田遺跡－神奈川能力開発センター建設に伴う調査－	〃
一つ山遺跡－昭和61年度横浜市港北区太尾町地区内 急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査－	〃
泥牛庵脇やぐら群－昭和61年度横浜市六浦町一丁目地区内 急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査－	〃
海老名本郷（本文編）III	富士ゼロックス株式会社 本郷遺跡調査団
〃　（図版編）III	〃 〃
昭和60年度神奈川県埋蔵文化財緊急発掘調査概要	神奈川県教育委員会
新潟県	
壬遺跡1987	国学院大学文学部考古学研究室
物見処遺跡1987	〃
新潟県城跡等分布調査報告書	新潟県教育委員会
北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書	〃

宮ノ手遺跡ほか9遺跡	
〃　糸魚川地区発掘調査報告書II	〃
岩野下遺跡	
富山県	
都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(5)	富山県教育委員会
黒川尺目遺跡	
北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編3－	〃
馬場山D・G・H遺跡	
石川県	
篠原遺跡	石川県立埋蔵文化財センター
吉竹遺跡	〃
宿向山遺跡－一般国道159号線押水バイパスに係わる	〃
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－	
普生寺遺跡－健民海浜公園野鳥飼育園整備事業に伴う	〃
緊急発掘調査報告書－	
金沢市笠舞A遺跡（III）－金沢営林署宿舎建設工事に係わる	〃
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－	
米光萬福寺遺跡	〃
永町ガマノマガリ遺跡	〃
敷地鉄橋遺跡	〃
小松市中海遺跡－県営ほ場整備事業小松東部地区関係	石川県立埋蔵文化財センター
埋蔵文化財発掘調査報告書－	
宿東山遺跡－一般国道159号押水バイパス改築工事に係わる	〃
埋蔵文化財発掘調査報告書－	
真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる	能都町教育委員会
発掘調査報告書－	真脇遺跡発掘調査団
（本文編・写真図版編）	
金沢城の発掘－1981－　藤右衛門丸北側方面裾部発掘報告	
若狭小浜城－小浜城跡発掘調査報告書－	小浜城跡発掘調査団
福井県	
西山古墳群	鯖江市教育委員会
愛宕山遺跡群I	武生市教育委員会
王子保窯跡群第1次発掘調査概要報告	〃
小丸城跡	〃
新町遺跡第1次発掘調査概要報告書	〃
鳥浜貝塚－1980～1985年度調査のまとめ－	福井県教育委員会 若狭歴史民俗資料館
〃　－1981年・1982年度調査概報・研究の成果－ 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3	〃
〃　－1983年度調査概報・研究の成果－ 〃　4	〃
〃　－1984年度調査概報・研究の成果－ 〃　5	〃
〃　－1985年度調査概報・研究の成果－ 〃　6	〃
大島浜爾・宮留遺跡・大島宮留遺跡調査概報	若狭考古学研究会
岩の鼻遺跡　－1985年度調査概報－	若狭歴史民俗資料館
〃　II－1986年度調査概報－	〃
山梨県	
義清神社内遺跡　付昭和町の埋蔵文化財分布調査報告	昭和町教育委員会 義清神社内遺跡発掘調査会
姥神遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	大泉村教育委員会 狭北土地改良事務所
長野県	
松本市赤木山遺跡群II	長野県松本土地事務所
－緊急発掘調査報告書－	松本市教育委員会
〃　島立北栗遺跡　条理的遺構	
－　〃　－	〃
〃　下原・埋橋遺跡	
－　〃　－	〃
〃　高畑遺跡	
－　〃　－	〃

〃　宮渕本村遺跡II　（遺構編）	〃
－　〃　－	
〃　出川南遺跡	〃
－　〃　－	
〃　内田清心・砂原遺跡	長野県松本土地事務所
〃　神林川西遺跡	〃
－　〃　－	〃
〃　推定信濃国府－第五次調査報告書－	松本市教育委員会
中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１	日本道路公団名古屋建設局
（本文編・写真図版編）	長野県教育委員会
	(財)長野県埋蔵文化財センター
村田遺跡群　新町II	佐久市教育委員会
－佐久市岩村田新町遺跡発掘調査報告書－	佐久埋蔵文化財センター
宿上屋敷・下川原・光明寺	〃
－佐久市安原宿上屋敷・下川原・光明寺発掘調査報告書－	
淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I	〃
－佐久市香坂淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I発掘調査報告書－	
高師町遺跡群高師町　西大久保遺跡群西大久保	〃
－佐久市安原・高師町・上平町・西大久保発掘調査報告書－	
岐阜県	
坊地廃寺跡　坊地遺跡	関市教育委員会
範囲確認発掘調査報告書	
半ノ木洞古墳発掘調査報告書　1987	各務原市教育委員会
桑原野山１号古墳発掘調査報告書	〃
市場遺跡発掘調査報告書I	洞戸村教育委員会
奥飛騨の縄文遺跡　下田遺跡	河合村教育委員会
第１次調査・第２次調査	
静岡県	
川原遺跡　昭和60年度発掘調査概報	静岡県埋蔵文化財調査研究所
－袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書－	
〃　〃 61　〃	〃
－　〃　－	
内荒遺跡（遺構編）	〃
昭和60年度静清バイパス（川合地区）	
埋蔵文化財発掘調査報告書	
蜆塚遺跡V・VI	浜松市教育委員会
埋蔵文化財研究会第20回研究集会の記録	第20回研究集会事務局
浜松市山の神遺跡発掘調査報告書	浜松市教育委員会
範囲確認調査	
富塚地蔵平１号墳発掘調査報告書	〃
伊場遺跡遺物編(4)	〃
浜松市半田山遺跡（V）発掘調査報告書	〃
鎌田・鍬影遺跡発掘調査報告書	磐田市教育委員会
浜部遺跡発掘調査報告書	〃
長江崎遺跡発掘調査報告書	〃
昭和61年度　遠江国分寺跡周辺　国分寺・国府台遺跡	〃
－発掘調査報告書－	
昭和61年度　安久路古窯発掘調査報告書－	〃
昭和61年度　堂山古墳	〃
－後円部・周堀発掘調査報告書	
昭和59年度　〃	〃
－周堀確認調査報告書－	
御殿・二之宮遺跡発掘調査	〃
－土地区画整理事業に伴う範囲確認調査－	
匂坂中下３遺跡発掘調査報告	〃
〃　２・４遺跡発掘調査概報	〃
大原墳墓群調査報告書	〃
見付端城発掘調査概報	〃
昭和59年度　見性寺遺跡発掘調査概報	〃
遠江国分寺跡周辺遺跡（国分寺西遺跡）発掘調査報告書	〃
玉腰遺跡－一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）	静岡県教育委員会
埋蔵文化財発掘調査報告書－	建設省中部地方建設局

道添遺跡	郵政省東海郵政局
兎沢古墳群発掘調査概報	焼津市教育委員会
道場田・小川城遺跡Ⅱ	焼津市教育委員会
〃 ・ 〃 Ⅲ・宮之腰遺跡Ⅱ・道下遺跡	小川第２土地区画整理組合
昭和61年度 33KV富士電化駿津線一部増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	焼津市教育委員会
〃 西笠子第64号窯跡発掘調査報告書	〃
〃 国道１号線潮見バイパス（湖西地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 長谷元屋敷遺跡	中部電力K.K静岡支店
鶴松遺跡Ⅱ－日本電信電話公社山科無線中継所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	湖西市教育委員会
平沼吹上遺跡発掘調査報告書	〃
	〃
	〃
	袋井市教育委員会
豆生田遺跡詳細分布調査報告書	平沼吹上地区土地改良区
長浜城跡 〃	沼津市教育委員会
雄鹿塚遺跡 〃	沼津市教育委員会
江浦の水祝儀	〃
大平新城館発掘調査報告書	〃
広合遺跡発掘調査報告書	〃
有東梶子遺跡	〃
駿河 楠ヶ沢古墳群	静岡市教育委員会
瀬名古墳群 瀬名３号墳－昭和60年度県営畑地帯総合土地改良事業（西奈地区）埋蔵文化財発掘調査報告書－	〃
四ツ池古墳群	清水市教育委員会
龍門池遺跡	静岡県中部農林事務所
三重県	
大鼻（二次～三次）・山城（三次）遺跡－一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ－	浜松市文化協会
鳥羽贄遺跡第２次調査報告 1987	〃
縄生廃寺跡発掘調査の概要	
平田古墳群	三重県教育委員会
津市半田 尺目遺跡発掘調査報告	
〃 大里 墓の谷１号墳発掘調査報告	鳥羽市教育委員会
〃 中蔦遺跡発掘調査報告書	朝日町教育委員会
〃 分野西垣内遺跡発掘調査報告書	安濃町教育委員会
粥鍋遺跡発掘調査報告書	津市教育委員会
明和町の遺跡	〃
滋賀県	〃
一般国道161号（西大津バイパス）建設工事に伴う大津市大伴遺跡発掘調査報告書	〃
ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書	松阪市教育委員会
〃 Ⅵ－１	皇学館大学考古学研究会
〃 Ⅶ－３	
〃 Ⅶ－２・４	滋賀県教育委員会
〃 Ⅷ－３	(財)滋賀県文化財保護協会
〃 XIV－１・２・４	〃
山ノ神遺跡発掘調査報告書－国道１号京滋バイパス関係発掘調査報告書－	〃
新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅰ－新守山橋梁工事に伴う山賀遺跡の調査－	〃
〃 Ⅱ	〃
－山賀遺跡昭和60年度調査－	〃
県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－１－守山市山賀西遺跡－	〃
〃 Ⅲ－２	〃
－近江八幡市八甲・黒橋遺跡・長浜市相撲北遺跡－	〃
高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要－吉武城遺跡－	〃
錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅰ	〃
県道片岡栗東線特殊改良第１種工事に伴う芦浦遺跡発掘調査報告書Ⅰ	〃

高月町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集	滋賀県教育委員会
県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書II	〃
新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要III	〃
－守山市杉江遺跡－	
琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う	〃
栗東町高野遺跡発掘調査報告書	
滋賀県の民謡　緊急調査報告書　昭和60年度	〃
宇曽川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡Ｉ	滋賀県教育委員会
〃　　〃　　II	(財)滋賀県文化財保護協会
一般国道８号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報告書	〃
草津川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報２　－御倉・北萱地区－	〃
宝持坊遺跡発掘調査報告書	〃
－坂田郡山東町清滝－	
赤野井湾遺跡	〃
志那湖底遺跡発掘調査概要報告書	〃
－志那南その２Ｉ区－	
〃	〃
－草津市志那中町地先所在－	
県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－１	〃
－蒲生郡安土町安土城城下町遺跡－	
〃　　Ⅳ－２	〃
－守山市杉江遺跡・近江八幡市金剛寺遺跡－	
県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書III	〃
－浅小井（高木）遺跡－	
特別史跡『彦根城』	〃
－県立彦根東高等学校資料室建設に伴う発掘調査報告書－	
昭和59年度国庫補助事業	
吉身西・吉身北・吉身南遺跡発掘調査報告	守山市教育委員会
守山市文化財調査報告書　第26冊	〃
野洲町左岸遺跡発掘調査報告書	〃
	野洲町教育委員会
小提遺跡発掘調査報告書	野洲町埋蔵文化財調査会
八日市遺跡発掘調査報告書	野洲町教育委員会
高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書	湖北町教育委員会
	長浜市教育委員会
高岡塚古墳発掘調査報告書	(財)滋賀県文化財保護協会
	山東町教育委員会
	(財)滋賀県文化財保護協会
京都府	
京都府遺跡調査概報　第13冊	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〃　第15冊	〃
〃　第20冊～第25冊	〃
〃　報告書　第３冊　大内城跡	〃
〃　〃　第６冊　太田遺跡	〃
〃　〃　第７冊　京滋バイパス関係遺跡	〃
埋蔵文化財発掘調査概報	京都府教育委員会
長岡京市文化財調査報告書第18冊	長岡京市教育委員会
鴫谷東１号墳　第１次発掘調査概報	立命館大学文学部
根方第２岩陰遺跡発掘調査報告書　昭和60年度	京都大学霊長類研究所
大阪府	
小阪合遺跡－八尾市都市計画事業南小阪合	(財)八尾市文化財調査研究会
土地区画整理事業に伴う発掘調査－　昭和57年度第１次調査報告書	
〃　－　〃　－　昭和58年度第２・３次調査報告書	〃
鳴上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要11	高槻市教育委員会
鳥居前古墳	大阪大学鳥居前古墳調査団
王子遺跡発掘調査概報II　第３次調査	貝塚市教育委員会
貝塚市遺跡群発掘調査概要IX	〃
－東北新幹線に伴う発掘調査－	
久宝寺遺跡発掘調査報告	(財)東大阪市文化財協会
－久宝寺緑地内雨水貯溜池築造工事に伴う発掘調査－	
若江遺跡　第25次発掘調査報告	〃
西の口遺跡　第１次発掘調査概要	〃
－市立縄手中学校分教場建設工事に伴う第１次調査－	
縄手遺跡・若江遺跡の調査－昭和61年度－	東大阪市教育委員会

松原市遺跡発掘調査概要　昭和61年度	松原市教育委員会
脇浜遺跡－都市計画道路貝塚中央線建設に伴う発掘調査報告書－	㈶大阪府埋蔵文化財協会
阪南丘陵埋蔵文化財－試掘調査報告書－	〃
尊延寺	㈶枚方市文化財協会
出屋敷Ⅱ調査概要報告	〃
	大阪府東部公園事務所
高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書　1987	高槻城跡調査会
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　1986年度	豊中市教育委員会
摂津・豊中大塚古墳	〃
野畑遺跡　第２次発掘調査概報	野畑遺跡発掘調査団
海会寺遺跡発掘調査報告書	泉南市教育委員会
－本文編・図版編・別添図－	
難波宮の研究　第八	㈶大阪市文化財協会
特別史跡　大坂城跡－大坂城内配水池改良工事に伴う発掘調査概報－	〃
〃　〃　Ⅱ	〃
－第２寝屋川改修工事に伴う（新鴨野橋下部工）大坂城跡発掘調査報告－	
有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ	大手前女学園
－三井パークマンションに伴う発掘調査報告書－	有岡城跡調査委員会
兵庫県	
オキダ古墳群発掘調査報告書	神戸市教育委員会
森北町遺跡発掘調査報告書	〃
柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書（本文編・図版編）	兵庫県教育委員会
日撫・正福寺谷横穴墓群	豊岡市教育委員会
〃・備後衆山砦址	〃
北浦古墳群・立石墳墓群－第１分冊～第３分冊－	〃
天神遺跡－公共下水道管埋設に係わる発掘調査報告書（Ⅰ）－	三田市教育委員会
奈良県	
奈良市埋蔵文化財調査概要報告　60年度	奈良市教育委員会
〃　61年度	〃
平城京東市跡推定地の調査Ⅳ	〃
第６次発掘調査概要	
〃　Ⅴ	〃
第７次発掘調査概報	
遺跡整備資料Ⅴ　官跡・官衙遺跡	奈良国立文化財研究所
〃　Ⅵ　庭園・その他の遺跡	〃
藤原京　左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告	〃
〃　右京七条一坊・西南坪発掘調査報告	〃
飛鳥・藤原宮発掘調査概報　17	〃
昭和61年度　平城京跡発掘調査部発掘調査概報	〃
平城京左京四条二坊一坪	〃
若槻池発掘調査報告書	大和郡山市教育委員会
郡山城第12次追手向櫓・多聞櫓発掘調査概要報告書	〃
平城京西一坊大路（右京八条一坊）発掘調査概要報告	〃
長塚遺跡発掘調査概要報告書	〃
昭和53年度国庫補助事業	㈶元興寺文化財研究所
出土鉄製遺物の実態調査報告書	
九州・中国・四国地方	
〃　〃	〃
近畿・中部地方	
〃　〃	〃
関東・東北・北海道	
昭和56年度国庫補助による出土青銅製遺物の実態調査報告書	〃
近畿・中国・四国・九州地方	
昭和57年度　〃　〃　概要報告書	〃
北海道・東北・関東・中部地方	
昭和58年度　〃　〃　報告書	〃
昭和59年度　〃　出土遺物の実態調査報告書	〃
沖縄・九州・中国・四国地方	
昭和60年度　〃　〃	〃
近畿・中部・関東地方	
昭和61年度　〃	〃
〃	
布留遺跡・布留（堂垣内）地区縄文時代の出土石器	埋蔵文化財天理教調査団

神木坂古墳群	榛原町教育委員会
岡山県	
樋本遺跡－総社南高校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－	岡山県教育委員会
岡山県埋蔵文化財報告17	〃
広島県	
備後国府跡－推定地にかかる第５次調査概報－	(財)広島県埋蔵文化財センター
名広遺跡－Ａ調査区－　県営ほ場整備事業（船佐地区）に伴う発掘調査	〃
明官地廃寺跡－第一次発掘調査概報－	〃
佐田谷墳墓群	〃
高塚山第１・２号墳発掘調査報告書	〃
伴造遺跡発掘調査報告書	〃
敷名番所跡伝承地発掘調査報告書	〃
皇渡古墳発掘調査報告書	〃
戸の丸山製鉄遺跡発掘調査報告書	〃
月見城遺跡	〃
名広遺跡－Ｂ調査区－	〃
大判・上定・殿山－三次市大田幸田所在遺跡群の発掘調査－	〃
賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）遺跡群II	〃
山陽自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ	〃
植松遺跡群－植松第２・３・４号古墳・植松窯跡－	〃
銭神第２・４・５号古墳発掘調査報告書	〃
三ツ城跡発掘調査報告	広島市教育委員会
山口県	
呉町廃寺発掘調査報告書	山口大学文学部考古学研究室
香川県	
瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報	香川県教育委員会 本州四国連絡橋公団
語りかける埋蔵文化財　下川津遺跡	香川県教育委員会
四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告　昭和61年度	〃 日本道路公団
愛媛県	
朝倉南甲遺跡－県営圃場整備事業（朝倉村南甲平林地区）関連 埋蔵文化財調査報告書－	愛媛県埋蔵文化財センター
道後今市遺跡－愛媛県県民文化会館・総合福祉センター建設に伴う 埋蔵文化財調査報告書－　（本文編・図版編）	〃
宮前川遺跡－中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書－ （本文編・図版編）	〃
高知県	
土佐国　跡発掘調査報告書　第７集 －松ノ下・南屋敷地の調査－	南国市教育委員会
福岡県	
長野Ａ遺跡２（II・Ⅴ・Ⅵ区の調査） －九州縦貫自動車道関係文化財調査報告11－	(財)北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室
〃　３（III・Ⅶ・Ⅷ区の調査） －　〃　12－	〃
井手尾遺跡－北九州市小倉区南石田所在の弥生遺跡の調査－	〃
畠山遺跡－国道10号曽根バイパス関係埋蔵文化財調査報告III－	〃
小糸遺跡－幹線５号道路改良建設関係文化財報告－	〃
権ヶ迫遺跡・先下遺跡 －幹線８号関係埋蔵文化財調査報告書－	〃
愛宕遺跡（III）－北九州市小倉北区菌園場所在－	〃
日の出町遺跡　－　〃　日の出町所在－	〃
権木山遺跡　第２地点 －北九州市若松区大字蟹住所在－	〃
平等寺・新池坂本遺跡 （第一・第二地点発掘調査報告） －南小倉ハイランド関係埋蔵文化財調査報告－	〃
勝円Ｂ遺跡Ⅶ区－北九州市小倉南区大字曽根所在－	〃
高槻遺跡（第７地点）－八幡東区松尾町所在－	〃
鳥越・七隈古墳群 －福岡大学構内におけるグランド造成及び馬術練習場建設工事に伴う 発掘調査報告書－	福岡市教育委員会
中部地区埋蔵文化財調査報告II	〃

博多Ⅶ－博多遺跡群第28次発掘調査報告－	〃
〃 Ⅷ－ 〃 第29次 〃 －	〃
〃 Ⅸ－ 〃 第30次 〃 －	〃
〃 Ⅹ－ 〃 第31次 〃 －	〃
井相田Ｃ遺跡Ⅰ	〃
那珂遺跡－那珂遺跡群第８次調査の報告－	〃
板付周辺遺跡調査報告書(12)	〃
〃 (13)	〃
福岡市有田・小田部　第８集	〃
－高速度鉄道関係調査(3)－	
〃　高速度鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ　博多	〃
〃　柏原遺跡群Ⅲ	〃
－柏原Ｋ・Ｌ遺跡・中世居館址と中世水田の調査－	〃
〃 〃 Ⅳ	〃
－縄文時代遺跡Ａ－１・Ｅ遺跡の調査－	
〃　野田目遺跡群－稲作開始期の水田遺跡の調査－	〃
野田目拈渡遺跡Ⅲ－野田目中央公園付設道路拡張に伴う発掘調査報告書－	〃
唐原遺跡－墳墓編－	〃
福岡市公民館建設関係埋蔵文化財調査報告	〃
福岡市那珂久乎遺跡Ⅱ	〃
〃　麦野Ｂ遺跡群－第１次調査－	〃
〃　西区浦江遺跡	〃
〃　板屋・今津遺跡	〃
－道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告－	
田村遺跡Ⅲ	福岡市教育委員会
福岡市早良区　田村遺跡Ⅳ	〃
〃 〃 四箇遺跡	〃
〃　西　区　青木遺跡	〃
〃　下山門　乙女田遺跡	〃
横隈瓜塚遺跡Ⅱ（上巻・下巻）	小郡市教育委員会
三国小学校遺跡Ⅱ・吹上赤土遺跡	〃
干湯下屋敷遺跡	〃
横隈山遺跡	〃
三国の畠遺跡Ⅳ・津古脇田遺跡	〃
津古牟田遺跡	〃
津古生掛遺跡	〃
福岡市早良区　千隈遺跡	千隈遺跡調査会
佐賀県	
下石動遺跡－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)－	佐賀県教育委員会
撰分遺跡　－ 〃 (7)－	〃
楠木谷古窯・小溝上窯	佐賀県立九州陶磁文化館
権現谷古窯跡－伊万里市大川内町所在・近世古窯跡調査の概要－	伊万里市教育委員会
馬立場遺跡－伊万里市東山代町所在遺跡の調査概要－	〃
神谷窯跡－伊万里市大川町所在・近世古窯跡調査の概要	〃
徳富権現堂遺跡	諸富町教育委員会
村中角遺跡	〃
熊本県	
ハレタ遺跡・付喜界島遺跡分布調査	熊本大学文学部考古学研究室
大分県	
雄城台　第８次調査の概要	大分県教育委員会
一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報	〃
中津市加来遺跡群	
〃	〃
中津市伊藤田地区遺跡群	
若杉遺跡・机張原女蒜近世墓地	〃
－九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報－	
緒方条里内遺跡－県道竹田・野津線改良工事に伴う発掘調査報告書－	〃
九州横断自動車道建設に伴う調査概報	〃
－日田地区－	
昭和61年度　大分県内遺跡詳細分布調査概報６	〃
杵築小学校内遺跡－豊後杵築藩武家屋敷関連遺跡の発掘調査報告書－	〃
岩戸遺跡	清川村教育委員会
朝地田村遺跡	朝地町教育委員会

宮崎県

宮崎県文化財調査報告書第30集	宮崎県教育委員会
宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書Ⅰ	〃
船塚遺跡	
北牧原地区・坪谷地区・地蔵ヶ森・城原地区・松本遺跡	〃
陣内第２遺跡・蓮ヶ池横穴墓群－遺物編－	宮崎県総合博物館
東城原第１遺跡・東城原第２遺跡・東城原第３遺跡	野尻町教育委員会
－漆野原県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－	

鹿児島県

国分・隼人テクノポリス地域埋蔵文化財調査報告書	鹿児島県教育委員会
県道鹿児島本名線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
－本吉田城跡－	
新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	〃
－長浜・金久遺跡－	
鹿児島県の中世城館跡	〃
－中世城館跡調査報告書－	
国道269号線高須バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
－榎木原遺跡－	

愛知県

尾張元興寺跡発掘調査概要報告書	名古屋市教育委員会
吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
白川公園遺跡発掘調査概要報告書	〃
天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	〃
尾張国府跡発掘調査報告書Ⅸ	稲沢市教育委員会
下津城跡発掘調査報告書Ⅲ	〃
大草城跡地形測量等調査報告書	長久手町教育委員会
能田旭古墳　第一次発掘調査報告	師勝町教育委員会
増田町埋蔵文化財発掘調査報告書	増田町教育委員会
大井窯山古墳群	南知多町教育委員会
知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅱ	知立市教育委員会
－天神遺跡Ｂ・中長遺跡－	
為当条理遺跡発掘調査報告書	豊川市教育委員会
形原遺跡発掘調査報告書	蒲郡市教育委員会
石巻神郷地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書	豊橋市教育委員会
水神古窯	〃
一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	一宮町教育委員会
柴崎第１号墳発掘調査報告書	〃
東光寺遺跡発掘調査概要報告書	幸田町教育委員会
第１・２・３次調査	
新編　岡崎市史　史料考古上15	岡崎市史編集委員会

※年報

名古屋市博物館年報　No.10	名古屋市博物館
知多市民俗資料館年報　2	知多市民俗資料館
東北大学埋蔵文化財調査年報　2	東北大学埋蔵文化財調査委員会
年報　6	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
年報　昭和61年度－７－	埼玉県埋蔵文化財調査事業団
千葉県立房総風土記の丘　年報　昭和60年度　9	千葉県立房総風土記の丘
茂原市文化財センター年報　No.1	(財)茂原市文化財センター
神奈川県立埋蔵文化財センター　年報６	神奈川県立埋蔵文化財センター
東京都埋蔵文化財センター　年報　7	(財)東京都埋蔵文化財センター
港郷土資料館館報　5　昭和61年度	港区教育委員会
館報　No.2	明治大学考古学博物館
創立10周年記念会誌	黒川古文化研究所
石川県立埋蔵文化財センター　年報　7	石川県立埋蔵文化財センター
富山県埋蔵文化財センター　10年の歩み	富山県埋蔵文化財センター
焼津市歴史民俗資料館　年報Ⅰ	焼津市歴史民俗資料館
岐阜市歴史博物館年報　No.1　昭和60・61年度	岐阜市歴史博物館
瑞浪陶磁資料館年報　第６号	瑞浪陶磁資料館
滋賀県文化財調査年報　昭和60年度	滋賀県教育委員会
枚方市文化財年報Ⅶ	(財)枚方市文化財研究調査会
神戸市埋蔵文化財年報　昭和59年度	神戸市教育委員会

奈良国立文化財研究所　年報	奈良国立文化財研究所
長岡京市埋蔵文化財センター　年報	㈶長岡京市埋蔵文化財センター
岡山大学構内遺跡調査研究年報４　昭和61年度	岡山大学埋蔵文化財調査室
年報Ⅱ　昭和58年度～昭和60年度	㈶広島県埋蔵文化財調査センター
広島県立埋蔵文化財センター　年報	広島県立埋蔵文化財センター
福岡市埋蔵文化財センター　年報５号　昭和60年度	福岡市埋蔵文化財センター
埋蔵文化財調査室３　昭和60年度	北九州市教育文化事業団
鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報	鹿児島大学埋蔵文化財調査室

※紀要

名古屋市博物館　研究紀要10　昭和61年度	名古屋市博物館
愛知県陶磁資料館　研究紀要６	愛知県陶磁資料館
研究紀要　第76集別冊－理科特集第23号－	愛知県教育センター
教育実践研究紀要　33集	愛知教育大学附属名古屋中学校
研究紀要４	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県立歴史博物館紀要　第８号	群馬県立歴史博物館
千葉県文化財センター　研究紀要11	千葉県文化財センター
学芸研究紀要　第４号	東京都教育委員会
研究紀要　創刊号	岐阜市歴史博物館
研究紀要　Ⅰ	静岡県埋蔵文化財研究所
滋賀県埋蔵文化財センター紀要１	滋賀県埋蔵文化財センター
関西大学考古学研究紀要　５	関西大学文学部考古学研究室
保存科学研究室紀要　３～６	㈶元興寺仏教民俗史料研究所
研究紀要　創刊号	㈶北九州教育文化事業団

※雑誌

岡崎市史研究　９号	岡崎市史編さん委員会
名古屋大学総合研究資料館報告	名古屋大学総合研究資料館
マージナル　No.６～７	愛知考古学談話会
研究連絡誌　17～18号	㈶千葉県文化財センター
研究論集　Ⅴ	㈶東京都埋蔵文化財センター
金大考古　第14号	金沢大学文学部考古学研究室
岐阜県博物館調査研究報告	岐阜県博物館
美濃の古陶　No.１	美濃古窯研究会
京都府埋蔵文化財情報　23～24号	㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
京都府埋蔵文化財論集　第１集　創立５周年記念会誌	〃
花園史学　８号	花園大学史学会
木簡研究　９号	木簡学会
倉敷考古研究集報　第18号	倉敷考古館
山陰地域研究　No.３	島根大学山陰地域研究総合センター

※展示図録・目録

開館10周年記念特別展　城下町名古屋	名古屋市博物館
部門展　尾張の絵画史　狩野派の画人たち	〃
館蔵品図録　Ⅱ	〃
特別展　南区の歴史	名古屋市見晴台考古資料館
開館記念特別展　一宮の名宝（Ⅰ）	一宮市博物館
小牧の文化財　小牧の米作・麦作と養蚕	小牧市教育委員会
小牧市文化財図録	〃
瀬戸の石造物	瀬戸市教育委員会
第８回特別展　豊川の遺跡	豊川地域文化広場
朝日遺跡出土遺物にみる　弥生時代のくらし	愛知県清洲貝殻山貝塚資料館
企画展　東南アジアのやきもの	愛知県陶磁資料館
展示図録	尾西市歴史民俗資料館
愛知県所在国・県及び市町村指定文化財総目録	愛知県教育委員会
悠久の遺産　中国陝西省文物展	群馬県立歴史博物館
収蔵品目録13　日本古瓦	黒川古文化研究所
浮世絵師　歌川国直（人物コーナー）	八王子市郷土資料館
展示図録	明治大学考古博物館
資料目録	㈶東京都埋蔵文化財センター

特別企画展　ひすい－地中からのメッセージ－	富山県埋蔵文化財センター
昭和61年度　富山県埋蔵文化財調査一覧	富山県教育委員会
展示図録	松本市考古博物館
特別展　東海のあけぼの	岐阜市歴史博物館
大垣の古墳	大垣市歴史民俗資料館
特別展　東海の形象はにわ展	瑞浪陶磁資料館
展示解説	〃
タイ・カンボジア陶磁	ヨコタ南方美術館
昭和61年度埋蔵文化財展	(財)滋賀県文化財保護協会
県外出土の信楽焼－流通の器種と範囲を探る－	滋賀県立近江風土記の丘資料館
要覧－創立20周年の歩み－	(財)元興寺文化財研究所
奈良の文化財　No.5　古墳II	奈良市教育委員会
景初４年鏡と芝ヶ原古墳　鏡と古墳	京都府教育委員会
考古展　第６回小さな展覧会 昭和61年度発掘調査成果から	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
第２回泉州の遺跡 －昭和61年度発掘調査成果展－	(財)大阪府埋蔵文化財協会
発掘20年のあゆみ　市制20周年記念特別展示	東大阪市教育委員会
とよなか探訪　ぶらり史跡たずねて	豊中市教育委員会
動物の考古学	大阪市立博物館
荘園・館・経塚	兵庫県埋蔵文化財調査事務所
弥生人のムラとくらし	〃
倉敷考古館　解説と周辺の歴史	倉敷考古館
「北九州の横穴墓」展	北九州市立考古博物館
福岡市の文化財－考古資料編－	福岡市教育委員会
収蔵資料目録４	九州歴史資料館
図書目録　－原文庫－	松本市立考古博物館

※分布地図

全国遺跡地図　大阪府	文化庁
愛知県遺跡分布地図Ⅰ　尾張地区	愛知県教育委員会
千葉県埋蔵文化財分布地図(3) －市原市・君津・長生地区－	(財)千葉県文化財センター
京都府遺跡地図　第２分冊（第２版）	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

※文化財行政関係

昭和62年度　文化行政関係事業計画書	愛知県教育委員会
昭和59年度　文化財保護行政要覧	群馬県教育委員会
文化財保護の手引き	新潟県教育委員会

※資料・その他

第３回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後	第３回東海埋蔵文化財研究会
第２回　市原市文化財センター遺跡発表会要旨	(財)市原市文化財センター
シンポジウム竜角寺古墳群調査の意義〈記録集〉	千葉県立房総風土記の丘
昭和61年度県内発掘調査報告会資料	福岡県教育庁埋蔵文化財センター
考古学ソフテックス写真集　第２集	名古屋大学文学部考古学研究室
平城宮木簡四　史料・解説	奈良国立文化財研究所
弥生土器集成　本編Ⅰ	日本考古学協会
房総考古学ライブラリー３　縄文時代(2)	(財)千葉県文化財センター
環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼	大井晴男　他
森　浩一対談集　古代技術の復権 技術から見た古代人の生活と知恵	小学館
箕面の歴史年表	地域歴史民俗研究会
見晴台教室　86	名古屋市見晴台考古資料館
トヨタ50年の戦い　かくて彼らは勝った	毎日新聞社・近藤智雄

年　報　昭和62年度

昭和63年 3 月

編　集
発　行　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　株式会社　刈谷高速印刷